

鹿児島大学FD報告書

5号 2008

鹿児島大学のFD活動

平成19年度 FD 委員会活動報告（総括）

全学 FD 委員会が平成19年度に取り組んだ活動については、各担当より詳細な報告がされているので、それらを御一読願いたい。平成19年度の FD 活動については、企画・立案に多少、時間がかかったが、それでも一年間を振り返ってみて、内容の豊かな充実した FD 活動が出来たと思う。また、19年度から研究科における FD 活動が義務化されたことにより、司法政策研究科と臨床心理学研究科からも委員の選出をすることになった。

1. 平成19年度 FD 経費について

平成19年度から大学院の FD 活動が義務化されたことにより、要求額は大幅に増えたが、予算示達額が昨年度配分額と同等と仮定した場合、各学部へ配分される予算は昨年度に比べ半減することとなり、昨年度並みの FD 活動が実施できない危惧の念が出された。そこで、大学院の FD 活動が義務化されたことにより、FD 活動経費の予算の増額を大学執行部に諮ることになった。

また、『FD 経費の予算要求に係る FD 活動についての基本方針』、及びその基本方針に基づく『予算配分におけるガイドライン』を策定し、ガイドラインに基づく予算配分を行うことになった。

2. 平成19年度鹿児島大学新任教員 FD 研修会について

新任教員 FD 研修会を平成19年10月25日に開催した。基調講演として、NHK 鹿児島放送局放送部長の福原健一氏を招待し、「分かりやすい話し方」という演題でその講演を聴いた。基調講演後、新任教員の授業参観及び FD 委員会委員等との懇談会を実施した。

3. 平成19年度「教養セミナー」ワークショップ

平成17年度より開設された『教養セミナー』の受講生が年々増加をし、平成19年度は272名であった。この状況で行うと、現在担当されている12名の教員では、とても受講生の要望に応じきれない危機感があり、そこで、平成19年12月1日に

(1) 目的：平成20年度以降の教養セミナーを担当できる教員を育成する。

(2) 内容：教養セミナーのシラバスと授業計画を作る。班作業を通して、少人数教育の実情と問題点を議論する。

上記2点の目標で「教養セミナーデザイン（少人数教育）」をテーマとしてワークショップを開催した。この「教養セミナー」ワークショップは毎年開催することにした。

4. 学生・教職員ワークショップ：『鹿大の英語教育を考える！』

平成20年2月19日、「学生」、「教職員」による合同ワークショップを開催した。このワークショップの目的は、鹿児島大学の「学生」、「教職員」が集まって鹿大英語教育のあり方について意見交換し合い、鹿大をもっとよくするためのアイデアやビジョンを提言してもらうことであった。

テーマ：「英語学習について～やる気の出る要因とやる気を失くす要因～」

5. FD 講演会

平成20年3月21日、愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室准教授佐藤浩章先生を講師として迎え、「愛媛大学の FD の取り組み」と「大人数講義法のコツ」を学習した。

愛媛大学は、教育に関わる全ての人（教員・事務職員・ティーチングアシスタント）の能力開発に力を入れている。その取組は、平成18年度「特色ある大学教育支援プログラム（特色 GP）」に選定されている。（「FD / SD / TAD 三位一体型能力開発」）。愛媛大学のこの FD 活動を以下の目的で学んだ。

(1) FD の理念や概念を、組織全体の教員に十分認識させる。さらに、FD 活動におけるボトムアップ。

(2) 大人数講義法のコツを学ぶことによって、学士課程教育の質の保証を目指す。

6. 平成20年度新入生クラス担任等教員 FD 講習会実施

国立大学法人も5年目に入り、クラス担任等教員の業務も複雑で多岐にわたっている。新しい時代に対処するために、共通教育に成績評価異議申立制度やGPA制度の導入もすでに実施され、平成20年度からは新しい英語教育も導入するが、最も重要なことは、新入生クラス担任等教員による行き届いた教務・厚生指導である。最初の段階で主に行われる共通教育について、新入生クラス担任等教員はその全容を熟知したうえ、新たな学生生活を始める精神的にも不安定な新入生をきめ細かく指導していくことが求められている。このように学生の指導・支援体制を充実するため、新入生クラス担任等教員 FD 講習会を開催した。

日時：平成20年3月24日

プログラム：

「保健管理センターの相談事例から見た学生の心理」

保健管理センター長 森岡 洋史
同准教授 伊地知信二

「共通教育の履修制度・手続き等について」

共通教育企画実施部長 志賀 美英
外国語教育推進部長 富岡 龍明
他、共通教育係職員

(文責：FD委員会委員長 谷口 溪山)

FD委員会審議事項

年月日	議 題
19. 4.25	・平成19年度年度計画について ・平成19年度新任教員等FD研修会について ・平成19年度FD経費について
19. 5.21	・平成19年度計画の具体的実施事項について ・平成19年度FD経費について ・平成19年度新任教員等FD研修会について
19. 6.27	・平成19年度計画の具体的実施事項について
19. 7.23	・平成19年度計画の具体的実施事項について ・平成19年度FD経費について
19. 9. 3	・平成19年度計画の具体的実施事項について ・平成19年度FD経費について
19. 9.25	・平成19年度鹿児島大学新任教員FD研修会について ・平成19年度FD経費について
19.10.24	・平成19年度鹿児島大学新任教員FD研修会について ・平成19年度ワークショップについて
19.11.28	・平成19年度「教養セミナー」ワークショップについて ・平成19年度FD活動経費について
19.12.25	・ワークショップの開催について ・講演会の開催について ・平成19年度計画実績報告書について
20. 1.23	・FD講演会等の開催について ・平成19年度新入生クラス担任等講習会について ・平成19年度新任教員FD研修会について ・平成19年度計画実績報告書について ・平成20年度FD活動経費要求について
20. 2.28	・FD講演会の開催について ・平成20年度新入生クラス担任等教員FD講習会について ・平成20年度FD活動経費要求について ・平成19年度FD活動総括及び次年度への申し送り事項について

「授業評価アンケート」の実施状況と結果分析

1. 前期

平成19年度前期に共通教育で開講されている授業科目について授業アンケートを実施した。下記の表に示すように講義科目334科目、実験・実習科目44科目について実施した。

表1. 前期実施科目数（講義科目および実験・実習科目）

	講 義						講義計	実験・実習		実験・実習計
	教養	情報	外国語	体育	日本語	基礎教育		体育	基礎教育	
専任教員	65	21	86	8	6	39	225	11	9	20
非常勤講師	24	0	65	0	1	19	109	24		24
計	89	21	151	8	7	58	334	35	9	44

授業科目アンケートは学生の態度として5項目、教員による授業評価項目として10項目の設問を設けている。アンケートは各設問について4から1の評価で行っている。下図は教養科目、情報科目などについての平均値である。全設問項目に関して日本語・日本事情科目の平均値が他科目を上回っていたが、基礎教育科目は一般に評価が低い傾向にあった。また、全科目に共通して、「シラバスを読んでいない」、「予習・復習の時間が短く講義時間だけの学習になっている」、「質問をしない」ことが明らかになった。

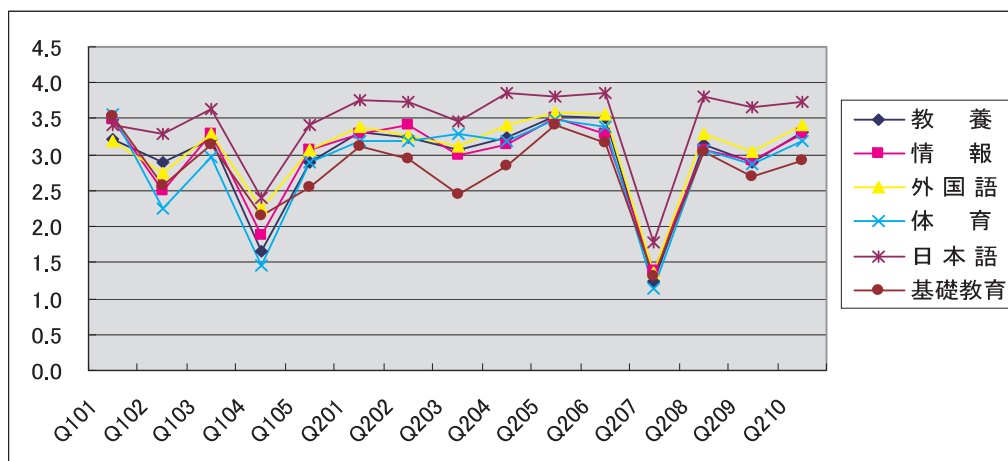


図1 前期授業アンケート 平均値

図2は教養科目についての授業アンケートの最高値、平均値、最低値を各設問について示している。各設問に関して最高値と最低値には大きな相違が見られる。授業に対する満足度の項目について最低値2.2から最高値4.0のであり、大きな隔たりがあった。

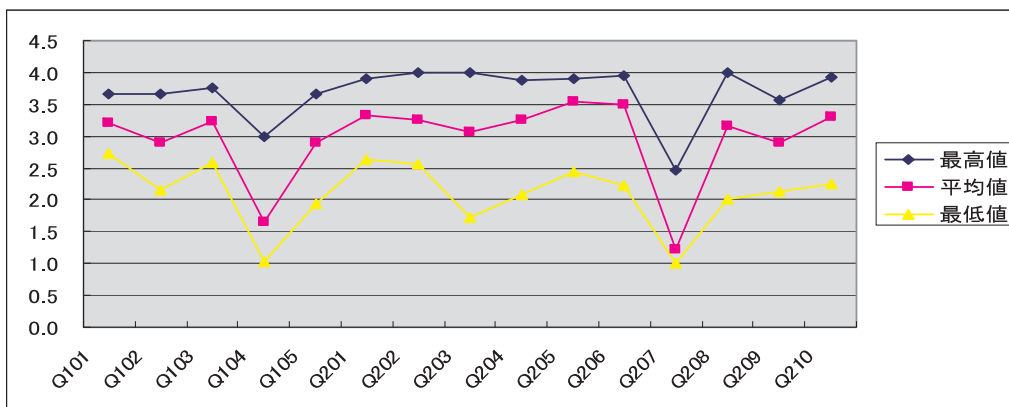


図2 前期授業アンケート 教養科目

下記の図は、情報科目についての授業アンケートの最高値、平均値、最低値を各設問について示している。授業満足度が低い授業ほど、出席も悪く、すべての項目について評価が低い傾向にあった。予習・復習をしない、質問をしないのは、教養科目と同様であった。

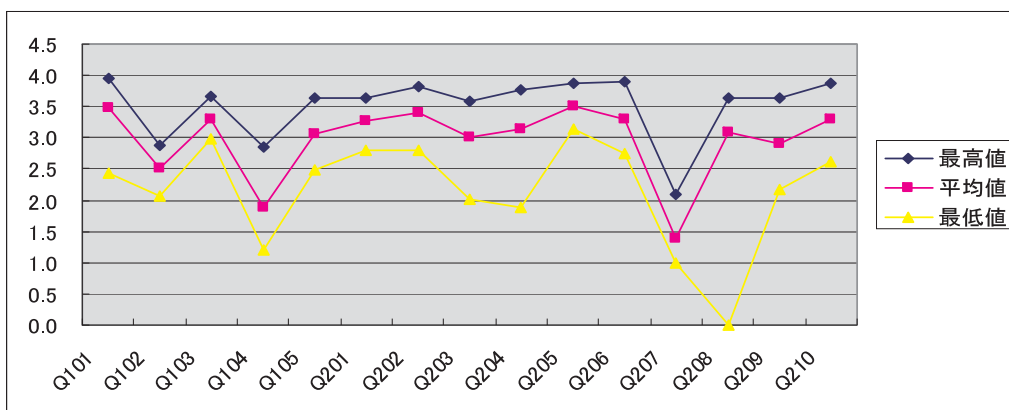


図3 前期授業アンケート 情報科目

下記の図は、外国語科目についての授業アンケートの最高値、平均値、最低値を各設問について示している。各設問に関して教養科目や情報科目と比較すると、最高値と最低値との差異は明らかである。学生の満足度が4の科目は、全ての項目について最高値を示したのに対し、評価が全般的に低い満足度2.5の科目もあり、これらの科目については、改善を試みる必要があると思われる。

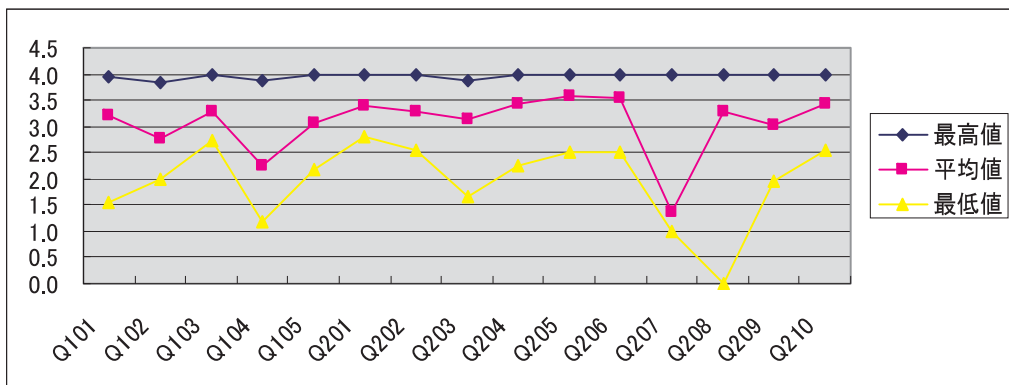


図4 前期授業アンケート 外国語科目

下記の図は同様に体育・健康科目についての授業アンケートの最高値、平均値、最低値を各設問について示している。各設問項目について最高値と最低値に相違が見られるのは、他の科目と同様である。予習や質問が殆んどないのがこの科目の特徴である。

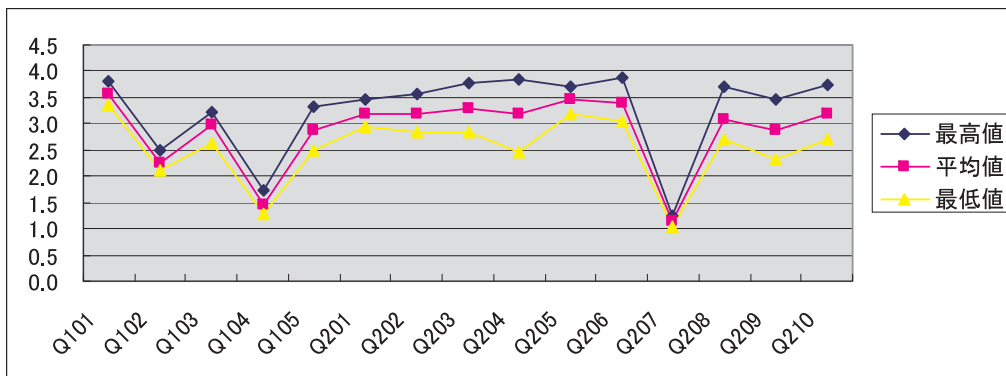


図5 前期授業アンケート 体育・健康科目（理論）

図6は、日本語・日本事情科目についての授業アンケートの最高値、平均値、最低値を各設問について示している。この科目の特徴は、最高値と最低値に殆んど差がない。ただ、予習や質問が殆んどないのは、この科目に限らず共通教育全体に見られる傾向である。

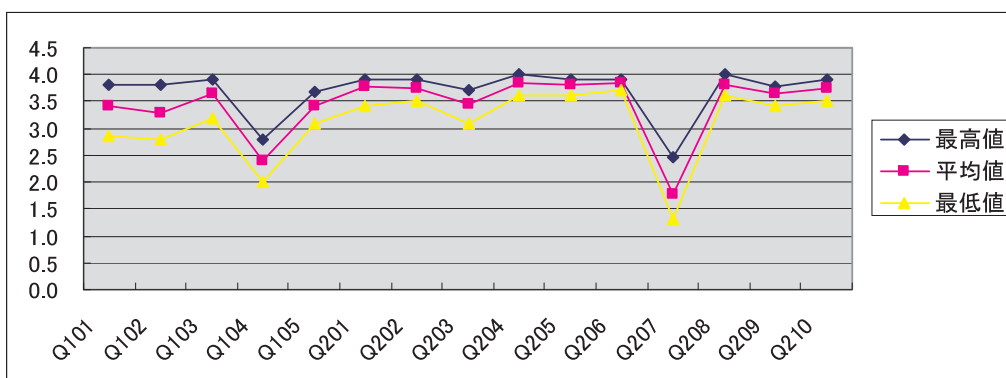


図6 前期授業アンケート 日本語・日本事情科目

図7は基礎教育科目についての授業アンケートの最高値、平均値、最低値を各設問について示している。教養科目同様、各設問に関して最高値と最低値には大きな相違が見られる。また、この科目の特徴は殆んど質問がなかったことである。各授業の担当者は学生が授業について行った評価を分析して、改善する項目があるのか検討することは必要だと思われる。

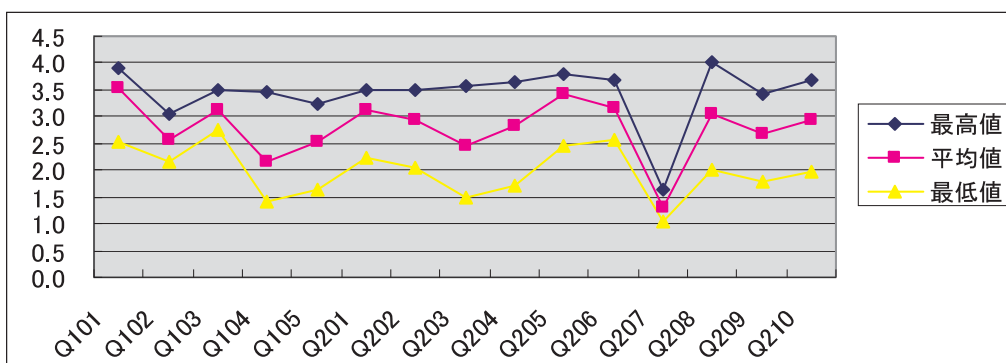


図7 前期授業アンケート 基礎教育科目（講義）

2. 後期

平成19年度後期に共通教育で開講されている授業科目について、下記の表に示すように講義科目255科目、実験・実習科目34科目について授業アンケートを実施した。

表2 後期実施科目数（講義科目および実験・実習科目）

	講 義						講義計	実験・実習		実験・実習計
	教養	情報	外国語	体育	日本語	基礎教育		体育	基礎教育	
回答科目数	73	10	128	5	5	34	255	27	7	34
延べ回答者数	4,356	467	4,252	407	55	1,547	11,084	933	159	1,092

授業科目アンケートは学生の態度として6項目（講義授業アンケート）の実施状況と結果分析、5項目（実験・実習授業アンケート）の実施状況と結果分析、教員による授業評価項目として9項目（講義授業アンケート）の実施状況と結果分析、10項目（実験・実習授業アンケート）の実施状況と結果分析の設問を設けている。アンケートは各設問について4から1の評価で行っている。下図は教養科目、情報科目などについての平均値である。全設問に関して日本語科目の平均値が最も大きく、基礎教育科目が低い評価になっている。評価が特に悪い項目は、(1)シラバスを読まない、(2)予習・復習をしない、(3)質問をしないの「三ない」で、教員より学生に問題があるように思われる。

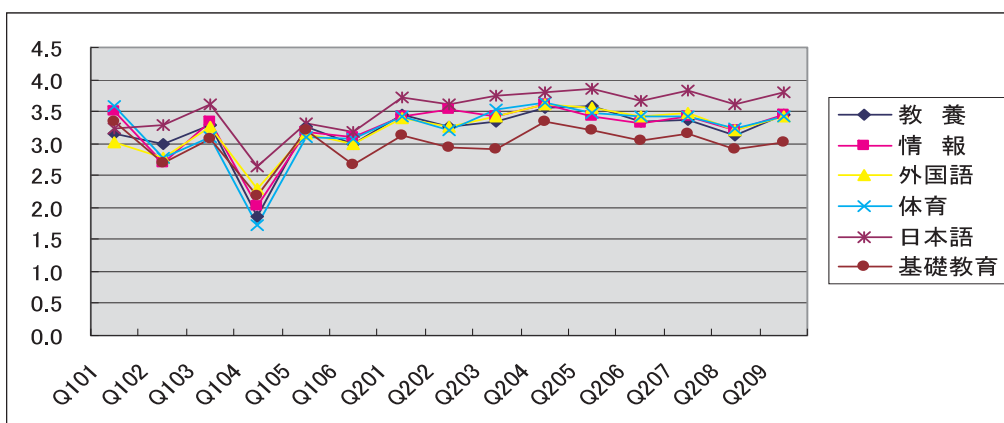


図8 後期授業アンケート 平均値

図9は教養科目についての授業アンケートの最高値、平均値、最低値を各設問について示している。各設問に関して最高値と最低値には大きな相違が見られた。

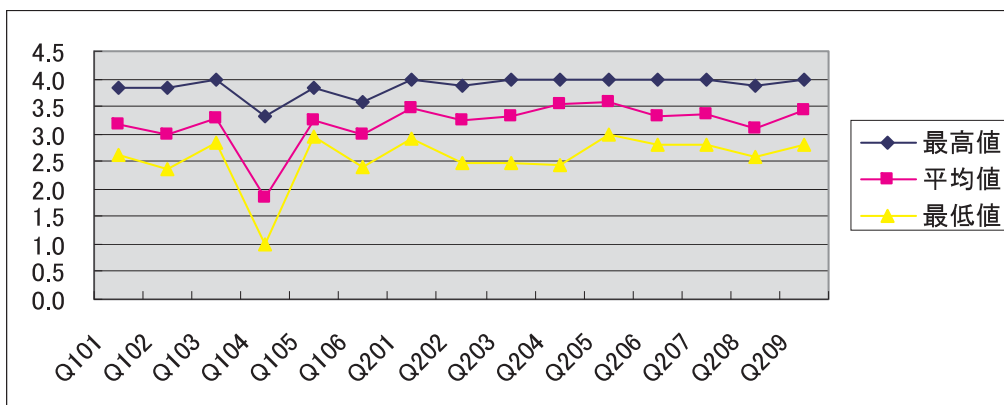


図9 後期授業アンケート 教養科目

図10は同様に情報科目についての授業アンケートの最高値、平均値、最低値を各設問について示している。各設問に関して教養科目と異なり最高値と最低値には大きな相違が見られないのが特徴で、満足度が高い科目でも教員の熱意が低いと回答したり、アンケート結果に一貫性が見られなかった。

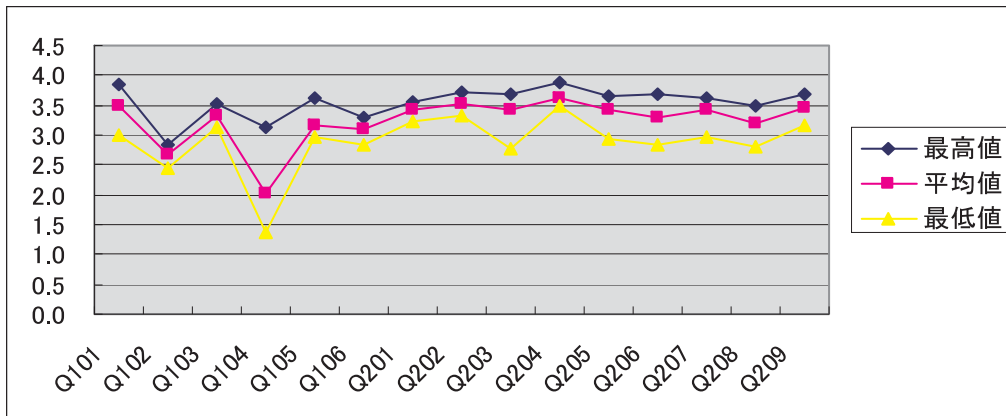


図10 後期授業アンケート 情報教育科目

図11は外国語科目についての授業アンケート結果を示している。授業満足度が低い科目ほど出席が悪く、予習さえ行われていないことをアンケート結果は示している。また、授業満足度が最高値の評価の科目は、全ての項目で評価が最大値を示し、満足度最低の科目では出席率も最低と明らかな違いを見せている。

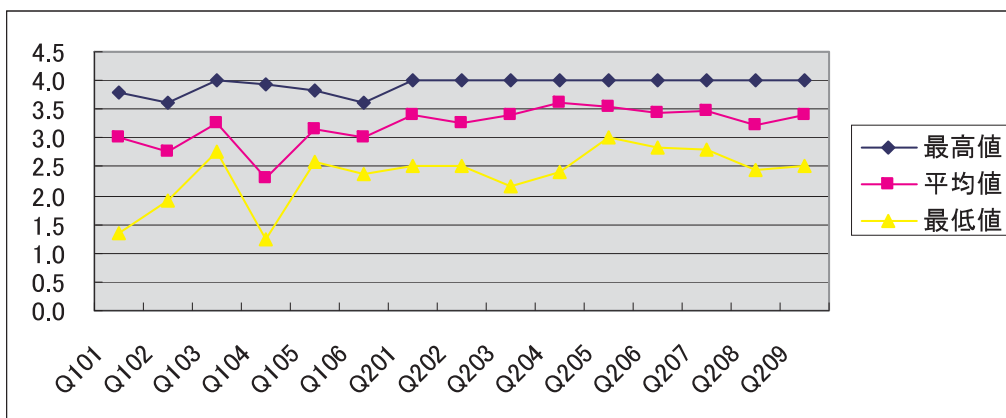


図11 後期授業アンケート 外国語科目

全学的取組み

図12は体育・健康科目（理論授業アンケート）の実施状況と結果分析の授業アンケートの結果で、他の科目とは異なり、出席率は高く、最高と最低の差が殆んどないのが特徴である。

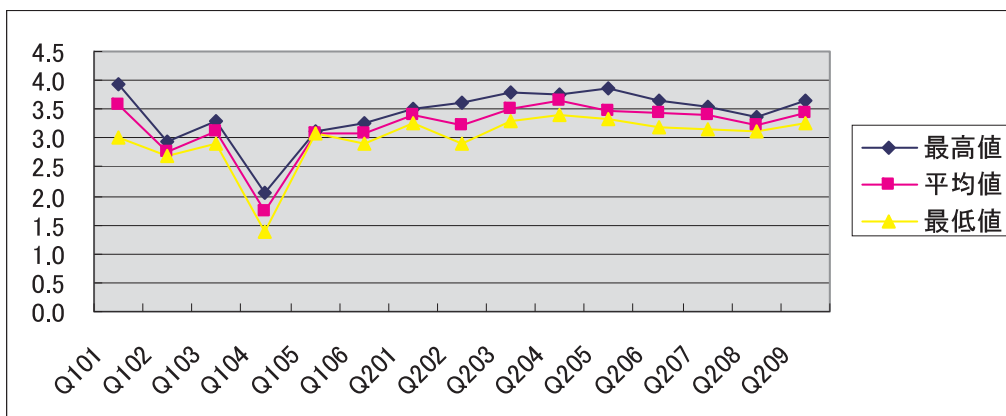


図12 後期授業アンケート 体育・健康科目（理論）

図13は日本語・日本事情の後期授業アンケート結果を示す。体育・健康科目（理論授業アンケート）の実施状況と結果分析同様、最高値と最低値の差が少ないのが日本語・日本事情の特徴である。ただ、授業満足度が低い科目ほど出席率が低い傾向が見られた。

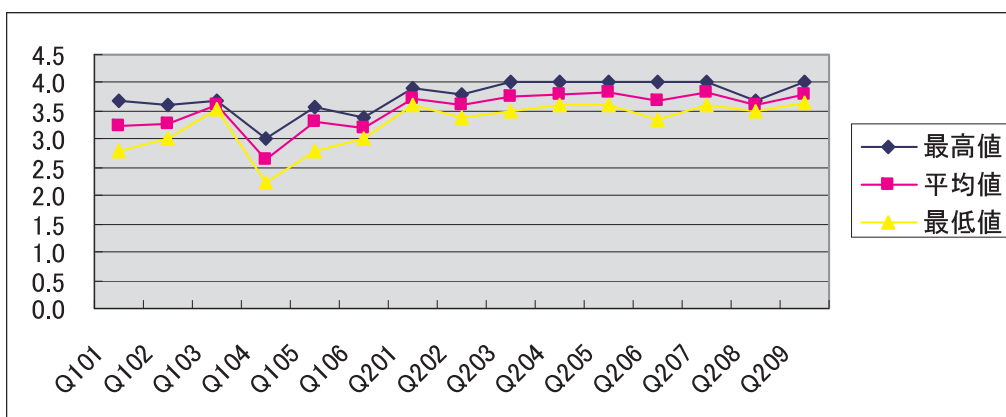


図13 後期授業アンケート 日本語・日本事情

図14は基礎教育科目の授業アンケートの結果を示している。授業満足度を指標にしてみると、授業満足度が低い科目は全ての項目について評価が低かった。

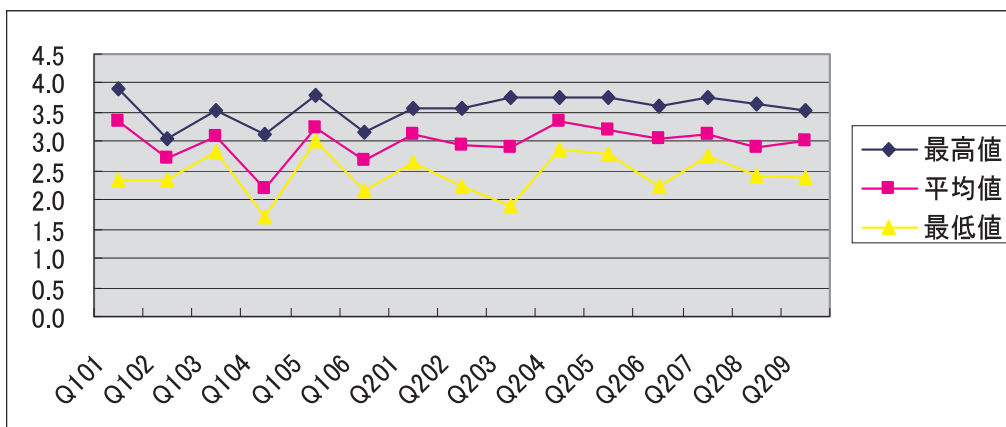


図14 後期授業アンケート 基礎教育科目（講義）

実験・実習授業科目アンケートは学生の態度として5項目、教員による授業評価項目として10項目の設問を設けている。図15の体育・健康科目（実習授業アンケート）の実施状況と結果分析では、授業満足度が低いほど、すべての数値は低い傾向にあった。

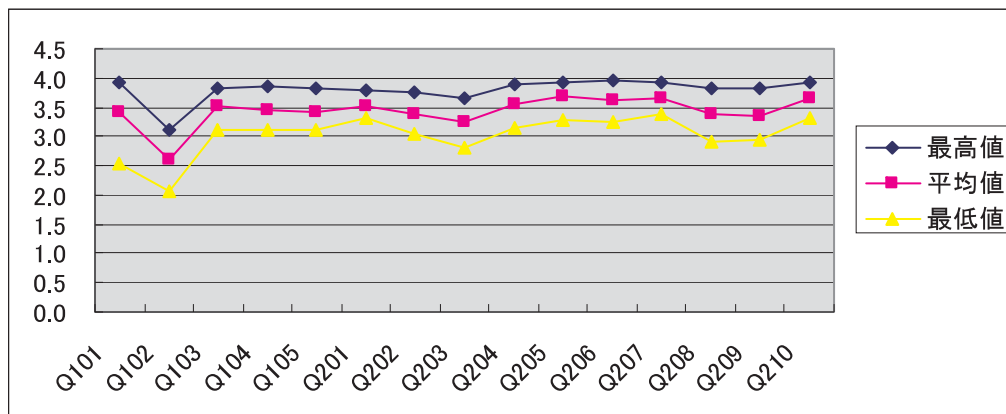


図15 後期授業アンケート 体育・健康科目（実習）

図16は後期授業アンケート基礎教育（実験授業アンケート）の実施状況と結果分析の結果を示している。基礎教育（実験授業アンケート）の実施状況と結果分析の特徴は授業満足度等すべてについて評価が高い授業科目がごくわずかにある一方で、大部分の科目は評価2.0前後と低かった。

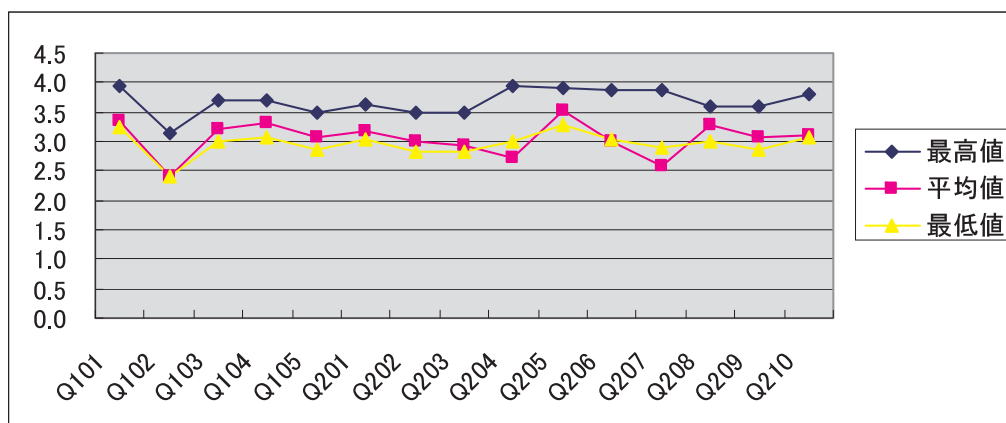


図16 後期授業アンケート 基礎教育科目（実験）

3. まとめ

平成19年度のアンケート調査結果は以上の通りであった。アンケート評価パターンはそれぞれの科目の特徴を表し、改善すべき点も明らかにした。

教養科目、情報科目などの共通教育科目の平均値を全設問項目に関して比較すると、日本語・日本事情科目の平均値が他科目を上回っており、基礎教育科目は一般に評価が低い傾向にあった。これは、日本語科目は受講生10名程度の少人数クラスで、100名超の多人数クラスとは異なるためと思われる。また、全科目に共通して、「シラバスを読んでいない」、「予習・復習の時間が短く講義時間だけの学習になっている」、「質問をしない」ことが明らかになった。この「三ない」は前期、後期を通じて同じで、教員より学生側に問題があると考えられる。

教養科目についての授業アンケートでは、最高値と最低値とでは、例えば授業に対する満足度の項目については最低値2.2から最高値4.0と大きな隔たりがある。これは、教養科目は、少人数クラスから200～300名規模の多人数クラスと様々で、また、受講生のレベルも学部も様々で、簡単には比較できない。

全学的取組み

各授業の担当者は、学生が授業について行った評価を分析して、改善する項目があるのか検討することは必要だと思われる。

情報科目については、前期は授業満足度が低い授業ほど、出席も悪く、すべての項目について評価が低い傾向にあったが、後期は最高値と最低値には大きな相違が見られず、満足度が高い科目でも教員の熱意が低いと回答したり、アンケート結果に一貫性が見られなかった。前期と後期の違いは、担当教員が違うのも一因と思われるが、その原因は不明である。予習・復習をしない、質問をしないのは、教養科目と同様であった。

外国語科目については、最高値と最低値との差異は明らかである。学生の満足度が4の科目は、全ての項目について最高値を示したのに対し、評価が全般的に低い満足度2.5の科目もあり、これらの科目については、改善を試みる必要があると思われる。ただ、予習・復習が不可欠の授業科目にも拘わらず、学生は予習・復習をしていないというのは理解できない。

体育・健康科目については、前期では評価が高い科目と評価が悪い科目との差に相違が見られたのは、他の科目と同様である。しかし、後期では他の科目とは異なり、出席率は高く、最高と最低の差が殆んどないのが特徴である。前期・後期の違いの原因は不明である。

日本語・日本事情科目の特徴は、最高値と最低値に殆んど差がない。これは受講生10名程度の少人数クラスのため、授業効果が上がっているからとおもわれる。ただ、授業満足度が低い科目ほど出席率が低い傾向が見られた。

基礎教育科目についての授業アンケートについては、教養科目同様、各設問に関して最高値と最低値には大きな相違が見られる。また、この科目の特徴は殆んど質問がなかったことである。各授業の担当者は学生が授業について行った評価を分析して、改善する項目があるのか検討することは必要だと思われる。図14は基礎教育科目の授業アンケートの結果を示している。授業満足度を指標にしてみると、授業満足度が低い科目は全ての項目について評価がひくかった。

体育・健康科目（実習授業アンケート）の実施状況と結果分析では、授業満足度が低いほど、すべての数値は低い傾向にあった。

基礎教育（実験授業アンケート）の実施状況と結果分析の特徴は授業満足度等すべてについて評価が高い授業科目がごくわずかにある一方で、大部分の科目は評価2.0前後と低かった。基礎教育（実験授業アンケート）の実施状況と結果分析については、最高値と平均値との差があまりに大きいので、実験科目については授業改善の可能性が充分にあると思われる。ただし、実験については、実験機材、消耗品費、実験室、実験補助の人数とそのレベルなど、教員の努力だけでは行えない課題も多く、改善は望ましいが、現実にはなかなか難しいのが現状である。

以上の授業アンケート結果は、それぞれの授業科目の特徴や改善すべき点を顕著に表わしている。その意味では、授業評価アンケートの調査項目は授業評価には十分に使えるフォームであると言える。

（文責：高等教育研究開発部会委員 水上 惟文、川畑 秀明）

平成19年度教養教育オープンクラス

1. オープンクラスの概要

- (1) 今年度の「オープンクラス」は学外者にターゲットを絞った、授業のみではなく学内の主たる施設の見学やセンター長との懇談会も含めた、総合的な「大学公開」のイベントとした。単なる授業参観ではなく、大学の教育活動を全体的に市民の目線で点検する機会として位置づけた。
- (2) 理由：①調査の結果、上記のようなオープンクラスは全国的にもめずらしい試みである。学生の保護者や受験予定の高校生の保護者など、興味を持ってもらえる可能性がある。②授業改善については授業参観や授業評価アンケートで、高校生向けの大学紹介は各学部のオープンキャンパスで、生涯教育的な意味での市民の授業参加は生涯教育センターの公開授業で行っている。本取組は、一般市民が一週間学生の立場で授業や図書館、情報基盤センター、学食等を体験する総合的な「大学公開」として考えるとその役割が明確になる。
- (3) 基本方針：①授業担当教員にはあらかじめ了承を得る。あるいはこちらから依頼をする。②授業科目だけでなく、施設見学も含める。図書館、情報基盤センター、学食、端末室等。既に図書館などは利用している方もいると思われるので、それぞれの施設に独自の説明会を依頼する。③週の終わりにセンター長との懇談会を持ち、参加者からの意見や要望を聞き授業改善にいかす。④学外者をターゲットにするため、宣伝活動に重点を置く。そのための期間を長めに取る。⑤受講者に前もって本取組の内容を示したパンフレットを送付する。

2. 時間割

	月	火	水	木	金
1限	授業1	授業1	授業1	授業1	授業及びキャンパスウォーキング
2限	授業2	授業2	授業2	授業2	
昼休み					
3限	図書館見学	情報基盤センター見学	博物館見学	稲盛会館見学	センター長等との懇談会
4限	授業3	授業2	授業3	授業3	

3. 日程

日 程	実 施 事 項
5月18日～6月1日	担当教員への参加依頼、授業科目一覧作成、関係施設へ見学依頼、時間割作成、入室証作成。ポスターとパンフレットの原案を業者に提示し、原稿が出来次第即日印刷の手配。
6月4日～6月8日	ポスター、パンフレット印刷
6月11日～(可能であればポスター納入後すぐ)	宣伝活動(新聞掲載、ダイレクトメール、ポスター掲示)
6月18日～6月29日	受講受付、随時パンフレットと決定済み時間割発送、受講者向けアンケート作成
7月2日～6日	予備期間
7月9日～13日	オープンクラス実施

4. 参加者数と公開授業科目数

(1) 参加者数等

参加者数：35名（前年度23名）
 施設見学（中央図書館）：11名
 施設見学（学術情報基盤センター）：7名
 施設見学（総合研究博物館）：8名
 施設見学（稲盛会館）：12名
 キャンパ・ウォーク：15名
 教育センター長懇談会：8名

(2) 公開授業科目数

193科目

5. 参加者からの意見・要望

授業内容や施設、実施内容について、概ね、好評であったが、学生の授業態度に苦言を呈される参加者もいた。

(文責：FD委員会委員 竹内 勝徳)



平成19年度新任教員 FD 研修会 挨拶

教育センター長 谷口 溪山

今日は！ ただ今ご紹介いただいた教育センター長の谷口でございます。所属は大学院医歯学総合研究科の教授で、医学部も併任しております。担当科目は「医療・医人倫理学」、「医の倫理」、「人間学」等を担当し、共通教育では、「英語」も担当しております。どうぞよろしく申し上げます。

先生方は、御縁があって、この鹿児島大学に赴任されたわけであり、心から歓迎するものであります。

教育センターは、平成15年10月1日付で設置された施設で、全体で133名の委員で構成されており、卒業要件の約3分の1を担う非常に大きな組織であります。『高等教育研究開発部』、『共通教育企画実施部』、『外国語教育推進部』の三部で構成されています。『共通教育企画実施部』というのは、旧教養部から共通教育委員会の業務を引き継いでおり、共通教育等の調査・研究・開発や授業の企画・運営を担っております。『外国語教育推進部』は、外国語教育の企画・提言を担っております。やはり、このセンターの中心になるのは、『高等教育研究開発部』であります。その他に、この部と連携して、全学のFD活動の企画・実施を行う全学FD委員会があります。このように教育センターは、鹿児島大学における教育の拠点として位置づけられており、本日の新任教員FD研修会も教育センターと全学FD委員会が連携して企画・運営しております。

教育センターでは、個性輝く鹿児島大学を求めて、2本の柱を掲げております。1つは、

- (1) 大学の基本理念や、大学憲章に基づいた人間教育、すなわち“真理を愛し、高い倫理観と社会性を備えて向上心を持って、自ら困難に立ち向かう人材を育成する”ことと、もう1つは
- (2) 鹿児島大学に入学してきた学生たちに付加価値を付けてあげたいということを考えて、英語教育の充実を目指しております。



- (3) 高校教育と大学教育を連携させるとともに、学問の体系や構造を理解し、専門教育への円滑に接続させるために導入的かつ動機付けのため『導入教育科目』及び「基礎教育科目」の充実を目指しております。

また、今年からは、FD活動には、大学院が義務化されました。来年度は、学部も義務化されていくと思います。したがって、年々FD活動の重要性が増してきております。そこで、本年度のFD活動のスローガンとして、“教員の資質向上を目指して：学生に対する人間教育に視点を”と考えており、それを目指して行きたいと思っております。

よく「FD」とは何かと言われますが、「FD」という言葉を簡単にそのまま訳すと、教員の資質改善となりますが、「FD活動」となるとかなり幅広くなります。FD活動は大学教員の能力開発の核となるものでありますが、それに限定するのは誤りであります。

一般にFDとは、大学における教育の諸活動を真に意義あるものとするための組織的支援活動を総括する代名です。したがって、FDとは、個々の大学が所属する教員の教育、研究、社会貢献等の使命を達成するために必要な専門的能力を維持し、改善するためのあらゆる方策や活動であります。FDには様々な活動があります。ベテラン教員による新任教員の指導、教員の教育技法、教授方法等の改善、あるいは授業評価、教育優秀教員の表彰制度等、次から次へと課題があります。

以上のことは、『大学力を創る：FDハンドブック』の序で絹川正吉先生が述べている事を簡単に要約したものでありますが、私はFD活動を上記のように主として教授内容、教授方法、授業評価等に心血を注いで、限定するものであってはならないと考えております。

いや、むしろ、いみじくも、文部科学省高等教育局による「大学における学生生活の充実方策について—学生の立場に立った大学づくりを目指して—」(平成12年6月)の報告書によりますと、「大学教員は、初等中等教育段階の教員と異なり、学生に対して教育・指導をする訓練を受けてない。学生に対するきめ細やかな教育・指導を充実させるためには、各大学において全学的・組織的にファカルティ・ディベロップメント (FD)を進める中で、積極的に教員に対する教育・指導についての研修を行うことが求められる。この際、正課教育における授業内容・方法のみに限定するのではなく、学生の人間的な成長を図る観点から必要な指導についても、その研修内容に加えることが適当である。」と述べています。

本年度のFDのスローガンとして、「教員の資質向上を目指して：学生に対する人間教育にも視点を」を目指しております。私達教員は、たゆまぬ授業改善の努力はもとより、学生に対する人間教育をも夢々怠ってはいけなないと考えております。自己の人間観、人生観、社会観、倫理観等が内奥にあつてこそ、教育を教育たらしめていくものと思っております。また、そういった信念に基づく教育を出来る教員に育っていただきたいと念願する次第であります。その事が、逆に学生は教員によって育まれてくるものと思いません。学生に対する決め細やかな教育・指導とは、そういう事を指摘しているものと思いません。

また一方で、10月の22日と23日に認証評価による訪問調査がありました。その時に、“自己の研究が教育に反映されているか、どうか”もたずねられました。自己の研究を究めつつ、それが教育の現場に反映をしていくことが求められています。

しかし、その教育の現場に反映していく教育方法(教授技法)が結構難しいものであります。そこで、その教育方法等の手がかりになればと願って、本日、新任教員の研修会を開催しました。多

数の先生方のご参加を頂き、厚く御礼を申し上げます。

基調講演として、NHK鹿児島放送局の放送部長でいらっしゃる福原先生にお願いに上がりましたところ、快く引き受けていただき、「一わかりやすい話し方」と題して、御講演を頂くことになりました。感謝をいたしております。先生の御講演から学び得ることが多いかと思えます。午後は、授業参観と、それに伴う懇談会が予定されております。

ぜひ、この研修会を通じて、自己の教師像確立のヒントにしていいただければと願っております。

新任教員FD研修会

平成19年度の鹿児島大学新任教員FD研修会は平成19年10月25日（木）に開催された。これまで、毎年4月に人事課が実施する新任教員研修と合同で実施してきたが、参加者に好評であったとは言い難く、平成18年度の研修会終了後より新しいスタイルを鹿児島大学FD委員会のWGで検討してきた。検討の過程で、新任教員が新たに授業を始めるときに、その授業を分かりやすく、学生にとって良いものにするために何をアドバイスできるか議論した結果、話し方のテクニックも極めて大切であるとの結論に達した。

そこで、今年度は「話」のプロを招き、如何にすれば話の内容をより効果的に相手に伝えることができるか講演してもらい、その後ベテラン教員の授業を参観し、今後の自分の授業にどのように生かすべきか、グループで討論してもらうという原案を作成した。この案は、平成19年9月25日に開催された平成19年度第6回FD委員会で正式決定された。また、NHK鹿児島放送局放送部長福原健一氏を講師にお願いすることになった。研修会参加対象者は、平成18年4月1日から平成19年3月31日までに本学に着任された教員の中で、今回初めて授業を担当することになったものとした。

当日のスケジュールは以下の通りであった。

10時：開会の挨拶（谷口教育センター長、
中山教育・学生担当理事）

10時30分－12時：基調講演
－分かりやすい話し方－
講師：福原健一
(NHK鹿児島放送局放送部長)

12時50分－14時20分：授業参観（6教室）

14時30分－16時：討論会、全体報告

当日の参加者は、講演会は新任教員28名、授業参観と討論会までの出席者は22名で、授業参観及び討論会へ全学のFD委員会からも11名の教員が参加した。

基調講演の講師を依頼する際、福原氏には放送現場でその場の雰囲気や如何に視聴者に伝えるかということを中心に、良いコミュニケーションと



はどういうことなのかということでも話をさせていただくようにお願いした。

講演の中で、我々が授業の中で生かすことができると思われることがいくつかあったので、それらを以下で紹介したい。

- ・話は一番大切なことからスタートする。＝特に短いスピーチでは、無意味なイントロダクションが入ることで、印象が弱くなり、何をいいたいのかわからなくなる。
- ・視線が大切である。＝ニュースの放送時、下を向いて原稿を読むだけでは視聴者はニュースに

興味を持たないし、内容を信用しない場合がある。絶えず相手を見ることで、こちらに注目が集まる。これは大学の授業でも同じ。

- ・ワンフレーズは短く。＝接続詞で文章をやたら多くつなぐと、何が言いたいのか聞き手は分からなくなる。
- ・相手にあわせた話し方の重要性。＝相手はこちらと同じテンションを持っていない場合もある。その場合は、しゃべりの間とトーンが重要になる。

当日の講演は、福原氏が多く手がけてきたスポーツ中継などにおけるエピソードを交えた、ユーモアたっぷりのもので、参加者の誰1人眠らなかったのは特筆される。午後からは、共通教育で開講されている井上知子、志賀美英、泉健子、宮廻甫允、松口徹也、水上惟文の各先生の授業を参観後、3－4名の研修参加教員とタスクフォース1ないし2名がグループとなり、現在行っている授業における工夫だけでなく、講演会での内容や授業参観で感じたことを、今後の自らの授業の改善に如何に生かすべきか等について活発な意見交換がなされた。各グループでの討論で出された意見や内容を全体討論で紹介し、質疑応答がなされた。これまでの新任教員研修会のスタイルを一新して迎えた最初の研修会であったが、参加者からの反応は、概ね良好で安堵している。

最後に、授業参観を快く引き受けてくださった上記6名の先生に心よりお礼申し上げます。

(文責：FD委員会委員 曾根 晃一)



平成19年度『教養セミナー』ワークショップ 挨拶

教育センター長 谷口 溪山

今日から師走。年末に向けて、この気ぜわしい時に、また、土曜日という日にワークショップを開催することを心苦しく思いつつも、多くの先生方の御参加を得ましたことを厚く御礼申し上げます。

中期目標・中期計画の各年度計画には、少人数教育の導入ということがうたわれております。

平成15年10月1日付けで教育センターが設立され、その教育センター長として、私は、法人化評価（当時は暫定評価とっておりましたが）の始まりの年度である平成16年に、年度計画の一つとして、早々にその少人数教育の導入をたてました。

当時、「長崎大学大学教育機能開発センター」が「長崎大学初年次教育」で教育 COE を獲得していたことを知って、私と事務方二人の計三人で調査に行き、続いてこの二回目の調査には、本日の「ワークショップ」のレクチャーをされる永吉先生に御同行を願って、重ねて調査に行きました。

そして、長崎大学よりお二方（栗山一孝先生と井手先生）をお招きし、「教養セミナーデザイン：長崎大学の少人数教育に学ぶ」というテーマで、平成16年10月1日、FD 講演会及びワークショップを一泊二日の日程で開催し、学習をしました。

以来、永吉先生、坂井先生、雲井先生、日高先生や当時大学院医歯学総合研究科助教授（後に熊本大学教授へ転出）、高等教育研究開発部の助教授であった杉本先生等の御尽力で、この「教養セミナー」は平成17年度より開設されました。その結果、年々受講生が増加をし、本年度は272名であります。

何はともあれ、現在12名の先生方、この「教養セミナー」に取り掛かられている姿勢は、いきいきと躍動しておられます。この「教養セミナー」を鹿児島大学の目玉にしたいという勢いがあります。

この教養セミナーの目的、及び教養セミナーの達成目標は、本日配布しました資料の3頁に書かれております。

教養セミナーの目的

1. 知的活動への動機を高める
2. 科学的思考方法・学習のデザイン能力を高める
3. 自己表現力を高める
4. 学生と教員の、学生相互のコミュニケーションを図る

本年度の受講生は272名で、その実施概要及び学部別の受講生は、4頁に書かれております。

この勢いで行くと、現在担当されている12名の教員では、とても受講生の要望に応じきれないという危機感をいただきました。

そこで、急ぎ、学生の要望に応じていくうえでも、20年度以降、「教養セミナー」を担当できる教員を養成しておかなければならない事態に迫りやられて、このワークショップを開催することにしました。

この「教養セミナー」は毎年開講されますので、全学の教員は5年に一度ぐらひは、この「教養セミナー」をご担当いただければと願っております。

なお、過日開催された「鹿児島大学・高校ガイダンスセミナー」で、‘少子化に伴う大学全入時代における学びのモチベーションをいかに高めるかについて’がテーマとなり、‘いかに知的興味・関心をかき立て、自主的に学問の世界を極めていく人間を育成するか’、ということが議論の一つになりました。

教育センターのこの「教養セミナー」は、まさに、そうした課題にこたえる『導入教育科目』であります。また、年々受講生が増加（本年は272名）している点からも、学生の関心度の高いことが伺われます。こうした学習目標を持つ、この「教養セミナー」のワークショップに、本日、御参加をいただき、まことに厚く、重ねて御礼を申し上げます。どうか一つ、このワークショップを通じて、ぜひ、学ぶところを得ていただいて、今後、鹿児島大学の教育の発展に、あるいは、教育センターへの御協力をお願いしまして、私の御挨拶にかえさせていただきます。

全学FDワークショップ「教養セミナーデザイン」

日時：平成19年12月1日(土)13時30分～16時30分

場所：共通教育棟1号館2階第1会議室、他

目的：平成20年度以降の教養セミナーを担当できる教員を育成する

内容：教養セミナーのシラバスと授業計画書を作る班作業を通して、少人数教育の実情と問題点を議論する

プログラム

- 13：30～ 開会の挨拶（教育センター長）
 13：40～ 教育・学生担当理事挨拶
 13：45～ ミニレクチャー
 ： 鹿大における教養セミナーの現状と本日の作業説明（理・永吉）
 ： 19年度の実施例（水・日高）
 14：30～ 各班ごとの討議（60分）
 15：30～ 全体発表（発表5分+討議3分）
 × 6班
 16：25～ 閉会の挨拶

1. 背景と目的

近年ほとんどの大学において、「大学での主体的な学び方を学ぶ」ための科目として、少人数によるグループ活動を柱とした、導入教育的な授業が開かれている。鹿児島大学でも、平成16年度に長崎大学からの講師を招いて行ったFDワークショップを基盤とし、表1に示した目的と到達目標を掲げて、平成17年度に「教養セミナー」という名称の授業を立ち上げ、今日に至っている。

初年度は周知不足もたまたまわずか19名の受講者であったが、その後は表2に示すように受講者数も順調に増え、平成19年度には12名の教員と272名の学生が参加する授業へと育ってきた。さらに多くの学生を受け入れるためには、授業担当教員の数を増やすことが急務となっている。

本学の教養セミナーでは、複数の教員が最大50名の中規模クラスを担当し、その中で学生は数名ずつのグループに分かれて、共同作業により1つのテーマを調査し、成果を発表するという形態が定着してきた。これによって、すべての授業日に参加するのが困難な多忙な教員でも、無理なく教

表1

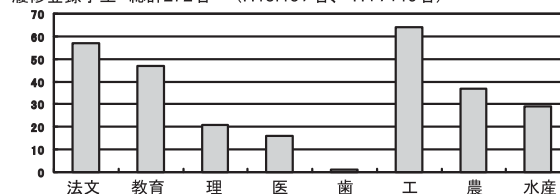
教養セミナーの目的	
1.	知的活動への動機を高める
2.	科学的思考方法・学習のデザイン能力を高める
3.	自己表現力を高める
4.	学生と教員の、学生相互のコミュニケーションを図る

教養セミナーの到達目標	
1. (課題発見能力)	課題（テーマ）を発見し、その解決に向けて思索・行動することができる
2. (コミュニケーション能力)	グループ内で協力して作業を進めることができる
3. (自己表現能力)	ディスカッションに積極的に参加し、自分の考えを述べることができる
4. (課題探求能力)	テーマに関連した情報やデータを検索・収集することができる
5. (情報処理能力)	プレゼンテーションに必要な情報技術を適切に操作することができる
6. (プレゼンテーション能力)	調査結果を分析し、効果的に説明・発表することができる

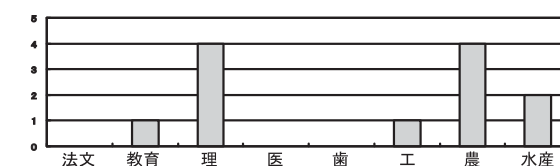
表2

平成19年度の教養セミナー概要

履修登録学生 総計272名 (H18:157名、H17:19名)



担当教員12名 (6クラス=水1限:3クラス、木2限:1クラス、金1限:2クラス)



養セミナーの授業を担当することができる。

しかしこのような教養セミナーの姿は、必ずしも本学のすべての教員に知られてはいないようである。授業の担当を持ちかけても、趣旨はわかるが自分にはとても担当できないと断られることが多い。教養セミナーの真の姿を知ってもらい、誰もが気楽にこの科目を担当できるような体制を整えることが、冒頭に掲げた教育目標を達成するために急務であると考えられる。

本科目の実施スタッフは、教養セミナー担当の実習を目的とするワークショップを、今後は毎年定期的実施することにし、その第1回を全学FD委員会の行事として、平成19年12月に開催することになった。

2. 実施内容

今回のワークショップは、19年度の教養セミナー担当者8名を含むスタッフ14名と、各学部からの一般参加者29名の参加を得て、前頁プログラムの要領で開催された。

まず最初に、本学における教養セミナーの経緯と、19年度における授業実施例についてのミニレクチャーがあった。特に後者では、19年度より本格的に稼働し始めたe-ラーニングシステム「Moodle」が、週に1度しか受講者が顔を合わさない共通教育のグループ活動型授業において、特に有効に機能することが紹介された。

ミニレクチャーのあと一般参加者は、6つの班に分かれてワークショップの作業に入った。各班には、19年度の授業担当者が1名ずつ、タスクフォースとして貼りついた。一般のワークショップの場合とは異なり、タスクフォースには単なるタイムキーパーとしてでなく、授業経験者としての経験を活かし、班の議論に深く関与していただいた。

具体的には表3のガイドに従って、教養セミナーの授業で学生が行う共同作業の形式により、教養セミナー1クラス分のシラバスを作っていた。このグループ作業自体が、教養セミナーの授業において学生にしてもらう作業の一形態であり、教養セミナーの実習を兼ねているわけである。

各班に配布されたノートパソコンには、議論する事項、作成するシラバスを組み込んだ表4のようなワークシートが前もって組み込んであり、議論をしながらその空欄を埋めていくと、班としてのプロダクトができあがるように配慮した。

班の作業時間は60分だったが、これはあまりに短すぎたようである。時間内にこのワークシートを完全に埋めることのできた班は多くなかった。

表3

本日の作業ガイド	
次の条件のもとに、各班ごとに討議して1クラスの1学期間の授業計画を立て、それをプロダクト（実施計画書とシラバス）としてまとめてください。	
1	教養セミナーの目的・目標にそった計画であること
2	1クラスは教員2名+学生30名で構成する
3	学生は全学部混成
4	シラバスには、学生がクラス選択する上での有用な情報を盛り込むこと



3. 各グループによるプレゼンテーション

作成したワークシートをスクリーンに投影する形式で、各班で設計した教養セミナーの授業計画を説明していただいた。発表時間は短かったが、どの班も要領よく発表を行い、そのあとの質疑応答・意見交換は活発に行われた。

今回のワークショップは、議論・発表を1セットしか行う時間がなかったため、発表に対して他班から出された意見を盛り込んでプロダクトの質を高めるという作業はできなかった。しかしワークショップ終了後には若干の時間をとり、語句の訂正や体裁を整えたうえで、最終プロダクトとして提出していただいた。その最終プロダクトを、氏名部分を除いて表5にそのまま掲載しておく。

4. アンケート

参加者には簡単なアンケートを書いてもらい、今回のワークショップによって教養セミナーとはどのようなものであるのが理解できたか、教養セミナーの趣旨に賛同できるか、今回のワークショップが有意義であったかを問うた。おおむね3分の2以上の参加者から、肯定的な回答があっ

た。作業時間が短かったこと、多忙な時期の開催だったことなど、不利な環境のもとでの開催であった割には好意的に受け取られ、主催者として参加者に感謝している。また自由記述欄では、約20件の貴重な意見が寄せられた。今後の教養セミナーの実施にあたって、またワークショップの開催にあたって、大いに参考とさせていただきたい。

なおワークショップ自体へのアンケートとは別に、「教育センター長からのお願い」という形で、20年度の教養セミナー担当への意向を調査した。多くの教員は「関心はあるが他の授業を多く担当していてこれ以上は難しい」という回答であり、結局は今回の参加者の中から新たに教養セミナーに参加する教員は現れなかった。

5. おわりに

今回のワークショップは準備期間も短く、12月という多忙な時期の開催、特にそれが次年度の授業登録期限間際であったことなど、新たな参加者を集めるという目的のためには、条件がよかったとは言えない。次年度のワークショップは、もっと早い時期に開催したい。しかしワークショップ参加者の中から直ちに手を挙げる教員がいなくても、このようなワークショップの開催を毎年繰り返すことにより教員の理解を高めていけば、何年に一度かは教養セミナーを担当してみようという教員も多く現れてくると信じている。

なお20年度の教養セミナーは、本ワークショップの一般参加者からの新規参加はなかったものの、新たな担当者4名を迎え、14名の体制で実施できることになったことを、最後に付記しておきたい。

(文責：永吉秀夫 (理学部))



全学的取組み

平成 19 年度 F D ワークショップ 各作業班のプロダクト

表 4

第 班			
役割	氏名	役割	氏名
リーダー		発表係	
資料作成		記録係	
		タスクフォース	

まず各班の基本方針を討議して、その内容をここに書いてください。教養セミナー全体の目標のもとで、特にこのクラスでは学生にこうなってほしい、こんな力を身につけさせたい.. といったことを討議してください。欄はいくら伸ばしてもかまいません。

--

基本方針に従って具体的な実施方法を討議し、その内容を書きこんでください。欄はいくら伸ばしてもかまいません。

グループ編成の方法	
テーマの選択方法	
教室	
授業の日程	(実際のシラバスの中に書きこんでください)
グループ活動促進のための方策	
授業時間にやることと時間外にやることの明確化	
Moodle の利用形態	
成績評価方法	
日常活動の評価方法	
その他	

上記に従って、学生が見る実際のシラバスの中核部分を下記に作成してください。欄は必要に応じて多少は伸ばしてもかまいませんが、実際のシラバスにしたとき 1 頁に収まるためには、この部分全体で 30 行程度以内であることが必要です(最初の状態では 23 行です)。

授業概要 (目的・内容・方法)	教養セミナーは新 1 年生を対象とし、「知的活動への動機を高める」、「科学的思考方法」、「学習のデザイン能力を高める」、「自己表現力を高める」、「学生と教員の、学生相互のコミュニケーションを図る」という目的で開講する授業科目です。 このクラスでは....	
成績評価基準および方法		
授業計画	第 1 回 : 第 2 回 : 第 3 回 : 第 4 回 : 第 5 回 : 第 6 回 : 第 7 回 : 第 8 回 :	第 9 回 : 第 10 回 : 第 11 回 : 第 12 回 : 第 13 回 : 第 14 回 : 第 15 回 :
その他		

表 5

第 1 班

まず各班の基本方針を討議して、その内容をここに書いてください。教養セミナー全体の目標のもとで、特にこのクラスでは学生にこうなってほしい、こんな力を身につけさせたい、..といったことを討議してください。欄はいくら伸ばしてもかまいません。

偉大なる科学者から学ぶ。 鹿大卒の成功者なら親近感を得られるのでなお好ましい。彼らの生き立ち、時代背景や、生き様を学ぶ。 どうして科学を志すことになったのかそのきっかけをも学び、学生の科学の学習へのモチベーションを高める。 彼らの業績が現代の生活、科学技術に貢献していることを認識させる。 成功者の影に成功しなかつた多くの人の存在があることも学ぶ。 学習内容を、自分の人生にどう生かすか考えさせる。
--

基本方針に従って具体的な実施方法を討議し、その内容を書きこんでください。欄はいくら伸ばしてもかまいません。

グループ編成の方法	学生の希望を聞いて、6人程度のグループに分ける。5グループか。
テーマの選択方法	学生の希望優先。丹下梅子、高木兼寛など？教官がサジェストも考慮する。
教室	端末室
授業の日程	(実際のシラバスの中に書きこんでください)
グループ活動促進のための方策	ゲーム方式の自己紹介で仲間意識を高める。郷土の偉人、(例) 丹下梅子の像の見学。
授業時間にやることと時間外にやることの明確化	Moodle を利用する。 グループディスカッション。 プレゼンテーション技術の習得。
Moodle の利用形態	時間外の活動。質疑応答。コミュニケーション。
成績評価方法	出席と発表態度。最終レポート。発表は分担して全員発表する。個人別に出来次第を評価。グループごとの違いが出ないように配慮。
日常活動の評価方法	Moodle を利用する。アクセス数とその内容の確認して評価。
その他	

上記に従って、学生が見る実際のシラバスの中核部分を下記に作成してください。欄は必要に応じて多少は伸ばしてもかまいませんが、実際のシラバスにしたとき1頁に収まるためには、この部分全体で30行程度以内であることが必要です(最初の状態では23行です)。

授業概要 (目的・内容・方法)	<p>教養セミナーは新1年生を対象とし、「知的活動への動機を高める」、「科学的思考方法」、「学習のデザイン能力を高める」、「自己表現力を高める」、「学生と教員の、学生相互のコミュニケーションを図る」という目的で開講する授業科目です。 このクラスでは、...</p> <p>偉大なる科学者から学ぶ。 鹿大卒の成功者なら親近感を得られるのでなお好ましい。彼らの生き立ち、時代背景や、生き様を学ぶ。 どうして科学を志すことになったのかそのきっかけをも学び、学生の科学の学習へのモチベーションを高める。 彼らの業績が現代の生活、科学技術に貢献していることを認識させる。 成功者の影に成功しなかつた多くの人の存在があることも学ぶ。 学習内容を、自分の人生にどう生かすか考えさせる。</p>	
成績評価基準および方法	出席と発表態度。最終レポート。発表は分担して全員発表する。個人別に出来次第を評価。グループごとの違いが出ないように配慮。	
授業計画	第1回：見本と同じ 第2回： 第3回： 第4回： 第5回： 第6回： 第7回： 第8回：	第9回： 第10回： 第11回： 第12回： 第13回： 第14回： 第15回：
その他		

全学的取組み

第 2 班

まず各班の基本方針を討議して、その内容をここに書いてください。教養セミナー全体の目標のもとで、特にこのクラスでは学生にこうなってほしい、こんな力を身につけさせたい...といったことを討議してください。欄はいくら伸ばしてもかまいません。

Moodleの使用に関する学生自身のルール策定
 専門性にとられないテーマ選びをしてもらう
 自分の興味あるテーマを選んで、本グループとなる
 自己評価で自分の能力を反省する

基本方針に従って具体的な実施方法を討議し、その内容を書きこんでください。欄はいくら伸ばしてもかまいません。

グループ編成の方法	仮グループ → テーマを出させる → 興味のあるものが 本グループ 形成 本グループは五六人
テーマの選択方法	入学した学部にとられないことをテーマに取り扱う →
教室	
授業の日程	(実際のシラバスの中に書きこんでください)
グループ活動促進のための方策	初回に「興味あること」を出させる なんでも言わせる
授業時間にやることと時間外にやることの明確化	授業時間 テーマの設定 資料の持ち寄りと評価、話し合い やっちゃいけない ネット検索 資料の整理 授業時間外 調査 次の時間での個人発表、調査のまとめ Moodle を使用したディスカッション 資料のアップロード A4、画面一面程度 自分の貢献度、反省点などを掲示板で書く 個人の資料収集の記録記載 自己評価の記録 点数化? 毎回の活動記録を含む 自己評価の項目? 情報収集について 多角的な視点を学ばせたい → 異説を調べてくる ネット以外の資料を活用してほしい 自分なりの情報の整理 アンケートなど自分で動いてデータを集める
Moodle の利用形態	調べたまとめ資料のアップロード → 目を通しておくこと 自己評価、反省点、活動記録 クラス間でのアンケート グループ内での意見交換 書き込みの項目 学生が決める、教官側で決めておく? 使用法のルール決め グループの進歩を評価できないか?
成績評価方法	授業中のグループ内相互評価 発表会における他グループへの積極的な発言
日常活動の評価方法	収集した情報の内容の重要性 量ではない 収集した情報の根拠の明確性
その他	

上記に従って、学生が見る実際のシラバスの中核部分を下記に作成してください。欄は必要に応じて多少は伸ばしてもかまいませんが、実際のシラバスにしたとき 1 頁に収まるためには、この部分全体で 30 行程度以内であることが必要です(最初の状態では 23 行です)。

授業概要 (目的・ 内容・ 方法)	教養セミナーは新 1 年生を対象とし、「知的活動への動機を高める」、「科学的思考方法」、「学習のデザイン能力を高める」、「自己表現力を高める」、「学生と教員の、学生相互のコミュニケーションを図る」という目的で開講する授業科目です。 このクラスでは、 専門性にとられないテーマをみなさんに出してもらい、その中から自分の興味あるテーマを選んで、本グループとします。グループで資料収集等を行います。Moodle を用いて、資料についての議論、資料の供覧をします。使用する中で、ネットのエチケットを考え学生自身で使用ルールを決めてもらいます。こういう活動を通して、データや資料の整理、正確な根拠に基づく資料の検証、効率よい情報伝達について学びます。	
成績評価基準 および方法	授業中のグループ内相互評価 発表会における他グループへの積極的な発言 50% 収集した情報の内容の重要性 収集した情報の根拠の明確性 50%	
授業計画	第 1 回：オリエンテーション・アイスぶれーキング、仮グループ決め 第 2 回：テーマの決定と本グループの決定、役割分担、資料収集および資料の正確性検証方法の検討など 第 3 回：情報検索法の説明と質疑応答 第 4 回：パソコン使用法の説明 第 5 回：収集した資料の整理と入力① 第 6 回：収集した資料の整理と入力② 第 7 回：中間発表 発表のスタイルを知る 目的、材料、方法、結果、考察 これまで集めた資料の検証 第 8 回：追加資料の整理、検証、入力①	第 9 回：追加資料の整理、検証、入力② 第 10 回：追加資料の整理、検証、入力③ 第 11 回：追加資料の分析、考察、入力① 第 12 回：追加資料の分析、考察、入力② 第 13 回：発表準備 第 14 回：最終発表会① 第 15 回：最終発表会②
その他		

第 3 班

まず各班の基本方針を討議して、その内容をここに書いてください。教養セミナー全体の目標のもとで、特にこのクラスでは学生にこうなってほしい、こんな力を身につけさせたい...といったことを討議してください。欄はいくら伸ばしてもかまいません。

重点目標
達成目標 2 コミュニケーション能力 6 プレゼンテーション能力
各プロセスで、自主性を発揮させる。

基本方針に従って具体的な実施方法を討議し、その内容を書きこんでください。欄はいくら伸ばしてもかまいません。

グループ編成の方法	シラバスの中にテーマを提示しておき、自主的にグループ分け（5～6名）する。
テーマの選択方法	次にグループ内でプレゼンテーションし、自主的にテーマを選択する。
教室	
授業の日程	（実際のシラバスの中に書きこんでください）
グループ活動促進のための方策	自主性（興味あるテーマを選定） 教員が学生作業記録（全員作成）をチェックする。
授業時間にやることと時間外にやることの明確化	
Moodle の利用形態	作業記録
成績評価方法	プレゼンテーションの過程を重視する。
日常活動の評価方法	
その他	

上記に従って、学生が見る実際のシラバスの中核部分を下記に作成してください。欄は必要に応じて多少は伸ばしてもかまいませんが、実際のシラバスにしたとき 1 頁に収まるためには、この部分全体で 30 行程度以内であることが必要です（最初の状態では 23 行です）。

授業概要 （目的・内容・方法）	<p>教養セミナーは新 1 年生を対象とし、「知的活動への動機を高める」、「科学的思考方法」、「学習のデザイン能力を高める」、「自己表現力を高める」、「学生と教員の、学生相互のコミュニケーションを図る」という目的で開講する授業科目です。</p> <p>このクラスでは、コミュニケーション能力とプレゼンテーション能力の向上に重点をおきます。そのため、テーマ選定においては、まずグループ内で各自プレゼンテーション①し、自主的にテーマを決定する。全員がグループ内でプレゼンテーション②、③をし、その中での優秀者（2～3名）が最終プレゼンテーションに臨む。</p>	
成績評価基準および方法	<p>プレゼンテーション① 10%</p> <p>② 20%</p> <p>③ 30%</p> <p>作業記録 10%</p> <p>最終レポート 30%</p>	
授業計画	<p>第 1 回：</p> <p>第 2 回：テーマ選定プレゼン①</p> <p>第 3 回：</p> <p>第 4 回：</p> <p>第 5 回：</p> <p>第 6 回：</p> <p>第 7 回：グループ内中間プレゼン②</p> <p>第 8 回：</p>	<p>第 9 回：</p> <p>第 10 回：</p> <p>第 11 回：</p> <p>第 12 回：</p> <p>第 13 回：グループ内プレゼン③</p> <p>第 14 回：最終発表</p> <p>第 15 回：</p>
その他		

まず各班の基本方針を討議して、その内容をここに書いてください。教養セミナー全体の目標のもとで、特にこのクラスでは学生にこうなってほしい、こんな力を身につけさせたい...といったことを討議してください。欄はいくら伸ばしてもかまいません。

①：思考の作法

まずは、思考の作法(例えば思考と事実の使い分け)を身につけてほしい。

②：思考の楽しさがわかる学生の育成

思考の作法を通じて未知の課題を見だし、自ら課題を解決する喜びを知ってほしい。

③：思考の共有と発展

グループ間のコミュニケーション、プレゼンテーションなどの複眼的な議論を通じて、グループ内で解決した課題の結果がより深まることを知ってほしい。

基本方針：なんでもありよりある程度テーマを設定したほうがよい。大きなくりのテーマ(責任を持って指導できる範囲)を与えた上で、各班の特色が出せるような指導をしたい。教員は、学生の資質を考慮した上でmoodleなどを用いて指導する。

質問：「グループ間のコミュニケーション」とはグループ発表の時以外でもコミュニケーションをとるという意味ですか？ 回答：発表会の時のグループ間コミュニケーションという意味です。

基本方針に従って具体的な実施方法を討議し、その内容を書きこんでください。欄はいくら伸ばしてもかまいません。

グループ編成の方法	サブテーマ化がしやすいような一般的なテーマを与える。グループの人数=6人程度。
テーマの選択方法	自分の興味関心のあるサブテーマを作成してもらおう。教員サイドがオリエンテーションの中で例をあげ、サブテーマが出やすい状況をつくる。
教室	52教室
授業の日程	(実際のシラバスの中に書きこんでください)
グループ活動促進のための方策	グループ長とサブグループ長に報告させる。教員からグループ長・サブグループ長にmoodleを通じてコミュニケーションをとる。
授業時間にやることと時間外にやることの明確化	授業時間にやること：グループ内でのディスカッション重視。 時間外にやること：事前にグループ長・サブグループ長とのコミュニケーションを通じて、次の時間におこなう作業案を煮詰める。
Moodleの利用形態	グループ長・サブグループ長とのディスカッション。 質問：グループ長・サブグループ長が責任を持つ場合、簡単に引き受けてくれるかどうかの討論はしましたか？回答：その点は討論しておりません。 意見：熱心でない学生が多い場合、グループ長が途中で投げ出したいと申し出る場合があります。
成績評価方法	連帯評価(発表)と個人評価(レポート or 試験)
日常活動の評価方法	Moodleを通じた毎回の活動状況の報告。
その他	

上記に従って、学生が見る実際のシラバスの中核部分を下記に作成してください。欄は必要に応じて多少は伸ばしてもかまいませんが、実際のシラバスにしたとき1頁に収まるためには、この部分全体で30行程度以内であることが必要です(最初の状態では23行です)。

授業概要 (目的・内容・方法)	<p>教養セミナーは新1年生を対象とし、「知的活動への動機を高める」、「科学的思考方法」、「学習のデザイン能力を高める」、「自己表現力を高める」、「学生と教員の、学生相互のコミュニケーションを図る」という目的で開講する授業科目です。</p> <p>この授業の狙いは思考の作法、思考の楽しさ、思考の共有と発展を身につけることにあります。このクラスでは、教員側が大きなくりの一般的なテーマを与えます。その中で学生の皆さんはより興味関心のあるサブテーマをつくってもらいます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・まずは、思考の作法(例えば思考と事実の使い分け)を身につけてほしい。 ・つぎに作法を通じて未知の課題を見だし、自ら課題を解決する喜びを知ってほしい。 ・最後にコミュニケーション、プレゼンテーションなどを通じて、複眼的な議論を通じて、解決した課題の結果がより深まることを知ってほしい。 	
成績評価基準および方法	連帯評価(発表)と個人評価(レポート or 試験)=4:6の割合	
授業計画	<p>第1回：従来のシラバスと同じ</p> <p>第2回：</p> <p>第3回：</p> <p>第4回：</p> <p>第5回：</p> <p>第6回：</p> <p>第7回：</p> <p>第8回：</p>	<p>第9回：</p> <p>第10回：</p> <p>第11回：</p> <p>第12回：</p> <p>第13回：</p> <p>第14回：</p> <p>第15回：</p>
その他		

第 5 班

まず各班の基本方針を討議して、その内容をここに書いてください。教養セミナー全体の目標のもとで、特にこのクラスでは学生にこうなってほしい、こんな力を身につけさせたい...といったことを討議してください。欄はいくら伸ばしてもかまいません。

<p>Moodle を活用して講義をすすめる形式。 プレゼンテーションを重視する。自己主張が論理的にできるようなする。情報は知っているが起承転結で考えることができるようにする。人の前で自分の考えを述べる事が出来るようになること。講義中に質問が出来る。 グループワークを行うと、共同作業を行える学生と作業を丸投げする学生がいる。グループワークを行えない学生をどうするか。 自分でテーマを決めて、各人でプレゼンテーションを行うような場を設定する。 調査能力を培うことがセミナーになるのではないか。 各個人の考えをプレゼンテーションで表現する、自己表現能力をつける。</p> <p>このクラスのテーマは、自然科学と社会（一般のニュースでもわかる）仮想社会、ブログ、生命科学</p>
--

基本方針に従って具体的な実施方法を討議し、その内容を書きこんでください。欄はいくら伸ばしてもかまいません。

グループ編成の方法	学部とジェンダーをランダムに振り分けたグループ編成を教員が行う。
テーマの選択方法	決められたグループで選定させる。5班6名。
教室	
授業の日程	(実際のシラバスの中に書きこんでください)
グループ活動促進のための方策	Moodle を使って授業時間外でのコミュニケーションを図る
授業時間にやることと時間外にやることの明確化	授業時間：学生が集まってグループ作業を行う。教員は調査の進め方、発表の仕方等の教示。 授業以外：資料収集、自分の考えをまとめる
Moodle の利用形態	授業時間外のコミュニケーションを図る。
成績評価方法	グループワーク 50%、個人 50%。グループワーク：50%（発表での自己表現） 個人：50%（最終レポート、日常調査報告） Moodle・レポートでの書き方。中間発表・最終発表での、話し方や発表を聞いている際に質問をしたかなど。 日常課題での態度。
日常活動の評価方法	Moodle への技術で評価する
その他	

上記に従って、学生が見る実際のシラバスの中核部分を下記に作成してください。欄は必要に応じて多少は伸ばしてもかまいませんが、実際のシラバスにしたとき1頁に収まるためには、この部分全体で30行程度以内であることが必要です（最初の状態では23行です）。

授業概要 (目的・内容・方法)	<p>教養セミナーは新1年生を対象とし、「知的活動への動機を高める」、「科学的思考方法」、「学習のデザイン能力を高める」、「自己表現能力を高める」、「学生と教員の、学生相互のコミュニケーションを図る」という目的で開講する授業科目です。 このクラスでは、... 自己表現能力を高めることを目的として、科学と社会の関わりをテーマとして班ごとに分かれてテーマを決めて資料収集・発表を行う。Moodle を中心にコミュニケーションを図っていく。中間発表、最終発表にて全員が発表すること。</p>	
成績評価基準および方法	発表 (25%)・レポート (25%)・日常活動記録 (25%)・態度 (25%)	
授業計画	<p>第1回：オリエンテーション・班分け 第2回：テーマ決定 第3回：Moodle・図書館の利用について 第4回：ワード・エクセル・ 第5回：資料収集 第6回：資料収集の整理と討議 第7回：中間発表の準備 第8回：中間発表</p>	<p>第9回：中間発表 第10回： 第11回： 第12回： 第13回： 第14回：最終発表 第15回：最終発表（最終レポート提出）</p>
その他		

全学的取組み

第 6 班

まず各班の基本方針を討議して、その内容をここに書いてください。教養セミナー全体の目標のもとで、特にこのクラスでは学生にこうなってほしい、こんな力を身につけさせたい、.. といったことを討議してください。欄はいくら伸ばしてもかまいません。

自分で学習する姿勢を持って欲しい。自ら積極的に学ぶ学生になってもらいたい。依頼心が強すぎる。年々数学の能力が落ちてきている。授業で総て教えて欲しいと学生が言う(理学部、教育学部)。学校に来ない学生がいる。学生に授業、大学に出てきて欲しい。学部によるモチベーションの違いか(理学部)。必須科目の授業態度が悪い(医学部)。学生に自身を持って欲しいし、やる気になって欲しい。
 学生が自ら学ばせる方策がないか。学部学生から大学院への進学については、残る学生が少ない。
 積極的に学ばせるにはどうするか。数学でセミナーでできることは、簡単な生活に密着した話なら可能。学生の食いつきを見てテーマを考える。教員が予め幾つかのテーマを提示してそれをやらせた方が間違いなく結論が出せてよい。例えばここは数理科学系のテーマでやる。従って、学生もそれに興味を持った学生が集まってくるはず。

基本方針に従って具体的な実施方法を討議し、その内容を書きこんでください。欄はいくら伸ばしてもかまいません。

グループ編成の方法	テーマごとにグループ編成、グループには必ず女子学生一人は必ず配置する。
テーマの選択方法	こちらが提示する。テーマは、「方程式の歴史」、「微分積分のなりたち」、「数学と物理の関係」、「ゼロについて」、「数学と生物学」、「数について」、
教室	
授業の日程	(実際のシラバスの中に書きこんでください)
グループ活動促進のための方策	講義も必要。
授業時間にやることと時間外にやることの明確化	本を指定して読ませる。授業の中で、その本についてのディスカッションをさせる。毎回、中間発表をさせる。
Moodle の利用形態	コミュニケーションの方法として使いたい。
成績評価方法	Moodle の利用
日常活動の評価方法	Moodle の利用
その他	

上記に従って、学生が見る実際のシラバスの中核部分を下記に作成してください。欄は必要に応じて多少は伸ばしてもかまいませんが、実際のシラバスにしたとき 1 頁に収まるためには、この部分全体で 30 行程度以内であることが必要です(最初の状態では 23 行です)。

授業概要 (目的・内容・方法)	教養セミナーは新 1 年生を対象とし、「知的活動への動機を高める」、「科学的思考方法」、「学習のデザイン能力を高める」、「自己表現力を高める」、「学生と教員の、学生相互のコミュニケーションを図る」という目的で開講する授業科目です。 このクラスでは、...	
成績評価基準および方法		
授業計画	第 1 回 : 第 2 回 : 第 3 回 : 第 4 回 : 第 5 回 : 第 6 回 : 第 7 回 : 第 8 回 :	第 9 回 : 第 10 回 : 第 11 回 : 第 12 回 : 第 13 回 : 第 14 回 : 第 15 回 :
その他		

共通教育の授業公開・授業参観について – MediaDEPO による授業参観

教育センターでは、平成19年度後期に開講された305科目において、授業公開・授業参観（平成19年12月17日～12月21日）を実施いたしました。今回は、初めての試みとして、教育センターのファウザー先生を中心に授業公開科目の中から3科目を選び、教育センターのMediaDEPOを利用したビデオ参観を企画しました。



<http://kie11.kuas.kagoshima-u.ac.jp/mediadepo/default.aspx>

この企画は、授業公開期間中に、ご自分の授業や出張等で授業参観に参加できなかった方にご覧いただくことを目的としています。それぞれの授業の特徴を参観者より提出いただいた報告書の視点からみると、「大規模クラスにおける先駆的な双方向授業の実践」、「グループ活動における学生相互の啓発と教員の役割」、「授業の組み立て方と丁寧な説明」という点で、とても参考になるかと思えます。MediaDEPOでの授業参観では、映像のタイムラインが示されており、そこをクリックすると早送りや巻き戻しが可能です。立ち上がりはストーリーミングとしてはかなり速く、ストレスを感じさせません。是非とも、ご活用下さい。

また、高等教育開発部では、授業公開・授業参観の際にご提出いただいた報告書のなかで授業改善の事例を収集しましたので、一部をご紹介します。

- ・話す時は正面を向き学生の様子を見ながら、できるだけゆっくり話す。
- ・授業のなかで、体験談を通して学生に興味を持ってもらう。

- ・講義終了後の質問には全て答える。
- ・携帯で感想を送るのは興味深かった。
- ・発声やしゃべり方のスピードを十分考えておられて良かった。
- ・説明が丁寧でわかりやすかった。

授業公開・授業参観も本年度で2年目を迎えましたが、今後、多くの教員に参観してもらうためには、授業のなかの Good Practice を引き出すようにすることが大切なことだと思います。優れた取り組みを MediaDEPO や授業改善マニュアルなどで集約し、大学全体で共有することにより10倍にも100倍にも活用することが、今後の課題と考えています。

(文責：平成19年度 FD 委員会 委員 上西 由翁)

平成19年度『鹿大の英語教育を考える！』ワークショップ 挨拶

教育センター長 谷口 溪山

年度末の御多忙な時に、このワークショップにお集まりいただき厚く御礼を申し上げます。

昨年12月には、少人数教育「教養セミナー」を担当出来る教員を育成するためのワークショップを開催しました時も、多くの教員の先生方にご協力ご参加をいただきました。厚く御礼を申し上げます。

今回は、「学生」、「教員」、「職員」の三者による合同のワークショップを開催することになりました。この種の企画として、前年度は、“鹿大の授業をもっと良くするために、教育環境をもっと魅力的にするために、あなたの声を聞かせて下さい。『鹿大の教育を変える！』”という、スローガンで開催されていますが、本年度は「英語学習について～やる気の出る要因とやる気をなくす要因～」をテーマとして、学生・教職員によるワークショップ：『鹿大の英語教育を考える！』を企画しました。

ここで、このワークショップを開催するにあたり、くれぐれも誤解のないように、予めお願いしておきたいことは、鹿児島大学の英語教育は平成20年度の4月より、ターニングポイントを迎えます。鹿児島大学の新しい英語教育の歩みを始めることとなりますが、ここで、誤解のないように念のためにあえて申し上げたいことは、今回のワークショップ企画開催の趣旨は、「鹿児島大学の新しい英語教育」についての是非を論じるためのものでもなく、また、学生諸君からみて、担当の英語の先生方の評価をするためのワークショップでもありません。「鹿児島大学の新しい英語教育」は、まだ始まっておりませんし、4月以降、2～3年程過ぎてから、その評価が問われてくるものであります。

むしろ、今回のワークショップの目的は、英語教育の核心として、極めて大事な点（英語学習について～やる気の出る要因とやる気をなくす要因～）について、鹿児島大学の学生・教職員の三者が集まって、鹿大の英語教育について意見を交換し合い、鹿大の英語教育をもっと良くするためのアイデアやビジョンを提言してもらうことにあ

ります。この機会に、ぜひ皆様の素直な意見をお聞かせ下さい。

なお、教育センター及び全学FD委員会が主催するこの学生・教職員によるFDワークショップについては、昨年、訪問調査のあった認証評価では、“学生・教職員のニーズの把握につとめている、”という高い評価を受けています。どうぞ宜しくお願いします。

学生・教職員ワークショップ「鹿大の英語教育を考える！」

日時：平成20年2月19日(火)12時00分～16時30分

場所：総合教育研究棟及び共通教育棟1号館

1. 目的

昨年度初めておこなわれた学生の参加を得たワークショップ型の双方向的FD活動として、今年度は「鹿大の英語教育を考える！」が開催された。英語学習について～やる気の出る要因とやる気をなくす要因～をテーマとし、「学生」「教職員」が集まって、鹿児島大学の英語教育のあり方について意見を交換し合い、鹿児島大学の英語教育改善のためのアイデアやビジョンの提言を目的におこなわれた。

2. 実施内容

本ワークショップは、28名（7学部3研究科）の学生と教職員26名の総勢54名が参加して実施された。参加者は5つのグループ（1～5）に分かれ、各グループは学生5～6名、教員2名、職員1名、タスクフォース1名の計9～10名程度で構成された。ワークショップのスケジュールは表1のとおりである。

表1 ワークショップ・スケジュール

(1) オリエンテーション	12:00-12:15 (15分)
↓	
(2) 昼食・自己紹介	12:15-13:15 (60分)
↓	
(3) グループ・ディスカッション	13:15-15:00 (105分)
↓	
(4) 休憩・移動	15:00-15:10 (10分)
↓	
(5) プレゼンテーション	15:10-16:00 (50分)
↓	
(6) 全体討論	16:00-16:30 (30分)

グループ・ディスカッションは5つの部屋へ分散後、以下のように進められた。まず、「司会」を1名決め「プレゼンテーション役」を1名～数名、さらに、「記録係」を決める。各グループで、以下の1)～4)の項目について「やる気の出る要因」と「やる気をなくす要因」に分けてディスカッションをおこなう。



1) カリキュラム：

科目構成、単位のあり方（必修、選択、選択必修）、クラス編成のあり方（習熟度別か否か等）等、学習到達目標の有無、海外研修制度の有無等

2) 授業：

授業の進め方等

3) 学習環境：

クラスサイズ、教室の設備等、教材〔アナログ、デジタル〕、自習環境等

4) 成績評価のあり方：

定期試験のあり方、その他のテストによる評価等

ディスカッションの内容は、「ワークシート」に書き写す。OHPで発表をおこなうための「プレゼンテーションシート」と「報告用シート」にまとめる。ここで、各グループにはタスクフォースが1～2名つき、何か困ったこと、わからないことがあれば、タスクフォースがアシストをおこなう。ディスカッションを15:00までに終了し、プレゼンテーションと全体討論をおこなう総合教

全学的取組み

育研究棟203号教室に集合する。

各グループとも活発な討論が行われ多くの意見が出された。203号室へ集合したあとのプレゼンテーションは学生中心に持ち時間各グループ6分および質疑応答の形でおこなわれた。各班の報告用シートおよびプレゼンテーションシートを基に各テーマごとにまとめたものを表2から表5に示す。各班の発表、質疑応答のみならず全体討論も含めて、議論は非常に盛り上がり、全体討論では、少人数授業（箱もの授業でない方法で考える）、英語必修の是非（他の外国語との選択制）、インテンシブ英語の受講者が少ない問題、学生の希望のみならず厳しい授業も必要、本当は今日来ているような積極性のある学生ではなく英語をやる気のない学生が問題でそれをどうするか等々の様々な討論がおこなわれ予定時間をオーバーして終了した。



表2 カリキュラムについてのまとめ

	やる気をなくす要因	やる気の出る要因
1班	<ul style="list-style-type: none"> ・受講届けの出し方が難しい。 ・インテンシブ授業などのシステムの複雑さ。 ・選択出来る授業や内容にも学部差がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・選べる学習内容等の選択肢が広い。 ・受講生の授業への希望に応じる。 ・授業を通しての到達目標が明確である。
2班	<ul style="list-style-type: none"> ・シラバスがわかりにくい。 ・インテンシブの内容にばらつきがあり、取り方がわかりにくい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業の目的を明確にした授業。 ・少人数のクラス構成。 ・習熟度クラスによる授業。 ・動機付けとしての海外研修の機会。
3班		<ul style="list-style-type: none"> ・受けたくなるようなインパクトのある導入。 ・習熟度別クラス。 ・発音指導により力を入れる。
4班		<ul style="list-style-type: none"> ・クラス編成の際の少人数制。 ・学生の目的に応じた細かなカリキュラムとそれを学生が選べること。（実用英語なのか英文学なのか。）
5班		<ul style="list-style-type: none"> ・学生が好きな授業を選択できるシステム。 ・英語レベルに対応した単位数が与えられること。

表3 授業についてのまとめ

	やる気をなくす要因	やる気の出る要因
1班	<ul style="list-style-type: none"> ・授業のレベルが自分に合わない。(高いまたは低い。) ・先生と学生の間に対話がない。 ・授業の到達目標を教員が示さない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・先生の熱意と学生の学習目的が一致している。 ・教員から学生へのフィードバック (のびたらほめる、苦手を伝える。)がある。
2班	<ul style="list-style-type: none"> ・講義形式で授業内容が暗記に偏った授業。 	<ul style="list-style-type: none"> ・参加型の授業。 ・外国人講師と会話できる。 ・フィールドワークをとり入れた授業。
3班	<ul style="list-style-type: none"> ・受け身的な授業。 ・先生が一方的におこなひ和訳に終始。 	<ul style="list-style-type: none"> ・英語のみで討論する時間をもうける。(プレゼン、ディベート。) ・移動したり体を使う授業。 ・宿題を出す授業。 ・生徒がトピックを選択できる。
4班		<ul style="list-style-type: none"> ・英語を学習する必要性を示す。 ・講義形式でなくコミュニケーション。 ・外国留学生の授業への参加。 ・夏休み等の集中的な英語学習プログラム。
5班		<ul style="list-style-type: none"> ・習熟度別クラス。 ・履修学年の自由度を広げる。 ・日本人が陥りやすい表現ミスの改善を題材とする。 ・毎回毎回学習目標を設定する。 ・グループ学習・お茶会を取り入れる。

表4 学習環境についてのまとめ

	やる気をなくす要因	やる気の出る要因
1班	<ul style="list-style-type: none"> ・装置・設備の老朽化。 ・教室の移動に時間がかかる。 ・人数にあわない広さの教室。 	<ul style="list-style-type: none"> ・少人数クラス。 ・グループディスカッションなど学習者中心の授業。 ・新しい設備 (LL教室等)がある。
2班	<ul style="list-style-type: none"> ・クラスサイズが大きい。 ・教材に魅力がない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・目的別クラスを作る。 ・ネイティブがいること。 ・教材が魅力的。
3班		<ul style="list-style-type: none"> ・小人数のクラス編成。 ・学内にどのような設備があるのかを学生に知らせる。
4班		<ul style="list-style-type: none"> ・グループ討論できるような机の配置。 ・自習環境と補習環境の整備。 ・公共放送と授業の連携。
5班		<ul style="list-style-type: none"> ・e-learningによる教材の拡充。 ・携帯電話 ipod などの利用。

表5 成績評価についてのまとめ

	やる気をなくす要因	やる気の出る要因
1班	<ul style="list-style-type: none"> ・具体的な成績が返ってこない。 ・どう評価されているかが分からない。 ・教員によって評価の基準が異なる。 ・やる気やプロセスが評価されにくい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・成績の善し悪しにかかわらず授業からのフィードバックがある。 ・評価の基準が明確。 ・複数の試験で評価。
2班	<ul style="list-style-type: none"> ・暗記すれば合格できる。 ・シラバスの改善がなされていない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業全体を通じての習熟度、参加度を含めた評価。 ・ペーパーテストだけではないプレゼンでの評価。
3班		<ul style="list-style-type: none"> ・期末、中間レポート、小テスト、出席で評価。 ・自習を成績評価に加える。(e-learning, moodle を用いる。)
4班		<ul style="list-style-type: none"> ・定期試験や小テストをとり入れる。(レポートではなく定期試験が重要。)
5班		<ul style="list-style-type: none"> ・複数回の試験、又は他の評価項目導入。 ・スピーキングによる評価。 ・好成績には奨学金。

(文責：平成19年度FD委員会 委員 種市 信裕)

平成19年度FD講演会挨拶

教育センター長 谷口 溪山

本日、教育センターと全学FD委員会主催で、平成19年度FD講演会を開催することになりました。年度末の慌ただしい時期に、多くの先生方にお集まりいただき、厚く御礼を申し上げます。

本年度は、愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室准教授、副室長の佐藤浩章先生をお迎えし、愛媛大学におけるFDの取り組みを学ぶことにしました。愛媛大学は教育に関わる全ての人（教員・事務職員・ティーチングアシスタント）の能力開発に力を入れています。その取り組みは、FD/S D/TAD三位一体型能力開発として、平成18年度「特色ある大学教育支援プログラム（特色GP）」に選定されています。

愛媛大学では、教育・学習効果を最大限に高めることを目指した、授業・教授法をより良いものにするための取り組み、教育・学習効果を最大限に高めることを目指した、学部・学科あるいは課程・コース等において提供されるカリキュラムや教育プログラムをより良いものにするための取り組み、教育・学習効果を最大限に高めることを目指した、組織構造や組織間の関係をより機能的なものにするための取り組み等について、教員個人としてだけでなく、組織として取り組んでおられます。

その中心的役割を担っておられるのが佐藤先生で、佐藤先生は日本初のFDR（フォカルティーデベロッパー）、すなわち、授業改善を組織的に進める専門家でいらっしゃる、他大学からの講演や研修の依頼でひっぱりだこになっています。

今日は、どうぞよろしく申し上げます。佐藤先生にお引き受けいただけるかどうかの打診をしたところ、逆に先生がお引き受けできるかどうかの検討をするために、FDニーズ分析アンケートが参りました。逆に私達がテストを受けることになりました。12項目あるうちの(2)項目〔目標〕で、‘今回の研修目標はどのようなものでしょうか?’とありました。それに対する私の回答は、次のとおりです。

- ①FD活動の理念や概念が、組織全体の教員に十分認識させる。



- ②FD活動におけるボトムアップの取り組み。
- ③学士課程教育の質の保証。
- ④大学院のFD：実践事例。
- ⑤全国の高等教育機関と連携を深めるためのネットワークの構築。

さらに(4)項目(内容)で‘ご希望の内容を下記から選択して下さい。’とありました。依頼の多い順に掲載しています。(16種類ありました)。そこで、FD委員会で検討した結果

- ⑥番目の、愛媛大学のFDの取り組み
- ①番目の、大人数講義法のコツ

この二つをお願いすることにしまして、本日の企画に至りました。

愛媛大学の教員研修FDスキルアップ講座は、これまた見事なものでありまして、佐藤先生に対する、依頼のもっとも多い①大人数講義法のコツ、大規模クラスをもっとも効果的に教えるためのコツについて、そのスキルを1つでも2つでも、会得、習得していただければと願っております。

そして、「学生中心の大学」の実現のために、“良い”授業ができるように願って、教育センター、ならびに全学FD委員会は企画しました。よろしく申し上げます。

平成19年度 FD 講演会

FD 講演会

平成19年度の、鹿児島大学FD委員会主催のFD講演会が、愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室准教授の佐藤浩章先生をお招きし、開催された。日時、会場、講演の内容は以下の通りである。

日時：2008年3月21日（金）12：50～17：30

会場：総合教育研究棟102号教室



【プログラム】

- 12：50 主催者挨拶
 谷口 溪山（教育センター長）
 中山 右尚（理事：教育・学生担当）
- 13：00 第一部 「愛媛大学におけるFDの取組」
 講師 佐藤 浩章 氏
 （愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室准教授）
- 15：30 第二部 「大規模クラスの教え方のコツ」
 講師 佐藤 浩章 氏
 （愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室准教授）
- 17：30 閉会の挨拶
 河野 健二（FD委員会委員、工学部教授）
 司会・進行：
 松本 利達（FD委員会委員、工学部教授）

当日の参加者は、教育センター長、理事（教育・学生）、学生部教務課長、学生部教務課長代理、学生部教育センター室長をはじめ、法文学部（1名）、臨床心理学研究科（1名）、教育学部（11名）、理学部（5名）、医学部（4名）、歯学部（6名）、工学部（6名）、農学部（7名）、水産学部（11名）、教育センター（3名）の総勢60名であった。講演や少人数グループによる討論を行い授業改善に向けての貴重な示唆を得ることができた。講演内容についての概略を以下で説明する。

【講演の内容】

第一部 「愛媛大学におけるFDの取組」について

1. はじめに
 - ・講演の目的

この講演の目的は、鹿児島大学のFDをより効果的なものにするために、必要なヒントを各自一つでもよいから持って帰ることである。との説明があった。
 - ・この講演での学修目標
 - (1) 愛媛大学のFDの事例の強みと弱みを述べることができる。
 - (2) 鹿児島大学のFDの事例の強みと弱みを述べることができる。
 - (3) 鹿児島大学のFDを更によくするために今後実行することを述べるができる。
2. FDの定義について

愛媛大学がFDをどのように考えているかについて説明がなされた。

（愛媛大学の考えているFDの定義とは）

 - ① 授業・教授法の改善（ミクロ・レベル）
 - ② カリキュラムの改善（ミドル・レベル）
 - ③ 組織の整備・改革（マクロ・レベル）教育に焦点化した組織とは何か

（愛媛大学教育・学生支援会議決定 2007）

3. FD担当組織（教育企画室を設置）

愛媛大学のFD担当組織の紹介があった。機構長の下、愛媛大学の教育に関する諸課題について調査・研究を行うと共に、その成果を実際の教育活動に適用し、大学の教育改革を推進することが目標である。

・業務の柱

- ① 全学的な教育課題に関わる調査・研究
- ② ファカルティ・ディベロップメント
- ③ 授業評価及びシラバス
- ④ 学生の学修を支援するシステム

・スタッフの構成（教育企画室の構成）

室長（兼任教員1）、室員（専任教員2、兼任教員6、事務職員5）。教育企画室の運営は、各学部の教育コーディネーター、企画室の教員、事務職員、及びTA（大学院生）により行われる。企画室の教員はFDer（ファカルティ・ディベロッパー）と呼ばれている。

4. 授業・教授法の改善（マイクロ・レベル）について

愛媛大学でも、初期の頃（1999～2001）講演会・シンポジウム・大人数啓発型のFDの取組であった。その後（2002～2003）の中期はワークショップ・少人数能力開発型FDとなり、後期（2004～）は授業コンサルテーション・個別支援型FDと変化しつつあるとの説明があった。

・マイクロ・レベル1の具体的取組内容

- 1) 新任教職員オリエンテーション
- 2) FD・SDセミナー



3) 愛媛大学GPシンポジウム

4) 共通教育に関する学生とのワークショップ

・マイクロ・レベル2の具体的取組内容

- 1) 教育ワークショップ（授業の基本的技術を習得する）
- 2) FDスキルアップ講座（パワーポイント入門が人気1位）

・マイクロ・レベル3の具体的取組内容

- 1) 中間期振り返り（授業を振り返り、客観的に授業を分析する）
- 2) ビデオ撮影サービス

・マイクロ・レベル4の具体的取組内容

- 1) 愛媛大学GPシンポジウム（発展）（授業実践の取りまとめ）
- 2) 愛媛大学教育実践ジャーナル（投稿）

・マイクロ・レベル5の具体的取組内容

- 1) 教育ワークショップ・FDスキルアップ講座
- 2) 授業コンサルタント
- 3) ファカルティ・ディベロッパー養成講座
- 4) 教育コーディネーター研修

ここまでの特徴としては、持続的な発展型の能力開発に力をいれていることである。具体的には、大学の内部で、指導できる人を養成していくことを目標にしている。又、各学部のFD担当者を支援することも行っている。更に、教員の個別対応も行っている。具体的には、授業の中間期の振り返り、授業のビデオ撮影サービス、シラバス作成支援サービスである。授業のコメントシートでは、学生に「あなたの学習意欲を高めた教員の言動」「あなたの学習意欲を低下させた教員の言動」を書かせるようにしていることが報告された。

5. カリキュラムの改善（ミドル・レベル）について

教員が身に付けておくべきポリシーとしては、ディプロマポリシー、カリキュラムポリシー、アドミッションポリシーが重要であり、策定と一貫性の構築が重要であることが説明された。又、カリキュラム診断（カリキュラムに

対する学生からのヒアリング)も行っている。カリキュラムの新規開発支援も重要であるとのことであった。

6. 組織の整備・改革(マクロ・レベル)について 愛媛大学では次のような取組を行った。

(1) 全学教育制度の整備

- ・履修制度 (GPA、CAP) の整備
- ・単位の実質化
- ・成績評価のありかた
- ・シラバスの作成について
- ・TAの活用方法についての検討
- ・副専攻について
- ・研究室の教育整備
- ・学修支援体制の整備

(2) 各種委員会等での意見表明ならびに業務引き受けについて

- ・広報の充実
- ・施設・設備を充実させる

(3) 学生参画型の大学運営推進について

- ・学生からの大学に対する要望・意見のヒアリング
- ・キャンパスでの学生のボランティア活動の推進

(4) 管理職対象の研修の充実

- ・組織マネジメント研修の実施
- ・中期計画・目標設定研修の実施

7. FDの有効性の検証について

愛媛大学の取り組みの成果について、説明があった。

- (1) 参加者数 7年間で述べ 2382 名
- (2) 満足度調査 約8割の満足状況
協力しない2割の人は無視するとの事、その人をどうするかは管理職の責任で、委員会の責任ではないとの見解が披露された。
- (3) 到達度調査 約9割の到達状況 (一部の講座)



- (4) 授業アンケート 過去3年間満足度は60%から80%へと向上
- (5) 開発されたツール 「FDハンドブック」、「大学教育実践ジャーナル」等

8. おわりに

愛媛大学のFDの説明のまとめとして、最初の目的、目標について再度確認を行った。

講演の後半として、小グループによるディスカッションが取り入れられた。

- (1) 今回の講演を聞いて「これはいい」と思った事柄
- (2) 今回の講演の中で、もっと知りたい、疑問に感じる、おかしいと思う事柄
- (3) これは直ぐに使えると思った事柄

について、各自が用意されていたメモ用紙にサインペンで大きな文字で記入した。記入した用紙を高く掲げて講師の先生に見えるようにした。その後近くに座っている参加者4、5名で各自の考え

全学的取組み

たものを紹介し、15分間の意見交換を行った。
その後、数名の参加者から意見の紹介があった。
主な意見は次のとおりである。

(1) について

- ・全学的に整備された組織があることがいいと思った。事務の組織も含めて充実している点が良いと思った。
- ・コメントシートの利用方法が参考になった。役立てたい。

(2) について

- ・シラバスの位置付けについてももう少し知りたい。
講師の先生の回答・・・共通教育ではシラバスの点検を行っている。書き方の指導についても講習をおこなっている。

(3) について

- ・視聴覚障害を持った学生の指導のありかたについて愛媛大学の指導のあり方が自分の学部でも役に立つように感じた。もっと詳しく知りたい。

その他、全体についての意見は次のようなものであった。

- ・FDに協力的でない教員への対応について知りたい。
講師の先生の回答・・・どこの大学でも2割ぐらいは非協力的な人はいる。無視すればよい。FD委員会の仕事ではない。管理職の仕事である。2割の人のためにエネルギーを使う必要はない。

第一部の講演については、各参加者が何かをつかんで帰っていただけたものと思われる。一方的な講演ではなく、意見交換の場や作業時間もあり、有意義な2時間であった。

(文責：FD委員会委員 北 廣男)



第二部（15：30～17：00）

「大規模クラスの教え方のコツ」

愛媛大学教育・学生支援機構 教育企画室
佐藤浩章 准教授

第一部の「愛媛大学におけるFDの取組」に引き続き、第二部である「大規模クラスの教え方のコツ」についての講演が行われた。教育の場では、つねに教える側と教わる側がある。まず、「大規模クラス」の特殊性について述べられた。教える事に対する関心の程度、および教師の立場から考えると何名の学生に理解してもらえるかが問題となる。学生の人数が多くなると、学生全員の把握が難しくなる。しかし、学生の人数が100名を超すとそのクラスに好意的になることもおこることが言われた。150名以上では、人間として見られなくなり、互いの認識を欠く状態になるという事であった。「大規模クラス」における講義の達成度をあげるべく、以下の30の"Tips"が提案された。

- Tips1：講義の構成をしっかりとさせる。
- Tips2：話し方は明瞭に、指示は明確にする。
- Tips3：座席を指定する。
- Tips4：なるべく前につめて座らせる。
- Tips5：学生の名前を呼ぶ。
- Tips6：教室に早めに着き、遅く退出するなどし、学生と話す機会を作る。
- Tips7：学生の考えている事をミニユッツペーパー等にて把握する。
- Tips8：ニュースレターを発行する（音声入力等手間をかけずに行う方法も考える。）
- Tips9：教員の個人的な話しをする。
- Tips10：ディスカッションの時に話しに加わる。
- Tips11：1回目の授業で周囲の学生間で自己紹介させる。（緊張人間関係緩和＝アイス・ブレイク）
- Tips12：学生を2人組や3人組に分ける。
- Tips13：Think, Pair & Shareを使う。
- Tips14：オープン・クエスチョン&クローズド・クエスチョンを使い分ける。
- Tips15：全体質問と指名質問を使い分ける。
- Tips16：リレー質問とリターン質問を使いこなす。

- Tips17：質問内容を繰り返す。
- Tips18：考えるのに必要な時間を確保する。
- Tips19：複数の人から答えを聞き取る。
- Tips20：指名は公平にする。
- Tips21：フィードバックを忘れずに。
- Tips22：間違っているでもバカにしない。
- Tips23：資料を1セットにして初回に配布する。（コース・パケット）
- Tips24：資料をインターネット上でダウンロード可能にして、事前にプリントアウト・持参させる。
- Tips25：出席番号順や列で区切った封筒を用意し、提出物を回収する。
- Tips26：冒頭でグループ分けをして、リーダーに各種とりまとめを依頼する。
- Tips27：レポートの提出期限をずらす。
- Tips28：提出期限は厳守させる。or 1週間遅れる毎に大幅減点。
- Tips29：授業冒頭 or 宿題でミニテストを課し、学生同士で採点させる。
- Tips30：ループリック評価を行う。

感想：「大規模クラス」講義における特殊性および多くの"Tips"が聞け、大変参考になった。昨今、少子高齢化に伴い、また、ゆとり教育の影響からか学生の質の低下が問題となっている。教える側の問題と、教わる側の問題があろう。教育の到達を考えたとき、教わる側のレベルにより到達度は変わってしまう。教育機関におけるProductsとは、学生を「一人前」にして社会に送り出すことであろう。本講義から、教える側の問題に着いて学ぶ事ができた。次は、教わる側の問題、我が鹿児島大学で定める「到達度」の問題に取り組む必要がある。しかし、学生の質の低下がもし存在し、それに合わせ「到達度」を下げるような事があれば、教育の低下を誘発する事になりかねない。鹿児島大学における「目玉」の設定により、日本の中で、より鹿児島大学が認知され、教員、職員および学生が一丸となり情熱とともに発展する、それこそ「FD」では無かろうかと考えた。

（文責：FD委員会委員 馬嶋 秀行）

平成20年度『新入生クラス担任等教員 FD 講習会』挨拶

教育センター長 谷口 溪山

年度末の慌ただしい時期に、多くの先生方にお集まりいただき厚く御礼を申し上げます。

この講習会の目的は、FD講習会実施要領にもありますように、国立大学の法人化も4年を経過し、クラス担任等教員の業務も複雑で多岐にわたってきています。新しい時代に対処するために、共通教育に成績評価異議申立制度やGPA制度の導入もすでに実施され、それに伴い成績不振者への助言・指導等、きめ細やかな対応が求められています。その一方で、4月7日の入学式直後のオリエンテーションで、教育センターでは、GPA値に基づき、成績優秀な学生を教育センター長賞として表彰します。19年度後期は歯学部の学生2名を表彰します。

さらに平成20年度からは、新しい英語教育も導入されます。鹿児島大学教育センターでは、外国語教育推進部長が中心となって、鹿児島大学の英語教育の抜本的な改善を行いました。要約すると、鹿児島大学に入学した学生に対して、きめ細かく、手厚く、そのカリキュラムが提供されています。そのカリキュラムの詳しい内容のパンフレットを作成しましたので、ご覧いただければ幸甚に存じます。

また、この度、鹿児島大学教育センターでは、教養教育科目を構成する一つの柱としての「人間教育科目(群)」の一環として、平成20年度から「ボランティア論」を新規に開講することになりました。この「ボランティア論」は講義と体験学習で構成されており、教育センターが地域社会(県・市・社会福祉協議会、NGO、NPO、各種市民団体等)と連携して実施するもので、その学習目標は、“学生の人間教育のみならず、学生が平和で豊かな社会作りに参加する入門の機会とし、奉仕の精神や意識を学習する”ために開講しました。

しかし、本日、特にお集まりいただきましたのは、これがもっとも大事なことでありまして、新入生クラス担任等教員による行き届いた教務・厚生指導であります。入学早々、主に行われる共通教育について、新入生クラス担任教員は、その全



容を熟知した上、新たな学生生活を始める新入生に対して、かつ希望・夢膨らみつつもその一方で不安も抱えている新入生に対して、きめ細かく指導していくことが求められています。このように学生の指導・支援体制を充実するために、新入生クラス担任等教員FD講習会を開催することになりました。

そこで、保健管理センター所長の森岡教授と准教授の伊地知先生に、「保健管理センターの相談事例からみた学生の心理」というテーマで、御講演をお願いしました。お二方の先生の御講演から不安定な青年期の「心理」について学ぶことにより新入生に対する助言・指導のお役に立てていただきたいと思います。

続いて「共通教育の履修制度・手続き等について」、共通教育企画実施部長で法文学部教授の志賀先生から詳しく御説明をいただきます。

また、20年度からは、私が鹿児島大学に赴任して実に34年ぶりの改変である、英語教育の抜本的改善を実施します。このカリキュラムの詳しい内容について、外国語教育推進部長の富岡教授にお願いします。その他として、共通教育系の事務職員からも御説明があります。

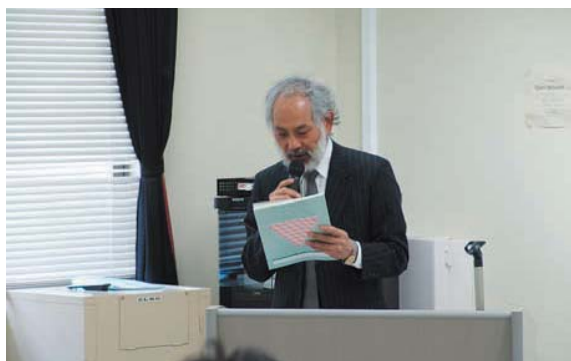
本日は、どうぞ、よろしく申し上げます。

平成20年度 新入生クラス担任等教員 FD 講習会

日時：平成20年 3月24日（月）13：30－16：30

場所：総合教育研究棟102号教室

本講習会は、クラス担任の業務が履修方法の指導や学力向上を目的とした学習支援から、学習意欲の喪失といった精神面に至るまでの複雑で多岐にわたる支援を考慮して開催され、各学部から54名の参加者があった。



1. 講習会の概要

最初に、谷口溪山教育センター長より、今回のFD講習会開催の趣旨について説明があった。また、来年度から大きく変わる英語教育や人間教育科目群の新設、GPAに基づく教育センター長からの学生の表彰などについて概略を説明いただいた。



森岡洋史保健管理センター所長からは、学生の健康管理を目的としたセンター業務の紹介があり、通常の疾病対処の他に精神面でのサポートを行っている旨の説明があった。伊地知信二センター准教授からは、鹿児島大学の休学率と退学率について述べられた後、「発達における偏り」とは何かの説明があった。また、勉強意欲はあるが引きこもりなどで授業が受けられない等、修学支援の対象となる学生について具体的な事例をもって詳述いただいた。



志賀美英共通教育企画実施部長からは、平成20年度の履修案内をもとに、共通教育科目や教養科目の構成について丁寧な説明をいただいた。また、バイトやサークル活動による勉強不足が原因でGPAが低くなることや学期GPAが1.5未満で助言指導の対象にすることなども詳述いただいた。富岡龍明外国語教育推進部長からは、新しい英語教育がどのように変わるのかをパンフレットをもとに紹介いただき、さらに、外国語の履修においては学部・学科等で受講パターンが異なることを履修案内に沿って説明いただいた。事務職員からは、新入生オリエンテーションでの伝達事項について資料に基づき説明が行われた。

2. アンケート結果

講習会に関連した11項目の設問に対して、3段階の回答方式によるアンケートが講習会終了後に実施された。全ての項目に対して7割以上の参加者が「概ね理解できた」と回答し、その中の9項目については9割近い参加者が「概ね理解できた」としており、講習会の開催がクラス担任の業務支援に一定の効果をもったと思われる。また、自由記述欄には14名の方から多岐にわたる意見をいただいた。次年度のクラス担任講習会を開催するにあたり、いただいた意見をもとに全学FD委員会で検討し、実りある講習会に繋げたい。

（文責：平成19年度FD委員会 委員 上西 由翁）

共通教育における e-learning 報告

1. 初めに

教育センターが平成18年度後期に導入した e-learning の取り組みは、平成19年度に様々な展開と発展を見せた。基幹システムである Moodle にビデオ配信のストリーミングサーバを導入し、Moodle を携帯電話またはそれ以外のモバイル媒体で閲覧できるソフトウェアの開発によって、様々なニーズに答えられるシステムを作り上げた。全体の利用度を紹介した後、これらの展開を年度の前期と後期に分けて説明する。平成18年度に始まったユーザグループ形成が平成19年度の急速発達によって、Moodle が教育現場で定着になったといえる。

平成19年度の全体的な利用状況は表1で表示されている。

表1 平成19年度前期・後期の Moodle 利用状況概要

	科目数	教員数（非常勤講師を含む）	学生数	「頻繁に」利用している学生数
前期	38	100名程度	2,070	1,100
後期	38	100名程度	1,930	1,200
合計	76	100名程度（延べ数）	4,000（延べ数）	2,300（延べ数）

前期と後期はほとんど同じですが、前期に VOA（Voice of America）の英語の副教材を使っている授業のほうが多く開講するということで前期の利用状況のほうが高くでている。Moodle サーバを導入したばかりの平成18年度の後期（表2）に比べると平成19年度の利用度は急速に進展した。平成19年度に Moodle を利用する科目の多くは、利用形態についての言及をシラバスに記載していたが、平成18年度にはシラバスの記載はなかったため、実験的な利用であった。

表2 平成18年度後期の Moodle 利用状況概要

	科目数	教員数（非常勤講師を含む）	学生数	「頻繁に」利用している学生数
後期	12	10名程度	1,020	200
合計	12	10名程度（延べ数）	1,020（延べ数）	200（延べ数）

Moodle 利用の定義は Moodle 上で「教室」を設けて、その教室に対面授業の科目の学生を登録させるということである。教室に載せる内容は教員によって異なるが、授業で利用したパワーポイントや PDF 資料と掲示板などの Moodle のコミュニケーション機能である。また、平成19年度末に携帯電話で Moodle 利用できるソフトである「Moodle Lite」の完成によって、Moodle の重要な機能が携帯電話で利用できるようになった。

2. 前期

2.1. Moodle 利用状況

平成19年度の前期の Moodle 利用状況は表3で示されている。

表3 平成19年度前期の Moodle の利用状況

科目群	科目名	受講者数	Moodle 利用形態	メモ
教養	鹿児島探訪－自然	120	授業中の携帯ミニッツペーパー・自学自習	特色G P
	鹿児島探訪－環境	75	授業中の携帯ミニッツペーパー・自学自習	特色G P
	鹿児島探訪－文化	120	紙ミニッツペーパーの返却（授業外）・自学自習	特色G P
	鹿児島湾の自然と人々	30	授業中の携帯ミニッツペーパー・自学自習	特色G P
	鹿児島文化遺産とまちづくり	100	紙ミニッツペーパーの返却（授業外）・自学自習	特色G P
	地球をつくった人々	53	授業中の携帯ミニッツペーパーとコメント・自学自習	
	職業人と実践倫理	59	紙ミニッツペーパーの返却（授業外）・自学自習	
	教養セミナー（3科目）	253	授業中のパソコン教室・自学自習	
	鹿児島探訪－鹿児島大学	230	授業中のフィードバック、アンケートとコメント・自学自習	特色G P （集中）
		1,040		
外国語	英語コアC	44	評価の20%（授業外）	VOA
	英語オープン	65	ボーナスポイント（授業外）	VOA
	英語コアU	69	ボーナスポイント（授業外）	VOA
	英語総合基礎（コア再）	82	ボーナスポイント（授業外）	VOA
	英語オープン	65	評価の15%（授業外）	VOA
	英語コアO	41	評価の15%（授業外）	VOA
	英語コアR	43	評価の15%（授業外）	VOA
	英語コアU 2	40	評価の20%（授業外）	VOA
	インテンシブ英語I	20	ボーナスポイント（授業外）	VOA
	インテンシブ英語I	20	ボーナスポイント（授業外）	VOA
	インテンシブ英語I	20	ボーナスポイント（授業外）	VOA
	英語コアC	51	ボーナスポイント（授業外）	VOA
	英語コアC	69	ボーナスポイント（授業外）	VOA
	英語コアR	53	ボーナスポイント（授業外）	VOA
	英語コアU 2	40	評価の20%（授業外）	VOA
	インテンシブ英語I	20	ボーナスポイント（授業外）	VOA
	インテンシブ英語I	19	ボーナスポイント（授業外）	VOA
	インテンシブ英語I	15	ボーナスポイント（授業外）	VOA
	韓国語オープン	4	自学自習（授業外）	
韓国語コアI（文系）	69	評価の10%・自学自習（授業外）		
韓国語コアI（理系）	35	評価の10%・自学自習（授業外）		
		840		
学部専門科目	細胞生物学	51	コメントと情報交換（授業中・授業外）	
	形態発生生物学	51	コメントと情報交換（授業中・授業外）	
	科学論文読解	27	コメントと情報交換（授業外）	
	航海法規	43	コメント、練習問題（授業中・授業外）	
		172		
大学院	英語科教育学特論Ⅱ	3	コメントと情報交換（授業中・授業外）	
	発生細胞学特論	15	コメントと情報交換（授業中・授業外）	
		18		
合計	科目数：38 教員数（非常勤講師を含む） 100名程度	2,070	学生の中には約1100人が「頻繁に利用している」主に特色G P 科目（集中講義を除く）、教養セミナー、韓国語、専門科目	

VOA = 「Voice of America Special English」の英語の共通副教材

全学的取組み

大きく言えば、利用形態は三つに分かれている。一つ目は特色GP「鹿児島の中に世界をみる教養科目群の構築」の実施に関わる「鹿児島探訪」の授業における取組である。この授業では、授業の最後に小レポートを書かせて、教員が評価とコメントをつける。教育的なメリットとしては学生が授業中に学習したこと文章を整理したうえ、教員が学生の理解度や教育成果を計ることができる。

二つ目は、VOA（Voice of America）の英語副教材である。平成18年度末に開発し、平成19年度の前期に本格的に利用を始めた。この教材はVOAの「Special English」のラジオ放送を利用して、リスニング、単語、そして作文練習の目的で使用した。「Special English」は、速度を落とし、限定された単語を使う、ニュースの英語である。比較的シンプルな教材でボーナスポイントや評価の10-15%程度で構成されている教材である。

三つ目は、「教養セミナー」のように主に掲示版やアンケートなどの意見交換の機能を利用する形態である。この場合、教員がコンテンツを用意するよりも学生がコミュニケーションできる場を用意することが特徴である。

また、大規模な利用として、大量の学生のユーザ登録及びデータ管理が実施経験になって、それ以降の取組に反映させた。

平成19年度前期に特色GPの鹿児島探訪講義シリーズに実施した携帯電話によるミニツペーパー入力提出であった。既に教育センターのサーバにインストールしたPC用サイトの携帯電話用に変換するソフトを利用して、Moodleを携帯電話で表示できるようになった。この方式で授業中に書かせたミニツペーパーの電子化ができた。それによって、紙処理のテーマが減り、学生へのフィードバックが早くなった。ただし、PC用のMoodleを携帯電話用に変換するには限界があり、画面が見にくかったり、一部の機種で利用ができなかったりすることがあった。

Moodleの効果的利用方法や教材作成方法などを説明するために、平成19年後期が始まる前に講習会を3回行いました。1回目は歯学部でのFD活動の一環として行い、2回目は共通教育の高等教育部会主催で行い、3回目は水産学部のFD活動の一環として行った。内容はMoodleのシステムの紹介と教員と学生のそれぞれの立場からMoodleを実際利用して、演習することであった。

特色GP「鹿児島の中に世界をみる教養科目群の構築」事業に関連して、7月6日に開催したFDフォーラム「鹿児島探訪シリーズの成果と展望」と、8月1日に開催したFDワークショップ「学生・教員連絡会」でMoodleを紹介し、ワークショップで学生から出たさまざまな意見を取り上げて、将来の改善の参考になった。また、特色GPの企画として、講義ビデオを撮影し、前期に導入したMediaDEPOビデオ配信システムに配信し始めた。学生の復習や来年に同科目を履修する学生の予習のために、前期にビデオ編集の取り組みを確立して、6月から配信を始めた。

3. 後期

3.1. Moodle 利用状況

平成19年度後期のMoodle利用状況は表4で示されている。

表4 平成19年度後期の Moodle の利用状況

科目群	科目名	受講者数	Moodle 利用形態	メモ
教養	鹿児島探訪－歴史	134	授業中の携帯出席・授業アンケート、紙ミニッツペーパーの返却（授業外）・自学自習	特色G P
	鹿児島探訪－国際貢献	51	授業中の携帯出席・授業アンケート、授業外のミニッツペーパー・自学自習	特色G P
	鹿児島探訪－循環型社会と世界遺産	40	授業中の携帯出席・授業アンケート、授業外のミニッツペーパー・自学自習	特色G P
	鹿児島探訪－離島対策	120	授業中の携帯出席・授業アンケート、授業外のミニッツペーパー・自学自習	特色G P
	鹿児島探訪－地域産業	119	授業中の携帯出席・授業アンケート、授業外のミニッツペーパー・自学自習	特色G P
	焼酎	250	自学自習	特色G P
	鹿児島の四季－キャンパス俳句会	20	授業中学習、コメントと情報交換（授業中・授業外）・自学自習	
	鹿児島湾の自然と人々	31	授業中のミニッツペーパー・自学自習	
	種子島の自然と人々	20	体験、コメントと情報交換、レポート提出	特色G P
	奄美大島の自然と人々	20	体験、コメントと情報交換、レポート提出	特色G P
	地球の誕生と進化	121	授業中の携帯出席・授業アンケート、授業外のミニッツペーパー・自学自習	
	生物学と人間	50	授業中の出席、授業中の学習・自学自習	
	韓国・朝鮮文化セミナー	10	授業中の携帯出席・授業アンケート、授業中の学習、コメントと情報交換（授業中・授業外）・自学自習	
	BBC・CNN リスニングと世界事情	30	授業中の携帯出席・授業アンケート、授業中の学習、コメントと情報交換（授業中・授業外）	集中
科学技術と社会	102	授業中の携帯出席・授業アンケート、授業外のミニッツペーパー		
基礎	微分積分学A II	57	自学自習	
		1,135		
外国語	英語コアO	37	10% ボーナスポイント（授業外）・授業アンケート	VOA
	インテンシブ英語II B	6	10% ボーナスポイント（授業外）・授業アンケート	VOA
	英語コアU I	58	評価の15%（授業外）・授業アンケート	VOA
	英語コアR	61	10% ボーナスポイント（授業外）・授業アンケート	VOA
	英語コアC	59	評価の20%（授業外）・授業アンケート	VOA
	英語コアU	39	10% ボーナスポイント（授業外）・授業アンケート	VOA
	英語総合基礎（コア再）	66	10% ボーナスポイント（授業外）・授業アンケート	VOA
	英語総合基礎（コア再）	11	10% ボーナスポイント（授業外）・授業アンケート	VOA
	英語コアO	30	評価の15%（授業外）・授業アンケート	VOA
	英語コアC	38	10% ボーナスポイント（授業外）・授業アンケート	VOA
	英語コアO	42	10% ボーナスポイント（授業外）・授業アンケート	VOA
	英語コアO	22	ボーナスポイント（授業外）・授業アンケート	VOA
	英語コアO	24	評価の15%（授業外）・授業アンケート	VOA
	インテンシブ英語I B	10	自学自習・授業アンケート（携帯・パソコン）	VOA
	インテンシブ英語I B	8	自学自習・授業アンケート（携帯・パソコン）	VOA
	インテンシブ英語I B	13	自学自習・授業アンケート（携帯・パソコン）	VOA
	韓国語コアII（文系）	58	授業中の携帯出席、授業アンケート・自学自習（授業外）・評価の10%	
韓国語コアII（理系）	34	授業中の携帯出席、授業アンケート・自学自習（授業外）・評価の10%		
		616		
学部専門科目	惑星化学（理学部）	38	授業中の携帯出席・授業アンケート、コメントと情報交換（授業中・授業外）・自学自習	
	有機化学反応論（理学部）	30	コメントと情報交換、授業アンケート（授業中・授業外）	
	学外研修（農学部）	38	コメントと情報交換（授業外）	
	海事法規（水産学部）	33	コメント、練習問題、授業アンケート（授業中・授業外）・自学自習	
		138		
合計	科目数：38 教員数（非常勤講師を含む） 100名程度	1,930	学生の中には約1200人が「頻繁に利用している」主に特色G P科目（集中講義を除く）、英語の一部、韓国語、専門科目	

VOA = 「Voice of America Special English」の英語の共通副教材

全学的取組み

後期の利用は前期と同様であったが、「教養セミナー」は前期のみの開講であるため、主に二つの科目群で利用された。一つ目は特色 GP「鹿児島の中に世界をみる教養科目群の構築」の実施に関わる「鹿児島探訪」の授業における取組である。もう一つは VOA (Voice of America) の英語副教材である。また、前期と同様に、いくつかの専門科目に利用された。

後期の大きな進展が、携帯電話により Moodle を利用できる「Moodle Lite」というソフトである。前期から実験的にパソコンサイトを携帯表示変換するソフトを運営していたが、表示の問題があって、サイトの見た目などが使いにくいとの意見が多かったため、後期は学長裁量経費を申請して、年度末に「Moodle Lite」を完成した。これによって平成20年度以降は日本の携帯電話で Moodle 利用できるようになり、鹿児島大学の特色になった。

講習会は引き続き、後期に高等教育研究開発部により 2 回開催し、1 回目が Moodle の紹介、2 回目が著作権とコンテンツ作成のテーマであった。また、対外活動として、10月30日に特色 GP 鹿児島探訪の一環として、「平成20年度に向けての授業改善研究会」を実施し、Moodle の紹介があった。年度末に島根大学で開催された FD シンポジウムに鹿児島大学から二人の代表が参加し、鹿児島大学における Moodle の取り組みの紹介も行った。

後期の新しい取り組みとして、前期に導入した MediaDEPO ビデオ配信システムを利用して、優れた講義を 3 つ選んで、FD 研修用ビデオとして撮影した。このビデオは12月に実施した「平成19年度共通教育授業公開授業参観」の一環として「共通教育公開授業参観 - FD 研修用ビデオ」として公開し、教員から参観報告などを提出してもらった。後期に多くの講義ビデオを編集して、後期が終わった時点で約149編が配信され、その中の、約144編は学外にも公開した。このような講義ビデオの公開によって、特色 GP の地域貢献とともに、これからの遠隔授業や対面授業の充実が期待されている。

平成19年度の教育活動、FD 活動、特色 GP「鹿児島の中に世界をみる教養科目群の構築」を通じて、平成18年度の後期に始まった鹿児島大学の e-learning 活動を一層発展させ、導入から定着の段階に入ったといえる。特に、教員間のユーザグループ形成と学生間に携帯電話で利用できる「Moodle Lite」ソフトの開発は平成20年度以降の更なる定着の中核になるのではないかと考えられる。

(文責：Robert J. Fouser、教育センター 前准教授)

法文学部FD活動報告

学生による授業評価アンケート調査

【実施の経緯】

法文学部では、平成13年度にFD委員会を設置して以来、学部の授業の点検と改善に取り組んできた。FD活動の背景としては、学生の学力低下、受講意欲低下が目立つようになり、また、外部からの大学教育への批判などが聞かれるようになったことがある。かかる事情に適切に対処するために、学部・学科の教育理念や目標を見直し、授業の改善、学生のキャリア開発などを手がけてきた。

FD委員会では、学部教育の質を向上させるべく、教員相互の授業参観活動や、全学FD研修会への参加など、各種の活動に取り組んできた。とくに、授業の改善のためには、学生が現在の授業をどのように評価し、どのような授業を望んでいるのかについての情報を収集することが重要であると考え、学生による自己評価と授業評価を定期的におこなってきた。そして、毎年度、データの集計を行ない、その結果を報告書として公表し、教員の授業改善に役立ててきた。

平成17年度には、アンケート調査の質問項目を精査し、次年度以降も同じ項目で、授業評価のアンケート調査を実施していくという基本方針を策定した。今年度は、この基本方針を踏襲しつつも、授業全般にわたる学生の出席頻度と、出席頻度の低い授業に関しても問うべく、新たな質問項目を追加した。これまでの調査では、アンケートを実施した授業それ自体に対する評価にとどまっており、学生が欠席しがちな授業に関する情報が得られなかったためである。

期間：2007年7月2日～7月13日

実施機会：各教員の担当授業のうち、1コマ（1回）。講義・演習・実習いずれでも可。

調査の実施にあたっては、ほぼすべての教員から協力を得ることができた。アンケートはマークシート方式とし、機械でデータを読みとり、データを読み込んだあとにアンケート用紙は各教員に返却し、今後の授業改善の一助とした。

【調査項目】

昨年度実施した授業評価アンケートの質問項目と同一内容に、新たに、授業全般について、学生の出席頻度と、出席頻度の低い授業に関する質問項目を追加した。次ページに、実際のアンケート用紙を採録する。

【今後の課題】

学科ごとの分析結果は以下に示すが、毎年ほぼ同様の傾向がみられることが判明した。すなわち、講義においては、学生が質問しやすい工夫や環境作りが必要であり、演習においては、質疑応答などを含めて議論を活性化していく必要があるといえよう。ただ、徐々にではあるが、改善されていることはうかがえる。

今年度は、平成17年度から継続している質問項目に、新たな項目を加えた。年々の変化・傾向を把握するためにも、今後もほぼ同様な質問項目で継続的に調査をすることが望ましいであろう。もっとも、学生による授業評価と学生自身の自己評価について、分析結果が毎年同じような傾向になってきており、授業評価アンケート自体がマンネリ化している点は否めない。こうした点を踏まえつつ、たとえば、学生による自由記述欄に焦点を当てた「記述型アンケート調査」や、学生への授業に対する「面接調査」などを別途実施するなど、今後の工夫が必要であろう。なお、昨今、学生に対して、全学・学部を問わず、多種多様のアンケートを実施しており、こうした「調査インフレ」が学生を拘束しているのも懸念材料である（学生の真摯な対応に期待するしかないのではあるが）。

いずれにしても、授業改善に役立てるべく、真に意味のあるアンケート調査の実施が必要である。

平成19年度前期 法文学部授業評価アンケート調査

【表面】

この調査は、法文学部における授業改善に役立てるために行なうものです。あなたの回答が成績等に影響することは一切ありません。受講して思った事や感じた事を率直に回答してください。

表と裏の両面に全部で26の設問があります。(1)から(17)まではすべての授業科目で回答してください。(A)と(B)は講義のみ回答してください。(a)と(b)は演習や実習のみ回答してください。裏面は、今年度の本調査を初めて受ける人だけ回答してください。(18)は履修登録した科目全般について、(19)から(22)については、出席頻度の低い科目全般について回答してください。(13)は記述式で、それ以外はマークシート方式で、○印を黒鉛筆・シャープで塗りつぶして回答してください。

科目名 ()	学生の所属学科
曜日時限 ()	○1 法政策学科
担当者 ()	○2 経済情報学科
	○3 人文学科
○1 講義	科目の開設学科
○2 演習	○1 法政策学科
○3 実習	○2 経済情報学科
学年 1 2 3 4	○3 人文学科
○ ○ ○ ○	○4 共通

すべての授業科目（講義・演習・実習など）で回答

(1) あなたはこの授業によく出席した	あまり出席しなかった	1 2 3 4 5 ○ ○ ○ ○ ○	よく出席した
(2) あなたは不明な点を積極的に教員に質問した	全く質問しなかった	1 2 3 4 5 ○ ○ ○ ○ ○	積極的に質問した
(3) あなたは授業に意欲的に取り組む努力をした	あまり努力しなかった	1 2 3 4 5 ○ ○ ○ ○ ○	非常に努力した
(4) この授業は分かりやすいものだった	分かりにくかった	1 2 3 4 5 ○ ○ ○ ○ ○	分かりやすかった
(5) 教員は授業の目標をはっきり示した	全く示さなかった	1 2 3 4 5 ○ ○ ○ ○ ○	はっきり示した
(6) 教員の声や話し方は聞き取りやすかった	聞き取りにくかった	1 2 3 4 5 ○ ○ ○ ○ ○	聞き取りやすかった
(7) 教員は授業を時間どおり行なった	全くそう思わない	1 2 3 4 5 ○ ○ ○ ○ ○	強くそう思う
(8) 教員の授業に対する意欲や工夫が感じられた	全くそう思わない	1 2 3 4 5 ○ ○ ○ ○ ○	強くそう思う
(9) 授業を通して、自分にとって発見があった	全くそう思わない	1 2 3 4 5 ○ ○ ○ ○ ○	強くそう思う
(10) 質問や意見に対して適切に対応してもらえた	全くそう思わない	1 2 3 4 5 ○ ○ ○ ○ ○	強くそう思う
(11) この授業に対するあなた自身の受講態度の総合評価を10段階で回答してください			
低 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 高 ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○			
(12) この授業に対する総合評価を10段階で回答してください			
低 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 高 ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○			

(13) この授業について、良かった点、改善すべき点など、感じた事や意見を書いてください。																			
(14) この半年間でオフィスアワーを利用した	全く利用しなかった	1 2 3 4 5 ○ ○ ○ ○ ○	非常によく利用した																
(15) この授業に対して満足している	全くそう思わない	1 2 3 4 5 ○ ○ ○ ○ ○	強くそう思う																
(16) シラバスで提示された学習目標は達成できた	全くそう思わない	1 2 3 4 5 ○ ○ ○ ○ ○	強くそう思う																
(17) この授業を含めた学生生活全体の支援として、整備・充実してほしいものを、次のなかから2つ選んでマークしてください。																			
<table style="width:100%; border:none;"> <tr> <td style="text-align:center;">1</td> <td style="text-align:center;">2</td> <td style="text-align:center;">3</td> <td style="text-align:center;">4</td> <td style="text-align:center;">5</td> <td style="text-align:center;">6</td> <td style="text-align:center;">7</td> <td style="text-align:center;">8</td> </tr> <tr> <td style="text-align:center;">○</td> <td style="text-align:center;">○</td> <td style="text-align:center;">○</td> <td style="text-align:center;">○</td> <td style="text-align:center;">○</td> <td style="text-align:center;">○</td> <td style="text-align:center;">○</td> <td style="text-align:center;">○</td> </tr> </table>				1	2	3	4	5	6	7	8	○	○	○	○	○	○	○	○
1	2	3	4	5	6	7	8												
○	○	○	○	○	○	○	○												
1 個人別学習の助言指導 2 自習室 3 自由に使える集会所やスペース 4 参考書等の図書																			
5 パソコン等の情報機器 6 奨学金 7 授業料の減免措置																			
8 その他（具体的に _____)																			

講義のみで回答

(A) 板書やOHP等の文字がよく読みとれた	全くそう思わない	1 2 3 4 5 ○ ○ ○ ○ ○	強くそう思う
(B) 教科書やプリント等の補助教材が効果的に用いられていた	全くそう思わない	1 2 3 4 5 ○ ○ ○ ○ ○	強くそう思う

演習や実習のみで回答

(a) 質疑応答などが活発に行なわれた	全くそう思わない	1 2 3 4 5 ○ ○ ○ ○ ○	強くそう思う
(b) 授業でなすべきことが明瞭であった	全くそう思わない	1 2 3 4 5 ○ ○ ○ ○ ○	強くそう思う

【裏面】

授業全般について回答

(注：本調査を今年度初めて回答する人だけ記入してください。)

(18) あなたが今学期に履修登録した科目のうち、常に出席している科目の割合に近いのは次のどれですか。	1/5	2/5	3/5	4/5	5/5
	○	○	○	○	○

出席頻度の低い授業全般について回答

(注：本調査を今年度初めて回答する人だけ記入してください。)

(19) 授業は分かりやすいものだった	分かりにくかった	1 2 3 4 5 ○ ○ ○ ○ ○	分かりやすかった
(20) 教員は授業の目標をはっきり示した	全く示さなかった	1 2 3 4 5 ○ ○ ○ ○ ○	はっきり示した
(21) 教員の声や話し方は聞き取りやすかった	聞き取りにくかった	1 2 3 4 5 ○ ○ ○ ○ ○	聞き取りやすかった
(22) 教員の授業に対する意欲や工夫が感じられた	全くそう思わない	1 2 3 4 5 ○ ○ ○ ○ ○	強くそう思う

授業公開・授業参観報告

1. はじめに

2005年度まで、法文学部では独自に授業公開・授業参観（名称は「研修授業」）を行ってきた。毎年学部FD委員会が数名の教員に依頼して、授業を公開してもらい、他の教員が参観した。授業終了後は、その授業を基にして、授業担当教員と参観教員との間で、授業方法等についての意見交換会を行った。

2006年1月、鹿児島大学では学長裁定により「鹿児島大学「授業公開」実施要項」が制定され、2006年度より全教員による授業公開・授業参観が実施されることとなった。法文学部では、6月、7月に実施された他学部の例を参考に、12月4日～15日に授業公開を実施した。

本年度は、昨年度の実施状況を参考に、実施期間を一週間延長して三週間とし、公開コマ数も1コマ以上としたうえで、以下の通り実施した。また、授業公開報告書では、授業担当者に「教育効果を高めるために行っている工夫等」を聞く項目を、「昨年度の授業公開を基に、工夫、改善した点」を聞く項目に改めた。

1. 実施期間

- ・2007年11月26日（月）から12月14日（金）

2. 対象教員

- ・法文学部全教員（非常勤講師を除く）。
- ・全教員は、法文学部における担当授業の上記期間中の全コマの中から、1コマ以上を選び、他の教員に公開する（講義以外でも可、共通教育は除く）。
- ・全教員は、上記期間中に公開される授業の中から、1コマ以上参観する。

3. 授業公開の流れ

- ・授業参観者は、授業を担当する教員（以下、授業担当教員）に事前に参観する旨を伝える。
- ・参観後、授業参観者は、「授業参観報告書」を授業担当教員に提出する。
- ・授業担当教員は、授業参観者と相談のうえ、意見交換会を行ってもよい（授業終了後でなくても構わない）。
- ・授業担当教員は、「授業公開報告書」と「授業参観報告書」を12月21日（金）までに各学科のFD委員に提出する（授業参観者がいない場合は、「授業公開報告書」のみを提出する）。

平成19年度 鹿児島大学法文学部授業公開報告書

授業科目名		授業担当者名	
公開期日	平成19年 月 日 (曜日) 時限		
授業参観者			
意見交換会	有 無		
昨年度の授業公開（参観者からの意見等）を基に先生が工夫、改善された点等をお書きください。			
授業参観者からの意見等に対する感想をお書き下さい。			
授業公開に対して意見等があれば、お書き下さい。			

平成19年度 鹿児島大学法文学部授業参観報告書

参観者氏名		参観者所属	
参観授業名		授業担当者名	
参観期日	平成19年 月 日 (曜日) 時限		
本授業を参観して、工夫していると感じた点や、自分の授業に取り入れたいと思った点をお書き下さい。			
本授業をより良いものにするためには、どのようにすればよいかをお書き下さい。			
本授業に対する感想やコメント等をお書き下さい。			

2. 授業公開の報告

ここでは、授業公開報告書と授業参観報告書の以下の項目を要約する。

- (1)「授業公開報告書」の「昨年度の授業公開（参観者からの意見等）を基に先生が工夫、改善された点等をお書きください。」（以下、「授業担当者の工夫、改善点」）
- (2)「授業参観報告書」の「本授業を参観して、工夫していると感じた点や、自分の授業に取り入れたいと思った点をお書き下さい。」（以下、「工夫していると感じた点・取り入れたい点」）

これらを、学科ごとに「講義形式の授業」と「演習形式の授業」に分けて整理してある。

2.1. 法政策学科

2.1.1. 講義形式の授業

(1) 授業担当者の工夫・改善点

- ・平易でかつ受講生の関心を引くことのできる教材を準備すること。
- ・丁寧な説明を心がけること。
- ・板書の文字を少し大きく、はっきり声が聞こえるように話すよう努めている。
- ・授業中の質問に正解を答えられなかった者のうち、一応それなりの解答をした者については減点しないこととした。
- ・翌週の分野を示すことにより、予習にかかりやすくなるようにした。
- ・授業内容をコンパクトにして、時限で話す内容を明確にした。しかし、コンパクトにすることが学生にとってよいかどうかは不明。
- ・テキストを2007年度出版されたものに改めた。
- ・内容も文章も学生にとってより理解しやすいものを選んだ。
- ・「翻訳」すること自体の難しさと注意をより詳しく教えた。
- ・板書による説明と配布資料による説明の時間配分。
- ・学生の集中度を維持するために時々質問を投げかけ、各自で考えてもらうようにすること。
- ・遅刻学生に配布する資料の配置場所を改善した。

(2) 工夫していると感じた点・取り入れたい点

- ・高度、難解な文法を平易に解説しつつ、初学者の受講生に勉強意欲をわかせる卓越した技術、手法。社会や政治制度の正確な内容にも説き及び受講生の法的素養を涵養する広範な知識力。
- ・丁寧でわかりやすい授業だった。インターネットのホームページで資料を集められている点も感心した。
- ・学生の質問をペーパーで出させ、回答の時間を設けている。
- ・テキストに書かれていることを補うための、板書による説明が多く加えられ、学生の理解の助けとなっている。全体的に丁寧な授業の進め方でわかりやすい。
- ・1つの条約の構造と歴史的発展との関係が非常に対応していて興味深い。
- ・現実の事件と条約との関係がヴィヴィッドにわかりやすく説明された。
- ・板書の文字も大きく、声も聞き取りやすい。また、学生がノートをとるために間をあけるなど学生に配慮した授業の進め方がなされていた。
- ・資料を読む時間と、説明をする時間とが適切な割合で配合されており、両者が有機的につながっていた。
- ・声が大変に聞き取りやすく速度も適切である。
- ・全体像を「あらすじ」として紹介するのもわかりやすくてよかった。
- ・遅刻者の資料配布にも配慮して大変親切である。
- ・板書が大変見やすかった。説明も複雑な内容を簡潔、明快に伝えるもので、聞いていてよくわかるものだった。また資料が大変詳細で、耳で聞いてもわかりにくい内容を効果的に学生に伝えていたと思われる。
- ・説明の方法などが大変参考になった。
- ・プロジェクターを効果的に使っている。
- ・資料の準備が良い。
- ・授業の最初に前回の復習を効果的に行っているため、学生が授業に入っていくやすいと思う。
- ・受講生からの質問を、講義の後に紙で回収しているのがよい。
- ・ドイツ語という理解するのに高度な学力を必要とする外国語を初学者にも十分理解させる教授力に感嘆した。

- ・TOEIC関係のテキスト使用により、今日的ニーズに応えるクラスの1つになっていると思われる。
- ・受講者の立場に立った講義のせい、受講者に私語がなく真面目にノートをとっていた。教員本位でカリキュラムをおしすすめるのではなく理想的な講義形式である。余計な知識を入れないう簡潔な説明方式でありながら、聴講者のイメージを高める工夫のなされた説明であり面白かった。

2.2. 経済情報学科

2.2.1. 講義形式の授業

(1) 授業担当者の工夫・改善点

- ・金融電卓を20台購入した。授業では、数の関係から直接は用いていないが、数値計算には利用している。
- ・計量分析ツールを教える講義でパソコンを使って実習を行うため、他の文系の講義とはやり方が異なるが、視覚に訴えて統計理論を構造化して教えた。
- ・インターネット上の関連したHPを利用して教えている。
- ・理論も大切だが、実際に使えることが学生にとって必要であり、モチベーションの向上にもつながるので、データを用いて学生たちに自分で分析できるようにしている。
- ・個々の簿記の記帳手順を習得するだけでなく、その手続きが対象としている現代企業の経済活動にも関心を持つように配慮している。
- ・簿記システムのメカニズムを考えることの重要性を理解できるようにしている。
- ・テキストだけでなく説明資料を配布している。
- ・授業の組み立てを分かりやすくするなど一般的な部分を改善した。
- ・学生が「楽しめる」「役に立つ」と感じる授業を実現するためにプレゼンテーションを基本(軸)に置いて内容を大幅に見直した。
- ・教材の内容を理解してもらうために関連資料を配布した。
- ・できるだけやさしい日本語で話をした。
- ・講義が一本調子にならないように強弱をつけた

- りできるだけ学生に質問をするようにした。
- ・できるだけ見やすい字で板書するようにした。
- ・昨年は教科書の順にリスニング、文法と進めていったが、今年は毎時間、前半リスニング、後半文法とバラエティを加えた。
- ・学生が自由に発言しやすい環境を作るのが課題となったが、ある程度成功したと思う。ただ、3名の授業参観者があり、学生は普段よりは緊張したようだ。

(2) 工夫していると感じた点・取り入れたい点

- ・導入でマンガ『ナニワ金融道』を材料にして、現在割引価値の概念を具体的に考えさせる工夫をしている。
- ・具体的な金利を提示して資産価値を計算させることによって理解を定着させている。
- ・経済理論によって現実の問題を解決させることによって経済学への関心をもたせる動機づけとなっている。
- ・パソコンを使った授業であり、自分の手で問題を解けるので内容理解に効果的である。
- ・ネットを使ってデータを入手できるのは便利である。
- ・自分の授業でもパソコンを使って効果的にやれる部分があると思うので検討してみたい。
- ・統計学という取っ付きにくい内容を身近な例を用いて説明しており大変分かりやすかった。
- ・練習問題を多く取り入れており、学生の理解度をチェックできると同時に学生も主体的に取り組むことができ大変良いと思う。
- ・授業ではインターネットを使っており、学生は授業外でも勉強ができるので良いと感じた。
- ・パワーポイントを使って学生が発表する授業で「伝える」ことを学ぶことが目的であり、実際に学生が体験している点で意味のある実習だと思う。
- ・学生の発表をコンテンツとして残すという発想は良いと思う。
- ・学生に接する方法に人間味が感じられて参考になった。
- ・会計基準の社会的な制定を理解するための前提として、企業の営業活動における事実と会計記録とを異なる事象として概念的に峻別することを説明するときに、板書で事実と会計記録をビ

- ・ ジュアルに区別されたことで混乱を回避されていた。
- ・ 事実と会計との間に1対1対応がないことをメリハリ付けて説明されていた。
- ・ 決算整理をフローチャートにのっとなったワークシート形式で説明された事により実践的な理解を可能にされた。
- ・ 話のスピードも数字を扱う学問なのでゆっくり過ぎるくらいでちょうどよかった。
- ・ 講義資料を主資料と付属資料に分けている点が良い。
- ・ 講義資料に図版を多用している点が良い。
- ・ 例示の必要な場合に、学生が日常よく知っている例を挙げている点が良い。
- ・ 最初に講義全体のテーマを明示して、講義のイメージを持たせるよう工夫されていた。
- ・ 理論をテーマにしている講義なので学生に高いレベルを求める講義であるが、歴史的背景についての説明を加えることにより興味を持たせようとしている。
- ・ 配布資料がうまくまとめられており、過去のイメージを持たせるために写真を使っている点良かった。
- ・ 授業の準備がきちんとされて学生に対する誠実な授業のある様に感じた。
- ・ 繰り返し学生の反応を確かめながら講義を進めていたので感心した。自分の講義は早口で学生は理解しにくいのではないかと思った。
- ・ 発言する学生も多かったので成功していると思う。
- ・ 学生が積極的に質問するように、(1) 発言した場合加点する、(2) 教員があえて「正解」や「不正解」と言わないことで学生が発言しやすい雰囲気を作る、(3) ある先生の質問に学生がいい回答をしたときに皆が拍手したのがよかった。
- ・ 学生の自己表現力を総合的にアップさせようとする工夫が見られた。
- ・ 座学に学外での活動を加え講義の内容にリアリティを持たせている。
- ・ 講義でのキーワードと自分の関心を結びつけるようにまとめさせている。
- ・ 自分の考えを報告させ他の学生との意見交換を行っている。

- ・ グラフ等を使った視覚に訴える授業はわかりやすかった。
- ・ 配布資料がきちんとしており、受講生も書き込みをしながら聞いており、丁寧に準備された授業だと感じた。個人的には、理論に関する抽象的な議論は好きなのだが、学生に対して理論をいかに説明するか大変な作業だなと思った。
- ・ 総じて随所に細かい配慮と工夫が見られ、有意義であった。
- ・ 統計資料等を自分で作成したものを利用してながら懇切丁寧な歯切れのよい講義だった。
- ・ 講義形式の授業で発表会を行うのは大変なことであるが、それを成功させているのは素晴らしいことだと思う。自分の講義でも受講生が少ない場合は取り入れてみたい。

2.3. 人文学科

2.3.1. 講義形式の授業

(1) 授業担当者の工夫・改善点

- ・ 英語で講義しているが、すべて英語だとまだ理解できない学生がいる。難しい単語などを黒板に書きながら進めている。今年はパワーポイントを取りやめ、黒板とチョークだけで授業をしている。黒板なので、板書しながら、なるべくアドリブで話しかけ、学生の顔を見て理解度を確認しながら話すようにした。この方が人間の言語理解の速度に合っているような気がする。すると、今のところ、かなりの学生が内容を理解しているようである。
- ・ 板書を丁寧にする。聞こえやすい声で話す。視覚的に訴えるよう工夫する。
- ・ パワーポイントを使用して資料を作成したが、実際にはプロジェクターでスクリーンに映さず、印刷して配布した。
- ・ 授業は講義であるが、受講生にも口頭による研究発表やレポート提出によって授業参加を促した。
- ・ テーマは擬音語であるが、極力多角的な考察ができるよう工夫した。
- ・ 学生の講義に対する疑問・質問を聴取する機会を設け、理解不十分な点を補足説明するようにして、学生の授業理解度を深めていくよう心が

けるようになった。

- ・レジュメの作り方を工夫した。
- ・授業の内容に沿ってスライドの内容を整理、変更した。
- ・昨年、学生へ参考図書を紹介することに関してご意見を頂戴したが、その後、授業のレジュメや口頭で極力示すようにしている。
- ・日本文学史の一側面として、平安時代の歌壇史について論じているが、常に歴史的社会的背景に留意し、また、和歌に限定することなく、日本文学史全体の問題として論じている。
- ・板書を丁寧な。
- ・パワーポイントに表記する文字の大きさ、見やすさの改善。
- ・ポイントの明確化。
- ・説明の端的さ。
- ・学生からも話し方が早すぎると指摘があったが、1時間の内にこれだけは説明しておきたいと思うとやはり早口になるので話し方をゆっくりにしたい。

(2) 工夫していると感じた点・取り入れたい点

- ・事前に小道具を用意し、学生にクイズを出して答えさせるなど、学生に飽きさせない工夫を凝らしていること。
- ・授業の進行に沿ったプリントを用意し、板書を極力しないで、受講する側の負担を少なくしていること。
- ・大教室での、かつ月曜5限という学生にとって「疲れている」時間帯の授業において、クイズ形式での導入や、解答者の指名など、扱われているテーマや内容に興味を引き、自然と授業に入っていける工夫が凝らされている点。
- ・狭義の専門領域に縛られず、ご自分が関心を持たれているテーマについて、「熱く」そして分かりやすく語られている点。
- ・90分の授業が周到に組み立てられ、また授業の流れや要点が分かりやすくまとめられた資料が配付されるなど、入念な準備がなされている点。
- ・配布されたレジュメに工夫が見られた点、そのレジュメを使って受講生に対してわかりやすく説明を加えて講義を行っていた点が、今後自分の授業にも取り入れたいと思った。
- ・高校で学ぶ知識にも触れながら、最新の研究成果が説明されている点、それにより、学生に理解しやすい授業になっていると思われる。
- ・パワーポイントを使用している点、内容が非常に整理されている点、最後にまとめがあり、全体の内容についても一度確認する仕組みになっている点。
- ・授業中、適宜に受講生に対する質問等を行うなど、学生の注意を喚起することを心がけながら講義が進められていた点に工夫を感じた。
- ・「伊勢物語」にまつわる謎（作者や成立過程）が大変面白いと思った。関連して、「源氏物語」の例や「三段階成立論」「後期挿入説」など内容が充実していると思った。
- ・講義名からは“理論づくめ”の内容になりがちと思われる講義を、非常にありふれた日常場面を題材に教授されているのは、とても勉強になった。
- ・パワーポイントを使用している点。講義内容が具体的で分かり易い点。「野良猫の話」は自分の経験を踏まえていて分かり易かった。猫の表情・見方の研究は、ユニークだと思う。猫の言葉も分かると聞いて驚いた。写真20,000枚からの物語には感心した。
- ・テキスト使用（頭に入りやすい、説明も丁寧）。黒板活用（豊富な事例・用例、図解）。プロットの明示（授業の流れが予めわかるのがよい）。論文の書き方を教えている（貴重な技法の伝授である）。一語完結（達成感がある）。
- ・このクラスは英語圏に六ヶ月以上滞在した学生のためのクラスである。後期の授業はディスカッションに基づいておこなっている。新しい文法・語彙を学ぶことを中心とせず、知っている英語を生かすという目的である。ディスカッションのテーマを毎週変えて、学生が自分の人生・生活に関係あるものを選んでいく。せっかく留学に大きなお金と労力を費やした学生にこのようなクラスを設けるのは、大きな意味があると思う。
- ・パワーポイントを使用しての授業で、視覚的にも学べるので、学生にとっては通常形態の授業よりも理解しやすいのではないかと思われた。自分も早くパワーポイントを使った授業形態を取り入れねばと思う。

・東アジア、東南アジアおよびヨーロッパにもわたる視点が提供され、全体の中での視点が獲得できる点がよかった。

3. 授業公開の総括

全員参加による授業公開、授業参観も2年目となり、昨年度の授業参観者の意見を基に授業担当者が様々な工夫、改善を行っていることが報告書から読み取れる。それは、板書の方法、話し方から、教材や配布資料の見直し、授業の進め方等まで多岐にわたっている。

講義形式の授業においては、いかに学生に理解させるかを主眼にした工夫、改善が図られている。また、授業によっては、教員側が一方向的に話すという従来の授業スタイルから、学生に質問をしたり問題を解かせたりする学生参加型の授業スタイルへの変化も見られ、それらの授業では学生の自己表現力を高めることに重点が置かれているようである。

一方、演習形式の授業では、学生の自主的な発言を如何にして引き出すかという点が昨年度からの共通した課題となっている。授業参観をすることによって、他の教員の演習の進め方を参考に種々の改善がそれぞれの教員で図られている。ただ、これという型があるわけではないので、これからの改善へ向けての不断の努力が必要となる。

全員一律参加を義務づける授業公開のあり方については、昨年同様肯定的な意見と否定的な意見が存在した。昨年と比較して、授業公開報告書の回収率が落ちたこと、報告書に何らの記述もないものが見られるようになったこと、参観者のいない授業数が増加傾向にあることは、今年度の授業公開を計画実行した者として多いに反省しなければならないが、その背景には画一的な授業公開のあり方に対する反論があることは間違いなからう。このままでは、授業公開そのものが形骸化していくことは明らかである。授業公開そのものへの異論は少ないので、全員一律参加型のあり方について全学的に再度議論することも必要に思える。

また、授業公開の実施方法についてもいくつかの意見があった。実施期間については、現状のまま後期に実施する、後期から前期へ移す、両期と

もに実施して公開する教員が実施期を選択する等が考えられる。これについては、一度アンケート調査を実施する必要があるであろう。

また一方、限られた期間の中で参観したい授業を見つけるのが難しいという意見も多い。今後は、学生の授業評価アンケートと連動する形で、評価の高い授業科目を公開していただき、なるべく多くの教員が参観し、自分の授業に生かすという様な方法も考えるべきではないかと思われる。

なお、今回授業公開が行われた科目数は88科目、授業を参観した教員数（授業参観報告書提出教員）は63名、参観者があった授業科目数は47科目で、授業が公開された科目の内53%の科目に参観者がいたことになる。

今年度も他学部からの参観者はいなかった。

教育学部FD活動報告

第1節 平成19年度の主な活動

教育学部教育改善委員会（学部FD委員会）は、以下のメンバーで活動を行った。

教育改善委員会委員 大野 克彦
(50音順) 片岡 美華
北 廣男
(委員長、全学FD委員)
黒光 貴峰
佐々 祐之
種村 完司
寺床 勝也
藤田 勉

教育改善委員会は毎月1回開かれ、教育学部及び大学院教育学研究科の教育改善のための活動を行った。主な活動内容は次の通りである。

1. 学部学生による授業アンケート（授業評価）の実施

平成19年度前期に学部学生による授業アンケートを、昨年度実施された内容のものを若干加筆修正を行い実施した。

2. 大学院の学生による授業アンケート（授業評価）の実施

平成19年度前期に大学院教育学研究科の学生による授業アンケートを、昨年度実施された内容のものを若干加筆修正を行い実施した。

3. 授業公開及び教員相互の授業参観の実施

平成19年度後期に全教員を対象に授業公開を実施し、教員相互の授業参観を実施した。

4. 「学生と教員が求める教育学部とは」(シンポジウム)の実施

「学生と教員が求める教育学部とは」(シンポジウム)を実施し、学生と教員との意見交換を行った。本年度は「学生によるシンポジウム実行委員会」を設立し、教員と学生の意見交換を進めながらシンポジウムを実施することができた。

5. FD研修の実施

FD研修を実施した。京都教育大学、鳴門教育大学を訪問し、学部・大学院の教育改善に関する情報を収集し、教育改善のための検討資料とした。

6. 「授業分析・改善報告書」の分析

学部全教員に「授業分析・改善報告書」の提出を求め分析を行った。

7. 報告書の作成

平成19年度に行った教育改善委員会の上記の活動について、報告書を作成した。

以下で、1から4の内容についての概略を説明する。5から7の詳細については平成20年3月に発行の「鹿児島大学教育学部・鹿児島大学大学院教育学研究科教育改善委員会報告書」を参照していただきたい。

第2節

【1】学部学生による授業アンケート（授業評価）の実施

平成19年度前期の教育学部学生による授業アンケートを以下の手順で実施した。

1. アンケートの実施方法について

(1) 授業アンケート実施科目調査

(平成19年6月20日～平成19年6月27日)

教育改善委員会より、各専修世話人に依頼し、授業アンケートを実施する科目を、各教員に対して調査し、集約した。

(2) 授業アンケート用紙配布(平成19年7月5日)

授業アンケート実施科目調査の結果をもとに、各教員に対して、アンケート調査用紙を必要部数配布した。

(3) 授業アンケート実施

(平成19年7月17日～7月23日)

各教員において、授業の最後に10分間程度時間を確保してもらい、アンケート調査を実施してもらった。なお、回収したアンケート調査用

紙は、封筒に入れ、教育改善委員に返送する形で集約した。

(4) 授業アンケート回収締め切り

(平成19年8月3日)

前期末試験週間終了直後を、アンケート回収の期限として指定した。

(5) 授業アンケート結果集計・分析

(平成19年8月～9月)

各教員から回収したアンケート調査用紙を集計し、全体的な傾向、授業の履修人数規模別の傾向性を分析した。

2. アンケート調査の質問項目について

今回のアンケート調査は、各質問項目に対して3段階から5段階までの選択肢を用意し、その中から1つを選んでチェックさせる方法で行った。

設定した質問項目は、「あなた自身について」「授業について」「教員について」「その他」という4つのカテゴリーに分かれており、総質問項目数は17項目である。以下に、それぞれの質問項目を挙げる。

あなた自身について

- 1) この授業を受講するにあたって、シラバスを確認しましたか。
- 2) あなたにとってこの授業の難易度はどの程度でしたか。
- 3) この授業に対して予習・復習を行いましたか。
- 4) あなたのこの授業に対する準備（復習も含む）は、授業の内容を理解するために、十分だったと思いますか。
- 5) この授業を何回欠席しましたか。
- 6) この授業にオフィスアワーが設定されているのを知っていましたか。

授業について

- 7) 授業の内容は、シラバスの内容に沿ったものでしたか。(シラバスの確認をしていない人は記入しないで下さい)
- 8) 授業の内容は、授業科目名にふさわしいものでしたか。
- 9) 授業の中で、教員の発問や学生の発言はどの程度活発に行われましたか。
- 10) 授業における資料の提示（板書、OHP、配付資料等）は適切でしたか。

11) あなたは、この授業の内容を、どの程度理解できたと思いますか。

12) あなたはこの授業に満足しましたか。

教員について

13) 教員の話し方は明瞭で聞き取りやすかったですか。

14) 授業は時間通りに行われましたか。

15) 授業に対する教員の熱意が感じられましたか。

16) オフィスアワー等、授業に対する質問へていねいに対応しましたか。

その他

17) この授業に対して、感想・要望などがあれば記入ください。

なお、これらの質問項目に対する選択肢は、ここでは省略するが、「教育学部教育改善委員会報告書」を参照していただきたい。

3. 授業アンケートの調査実数について

今回行った授業アンケートを依頼した教員数は100名、授業アンケート実施科目調査によりアンケートの実施に同意していただいた授業数は94授業（複数の授業で実施する教員を含む）、実際に授業アンケートを実施し、教育改善委員会で回収できた数は85授業分であった。この結果、授業アンケートの実施回収率は90.4%となり、昨年度（86.7%）に対して非常に高い実施率を上げることができたと考えられる。

4. アンケート結果の集計について

結果の集計は、質問項目ごとに全授業を対象とした集計、授業履修人数別（1～10人、11～25人、26人～70人、71人以上）による集計を行った。

授業履修人数別にみると、1～10人が6授業、11～25人が28授業、26人～70人が42授業、71人以上が9授業のクラス構成であった。

5. アンケート結果のまとめについて

結果の分析は、アンケートの質問項目別に行った（質問項目1から質問項目16まで）。「その他」の質問項目17については、各授業に対するコメントとなるため、ここでの分析には含めないが、各教員への返却に含めることとした。質問項目別の調査結果と分析の詳細については「教育学部教育

改善委員会報告書」を参照していただきたい。ここでは次の項目で全体の概要を紹介する。

6. アンケート実施を振り返って

今回の授業アンケートから浮かび上がってくる教育学部の現状を前回（平成18年度前期）の調査とも比較しながら全体的に考察すると、教育学部の教員は、前回に引き続きおおむね授業に対して真摯な姿勢で取り組んでいると評価されていることがわかる。授業内容はシラバスに沿ったものであり、授業科目名も授業内容に合致したものであるという評価が高い。また資料の提示もおおむね適切であり、話し方は明瞭で聞き取りやすく、授業時間についても適切に行われ、授業に対する熱意も十分に感じられるという評価になっている。

また、昨年度から新たに追加された質問11「あなたは、この授業の内容を、どの程度理解できたと思いますか」でも79%と高く、昨年度75%に対して4ポイント向上できたことから、おおむね良好な結果が得られた。また、質問12「授業に対する満足度」でも、85%の学生が満足と評価した。これは昨年度の81%に対して4ポイント改善できた。

一方、昨年度からの課題であった、学生自身の意識の持ち方についてみると、今回の調査でも、シラバスの確認の有無や予習・復習の有無は従前と変わらぬ傾向を示した。

例えば、質問4「あなたのこの授業に対する準備（復習も含む）は、授業の内容を理解するために、十分だったと思いますか」では、“やや不足していた”が46%（昨年度44%），“不足していた”が14%（昨年度19%）と6割の学生の準備不足は依然として変わらない。また、質問6の「この授業にオフィスアワーが設定されているのを知っていましたか」でも“知っていて活用した”と回答したのは全体の7%で昨年の6%とあまり改善しなかった。ただ、“知っていたが活用しなかった”と回答したのが50%と半数になり、昨年の43%より7ポイントも向上している。今後、オフィスアワーの活用を工夫改善する必要がある。

今回、新設した質問16「オフィスアワー等、授業に対する質問へていねいに対応しましたか」では668名の学生が“非常にていねいに感じられた”と答えている。実際は、質問6でみるように188

名の学生のみがオフィスアワーを活用しているはずで、オフィスアワー以外の場面での教員の対応について回答したのと考えられる。いずれにせよ、さまざまな教育場面で教員はていねいに対応したものと推察できる。

シラバスの確認については、昨年度より10ポイント改善したとはいえ、まだ全体の4割が授業を受講するにあたってシラバスを読んでおらず、予習・復習も十分行われているとは言い難い結果となっている。また、授業の準備に関しては6割強の学生が準備不足であることも明らかであった。加えて、オフィスアワーについては、実に93%が無関心であるという結果も明らかとなり、昨年の傾向とほぼ変わらず改善されていない。教育学部全体としてシステムの機能改善とともに広報活動などの取り組みによって学生の意識喚起を促す必要がある。

【2】大学院の学生による授業アンケート（授業評価）の実施

アンケート内容等は学部の場合のものと同様であるため、アンケートの集約結果のみを報告する。アンケートの実施方法その他については「教育改善委員会報告書」を参照いただきたい。

今回行った授業アンケートを依頼した教員数は100名、授業アンケート実施科目調査によりアンケートの実施に同意していただいた授業数は69授業、のべ280名のアンケート数になる予定であったが、実際に授業アンケートを実施し、教育改善委員会で回収できた数は56授業分で、のべ130名から回答を得た。この結果、授業アンケートの実施回収率は46.4%であった。

今回の教育学研究科の授業アンケートの結果から、90%以上の高い割合で評価がなされた結果となった。またこのことは、学部教育のアンケート結果と比較することでその傾向も顕著に示された。

あなた自身についての6つの質問項目（質問1～質問6）についてみると、8割の院生が事前にシラバスを確認し、7割が予習・復習を行い、授業内容を理解するのに十分な学習を行っている院生は6割であること、欠席もほとんどないことなど、学びの姿勢が十分窺い知れた。

授業についての6つの質問項目（質問7～質問12）についてみると、授業はシラバスに沿ったものであり、授業科目名もふさわしいと評価した院生は、ほぼ100%であった。授業の中で行われる発問や発言は活発であり、資料の提示もほとんどの院生から高い評価を得ている。授業の満足度も6割が“非常に満足しており”、学部教育の3割と比して高い評価であった。ただ、授業内容の理解度をみると、3割が“十分理解できた”とし、6割が“理解できた”としているが、質的に“十分理解できる”割合を高める工夫が必要であるう。

教員についての4つの質問項目（質問13～16）についてみると、教員の話し方も明瞭で、時間通りに授業は行われ、熱意も感じられ、質問等にもていねいに対応するなど、ほとんど100%の院生の教員に対する評価が高い結果を示した。

今回、学部と同じ授業アンケートを実施し比較検討することで、何らかの差異を見出せないかとの期待があった。大学院教育のもつ特色ある少人数教育や演習形式をふんだんに取り入れた授業展開などがこのような評価に結びついたものであることは推察できる。また、大学院生のもつ授業への姿勢、モチベーションの高さも窺い知れた。ただ、今回のアンケート結果からは、大学院教育の課題を浮き彫りにすることはできなかった。より具体的な課題を発掘し、授業改善へフィードバックできる内容を伴ったアンケートのあり方を再点検しなおす必要があると思われる。

検討すべき課題として、

- アンケートのとり方を、大学院向けにさらにテーマを絞ってできないか。
- 記述式アンケートを増やしデータマイニングの手法で課題を明らかにできないか。
- 3年から5年程度の長期的視点に立った授業アンケートの実施方策を考えられないか。

上記のような課題はまだ残っているが、継続的に授業アンケートを実施し、その結果の分析を通して授業改善に努められるシステム整備が肝要である。

【3】授業公開及び教員相互の授業参観の実施

平成19年度の教育学部授業公開を、以下のよう

な手順で実施した。

1. 授業公開の実施計画について

（1）授業公開の目的と枠組み

授業公開は教員同士が相互に授業を公開・参観することで、各教員が授業方法・授業運営の改善を図り、教育の質的向上に資することを目的としている。今年度も昨年度同様、12月の一ヶ月間を平成19年度授業公開期間とした。教育学部所属の専任教員全員が担当授業科目を一つ以上公開し、同時に全教員が一つ以上の授業を参観するということを基本的な枠組みとして、授業公開を実施した。

（2）授業公開科目調査

平成19年10月17日（水）から平成19年10月31日（水）まで、授業公開の科目調査を行った。調査方法としては、各専修の世話人を通じて専修ごとに各教員の授業公開科目を取りまとめ、教育改善委員会で集約した。

（3）授業公開科目一覧と報告書書式の提示

授業公開科目調査表を集約し、教育学部全教員に授業公開科目一覧表（専修別・日別）と授業参観報告書の書式を配布するとともに、授業公開の実施要領を提示した。授業参観をした教員は授業参観報告書を提出することを原則とし、教育改善委員会で集約したのち、授業改善のための資料として個々の教員へフィードバックすることにした。また、授業公開科目一覧表は教育学部だけではなく、全学FD委員会を通じて鹿児島大学の全学部に公開し、授業参観を受け入れる体制を整えた。

（4）授業公開の実施

平成19年12月3日（月）から平成19年12月21日（金）までを授業公開期間とし、この期間中に各教員に授業公開ならびに授業公開を実施してもらった。

（5）「授業参観報告書」の提出

授業参観を行った教員は平成20年1月11日（金）までに「授業参観報告書」を提出し、これを教育改善委員会が集約した。

（6）授業公開のまとめ

提出された授業参観報告書をもとに授業参観者数等を集計し、平成19年度教育学部授業公開のまとめを行った。

(7)「授業分析・改善報告書」の提出

本年度前期に実施した「授業アンケート」及び後期の「授業公開」を受け、教育学部全教員に対し「授業分析・改善報告書」の提出を求め、これを自己評価委員会並びに教育改善委員会で集約した。

2. 授業公開の実施状況について

授業参観報告を集計した結果、本年度の教育学部授業公開の実施状況は以下ようになった。

(1) 公開授業数

教育学部全専任教員100名のうち、96名の教員が授業を公開した（一部、複数の授業を公開）。96%の教員が授業公開を行っており、昨年度の94.9%を上回る率となった。教育学部全体に、授業を公開することに対する積極的な姿勢が浸透していることがわかる。

(2) 授業参観者数

授業参観報告書の提出は54件（昨年度57件）、ただし、複数の授業を参観し報告書を提出した教員もいたため、実際に授業参観を行った教員の実数は39名（昨年度40名）であった。昨年度の実績にはわずかに及ばなかったが、年末の多忙な時期であることを考慮すると、かなり高い授業参観率であるといえるだろう。

3. 「授業参観報告書」の記述より

授業参観報告書における記述を見ると、教育学部の教員が真摯な姿勢で授業参観に臨み、教育改善へ向けて熱心に取り組んでいる様子を読み取ることができる。授業全体への感想、参考になった授業方法、「授業分析・改善報告書」の分析等の詳細については、「教育学部教育改善委員会報告書」を参照していただきたい。

4. 授業公開のまとめ

昨年度から、教育学部専任教員による授業公開が始まった。二年目となる本年度は、この授業公開の取り組みを軌道に乗せ定着させるという意味で、非常に重要な年であったといえる。そのため、教育改善委員会では、少なくとも初年度と同程度かそれ以上の授業公開・授業参観の実施率を目指し、この取り組みへの意識をよりいっそう高めてもらうため、教育学部全教員に向けて周知・広報

活動をたびたび行ってきた。結果的に、授業公開率では昨年度よりもやや上昇、授業参観者数はわずかに前回は下回ったが、全体として見ると昨年度とほぼ同じ実績に達することができた。教育学部各教員の授業公開に対する積極的な姿勢は、初年度から依然持続しているということが窺える。しかしながら、次年度へ向けて検討・改善していかなければならない問題点もいくつか見えてきた。まず、参観者ゼロの授業科目が、全授業公開科目数の約6割にあたる56科目もあったということである。基本的に教員1名につき1科目・1回の公開であること、また、年末の忙しい時期の実施であるため参観時間が取れない等の事情を考慮しても、仲間の教員に授業を見てもらい評価を受けることによって授業スキルを高めるという目的からすると、このような事態は望ましいとはいえず、何らかの対策を講じる必要がある。また、これまで授業参観を行っていない教員に対してどのように参加を促すかについても検討しなければならない。さらに、回収した授業参観報告書の枚数で授業参観教員数をカウントする方法をとっているが、これでは授業参観を行った教員の報告書未提出者数を把握することができない。参観を行う以上は、参観した全教員が報告書を出し、授業を公開してもらった教員に漏れなく感想・評価等をフィードバックすることが肝要である。そして最後に、授業公開・授業参観を通して得られた様々な貴重な知見を、授業の質的向上のために今後どのように生かしていくのか、そして授業を改善し、その結果どのような教育的効果が得られたのかという実績を示すことが喫緊の課題である。これまで教育改善委員会としては、授業公開の意義を教員に広く理解してもらい教員の協力を仰ぎながら安定的に授業公開・授業参観を実施し、授業参観報告書の提出を求めることに重点をおいてきた。しかし、授業公開の眼目は当然のことながらその先にある。授業参観報告書を単に授業公開教員にフィードバックするだけで終わらせず、各教員が自分の授業を内省し分析することによって授業スキルの向上に努めることができるような環境を整え、具体的な授業改善例と改善による成果・効果を継続的に提示していくことが、今、大きく問われているといえよう。

【4】「学生と教員が求める教育学部とは」(シンポジウム)の実施

教育改善委員会では、昨年度に引き続きシンポジウムを開催した。シンポジウムの開催にあたっては、学生の参加を促すことを狙いとして、学生中心のシンポジウムを実施するため、今年度より新たに学生による実行委員会を立ち上げた。

3年生を中心として各系から1名ないし2名を選出し、週に1回程度の学生実行委員会を開催し、シンポジウムの内容や進行の話し合いを行なった。主な検討事項は、役割分担、議題、進行、事前調査についてである。また、実行委員会委員のメンバーおよび役割は以下の通りである。

1. 議題について

シンポジウムの主題は「学生と教員が求める教育学部とは」、副題は「おはんならどげんすつと？ 来ごあ大学にすつために！」とした。実行委員会で話し合った結果、『主題が少し分かりにくい』、『あまり参加しようとは思わない』という意見があげられたため、分かりやすく、学生が参加したくなるような副題となるよう工夫した。また、自分たちの大学である鹿児島大学のことを話し合うということ意識するために敢えて方言を使用した。

2. 学生実行委員会のメンバー

シンポジウム学生実行委員

氏名	役割
上田 涼一	実行委員長
池田 直也	副委員長
北浦 葉二	副委員長
片野田 優子	広報
加覧 香織	広報
崔 京花	広報
新馬場 有希	広報
川崎 健太	事前調査
梶 千明	事前調査
瀬戸川 将	記録
山田 一慶	記録

3. 事前調査

学生実行委員会の『何を中心にシンポジウムを進行していくのかが重要である』という意見か

ら、『シンポジウムの中身を学生中心のものにする』、『今後の学生の大学生活が有意義なものになる』という必要性があげられた。そのため、ヒアリング調査を実施することとし、実際に生活を送っている学生が教育学部に対してどのようなことを考えているのかを調べ、それらをまとめた上で、内容、進行等を考えることにした。

事前調査は、事前調査係が学生約50名を対象にヒアリング調査を行なった。調査では、教育学部の「良いところ」と「悪いところ」について回答を求めた。あげられた意見は実行委員会でまとめられ、シンポジウムの当日に委員から発表された。

4. シンポジウム実施概要

シンポジウムの日時等は、以下の通りである

日 時	平成20年1月30日(水) 16:30~18:30
場 所	教育学部 第一講義棟101教室
パネリスト	寺床 勝也 准教授 中島 祥子 准教授
コーディネーター	黒光 貴峰 准教授 上田 涼一 (学生実行委員委員長)

シンポジウムでは、パネリスト2名の教員をたて、各々教育改善に向けての報告を行い、その後、話し合いの場を設けた。1つは、教育改善委員会委員である寺床勝也准教授に、平成19年度前期授業アンケートの結果の報告を行なってもらった(教育改善委員会報告書：平成19年度授業アンケート報告参照)。もう1つは、中島祥子准教授に、「学生に求めること」について、報告を行なってもらった。先生の経歴と研究分野を紹介して頂くとともに、過ごされた学生生活を通して、大学生活で重要な事柄について報告してもらった。

また、2人のパネリスト報告の間には、シンポジウムに参加している学生が意見を出しやすいように、学生実行委員会による事前調査の報告を行なった。報告は『環境』、『カリキュラム・講義』の改善について行い、その後、話し合いを行なった。当日配布された資料を掲げておく。

環境

- ・他学部よりはるかに禁煙が徹底されている
- ・学生係の対応が丁寧
- ・教育実践センター、エディカなどの本学とは別に施設がある。
- ・放課後に教員対策や就職のセミナーがある。
- ・交通の便が良い
- ・ホームページが分かりやすい
- ・授業に協力的で真面目な学生が多い
- ・行事に積極的
- ・学部全体で仲が良い
- ・敷地内に保育所がある

- ・衛生面が悪い（ポイ捨て、ゴミの放置 etc）
- ・講義、研究棟が古い（椅子破損 etc）
- ・施設の開放時間が短い
- ・科室・自習室が欲しい
- ・授業評価をすべての授業で行わない。
（また、それを第三者に任せず、教員に任せている）
- ・ウェブ上の研究者総覧が五年も更新されていない
- ・印刷に無駄がありすぎる
- ・教員同士の連携が取れていない
- ・学食の座席数が少ない
- ・退官した先生の後任が来るのが遅い
- ・学生のモラルが低い
（喫煙者のマナー、授業態度 etc）
- ・掲示板が見難い

カリキュラム・講義

- ・履修時期が決まっていて時間割が立てやすい
- ・理系、文系いろいろな科目があり、幅広い分野の履修が可能
- ・副免がとれる
- ・教員養成基礎講座により学校外の人の話を聞くことができる
- ・毎年様々な現場での実習がある
- ・熱心な先生が多い
- ・出席をとり補講も行われる
- ・視聴覚器が充実している

- ・免許法と卒業要件の説明がしっかりなされていない
- ・必修履修科目に制限がかけられている
- ・不定期、隔年はやめて欲しい
- ・教育実習の意義ばかりで具体的なアドバイスが少ない
- ・シラバスの配布が遅い
- ・板書が汚い
- ・違う授業なのに同じ内容を教える先生がいる
- ・マイクを使わなかったり、スクリーンを使うのに時間がかかったりもっていない
- ・実践的なものが少ない
- ・学生が授業に参加し、意見交換を行えるような講義が少ない

5. シンポジウム参加学生の意見

シンポジウム参加者から、『環境』については、「科室等の学生が集まれる部屋を充実してほしい」、「空いている教室を開放してほしい」、「パソコンを専修ごとにおいてほしい」、「トイレに荷物かけをつけてほしい」といった意見が出た。『カリキュラム・講義』については、「教育課程が分かりにくい」、「集中講義のスケジュールを調整してほしい」、「履修科目の制限をなくしてほしい」、「単位取得に際し、ひいきがあるのではないかとと思われる」、「講義時間をしっかりとしてほしい」、「シラバスのあり方を見直してほしい」といった意見が出された。教育課程の分かりにくさをあげた者が多く、改善に向けては、「教育課程を正しく理解するための講習を開く」、「単位取得の一覧表を作成する」といった意見がみられた。教育学部では、卒業要件とあわせて免許要件があるために、どの単位を取得しなければいけないのか学生には分かりにくい。その対応として、教育学部では、教務委員が事前に単位取得のための説明会を実施している。また、成績評価に関しても、評価に不服がある場合は、不服申し立ての制度というものを設けているとの説明がなされた。しかし、それらを知っていると答えた学生は少なく、今後、学生への周知が課題であることも分かった。

6. 学生実行委員会委員の感想

今回のシンポジウムでは、学生による実行委員会を立ち上げたが、シンポジウムを終えて学生実行委員会からは、以下のような感想が得られた。

上田涼一さん

今回のシンポジウムのように直接思っていることを伝え、その場で返答をもらえる機会は今までなかったのでとても良かった。会の進行をして、皆同じことを考えているんだと強く感じました。

川崎健太さん

改善委員をしていて、「教育学部をなんとかしたい」という学生の気持ちが多いことに驚かされました。改善委員として、素晴らしい大学作りに向けての一步のお手伝いできたことを誇りに思います。私たちが動き出せば、大学は変わります!!

池田直也さん

たくさん話し合い、いろいろ準備をしてきましたが、いざ本番になるとやはり不安でしょうがな

かったです。しかし、本番では、ほくたちシンポジウムのメンバーだけでなく参加した学生や教授の方から多くの意見などがでて、盛り上がり成功したと思います。こういう会に参加することが今までなかったのですが、参加できてよかったと強く感じています。みんな、何かしらよくしたいという気持ちはもっているはずなので、このようなシンポジウムに参加してほしいです。楽しかった。

瀬戸川将さん

今回、シンポジウムに参加して様々な先生方とお話できてとても楽しかったです。これからの大学の環境をますます良くして行くためにも、教員と学生の対話の機会を持つことは重要だと思いました。今後もこのような機会が残って行くことを願っています。協力してくださった先生方や参加してくれた学生に感謝したいと思います。

加覧香織さん

シンポジウムへ向けての話し合いや各係の仕事など大変なこともありましたが、みんなで協力して一つの会を作り上げることができて、本当によかったと思います。

片野田優子さん

大学に対して自分の思っていることを率直に言える場です。思い切ってぶつけてみたら、きちんとした対応がありました！参加してよかったと思います。

梶千明さん

自分が日頃何気なく過ごしている教育学部についてこういった形で考えを深めることができたのは大変よい機会になったと思います。こういったシンポジウムによってもっとよりよい教育学部を目指していけたらよいと思います。

北浦葉二さん

活動を通して学部生の意見を聞いた上での、本番は時間が足りないぐらいで、もっとたくさん議論を深めたかった。これから次の世代へ、さらにその次へと、教育学部をより良いものへと導き、教師になる素晴らしい環境になるのが楽しみです。

崔京花さん

シンポジウムに参加する前までは、教育学部の設備などに改善すべきものってあるのかなあ〜と思っていたんですが参加してみんなと話し合っ

行くなかで意外と大学に設備が整っていないところが見えましたし、先生たちが学生たちに求めている勉強への意識も分かってきましたのでいろんな問題点が見えてきたからとてもよかったと思います。

新馬場有希さん

私は委員として活動する中で自分が教育学部生だということを改めて実感し、さらに自分たちの学生生活を自分たちで改善していくこと、受け身ではなく自ら積極的に情報を収集していくことの大切さを学ぶことができました。そして、シンポジウムが成功したときの喜びはとても大きなものでした。この貴重な経験を活かし、これから夢を叶えていく糧にしたいと思います。ご指導くださった先生方、共に活動できた仲間感謝します。

7. まとめと今後の課題及び対応について

シンポジウム開催前、実行委員会広報係がポスターの掲示、ビラの配布による広報活動を行なった。参加学生と教員との間で意見交換が行われ、検討すべき課題も出てきた。実行委員会の学生からもシンポジウムに好意的な感想が寄せられた。以上のことから、教育学部の充実に向けて、学生が主体的に発言し、話し合える機会となる当シンポジウムは学生、教員両者にとって重要であり、今後継続していくことが必要であることが分かった。

学生の意見には大学の制度に関する知識不足が原因であると考えられるものがある。そのため、学生に対して分かりやすく、得やすい情報の提供の方法を検討することが課題としてあげられる。又、シンポジウムで出された学生の意見に関しては、各委員会等において改善に向けて、検討するよう教育改善委員会から教授会を通じて要請を行った。

最後にシンポジウムの様子を写した写真の一部を掲載しておく。

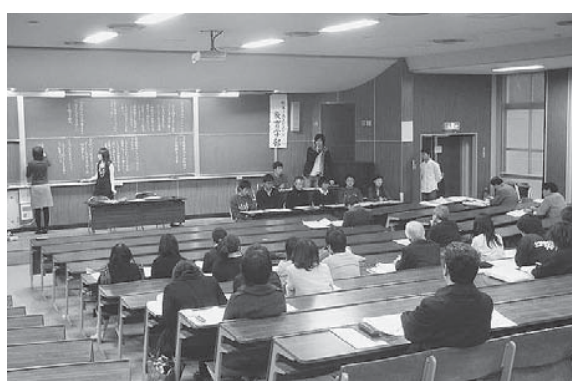




河原教育学部長の挨拶



実行委員からの報告①



実行委員からの報告②



実行委員からの報告③



シンポジウムの様子①



シンポジウムの様子②



シンポジウムの様子③

理学部FD活動報告

今年、昨年から本格的に軌道に乗り始めた理学部のFD活動に関してその順調な継続とFDのための有効データの蓄積をめざした。授業公開においては1度の授業公開(12月)では日程的な都合で参加できない人も年2回ならば参加できるのではということで6月の公開も加え授業公開を年2回おこなうこととした。そして、次の4つのイベントを実行した。

1. 学生による前期授業アンケート
2. 学生による後期授業アンケート
3. 前期授業公開(6月)
4. 後期授業公開(12月)

学生による授業アンケート、および授業公開の概要を報告する。詳細は理学部の平成19年度FD委員会報告書をご覧ください。

学生による授業アンケート

昨年度後期から授業時間中にアンケート用紙を配布して原則記名方式のアンケートを書いてもらい、学生の代表にその場で集めて学生係に持ってもらうような方式がとられている。アンケート結果の経年変化を分析するために数年間は昨年度用いたアンケートと同じ設問をおこなうことが昨年度の理学部のFD委員会で決定しているため昨年度と同じ設問のアンケートを用いた。今年度はまだ2年目であるので経年による特徴的变化は見ることは難しいかも知れないが経年的変化を見るデータの蓄積をおこなった。前期は90科目、後期は94科目でアンケートが実施されアン

ケートを実施した受講者数あたりの回収率は前期52%、後期59.8%、前後期平均で55.5%であった。前期のアンケートの結果を学科別にまとめたものが表1である。質問には1～5の数字で答えることとし、11、12番以外の質問の評価は5の回答が最も望ましく、1が最も望ましくない。そこで表1-5の評価点とは、未記載のゼロを個数に入れることなく、5は5点、4は4点、3は3点、2は2点、1は1点として加重平均したものである。ただし、11、12番の質問への回答は3が最もよいので、3であった場合に5点とし、4と2を3点、5と1を2点として集計した。表1による19年前期のデータ、表2による19年後期のデータ、18年前後期のデータ(平成19年度FD委員会報告書参照)を設問ごとに経時的に見ると、昨年、報告書におい数理情報科学科に関して指摘されていた「シラバスを読んでいない」という指摘や、物理科学科で指摘されていた「時間どおりに授業がおこなわれていない」という指摘が徐々に改善されているのが見て取れる。データの蓄積がまだ2年目であるのでまだ多くは判らないが、前期科目におけるシラバス関係、学生自己評価、授業内容、およびすべての設問の平均の18年度と19年度の比を示した表3と後期授業科目についての表4を作成すると、この2つの表により数量的には多くの部分で(少なくとも設問全体の平均においては)授業は明らかに改善されているとみることができ、先生方の努力が全体として形になって現れたとも評価できる。

表1 平成19年度前期アンケート結果の概要(評価点大きいほどよく、5が最大)

番号	質問内容	数理	物理	生化	地環	学部
1	この授業のシラバスを読みましたか?	2.2	2.6	2.8	2.8	2.7
2	この授業の出席状況を教えてください。	3.9	4.1	4.2	4.3	4.2
3	授業の予習・復習をし、宿題などにも取り組みましたか?	3.9	3.8	3.8	3.9	3.9
4	授業中、真剣に学ぼうと心がけましたか?	3.8	3.6	3.9	3.9	3.9
5	この授業に対しては、授業時間以外に毎週どれほどの自習時間をとりましたか?	2.1	2.1	2.2	1.9	2.1
6	シラバスの内容はわかりやすかったですか?	3.4	3.4	3.5	3.6	3.5

7	授業はシラバスの目的・内容にそって実施されましたか？	3.7	3.7	3.7	3.8	3.7
8	授業方法は興味をわかせる理解を促す上で有用でしたか？	3.6	3.5	3.6	3.8	3.6
9	授業から新しい関心が生まれ、関連分野の勉強をしたくなりましたか？	3.4	3.6	3.6	3.7	3.6
10	この授業は、学力（知識・技術・思考能力）の増大に役立ちましたか？	3.8	3.7	3.8	3.9	3.8
11	授業内容のレベルはいかがでしたか？	3.8	3.8	4.2	4.2	4.0
12	授業内容の分量はいかがでしたか？	4.1	4.1	4.1	4.2	4.1
13	教員の話し方は聞き取りやすく、説明もわかりやすいと思われましたか？	3.7	3.3	3.6	3.8	3.6
14	授業は時間通りに行われましたか？	4.1	3.9	4.0	4.1	4.0
	質問1, 6, 7（シラバス関係）の平均	3.10	3.24	3.33	3.42	3.31
	質問2 - 5（学生自己評価）の平均	3.43	3.40	3.54	3.50	3.48
	質問8 - 14（授業内容）の平均	3.90	3.81	3.94	4.10	3.95
	全体の平均	3.59	3.57	3.70	3.76	3.68

表2 平成19年度後期アンケート結果の概要（評価点大きいほどよく、5が最大）

番号	質問内容	数理	物理	生化	地環	学部
1	この授業のシラバスを読みましたか？	2.3	2.6	2.9	3.2	2.8
2	この授業の出席状況を教えてください。	3.7	3.9	4.2	4.0	4.0
3	授業の予習・復習をし、宿題などにも取り組みましたか？	3.3	3.3	3.3	3.5	3.4
4	授業中、真剣に学ぼうと心がけましたか？	3.6	3.7	4.0	4.0	3.8
5	この授業に対しては、授業時間以外に毎週どれほどの自習時間をとりましたか？	2.0	2.0	1.9	2.0	2.0
6	シラバスの内容はわかりやすかったですか？	3.43	3.5	3.6	3.8	3.6
7	授業はシラバスの目的・内容にそって実施されましたか？	3.6	3.7	3.8	4.0	3.8
8	授業方法は興味をわかせる理解を促す上で有用でしたか？	3.4	3.6	3.8	3.9	3.6
9	授業から新しい関心が生まれ、関連分野の勉強をしたくなりましたか？	3.3	3.5	3.7	3.7	3.6
10	この授業は、学力（知識・技術・思考能力）の増大に役立ちましたか？	3.5	3.8	3.9	4.0	3.8
11	授業内容のレベルはいかがでしたか？	4.3	4.3	4.6	4.5	4.4
12	授業内容の分量はいかがでしたか？	4.5	4.6	4.6	4.6	4.6
13	教員の話し方は聞き取りやすく、説明もわかりやすいと思われましたか？	3.5	3.4	3.8	4.0	3.7
14	授業は時間通りに行われましたか？	3.9	3.9	4.1	4.2	4.0
	質問1, 6, 7（シラバス関係）の平均	3.06	3.27	3.44	3.66	3.39
	質問2 - 5（学生自己評価）の平均	3.15	3.21	3.33	3.38	3.28
	質問8 - 14（授業内容）の平均	3.77	3.88	4.05	4.13	3.97
	全体の平均	3.44	3.56	3.71	3.81	3.65

これは、個々の科目の授業アンケートの結果と全体の平均点をまとめた資料を各教員に配布し、それを見て各教員個々にアンケート結果を分析してもらい、今後の対応を考え提出してもらうとともに、学科単位で分析をおこない今後の対応を提出するというシステムが少しは効果を上げているのかも知れない。しかし、報告書の提出率は50%前後を推移しているのも事実である。ここで、各教員のアンケートの分析と授業改善の取り組みの例を示す。

学生自身の自己評価に関して：

- (1) [分析] レポート課題をほぼ毎回与えたことが功を奏し、出席率、自習時間はますますであった。[改善策] 自習時間を増やすには、レポートを与えることがかなり効果的であることが、確認できたのが収穫である。今後もこの方法を続けていきたい。
- (2) [分析] 予習・復習および課外の自習時間が少ない傾向が見られた。[改善策] 宿題を課すなどして、自宅での学習時間を増やすように努めたい。また講義の配布資料を可能な限りウェブ上にアップして、復習が行い易い体制を整えたい。
- (3) [分析] 科目平均値が2.87で、学科平均・学部平均を下回っている。授業では毎回レポート課題を課したので予習・復習を実際には行っているはずだが、Q3が「どちらともいえない」が多いのは、課題に取り組んだけど出来具合には満足していない、ということだと思われる。また、学ぼうという意欲も平均以下である。[改善策] 受講生が達成感を持てるような課題レポートの内容に組直す。より平易なレベルの課題を組み入れることが必要。また、導入時にこの授業が広く役に立つことをしっかりと伝える必要がある。専門研究において波動の理解は不可欠であることを、天体観測などの実例をもって示すよう改善する。
- (4) [分析] 欠席が多かったのですが、思った以上に学生は意欲的だったことがわかりました。予習・復習もそれなりにやっていることがわかりました。[改善策] 授業内容や授業の進め方にはかなり気を配ったのですが、その効果はあったようです。次回は、自習しやすいように

小まめな練習問題を出すように工夫してみようと思います。

授業に対する評価に関して：

- (1) [分析] スコアは学部平均に比べればかなり低い、「4」「5」の評価を与えた学生が半数以上いて、昨年より向上している。学生の興味を引くことを第一義に、面白いこと・変わったことを次々紹介する授業もあってよいが、本授業のように自らの手を動かし苦勞していろいろな作業をすることを通して自然界の面白さを学ぶ授業の存在意義も、一定の支持を得ていると考えられる。[改善策] 本学科の教育目標を考えれば、自ら苦勞して考えさせるという本授業の基本方針は維持したい。そのうえで、学生とのコミュニケーションを深めることにより授業を活性化するための方策として、考えられる具体案を試してみたい。以前と比べてレポートの回数を減らしたので、「質問票」を毎回集めるような方法で、学生の疑問解決にきめ細かく応ずる方法を検討している。
- (2) [分析] 授業スピードが速すぎる、内容が高度すぎる、多すぎるという評価が多い。[改善策] 昨年度と同内容の授業だったが、昨年と比べて不満が大きい。そのわりに、小テスト、期末テストの成績は昨年より向上している。授業内容を絞り込み、進度を遅くすることを検討したい。
- (3) [分析] 内容がやや難しいという意見もあったが、そのような学生も、毎回の演習の時間で、なんとかついてきていた感じであった。興味をわかせる内容と答えた学生も半数以上いた。[改善策] 内容については、難しい部分を削る必要があるかもしれないが、具体例の紹介など、学生が興味をもてそうな内容については、そのまま残し、説明を工夫する。

今年度はまだ2年間の蓄積のため、それほど多くにことがわかったわけではないが、今後経時的データを蓄積することにより学生アンケートによる授業改善のための新しい知見が得られることが期待できる。

表3 前期アンケートにおける比率（19年度の値/18年度の値）

	数理	物理	生化	地環	学部
質問1, 6, 7（シラバス関係）の平均	1.03	1.03	1.05	1.01	1.03
質問2-5（学生自己評価）の平均	1.09	1.06	1.07	1.09	1.08
質問8-14（授業内容）の平均	0.99	0.99	1.01	0.99	1.00
全体の平均	1.03	1.02	1.03	1.01	1.03

表4 後期アンケートにおける比率（19年度の値/18年度の値）

	数理	物理	生化	地環	学部
質問1, 6, 7（シラバス関係）の平均	1.06	1.02	1.04	1.07	1.07
質問2-5（学生自己評価）の平均	1.00	1.02	1.02	1.00	1.00
質問8-14（授業内容）の平均	0.98	1.02	1.02	1.02	1.01
全体の平均	1.00	1.02	1.02	1.02	1.03

理学部授業公開報告

平成18年度の授業公開は年1度であったが、今年度からは前後期1回ずつ年2回実施することになった。前期は平成19年6月4日（月）から6月15日（金）の2週間（ただし、はしかによる臨時休講等により1科目（プログラミング応用演習）のみが進度と日程の都合がつかず6月21日（木）におこなわれた。）、後期は平成19年12月10日（月）から12月21日（金）の2週間に渡って実施された。以下の実施要領に従っておこなわれた。

1. 教員全員が授業公開または授業参観のいずれかに関わることを原則とする。
2. 公開される授業は学科、講座のバランスを考える。
（非公開の学科、講座がないようにする。）
3. 参観した教員は、講義を担当した教員にレポートを提出し、講義を行った教員はその意見を参考にしながら、学生係にレポートを提出する。
（参観した教員用のレポート様式と授業担当

教員用レポート様式はそれぞれ理学部の平成19年度FD委員会報告書を参照されたい。）

授業公開結果

表5、表6に前期、後期それぞれの概要を示した。理学部内へはメールによるアナウンス。また全学に向けては理学部のホームページにも載せ、メールにより全学へのアナウンスもおこなって参観者を募った。前期は4学科合わせて15の授業が公開対象となり、そのうち4つの講義に参観者があった。延べ10名の教員が参観した。後期は18の授業が公開対象となり、そのうち4つの講義に参加者があり、延べ7名の教員が参観をおこなった。前後期合計では33の公開に対して9つの講義に参加者があり延べ19名の参加者があった。平成18年度は年一度の公開にもかかわらず、公開講義数31、参加者のあった講義数が18、延参観者数が37であった。公開数は増加したが、参加者が減少してしまったことになる。

表5 前期授業公開の数 参観者数

学科	公開講義数	参観者のあった講義数	延参観者数
数理情報	5	3	4
物理科学	3	1	6
生命科学	3	0	0
地球環境	4	1	2
合計	15	5	12

表6 後期授業公開の数 参観者数

学科	公開講義数	参観者のあった講義数	延参観者数
数理情報	6	1	1
物理科学	3	1	3
生命科学	3	2	3
地球環境	6	0	0
合計	18	4	7

平成18年同様参観者からは、参観者報告書を提出してもらい、授業担当者はその意見を参考にして授業公開報告書を学生係に提出することにした。参観者からのコメント例とそれに対する担当教員の反応例を示す。

(1)

「コメント」 出席回数でチェックを入れている所は非常に良いと思います。

「反応」 講義している事柄の内容について理解してもらいたいために、毎回前回の授業の復習をし、講義ではていねいにわかりやすく説明している。それでも講義についていけない学生もいるが調べてみると欠席の多い学生のようなので、そこで毎回学生の顔を見ながら出席をとり、前回欠席した学生には注意している。

(2)

「コメント」 ほとんど真剣に聞いていたが中に後ろの方で携帯で遊んでいたり寝ている者がいた。

「反応」 特に教卓から離れている学生の受講態度に注意を払いたい。

(3)

「コメント」 教室の問題だが、プロジェクターの画面が後ろからはみにくかった。

「反応」 確かにスクリーンが暗いので基盤センターに要望したいと思います。

(4)

「コメント」「話し方や講義の進め方」について、「やや早め」。

「反応」 これについては、学生にも常に言われていることなので、注意を心がける。

(5)

「コメント」 遅刻者が多い。

「反応」 今回は遅刻者が7名と普段より多かった（通常は多くても3名）こともあったが、遅

刻者を減らす対策が必要である。現在は、遅刻2回で1回の欠席に相当させてはいるが、成績評価の停止までは行っていない（欠席3回以上は評価しないことをシラバスに明示）。

(6)

「コメント」 学生にとって難しい講義だと思いが、受講生が結構多いのは何故？

「反応」 自分にもよくわかりませんが、それほど難しい内容をやっている意識はありません。それどころか他の数学よりもよほど優しい（証明は定義に戻ってチェックするか、数学的帰納法しか出てこない、計算は一切無し）と思っています。

(7)

「コメント」 板書やスライドの説明に気をとられて、なかなか学生の方を向いていない

そのため、学生が講義に参加するという意識が薄れる。宿題を毎回出しているものの、出席をとらないので、この点も考えた方がよい。

「反応」 この講義は今年初めて担当するので、試験の結果、どの程度理解できているかみてから、来年度の講義の進め方を検討しようと考えています。

(8)

「コメント」 教科書を使っているので、板書は簡潔にして、話の流れを強調した説明にしたほうがよい。語尾が聞き取りにくいときがあり、最後をもう少し明確に述べたほうがよい。

「反応」 参観者からのコメントもありましたが、このような物理の基礎科目は数式も多く、学生にとってはかなり敷居の高い部分があり、特効薬はないと思います。学生にもそんなに簡単に分かるものではなく、理解するためには努力が必要であることを分かってもらう必要がありますが、これもなかなか難しい話です。教科書の使用の仕方や、後ろで寝ている学生など、

難しい問題です。

(1) から (5) の例の場合は参観者のコメントに対して担当教員が改善策もしくは改善した結果を示している。(6) については参観者がいまままで考えなかったような新しい事実を発見したと考えられる。これは授業参観は参観者にとっても有用なイベントでありうる一つの例だと思われる。(7), (8) は授業改良はトライアンドエラーを繰り返し長い年月を掛けておこなわれるものでありそのための一助として授業参観がおこなわれている例だと思われる。

授業公開に関して改善すべき点

授業公開の時期が今年から年2回となり報告書を見る限り授業改善のために有効に活用されていると考えることができる。ところが、公開数は増加しているが、わざわざ期間を年2回にしたにもかかわらず参観数が逆に減少している。全員が公開か参観のいずれかに参加するという取り決めも守られているとはいえない。各学科のFD委員の積極的な参加の呼びかけはもちろんのこと、公開の時期は1回にしても参観に関しては何らかの別の方法で増やすことを考えなくてはならない。



医学部 FD 活動報告

平成19年度の医学部 FD 委員会の活動について、医学科部会と保健学科部会に分けて以下に報告する。

平成19年度 医学部 FD 委員会医学科部会活動報告

平成19年度の医学部 FD 委員会医学科部会の活動としては、医学部 FD 委員会保健学科部会主催の「FD 研修会（平成19年9月18日）」ならびに、医歯学総合研究科 FD 委員会主催の「FD 講演会（平成20年3月7日）」を共催した。双方の研修会ならびに講演会の詳細な報告は、医学部 FD 委員会保健学科部会と医歯学総合研究科 FD 委員会の活動報告に記載されている。

また、学生による授業評価を実施した。以下にその概略を述べる。

鹿児島大学医学部医学科における学生による授業評価

（文責 医歯学教育計画室 今中 啓之）

背景

医学教育では試験などの客観的評価など様々な評価が行われているが、近年教える側に対して学生からの教育評価が重視されており、学生の授業評価を実際の教育に反映させることは重要である。

鹿児島大学医学部では医学教育目標を達成するため、基礎臨床統合カリキュラムの編成、チュートリアル授業の導入、診療参加型臨床実習の導入などさまざまな取組みを行っているが、これらの教育が学生にどのように受け入れられているか具体的には検討していない。

目的

現在実施している医学部学生教育の問題点を学生の授業評価から検討する。

対象と方法

1. カリキュラムの評価

平成19年度前期に実施した基礎臨床統合カリキュラム3年生対象4系、4年生対象4系8系についてカリキュラム終了時に学生にアンケート配布、回答を集計した。このうち感染系は基礎系を主とした微生物分野、免疫分野と、臨床系が授業を担当する臨床分野のそれぞれでアンケートを行った。

2. 臨床実習の評価

6年次選択実習の離島医療実習について学生にアンケートを web で配布、入力させた。未入力の場合メールで催促し、回答を集計した。

3. 講義評価

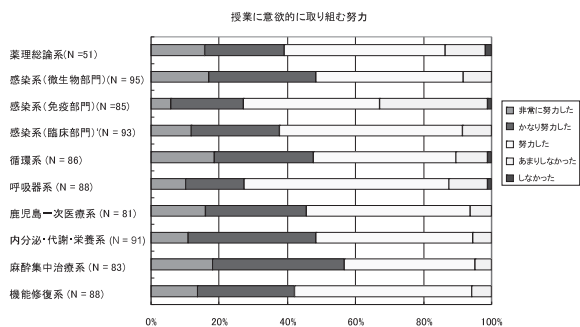
平成18年度3年生対象神経系で行った講義評価のうち基礎系、内科系、外科系3名の教員に対する評価結果を検討した。

4. チュートリアルの評価（日本医学教育学会での報告参照）

結果

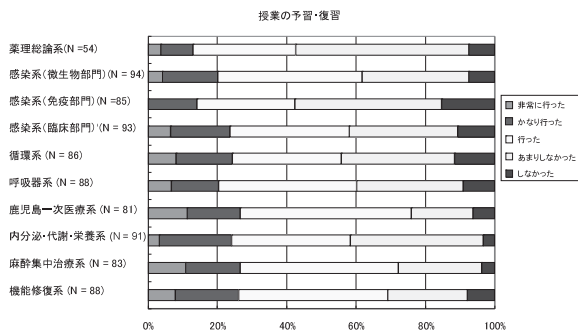
I. カリキュラム評価

1. 学生の自己評価



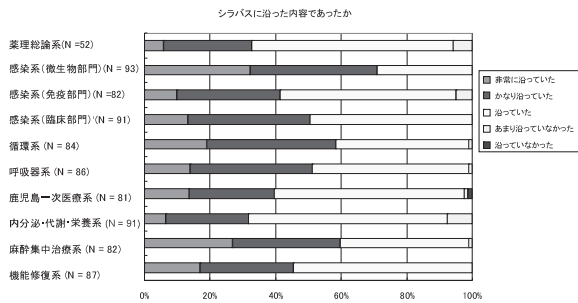
「授業に意欲的に取り組む努力をしたか」は、ほとんどの系で、非常に努力した、かなり努力した、努力した、と答える学生が大半であるが、「非常に」、「かなり」の割合が低い系（呼吸器系、感染系免疫部門）がみられた。感染系免疫部門は「あまり努力しなかった」の割合が多い。

「授業の予習または復習を行ったか」では、「あまり行わなかった」、「行わなかった」の割合が40～60%におよぶ系が多く、特に基礎的な内容を扱

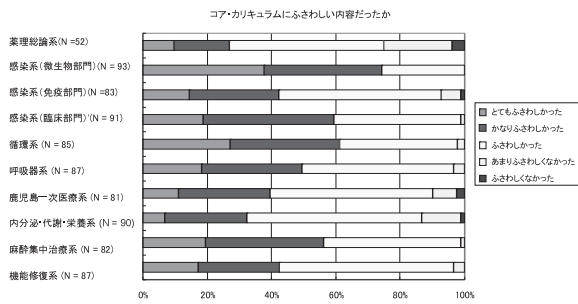


う分野（薬理総論系、感染系免疫部門など）が予習、復習を行わない学生が多い。

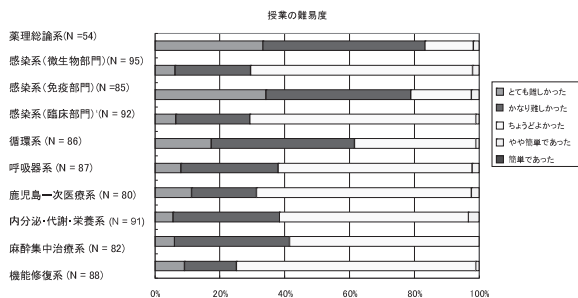
2. 授業内容



「授業はシラバスに沿った内容であったか」を聞いたところ、すべての系で肯定的な感想であった。



コア・カリキュラムにふさわしい内容であったかについては、薬理総論系、内分泌・代謝系で否定的な意見のある学生が他の系より多いが、全体的には肯定的である。



授業の難易度については、「とても難しかった」、「難しかった」と答えた学生が、薬理総論系、感染系免疫部門、循環系で多く、系により難易度に差がみられた。

II. 6年生離島医療実習

1. 行動目標の達成度

07年6年生離島医療実習の行動目標の理解度

(%)

	よく理解できた	理解できた	ある程度理解できた	あまり理解できなかった	理解できなかった	回答なし
離島医療現場における診療体制	47.2	32.6	16.9	1.1	0.0	2.2
離島医療現場における救急搬送システム	22.5	33.7	30.3	10.1	1.1	2.2
離島医療現場に必要なプライマリ・ケア	49.4	32.6	12.4	3.4	0.0	2.2
離島医療現場における遠隔医療	28.1	22.5	28.1	15.7	3.4	2.2
離島医療現場における保健・福祉活動	38.0	28.1	22.5	9.0	2.2	2.2
離島医療現場を通じて医療の原点に立ち返り医療人としてのあり方	52.8	28.2	14.6	1.1	0.0	2.2

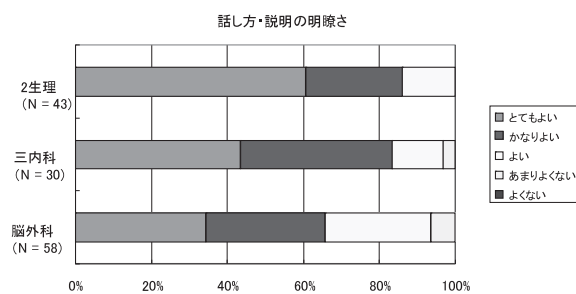
N=98(必須85名、希望13名)

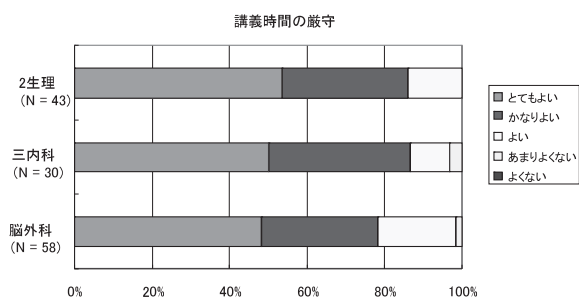
「離島医療現場における診療体制」、「救急搬送システム」、「離島医療現場でのプライマリ・ケア」、「遠隔医療」、「保健・福祉活動」、「医療人のあり方」について理解度の程度を聞いた。おおむね理解できているが、「救急搬送システム」、「遠隔医療」で理解度が低い傾向がみられた。

2. 実習運営について

他の臨床実習と異なり、離島医療実習は実習先の選択・割り当て、交通、宿泊などが必須であり、実習先および大学事務系などとの連携が必要な実習である。そこで実習先での教育指導に関する対応、事前の情報提供、大学側事務系の対応、交通、実習先での生活、経費などについてアンケートした。おおむね良好な評価であったが、交通、実習先での生活で「支障がある」と答えた学生がそれぞれ38.2%、25.9%いた。経費について「負担になる」と答えた学生が57.3%であった。

III. 講義評価





媒体のアンケート以上に有用な方法であり、導入の是非を検討したい。

(文責：前医学部FD委員長 米澤 傑)

話し方・説明の明瞭さ、講義時間の厳守、講師の熱意について見てみると、特に不満な点はないが、講師によって評価の程度にばらつきが見られる。

結果のまとめ

学生の自己評価では、系により学生の学習に取り組む意欲に差がみられ、薬理総論系、感染症免疫部門など基礎的な内容の授業に対して学生の意欲・関心が低い傾向がみられた。授業の予習・復習も同様に基礎的な内容が多い授業で低いため、基礎的な分野をいかに学生に興味を持たせる授業にするかが課題と思われる。

授業では、シラバス、コア・カリキュラムの内容を念頭にカリキュラムを企画するようコーディネータに依頼しているが、必ずしも系によっては学生に意図が理解されていない。このことは予習・復習を行う際に学生を混乱させる可能性があり、教育担当者が注意すべき点であろう。

臨床実習の学生評価は今回、離島医療実習のみであったが、行動目標の理解度に差が見られる項目があり、今後の実習内容を検討する資料となった。また、この実習は多方面の協力が運営に必要であり、これらの問題点を確認するためにも学生評価は有用である。

講義それぞれに対する評価では、教員により講義担当内容が専門性と異なることもあり、講義内容自体ではなく、講義への取り組み・スタイルについての評価を検討した。おおむね満足できる評価であるが、評価の程度では教員によって差があり、スキルアップを図る必要がある教員も存在するものと考えられる。ただ、講義の評価はデータ化に多大な労力を要するため、すべての講義に学生評価を導入するには問題があると思われる。

また、離島医療実習授業評価はwebを通じてアンケートしたが、高い回収率が得られており紙



平成19年度 医学部FD委員会保健学科部 会活動報告

平成19年度の医学部FD委員会保健学科部会の活動として、①FD研修会（医歯学総合研究科FD委員会、保健学研究科FD委員会、医学部FD委員会医学科部会との共催）、②学生による授業評価、③教員による授業公開・授業参観、④FD活動を契機とした授業方法・内容改善についてのアンケート調査を実施した。それぞれの活動について以下に概略を述べる。

1. FD研修会

平成19年9月18日、名古屋大学大学院医学系研究科の山内豊明教授を講師として迎え、「フィジカルアセスメント実践・教育技術の向上のために」をテーマに講義、演習を行った。この研修会の特徴は、大学教員に加え学生の臨床教育を担当する大学病院の臨床指導者を研修対象としたことである。

演習を行う都合で定員を40名としたが、それを上回る65名が参加した。参加者の内訳は、保健学科教員22名、医歯学総合研究科教員2名、大学病院臨床指導者41名であった。研修会終了後にアンケートを実施し、46名から回答が得られた。その結果は以下のように良好なものであった。

1) 企画に対する回答結果

(1) プログラムの内容は

	人数	%
大変良い	23	50.0
良い	18	39.1
普通	3	6.5
改善すべき	1	2.2
回答なし	1	2.2
合計	46	100.0

(2) プログラムの開催時間は

	人数	%
大変良い	11	23.9
良い	29	63.0
普通	6	13.0
合計	46	100.0

(3) プログラムの開催場所は

	人数	%
大変良い	12	26.1
良い	30	65.2
普通	4	8.7
合計	46	100.0

(4) プログラムの広報の方法は

	人数	%
大変良い	8	17.4
良い	17	37.0
普通	13	28.3
改善すべき	7	15.2
回答なし	1	2.2
合計	46	100.0

2) 研修会内容の今後の生かし方について、自由記載による回答結果（抜粋）

- ・呼吸音、心音聴取等、実習指導に生かしていきたい。
- ・実際の場面で肺音、心音を正確な位置で聴取できるようにし、正確な情報をもってアセスメントできるようにしたい。
- ・学生への指導に活用したい。
- ・日々の看護記録の中で、「肺雑音あり」「腸蠕動音なし」等と誤った（曖昧な）記録をしていたため、病棟のほかのスタッフへ情報提供し学びを共有したい。
- ・学生に伝える際の伝え方、看護のアセスメントに必要なフィジカルアセスメントの視点の伝え方など勉強になった。
- ・「異常なし」＝「正常」ではないというのが印象的だった。学生指導するにあたり、今ある情報が何を示しているのか、アセスメントする大切さを改めて確認した。学生の「何もありません」という言葉に対して、そうではないということは今後伝えられる。
- ・学生に看護技術を伝えようとするとき、つい技術のハウツーを伝えてしまいがちだった。限られた時間であれもこれも伝えなければという焦りもある。しかし、本日の研修では、その技術にいたる考え方（情報認識、整理、判断、共有）を丁寧に伝えないと、学生は、何が大事で、その他の情報がきた時、どう判断してよいか分か

らないことを再認識できた。こちらが力んで多くを伝えるのではなく、伝わるようにポイントを押さえて教育することに生かしたい。

- ・学生への説明の仕方の参考。
- ・技術教育だけでなく、看護過程や、実習指導など、多くの教育場面で、思考を鍛えることの難しさは感じていたが、山内先生の講義を基に、学生の理解度を確認しながら、「なぜ学生には見えないのか?」「どうしたら見えるようになるのか?」ということを丁寧に解きほぐし共有していくことの大切さを学んだ。フィジカルアセスメント教育以上の「教育」について学ぶことができた。
- ・学生が得た情報を言語化し、伝わる情報として記録できるように指導していきたい。そのためには、自分も曖昧な専門用語ではいけないとあらためて感じた。ひとつの情報からいろいろな症状がアセスメントできるので、正しく測定できることが大切だと感じた。

2. 学生による授業評価

実習、演習を除く総ての授業科目を対象に学生による授業評価を実施した。実際に授業評価が行われた科目は、前期57科目（実施率89.1%）、後期62科目（実施率84.9%）であった。評価方法は、アンケート調査であり、学生自身の自己評価として「出席状況」「意欲的な取り組み」「予習・復習」、授業の内容として「内容のふさわしさ」「明確なシラバスの内容」「授業内容とシラバスの整合」「適切な難易度」「他学生への履修の勧め」「自分にとっての価値」、さらに教員の授業への取り組みとして「わかりやすい説明」「時間どおりの開講」「授業に対する熱意」「質問や相談への対応」の合計13の質問項目を設定し、それぞれに対して1点から5点の5段階（点が高いほど評価が良い）で回答してもらった。回収したアンケートは、当該科目と全科目の質問項目ごとの平均点を示した資料と共に担当教員にフィードバックした。平成19年度の評価結果（全科目の質問項目ごとの平均点）を平成17年度および平成18年度の結果と共に下の表に示した。評価を開始した17年度に比べ平成18年度、平成19年度は評価が高くなり、「予習・復習」を除く総ての質問項目の平均点が4点を超えている。

学生による授業評価の結果（全科目の質問項目ごとの平均点）

質問項目	平成17年度	平成18年度	平成19年度
出席状況	4.62	4.71	4.62
意欲的な取り組み	3.91	4.05	4.00
予習・復習	2.55	2.89	2.97
内容のふさわしさ	4.31	4.38	4.36
明確なシラバスの内容	4.02	4.15	4.11
授業内容とシラバスの整合	4.03	4.16	4.13
適切な難易度	4.31	4.36	4.34
他学生への履修の勧め	3.90	3.97	4.20
自分にとっての価値	項目の設定なし	4.20	4.22
わかりやすい説明	4.00	4.10	4.14
時間どおりの開講	4.19	4.30	4.26
授業に対する熱意	4.19	4.24	4.25
質問や相談への対応	3.92	4.05	4.05

各質問項目に対して1点から5点の5段階で評価

3. 教員による授業公開・授業参観

教員による授業公開・授業参観を前期においては7月3日から同月24日まで、後期においては11月1日から同月30日までの期間に実施した。前期には、延べ56科目が公開され、延べ37人が参観し、後期には、延べ41科目が公開され、延べ21人が参観した。参観後は、授業参観報告書を参観した教員に提出してもらい、授業公開した担当教員にフィードバックした。

4. FD活動を契機とした教育方法・内容改善についてのアンケート調査

研修会、学生による授業評価、教員による授業公開・授業参観などのFD活動を契機として教育方法・内容等で改善された点を明らかにするためのアンケートを平成20年3月に実施した。報告された改善点の例を以下に示す。なお、改善点の内容は一部簡略化されたものもある。これらの内容から平成19年度に実施した一連のFD活動は、教育方法・内容の改善に関して大きな役割を果たしたと考えられる。

- ・他教員の授業を参観し、従来から配布している講義レジュメを改定した。具体的には、図表を多用し、より視覚的に理解しやすいように配慮した。
- ・従来からいくつかの講義ではレジュメを使った講義の後で、パワーポイントを用いて講義内容

- に関する画像の提示と、講義内容の再確認・復習を行っていたが、この形式のプレゼンテーションの回数を増やし、アニメーションを多用するなどして、より理解し易いプレゼンテーションを試みた。
- ・例えば、小児保健の分野では少子化の問題、小児疾病に関する講義では生体肝移植や遺伝子治療を取り上げ、最新のデータを示すことで学生の学習意欲を高めた。
 - ・パワーポイントの画面に描写する内容を厳選し、学生が画面を写すことに集中しすぎず、説明を落ち着いて聞くことができるようにした。理解を容易にするための画面の場合は、写さなくてもよいことを伝えた。画面の内容を写すことが必要な場合は、その時間をとり、学生の筆記状況に合わせて画面を次の画面へと変換した。
 - ・学生は臨床経験がないことからケアの場を想像することが困難であるため、実際の体験談をさらに増やし、また、実習での学生のケア状況などを説明に加え、学生の理解を容易にするだけでなく、興味関心が持てるよう工夫した。
 - ・新聞記事などの読みやすく、最新の情報を授業内で読んでもらうなどして、教員が話し続けることを避けるようにした。主体的に授業に参加することが促進できるよう工夫を重ねた。
 - ・シラバス等での授業目標・目的の明確化に配慮するようになった。
 - ・今まで以上に、学生の思考プロセスに添うような講義の組み立てや教授方法を工夫するようになった。
 - ・自分が所属する分野の専門だけでなく、4年間の中で学生の学びについて考えるようになった。
 - ・他の学部や全学での取り組みなどに興味を持つようになった。
 - ・学生による前期授業評価の中に、視聴覚教材の活用と資料配布について要望があった。学生にわかりやすい講義、興味関心がもてる講義を行うことが重要と考えているので、後期授業では、授業内容に応じた視聴覚教材の開発や、学生が事後学習できるような資料づくりを心がけた。また、教員による授業公開や授業参観は、マンネリ化し易い現状に刺激を与えて下さり、講義内容を検討する機会になった。
 - ・何でもかんでも教え込むのではなく、授業内容を厳選して焦点化し、解りやすい平易な講義を心がけるようになった。
 - ・授業終了直前に、当日の授業内容に沿った小テストを実施するようになった。
 - ・当日の講義内容を簡単にまとめたものを授業前に配布して興味を促すようにした。
 - ・今後、改善していきたいと考えているのは学生が受身的にならないような講義ということで、学生参加型講義形式やディベート、学生の理解度を確認するための小テスト等である。また、学生との関わる時間は、個人的には講義より実習期間の方が長いので、講義と実習の両面からの学生からの評価も視野に入れ、自分自身の講義の内容、あり方等も含めて考えたい。
 - ・フィジカルアセスメントの研修会での学びとして、研修の中で山内先生が用いられていた「生活に結びつけた視点」を活用し、学生に対して現象とその意味を伝えることに関して改善が図られたと考えます。
 - ・学生が授業に積極的に参加できるように、グループワーク、ディベート、バズセッションなどを取り入れた。
 - ・プレゼンテーション能力をつけるために、パワーポイントを利用したグループ発表や、資料作りを課題にした。
 - ・学生の疑問にできるだけ応えられるように、質問時間をとるようにした。
 - ・課題別グループ発表のグループメンバーでは、学生の学習動機を大切にして自分たちで、目標設定、方法の選択ができるようにした。

(文責 医学部保健学科 築瀬 誠)

歯学部FD活動報告

はじめに

歯学部では昨年度から学生による授業評価票を改善し、OCRによる機械処理をより効率化し、事務処理の効率化を図っているが、本年度もアンケートの回収とOCR処理は学務係（歯学）とともにいった。専門教育の全ての科目で実施し、複数回実施した教員も増えた。また、継続した目的指向型の教員組織化の試みとして、共用試験CBT作問過程をFD活動として捉え、教員組織を編成した。その結果、作問した問題の採択率は昨年に引き続き、高いものとなった。また、昨年度に引き続き、学部教育に関する3テーマについて問題点を共有すると共に、今後の授業や教育の改善に結びつく具体的な方略を探る事を目的としたFDワークショップを開催した。これらの活動を支援するために、学内サーバーを設置し、諸アンケートやシラバスデータの入力に活用し、また、情報発信用のサーバーを充実し、学生向けのe-learningの試行や講義室無線LAN環境整備も支援した。

本年度は、昨年度から開始した卒業時アンケートに加えて、既卒者を対象とした全学的なアンケートの一部として、歯学部教育に関する満足度や意見を聴取するためのアンケートを実施した。更に、全学的な授業公開・授業参観の活動を歯学部でも実施月間について要項を定め実施したが、未だ、その実施体制については試行段階であり、その実効性とも併せて今後の課題である。

第1節 学生による授業評価

■ 歯学部における学生による授業評価の概要

(1) 体制：歯学部FD委員会が年間のFD活動計画の一環として行っている。

(2) 評価を受ける（実施する）時期：授業評価は各科目の授業終了時に適宜行っているが、本年度も複数回の実施も試みた。集計時期は前期終了時の10月頃と、後期終了時の2月頃で、年度末に全ての集計結果を取りまとめる。

(3) 方法：歯学部で作成した「授業に対する学生評価表」を用い、15項目に亘って5段階評価をし、かつ、改善点や長所、短所についての自由

記載をする。対象者は、その授業科目の担当教員であり、教授、助教授、講師である。無記名の評価表は学生クラス委員が集め、学務係へ提出し、OCR集計処理後、さらにFD委員会委員によって、内容の点検を行った後、当該教員へ戻される。教員は所見、感想などを記載し、より良い授業に向けての改善策を記入し、FD委員へ提出後、報告書として取りまとめる。

(4) 結果の公開：教員の各項目の評価集計結果と所見、感想などのまとめを教育センターの報告書に掲載するとともに、学部内向けに詳細なデータを掲載した報告書を作成し、学生、教職員に配布するとともに、学務係に常備し、また、ネットワーク上でも掲載し、学部内に公開する。

(5) 評価結果をどのようにして反映させているか：各教員が評価結果について真摯に受けとめた上で、所見、感想などを明記し、さらに、これらをより良い授業のための改善策として公表することによって、授業に対する教員の自覚と自己効力感の醸成に役立てている。各教員のまとめは匿名にしてWebにも掲載し、公開した。

■ 学生による授業評価のまとめ

各教員による自己評価と改善に関するまとめには、評点からクラス全体の傾向と個々のコメントから具体的な問題点を読み取った結果が記載され、この授業評価が一方的なものではなく、双方向的な教員の授業改善の手法として機能していることが伺える。各教員による改善に関するコメントには、他の教員も参考になる具体的な改善方法が示されていることから、全文を歯学部教員に公開している。さらに、複数回の評価を実施し、改善方略の効果について検証している教員も増えている。

一方、学生のコメント数が少なく、全員の意見の反映には及ばないことも、継続して見られ、今後、さらに方法や内容を検討する必要がある。また、今回も予習復習の自己評価が低く、課外学習の在り方について対策を講じる必要がある。今後、e-learningシステムの充実を図り、より簡便で、双方向的な授業の組み立てが出来る様に教員を支援すべきであろう。

学生による授業評価集計結果

【学生による授業評価実施数38】

2年生

■記入学生に関する事項

記入者の学年	2	2	2	2
この授業の予習・復習を行ったか	2.2	3.0	2.4	3.2

■対象教員の授業に関する事項

シラバスに沿った授業がなされたか	3.4	3.4	3.9	3.9
授業の主題・概要・到達目標等の説明があったか	3.7	3.3	3.7	4.0
授業の準備がよくなされているか	3.9	3.5	4.3	4.2
教材（プリント、スライド、教科書、参考書、板書等）は適切であったか	3.6	3.3	4.0	4.2
実習器具・材料は適切であったか	3.3	3.5	3.9	4.0
実習は授業内容の理解に役立ったか	3.4	3.4	4.1	3.9
明瞭で聞き取りやすい話し方であったか	3.6	2.7	3.9	3.8
質問や学生による発表の機会を与えられたか	3.6	3.2	3.5	3.8
質問をしやすい雰囲気であったか	3.1	3.2	3.8	3.6
学生にとって適切な難易度であったか	2.9	3.1	3.5	3.6
学習意欲が刺激されたか	3.2	3.3	3.5	3.6
教員が学問分野の専門家として信頼できたか	3.7	3.7	4.2	4.2
教育に対する熱意が感じられたか	3.6	3.6	4.2	4.0
総合的な評価	3.4	3.4	4.0	3.9

3年生

■記入学生に関する事項

記入者の学年	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
この授業の予習・復習を行ったか	2.6	2.2	2.6	2.9	2.5	2.2	2.4	2.4	3.2	3.1

■対象教員の授業に関する事項

シラバスに沿った授業がなされたか	4.0	3.7	3.9	3.5	4.1	3.9	4.3	4.0	3.8	3.9
授業の主題・概要・到達目標等の説明があったか	4.1	3.9	4.0	3.7	4.0	3.9	4.3	4.0	3.4	4.0
授業の準備がよくなされているか	4.3	3.9	4.1	3.8	3.9	4.2	4.5	4.2	3.7	3.7
教材（プリント、スライド、教科書、参考書、板書等）は適切であったか	4.0	3.7	3.6	3.8	3.5	3.6	4.0	4.1	3.3	3.9
実習器具・材料は適切であったか	3.9	3.7	3.9	3.9	3.8	3.6	3.9	4.0	3.6	3.8
実習は授業内容の理解に役立ったか	3.8	3.7	4.2	3.9	3.9	4.0	4.0	4.0	3.9	4.2
明瞭で聞き取りやすい話し方であったか	4.3	3.3	3.5	3.9	3.8	3.9	4.2	4.2	3.3	4.1
質問や学生による発表の機会を与えられたか	4.3	3.8	3.8	3.8	4.0	4.0	4.2	3.9	3.5	3.8
質問をしやすい雰囲気であったか	4.0	3.6	3.6	3.8	3.7	3.8	4.5	4.1	3.5	3.6
学生にとって適切な難易度であったか	3.7	2.8	3.2	3.7	3.4	3.2	3.6	4.0	3.3	3.7
学習意欲が刺激されたか	3.9	3.1	3.6	3.6	3.8	3.4	3.8	3.6	3.4	3.8
教員が学問分野の専門家として信頼できたか	4.4	3.8	4.1	4.0	4.2	4.2	4.3	4.4	3.8	3.8
教育に対する熱意が感じられたか	4.3	3.8	4.0	3.8	4.3	4.1	4.4	4.1	3.5	3.5
総合的な評価	4.2	3.6	3.9	3.7	4.0	3.9	4.3	4.1	3.5	3.7

4年生

■記入学生に関する事項

記入者の学年	4	4	4	4	4	4	4	4	4
この授業の予習・復習を行ったか	2.4	3.0	2.4	2.8	3.3	2.3	2.4	3.1	2.5

各学部の FD 活動報告

■対象教員の授業に関する事項

シラバスに沿った授業がなされたか	3.9	3.9	3.7	3.9	4.0	4.1	4.2	4.1	3.3
授業の主題・概要・到達目標等の説明があったか	3.9	4.0	3.8	4.0	3.8	4.1	4.2	4.1	3.8
授業の準備がよくなされているか	4.3	4.3	3.6	4.1	4.0	4.3	4.5	4.2	4.1
教材（プリント、スライド、教科書、参考書、板書等）は適切であったか	4.2	4.0	3.3	3.8	4.1	4.4	4.4	4.2	4.1
実習器具・材料は適切であったか	--	3.0	3.4	3.9	3.9	4.2	4.2	3.9	3.9
実習は授業内容の理解に役立ったか	--	4.2	3.6	4.0	4.1	4.2	4.4	4.0	4.0
明瞭で聞き取りやすい話し方であったか	3.9	3.7	3.4	3.6	4.1	3.9	4.4	3.9	4.3
質問や学生による発表の機会を与えられたか	4.0	4.1	3.8	4.0	3.8	3.9	4.6	3.7	4.2
質問をしやすい雰囲気であったか	3.6	3.2	3.3	3.6	3.8	4.0	4.3	3.9	4.0
学生にとって適切な難易度であったか	3.6	3.5	3.4	4.0	4.0	4.2	4.1	3.9	4.1
学習意欲が刺激されたか	3.8	3.8	3.2	4.1	4.0	4.1	4.0	3.8	4.2
教員が学問分野の専門家として信頼できたか	4.3	4.3	3.7	4.3	4.1	4.3	4.5	4.1	4.4
教育に対する熱意が感じられたか	4.2	4.1	4.0	4.2	4.1	4.1	4.4	4.0	4.4
総合的な評価	4.1	4.0	3.7	4.0	4.0	4.2	4.3	4.0	4.2

5年生

■記入学生に関する事項

記入者の学年	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
この授業の予習・復習を行ったか	2.5	2.4	2.5	2.6	2.7	3.0	2.8	3.1	3.0	2.9

■対象教員の授業に関する事項

シラバスに沿った授業がなされたか	3.2	3.7	4.1	3.6	3.9	3.6	3.4	3.7	3.9	3.9
授業の主題・概要・到達目標等の説明があったか	3.0	3.8	4.2	3.6	3.9	3.5	3.4	3.6	3.9	4.0
授業の準備がよくなされているか	3.3	4.0	4.4	3.5	4.0	3.7	3.4	3.7	3.9	4.0
教材（プリント、スライド、教科書、参考書、板書等）は適切であったか	3.4	3.8	4.1	3.4	4.0	3.7	3.3	3.8	4.1	4.0
実習器具・材料は適切であったか	3.4	--	3.8	3.5	3.9	3.7	3.6	3.7	3.9	3.9
実習は授業内容の理解に役立ったか	3.4	--	4.1	4.0	3.8	3.5	3.6	3.7	3.9	3.9
明瞭で聞き取りやすい話し方であったか	2.7	3.8	4.3	3.6	4.0	3.5	3.6	3.0	3.8	3.6
質問や学生による発表の機会を与えられたか	2.9	4.0	4.2	4.0	4.0	3.5	3.3	3.5	3.8	3.9
質問をしやすい雰囲気であったか	2.7	3.3	4.0	3.4	4.0	3.4	3.5	3.4	3.8	3.9
学生にとって適切な難易度であったか	2.4	3.5	4.2	3.6	3.9	3.7	3.5	3.6	3.9	4.0
学習意欲が刺激されたか	2.7	4.0	4.2	3.7	3.9	3.5	3.5	3.5	3.8	3.9
教員が学問分野の専門家として信頼できたか	3.2	4.4	4.4	3.5	4.0	3.6	3.6	3.7	4.0	4.0
教育に対する熱意が感じられたか	3.0	4.3	4.2	3.5	4.1	3.5	3.5	3.4	3.8	3.9
総合的な評価	2.9	3.9	4.2	3.5	4.0	3.6	3.5	3.5	3.9	3.9

■記入学生に関する事項

記入者の学年	5	5	5	5
この授業の予習・復習を行ったか	3.1	2.5	2.3	3.6

■対象教員の授業に関する事項

シラバスに沿った授業がなされたか	4.1	3.6	3.8	4.6
授業の主題・概要・到達目標等の説明があったか	4.1	3.6	3.8	4.6
授業の準備がよくなされているか	4.2	3.9	4.0	4.4
教材（プリント、スライド、教科書、参考書、板書等）は適切であったか	4.1	3.5	3.9	4.5
実習器具・材料は適切であったか	3.9	--	--	--
実習は授業内容の理解に役立ったか	3.8	--	--	--
明瞭で聞き取りやすい話し方であったか	4.0	4.0	4.3	4.0
質問や学生による発表の機会を与えられたか	4.3	3.5	3.6	4.1

質問をしやすい雰囲気であったか	4.1	3.6	3.9	4.4
学生にとって適切な難易度であったか	4.0	3.6	4.1	4.5
学習意欲が刺激されたか	3.9	3.6	4.0	4.1
教員が学問分野の専門家として信頼できたか	4.1	3.9	4.1	4.2
教育に対する熱意が感じられたか	4.3	3.9	4.2	4.1
総合的な評価	3.9	3.7	4.2	4.6

6年生

■記入学生に関する事項

記入者の学年	6
この授業の予習・復習を行ったか	2.3

■対象教員の授業に関する事項

シラバスに沿った授業がなされたか	3.6
授業の主題・概要・到達目標等の説明があったか	3.5
授業の準備がよくなされているか	3.9
教材（プリント、スライド、教科書、参考書、板書等）は適切であったか	3.8
実習器具・材料は適切であったか	3.6
実習は授業内容の理解に役立ったか	3.7
明瞭で聞き取りやすい話し方であったか	3.7
質問や学生による発表の機会を与えられたか	3.7
質問をしやすい雰囲気であったか	3.7
学生にとって適切な難易度であったか	3.7
学習意欲が刺激されたか	3.5
教員が学問分野の専門家として信頼できたか	3.9
教育に対する熱意が感じられたか	3.7
総合的な評価	3.7

■記入学生に関する事項

記入者の学年	2年	3年	4年	5年	6年	全平均
この授業の予習・復習を行ったか	2.7±0.48	2.6±0.35	2.7±0.37	2.8±0.35	2.3	2.7±0.36

■対象教員の授業に関する事項

シラバスに沿った授業がなされたか	3.7±0.29	3.9±0.22	3.9±0.27	3.8±0.34	3.6	3.8±0.29
授業の主題・概要・到達目標等の説明があったか	3.7±0.29	3.9±0.24	4.0±0.15	3.8±0.39	3.5	3.8±0.30
授業の準備がよくなされているか	4.0±0.36	4.0±0.27	4.2±0.26	3.9±0.34	3.9	4.0±0.31
教材（プリント、スライド、教科書、参考書、板書等）は適切であったか	3.8±0.40	3.8±0.25	4.1±0.34	3.8±0.34	3.8	3.9±0.33
実習器具・材料は適切であったか	3.7±0.33	3.8±0.14	3.8±0.41	3.7±0.18	3.6	3.8±0.25
実習は授業内容の理解に役立ったか	3.7±0.36	4.0±0.16	4.1±0.23	3.8±0.22	3.7	3.9±0.25
明瞭で聞き取りやすい話し方であったか	3.5±0.55	3.9±0.37	3.9±0.32	3.7±0.45	3.7	3.8±0.41
質問や学生による発表の機会を与えられたか	3.5±0.25	3.9±0.23	4.0±0.27	3.8±0.39	3.7	3.8±0.33
質問をしやすい雰囲気であったか	3.4±0.33	3.8±0.30	3.7±0.35	3.7±0.43	3.7	3.7±0.37
学生にとって適切な難易度であったか	3.3±0.33	3.5±0.35	3.9±0.29	3.8±0.49	3.7	3.7±0.42
学習意欲が刺激されたか	3.4±0.18	3.6±0.24	3.9±0.30	3.7±0.38	3.5	3.7±0.33
教員が学問分野の専門家として信頼できたか	4.0±0.29	4.1±0.24	4.2±0.23	3.9±0.35	3.9	4.0±0.30
教育に対する熱意が感じられたか	3.9±0.30	4.0±0.32	4.2±0.15	3.8±0.40	3.7	4.0±0.34
総合的な評価	3.7±0.32	3.9±0.26	4.1±0.17	3.8±0.41	3.7	3.9±0.32

第2節 共用試験 CBT 問題作成を通じた FD 活動

■ 教員の組織化

歯学教育コア・カリキュラムに準拠する CBT 用の問題作成を通じて、コア・カリキュラムが教育の場面でも生かされる様になることを目指して、本年度も継続して、学部教育委員会共用試験実施部会とともに、CBT 問題作成過程を歯学部 FD 活動の一環と捉え、教員を組織化して活動を行った。各分野から1名の作問委員（計21名）を選出し、グループを作り、全教員を対象とする FD 講演会と各グループ作業を行いながら、問題作成とそのブラッシュアップを行った。本年度は取りまとめ役となるタスクフォースを昨年に比し減らし、6名とした。

■ CBT 作問活動と成果

詳細な実施経過は省略するが、本年度は約6か月間に及ぶ作業期間中、各グループでは毎週のミーティングとともに、日々、電子メールを用いた意見交換やファイルの転送を行い、スムーズに作業を進めた。FD 活動として教員を組織化する際には、明確な目標をもち、また、集中的に活動する方が、達成感が得られやすいと考えられ、今後もこの様な目的指向型の短期組織化を継続、充実させたいと考えている。また、その成果として採択率は昨年に引き続き高いものとなり、一定の成果もあげたと言える。さらに、この共用試験に対応した基礎歯学特別講義を本年度も継続して設け、実質的なカリキュラム改善にもつながったといえる。

平成19年度 CBT 問題作成 FD 研修会報告

歯学部共用試験委員会 CBT 作問作業部会
歯学部 FD 委員会

平成19年度の CBT 問題作成 FD 研修会は下記の要領で行われた。

実施責任者：歯学部FD委員会委員長 馬嶋 秀行

日時：平成19年12月5日（水）17：30～19：00

場所：歯学部第3講義室

内容：

（司会）宮脇 正一

（挨拶）植村 正憲 馬嶋 秀行

（講演1）伴清 治

（講演2）梶山 加綱

（講演3）西原 一秀

（講演4）岩下 洋一郎

参加者：歯学部・大学病院の教員90名

要旨

（講演1）

学生の成績から判断する問題の質

鹿児島大学大学院歯学総合研究科 先進治療科学専攻
顎顔面機能再建学講座 歯科生体材料学分野
卒業試験実施部会 伴 清治

CBT 問題および卒業試験問題の成績データを用いて、何が良い問題なのか、良くない問題なのかを解説した。

良い問題とは、学習による知識の習熟成果が客観的に評価できる問題であり、良くない問題とはその逆である。すなわち、正答率が100%近くて学習しなくてもできる、正答率がきわめて低く学習成果が正当に評価できてない問題である。また、識別指数が低い問題も良くない問題となる。すなわち、正答率と識別指数で問題の質を判断することが客観的な問題評価となる。

ここで、識別指数とは下表のように、成績上位群と下位群の中の正解者数と不正解者数を求め計算式に代入して求められる。

	正解者数	不正解者数
試験全体得点上位群	a	b
試験全体得点下位群	c	d

$$\text{識別指数} = (ad - bc) / (\sqrt{(a+b)(c+d)(a+c)(b+d)})$$

上位群と下位群は対象受験者数により1/4にするか、1/2にするかが異なっている。

受験者数	200名以上	200名以下
試験全体得点上位群	上位1/4	上位1/2
試験全体得点下位群	下位1/4	下位1/2

識別指数により以下のように、一般に判断されている。

識別指数 > 0.5 希（良）

>= 0.25 適当

<= 0.15 質的に疑問

CBT 事後評価解析小委員会は CBT プール問題の採用判定をすることが主な仕事であるが、正答率と識別指数で主に判定することになっている。

判断基準を明らかにすることはできないが、特定の数字以下または以上が削除される。

CBT および卒業試験において、正答率が低く、識別指数が低く良くないと判定される問題は以下のような共通点がある。

1. 画像が不備：ピントが甘い等、視野が限定されておらず重要な部分が認識しにくい。
2. 微妙な差：特性値の数字が微妙な違いしかない。
3. カタカナ英語
4. 化学式
5. 一般的でない特殊な器具、物質が対象
6. SBOの不一致
7. 個人差があるもの
8. 異常な行為

上記のような問題は極端に正答率が低く、識別指数が低い場合が多い。従って、この逆になるようにすれば、良い問題が作成できることになる。

（講演2）

CBTの作問方法について－共用試験実施評価機構の考え方－

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科 先進治療科学専攻
顎顔面機能再建学講座 歯科麻酔全身管理学分野
梶山 加綱

「なぜ、CBTが必要なのですか?」「なぜ、視覚素材が重要なのですか?」「なぜ、写真は美しくないとダメなのですか?」「なぜ、連問で異なる写真が要るのですか?」「なぜ、毎年、新作問題を作るのですか?」「なぜ、採択率を競走させるのですか?」という質問を受けることがある。「CBTの問題を作れと言われたから一生懸命作ったのに、専門外の先生がいろいろケチを付けて、作り直せという」「作問委員になったら、夜遅くまでブラッシュアップに付き合わされて、帰宅が夜の10時や11時になる。」「CBTの問題はいつも自分一人が作って、他の医局員は協力してくれない」という不満を耳にすることも。そこで、今回、これらの疑問や不満を解消するために、共用試験実施評価機構のCBTに対する考え方を説明してCBTに対する理解を深めてもらうとともに、良い問題の作成方法、ブラッシュアップ方法について解説した。

CBTの実施機構とは、一体全体どのような組織なのだろうか。社団法人医療系大学間共用試験実施評価機構には、共用試験実施委員会と共用試験事後評価解析委員会があり、そのほかに共用試験制度・システム開発委員会や共用試験広報・推進委員会がある。共用試験実施委員会は医学系と歯学系に分けられ、それぞれにCBT実施小委員会とOSCE実施小委員会がある。共用試験事後評価解析委員会も医学系と歯学系に分けられ、それぞれにCBT事後評価小委員会とOSCE事後評価小委員会がある。そして、歯学系CBT実施小委員会の中にブラッシュアップ専門部会、問題作成FD専門部会、問題プール化専門部会がある。ブラッシュアップ専門部会では、全国から集められたCBT問題のブラッシュアップを9日間費やして行っている。ブラッシュアップ専門部会の委員は予防歯科学、生化学、解剖学、生理学、細菌学、病理学、薬理学、歯科理工学、歯科放射線学、歯科麻酔学、口腔外科学、歯科保存学、歯科補綴学、小児歯科学、歯科矯正学など、各専門分野から選出された教授により構成されている。

なぜ、CBTが必要なのだろうか。講義や実習では当然ながら学生が患者さんを診ることはない。しかし、臨床実習では患者さんを診なければならぬし、治療もしなければならない。ここに大きなギャップがある。講義や実習でいくら説明しても実際の患者さんの様子は学生にはなかなか理解できない。このギャップを埋めるのがCBTである。CBTを実施することにより講義や実習で修得した知識や技術が円滑に臨床実習の場に生かすことができる、CBTに合格した学生のみが臨床実習を行うことができるし、逆に臨床実習に対応できないような知識不足の学生は患者さんに対して歯科治療を行う資格はない。患者さんは決して学生のもっとではないからである。臨床実習に進級できるくらいの知識があるか否かを問うのがCBTである。このように考えると、CBTの必要性がよくわかるし、CBTを臨床実習直前の進級判定基準として実施する理由も容易に理解できる。

なぜ、視覚素材が重要なのだろうか。臨床実習で初めて患者さんの歯肉を診ても実際の発赤や腫脹がわからなければ歯肉炎と診断することはできない。ましてや歯肉炎を治療することはできな

い。たとえ歯肉炎の治療法が知識として頭の中で列記できても、患者さんの歯肉を診て、歯肉炎が起こっているのかいないのかわからなければ、その知識は臨床的意味を持たない。「これが歯肉炎だよ。わかっているかい？」と学生に示すためには、典型的な歯肉炎の写真が必要になる。全く同じ理由により、典型的な唾石の写真、典型的な歯牙腫の写真、典型的なガマ腫の写真、典型的な白板症の写真、典型的な骨折のレントゲン写真、病理組織写真などなどが必要になる。だから、視覚素材が重要なのである。視覚素材がなければ、口頭でいくら饒舌に述べても学生の理解は得られない。「百聞は一見にしかず」である。

なぜ、写真は美しくないとダメなのだろうか。もしも写真がピンボケで汚かったら、学生はどこを見てよいのかわからない、どこが骨折線なのかわからない、矢印がどこを指しているのかわからない、病理組織像が鑑別できない、診断できない、ということになってしまう。これでは CBT において、きれいな写真を見ている学生と汚い写真を見ている学生との間に不公平が生じてしまう。受験生はそれぞれ違う問題を解いているために、このような不公平が生じてしまうのである。ここが国家試験と根本的に違うところである。

なぜ、連問では異なる写真が要るのだろうか。CBT の問題形式には、タイプ A = 単純 5 肢択一形式、タイプ W = 順次解答 2 連問、タイプ Q = 順次解答 4 連問、タイプ L = 多選択肢 2 連問、タイプ R = 多選択肢 4 連問の 5 つの形式があるが、W 問題の 1 / 2 で疑わしい疾患名、2 / 2 で病理組織像の特徴を問う問題において、もしも 2 問とも視覚素材が全く同じ口腔内写真だったら、2 / 2 で病理組織像の特徴を答えさせているのに写真が口腔内写真ということになってしまい、写真を見せている意味がない。これでは、患者さんの口腔内を診ただけで確定診断することになり、病理診断は必要ないということになってしまう。これは実際の臨床とは異なる。実際の臨床では、口腔内を診て、口腔粘膜の異常を疑い、病理組織像を見て確定診断するわけだから、学生は病理組織像を観る能力が必要であり、われわれはそれを教えなければならない。だから、1 / 2 の問題は口腔内写真で、2 / 2 の問題は病理組織像の写真でなければならないということになる。すなわ

ち、口腔内写真と病理組織写真の 2 種類の異なる写真が必要になるのである。これが CBT における視覚素材の基本的な考え方である。すなわち、写真を見せて答えさせる問題は写真を見なければ答えられない問題であり、写真を見なくて解けるような問題は写真を見せる意味がないという訳である。

Q 問題において、もしも 4 問とも視覚素材が同じだったら、どうだろうか。1 / 4 では、初診時の口腔内写真を見せて必要な検査を質問する。まず口腔内を診てから、診断を下すために検査をする必要がある。2 / 2 では、検査で慢性歯周炎と診断したので、次にエックス線写真を提示して、歯槽骨の状態から、どのような治療を行うかを質問する。3 / 4 では、ブラッシング後にスケーリングとルートプレーニングを行うことに決定したので、その治療に必要な器具を選ばせる。4 / 4 では、治療を行ったあとに、どのような症状が出現しやすいかを質問する。このように、検査をして、治療法を決定して、治療器具を選んで、術後の予後について述べるという、時間的経過に沿って問題が作成される。これはまさに臨床で歯科医師が日常行っている時間経過そのものであり、写真もその時間経過に沿って変化するのは、むしろ当たり前、つまり写真は 4 枚とも異なって当然といえる。ということは、4 種類の異なる写真が必要になってしまう。これが CBT の連問における視覚素材の基本的な考え方である。日常臨床で歯科医師が行っている歯科治療の時間的経過に従って、学生がいかにも体験しているかのようなシミュレーション問題を作成する必要がある。したがって、作問者は同じ患者を長期間にわたり写真取材しなければならない。

なぜ、毎年、新作問題を作る必要があるのだろうか。CBT の試験中に後方の席から前方の PC 画面が見えてしまうことがある。これはカンニングをしているという意味ではなく、いくらパーティションを置いても後方からは前方の画面が見えてしまうのである。また、CBT 問題に関して、学生には守秘義務がある。にもかかわらず、一部の学生が他学年の学生に、あるいは他大学の学生に問題情報を流すことがある。学生が故意に漏洩しなくても雑談をしているうちに無意識的にしゃべってしまうこともある。さらに、出版業者

がCBTの問題集を発売しているの、全く同じ問題を削除せざるを得ない状況になっていることも事実である。これはなかなか規制が難しい。全く同じ問題ないしはきわめて類似した問題が掲載された問題集はよく売れるからである。そして、前述のように、全国の大学から多くの問題を集めても、視覚素材が不鮮明でなかなか良問が残らないということもある。視覚素材が不鮮明では学生間に不公平が生じてしまうからである。このように、いろいろな理由により膨大な量の問題が必要になるのである。

なぜ、機構は大学間で採択率を競走させるのだろうか。競走させるというよりも、前述したように、よい問題がたくさん欲しいのである。順位をつけることにより各大学で競争意識が芽生えて採択率が上昇すればよい問題がたくさん集まるといふわけである。つまり、良問を集めるための手段なのである。ブラッシュアップ専門部会では、よい問題を集めるために各大学から送られてきた問題をなるべく採択しようと努力に努力を重ねている。文章は修正できても視覚素材は修正できない。切り取りはできるが、ピンぼけ写真や汚れた写真はどうしようもない。だから、視覚素材が悪いと、どんなに問題文が優れていても採択されないということになる。実際、非常に残念な問題が多々ある。

4/6以下の問題とは4年生までに習った問題という意味なのだろうか。4/6とは6年間のうちの4年次までの知識ということであるが、この説明では各大学のカリキュラムによって異なってしまう。たとえば、鹿児島大学の歯科麻酔学講義は5年次の前期に設定されているので、歯科麻酔学の問題は作れないということになってしまう。4/6ということは、換言すれば、「国家試験や卒業試験よりも簡単な問題」という意味であり、必ずしも4年次までに教えた内容に限るという意味ではない。実際にCBTを受験する学生は臨床実習直前だから、すべての専門科目は終了しているのである。つまり、あまり複雑にひねった問題はやめてくださいという意味なのである。さらに想像を逞しくすれば、この4/6という言葉は私立大学的発想なのである。私立の歯科大学では4年生までにすべての講義が終了している。国試対策に十分な時間をかけなければならないからであ

る。だから、われわれは、この4/6という言葉に惑わされてはいけないのである。

問題文作成時にはどのような注意が必要なのだろうか。作問方法のマニュアルを参考にすればよいのだが、特に多い間違いについて説明すると、主文では、年齢と呼び名、女性、女子、女兒などに注意する。「AおよびB」は「AとB」と書く。「A、B、C」は「A、BおよびC」と書く。連問では前問の答の部分は段落を変えて1文字あける。写真を示す場合は、「○の写真を示す」あるいは「○を写真に示す」と書く。「○○の過程を示す」は「○○の一過程を示す」と書く。左側下顎第一大臼歯と書かないで菌式で入力する。「写真を示す」「図を示す」は主文の最後に置く。ただし、図中の(ア)(イ)を説明するときは例外である。副文では、「○○の特徴で正しいのはどれか」は「○○の特徴はどれか」と書く。「まず行う処置はどれか」は「最初に行う処置はどれか」と書く。「診断はどれか」は「診断名はどれか」あるいは「考えられるのはどれか」と書く。選択肢では、組み合わせを問う場合は、選択肢に中線(ー)が要る。単語が2文字なら間にスペースを入れる。図表では、模式図の線がギザギザにならないようにスムーズに描く。図中に示す記号(選択肢も)は(ア)(イ)と括弧を付ける。図中の記号は時計回りだが、見にくい場合は例外である。パノラマ写真は原則として切り取らない。ただし、このことに関しては意見が分かれているので、今後検討する予定である。写真が2枚あるときは、くっつけずに少し離す。病理組織像で強拡大を示すときは、弱拡大の中に□で囲って強拡大を示し、両方の組織像を提示するのがよい。患者の顔写真は下半分でないとダメ。ボランティア(医局員)は顔全体を出してよい。この場合、承諾書を添付するように書いてあるが、実際には添付しなくてよい。

最後に、良問を作るコツはないのだろうか。「くっきり、明るい、きれいな画面」という視覚素材のキャッチコピーと「すっきり、はっきり、慣用句」という問題文のキャッチコピーを覚えておくとうわりやすいと思う。要するに、問題文は簡単明瞭に、論文の要約のように書く。ダラダラと回りくどい文章はダメ。ということは、つまり学生が読みづらく、学生間で不公平が生じてしま

うという意味である。字数制限は文章が冗長にならないためのひとつの目安に過ぎない。

以上のように、要するに、基本は、学生間で不公平が生じないように問題を揃えるということである。学生はそれぞれ異なる問題を解いているので、どうしても不公平が生じてしまう可能性がある。ここが国家試験と違う点なのである。個人で CBT 問題を作成したら、必ず医局内でブラッシュアップを十分に行い、よい問題に仕上げたから WG に提出する。そうすれば、歯学部内のブラッシュアップ WG でケチを付けられることもなくなり、被害者意識も解消するであろう。夜遅くまでブラッシュアップに付き合うこともなくなる。そして、鹿児島大学歯学部の CBT 採択率も必然的に上昇して、機構には良問が多く集まるということになる。これはすべて学生のために行っているものであり、将来有望な素晴らしい歯科医師を教育するためのわれわれの義務でもあるということを理解していただきたいと思う。

(講演3)

CBT 問題作成の基本的手順について

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科 先進治療科学専攻
顎顔面機能再建学講座 口腔顎顔面外科学分野
西原 一秀

CBT 問題の作問は問題入力システム QED ver.5.0 (以下、QED) を使用して行われるが、QED は複雑な入力操作を必要とし、さらに、CBT 作問では決められた語句・用語を使用しなければならないなど制限が多く、多くの教員が作問・入力に戸惑っているのが現状である。

そこで、今回、問題入力システム QED ver.5.0 の問題作成の基本的手順を「鹿児島大学歯学部 CBT 作問ガイド - QED の簡易マニュアル - (以下、作問ガイド)」を参考に、コンピューター画面上で QED を実際に操作し、解説した。

QED は大学から提供された入力ソフトを用いて各自インストールすることが可能であるが、現在は Windows のみで使用できる。QED は初めの画面で作問者を講座名を含めて表記し、問題作成を開始する。次の画面が問題入力の画面となっており、基本的には 2 画面で問題を作成する。問題入力では主文、副文、選択肢のいずれも 11 ポイン

トのフォントサイズを使用し、主文、副文の冒頭は必ず 1 文字空白にしなければならない。選択肢の適正度は、②正解か 0 不可のいずれかを選択する。図、画像は直接 JPEG ファイルから入力し、問題文、選択肢、図、画像のレイアウトは規定されたレイアウトパターンの位置関係に配置する。求められる学力 (Taxonomy) は「II: 分析/統合/解釈する力 (分析・解釈)」を選択するような問題作成が求められ、学生が問題解答に要する所要時間は「1 分」とし、必要度は「必須」、難易度は「平易」を通常選択して入力する。

以上のような方法で問題を作成するが、提出問題や作問情報がコンピューターで洩れないようにセキュリティを充分に行うことが必要である。

参考資料：鹿児島大学歯学部 CBT 作問ガイド

- QED の簡易マニュアル -

(講演4)

CBT 問題作成のための視覚素材の作成方法と IT スキルについて

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科 先進治療科学専攻
腫瘍学講座 顎顔面放射線学分野
岩下 洋一朗

CBT 問題作成のための視覚素材の作成方法と IT スキルについて要点を示した。

まず、簡易マニュアル (鹿大歯学部 CBT 作問ガイド三部作) に要点はほぼ全て記述しているのでそちらを読んでほしい。作問ガイド (2) 視覚素材の作り方にあるが、日頃から CBT のためによい画像を集める必要がある。よい画像とは、日常的な、ありふれた、典型的な、非常にわかりやすく、フォーカスのあった、フレームのよい、明るさが適正な画像である。日頃から撮影、整理しておく必要がある。CBT 用と学術用は別にした方がよい。

重要なことは、最初にスキャンするときの画素数、濃度分解能に注意することである。画素数は後で増やせない。濃度分解能も後で増やすことは出来ない。フィルムをスキャンするときは、デンタルフィルムの分解能は 600dpi 以上で、自動濃度調整ボタンがあれば使用するようにする。PowerPoint などで作図したときは、元のファイルは必ず保存する。(ファイル名は ori-xxx.ppt の

ようにつける。)

最終画像ファイルは500 x 400dot, 72dpiが基準である。提出する際は ori-, mid, final を準備する。Finalは出来るだけ JPEG 画像ファイル（拡張子名.jpg）で提出する。

CBTのためのITのスキルについて、セキュリティ、メールについて注意しなければならない。

セキュリティについては、OS, ソフトウェアのアップデート、ウイルス対策ソフトは必須である。パスワードは必ず設定する。スクリーンセーバーにもパスワードをつける。ノートパソコンでの運用に注意する。特に盗難とデータの流出には要注意である。Winnyなどのファイル交換ソフト

は禁止されている。

メールについては、できるだけテキストメールを使用し、HTMLメールは使用しないようにする。必ず宛先の確認を（cbt-wgと通常のメールの区別）する。特にメールングリストの返信時には注意する必要がある。

一般的なITのスキルについては鹿児島大学歯学部情報ネットワーク委員会 作業部会のホームページ (<http://www.halkagoshima-u.ac.jp/net-wg/index.html>) を参照する。歯学部のホームページからリンクがある。

アンケート結果

質問内容	はい		いいえ	
1. 過去にCBTの作問をしたことがある。	72		18	
2. CBTのブラッシュアップをしたことがある。	57		33	
3. 作問のために視覚素材を集めたことがある。	75		15	
<そう思わない・・・そう思う>				
	1	2	3	4
1. 組織的活動として有意義であったか。	4	5	44	37
2. 企画内容は適切であったか。	3	10	44	33
3. 時間、場所等は適切であったか。	3	13	47	27
4. 個人的に成果は得られたか。	4	16	44	26
5. 今後もこの様な活動は必要か。	3	12	45	30
6. 上記項目やその他の反省点、改善点などがあれば、自由にお書き下さい。	<ul style="list-style-type: none"> ・FD研修会を教員に行うことは良いことだと思う。しかし、助教等の尻をたたく前に教授の先生方に温度差があるように思われる。やはり全員の教授が参加するのが前提ではないでしょうか？（教育に熱心な先生はいつも顔ぶれが決まっています。） ・とても良かった。・分かりやすく良かった。 ・最後の採用までの努力が良く良かった。 ・CBTの意義が良く理解できた。 ・（作問未経験）実際に作問を行えば見えてくるとは思いますが、現段階では分からないことばかりです。 ・本当に参加して理解してほしい人が不参加だった少なくとも責任ある立場の人は全員でほしい。 ・教員全員が参加する内容でしょうか。作問したことがない、又は非協力的な教員が参加すれば良いと思います。 ・対象は新任教員でも良い。 ・機構の情報として、不要な作問があれば作問の前に早めに教えてほしい。 ・参加者数をもっと増やす方が良いと思います。（教員全員参加にしてもいいと思います。） 			

第3節 歯学部FD講演会

平成19年度の歯学部FD講演会は下記の要領で行われた。

実施責任者：歯学部FD委員会委員長 馬嶋 秀行
日 時：平成20年3月27日（木）17：00～18：00
場 所：歯学部第1示説室
講 師：福岡歯科大学・全身管理学講座画像診断学分野教授
湯浅賢治先生

要旨

IT 歯科医療時代の歯学教育

福岡歯科大学・全身管理学講座画像診断学分野
湯浅賢治

1. 福岡歯科大学医科歯科総合病院の概要

福岡歯科大学医科歯科総合病院は頭頸部を中心に歯科のみならず医科についても診療を行う病院である。口腔医学を目指している。

2. 本学の登院前および臨床実習の概要

本学の登院前および臨床実習スケジュールとして、5年生は4月から6月に登院前実習を行い、6、7月にOSCE, CBTを行い、共に60点以上で臨床実習へあがる。臨床実習期間は5年の9月から6年の7月までである。

登院前の実習として、9班（10～11人/班）に分け、各科を5日/科でローテーションする。特徴として、介護老人施設があり、介護実習が5日間含まれる。

臨床実習では、16班（6～7人/班）に分け、各科をローテーションする。また、外科、内科もローテーションする。見学型から診療参加型へ移行中で、学生あたりに患者を配当し、学生は患者1人を連れてくる必要がある。

3. 病院のIT化

本学の中期構想で病院のIT化の推進が2005年に決まった。デジタル社会への学生の対応、デジタル情報の教育を目的としている。導入申請に当たって、2011年には医療機関の診療報酬明細の電子化請求が義務づけられている、このような時代の要請から、生の医療情報を扱う臨床実習において、これらのデジタル情報に関する教育を行うことが重要であるとした。

HIS導入の経緯としては、2002年4月に口内法を除く画像のデジタル化、PACSが導入された。

2003年4月にHIS検討委員会が設置され、2005年5月に福岡歯科学園の中期構想の策定で、「病院のIT化を推進する。」と決定され、2006年3月より仕様書原案の作成、2006年12月に仕様書が作成され、HISの導入企業が決定された。2007年7月にPACSの更新を含むHISが稼働している。

HIS導入の基本姿勢としては、なじみやすく、便利になったと思うシステムを目指し、発生源入力のためだけに情報入力を行うことを避けた。端末に情報を入力し、かつカルテにも同じことを記入することを避けた。また学生にとって卒業に有用であることを考え、歯科用レセプトコンピュータを導入した。また、オーダーリングのみ電子化するか、医科電子カルテまで導入するか検討した。法人からの要望で診療予約システム導入により、予約台帳をなくし、歯科用チェアの効率的運用を行うことを目的とした。導入経費を抑えるために、オーダーメイドのシステムは無理で、既成のシステムを導入し、導入システムに本院のシステムを合わせた。説明会で教職員に「ユニクロで洋服を買うようなものです。選べるのはサイズと色くらいです。そのつもりで!」と言いつづけた。

導入の要件として、1回のオーダー入力でレセプトの作成、電子カルテへの入力、保険請求の漏れの確認、さらにレセプト監査を可能にする必要がある。また、画像については、PACSからの画像を電子カルテに入力できるようにする必要があった。

導入への問題点として、200台以上の歯科用レセプトコンピュータをLANで結ぶことができるかという問題があった。また、歯科用レセプトコンピュータにはオーダーリング機能がないため、医科用のオーダーリングシステムとの連携が必要になり、ひとつのプラットフォームではなく、複数のメーカーで連携する必要があった。引き受けるメーカーを探して見つけることができた。また、医療情報を管理する医療情報室などの専門の部署が無く、放射線科が中心となって行った。臨床検査室は装置の老朽化によりネットワークに対応せず、更新した。

システム構成としては、NECとメディアの二つのメーカーが協力し、NECのオーダーリングシステムがメディアの歯科カルテレセプトシステムと連携し、画像については、GEのPACSを接

続した。これにより、オーダー情報・請求情報は連携し、レセプト作成、電子カルテ、保険請求、およびレセプト監査まで可能なシステムを構成した。情報端末数は212台、プリンターは78台で、病院の各科、各講座の研究室、および介護実習施設に設置された。再来患者は受付を通した後はカルテ等を持たずに直接各科へ行くことができる。カルテは電子化されたが、最終的に印刷して残した。患者が受診すると各診療科に外来基本カードが出る。診療室にはチェア一台に一台ずつ端末がある。カルテは追記印刷するようになっている。患者一覧より患者のカルテを開き、歯科用カルテを開いて入力する。図についてはあらかじめパターンを入れておき選んで書き加えるようにした。

予算がないため、自作システムとの連携を行っている。メーカーに依頼するのではなく自作した方が使いやすく、カスタマイズが自由である。ファイルメーカーで作成するようにした。PACSを接続し、HISの端末で画像の閲覧が可能にした。口内法の写真はスキャンしてサーバーへ転送した。これらは実習室、セミナー室にも設置され、臨床実習に利用されている。

4. Web教材

Webを用いた教材を作成し、講義、実習に役立てている。歯科放射線の基礎について、動画を用いたわかりやすい教材を作成し、ホームページを公開している。歯科放射線学会のホームページよりリンクされている。

第4節 卒業時アンケート

■ 卒業時アンケートの実施方法と結果

卒業時アンケートは昨年と同様に歯学部卒業式会場においてアンケート用紙を配布し、19年度卒業生全員、61名を対象に実施し、56名分の回答を得た。以下の18項目について歯科医師になる立場で、「5点：極めて有効、4点：どちらかといえば有効、3点：どちらとも言えない、2点：どちらかと言えば無意味、1点：全く無意味であった。」の評価を集計した。

項目（結果）：合宿オリエンテーション（3.79）、共通教育（3.59）、専門・導入系科目（3.79）、専門

・基礎系科目（3.98）、専門・臨床系科目（4.23）、専門・医系科目（3.94）、専門・臨床実習（4.24）、専門・選択科目（3.11）、共用試験 CBT（3.95）、共用試験 OSCE（3.98）、卒業試験（4.07）、チューター制度（3.45）、課外活動サークル等（4.30）、学術情報基盤センター（3.73）、図書館（4.31）、学習室（1, 2示説室等）（4.27）、学生控室（4.16）、学務事務室（3.78）。

今年は56名の回収の中で若干の書き込みしかない。また、感情論だけのような内容が多い。各項目の評価においては、昨年とほぼ同じ傾向である。すなわち、直接関係する事項である専門・臨床系科目、専門・臨床実習、図書館、学習室、学生控室に、高い評価が得られている。また、課外活動（サークル等）は精神的な支えとして重要な活動であることがわかる。昨年、3点台の評価であった、卒業試験が4点台になっており関係者としては喜んでいる。一方、1, 2年生時の経験となる合宿オリエンテーション、共通教育、学術情報基盤センターは依然3点台の低い評価となっている。また、共用試験（CBT、OSCE）およびチューター制度など、教職員が苦勞して実施している行為に対する評価も比較的低い。歯科医師国家試験に合格するために直接関係するような教育事業・行事・施設に対してのみ評価が高く、全人的教育をしてきたつもりで教職員としては残念である。

平成19年度卒業時アンケート集計結果

歯学部教育委員会・歯学部FD委員会

実施日：平成20年3月25日（火）

場 所：卒業式会場（第3講義室）

対象者：平成19年度卒業生全員（61名）

回収数：56名分

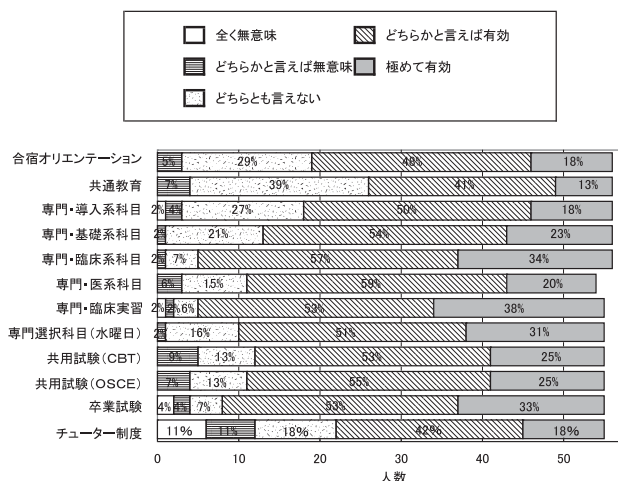
	鹿児島県	鹿児島以外の九州	左記以外
出身	16名	17名	23名
研修先	28名	11名	17名

結果

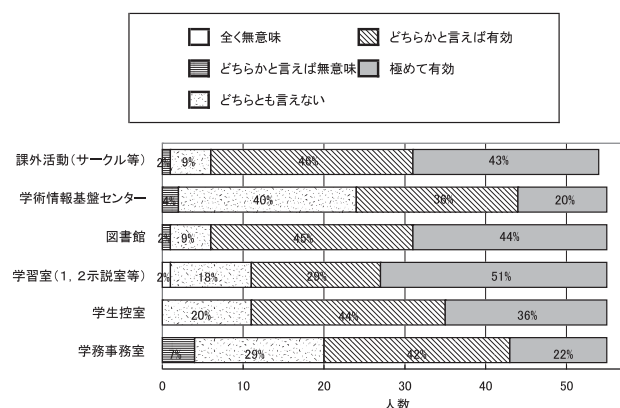
以下の18項目について歯科医師になる立場で、「5点：極めて有効、4点：どちらかといえば有効、3点：どちらとも言えない、2点：どちらかと言えば無意味、1点：全く無意味であった。」の評価を集計した。

項目	平均評価点	
	2008. 3. 25	2007. 3. 23
合宿オリエンテーション	3.79	3.33
共通教育	3.59	3.42
導入系科目	3.79	3.53
基礎系科目	3.98	3.83
臨床系科目	4.23	4.35
医系科目	3.94	3.86
臨床実習	4.24	4.48
選択科目(水曜日)	4.11	3.90
共用試験(CBT)	3.95	3.87
共用試験(OSCE)	3.98	3.89
卒業試験	4.07	4.10
チューター制度	3.45	3.77
課外活動(サークル等)	4.30	4.02
学術情報基盤センター	3.73	3.63
図書館	4.31	4.26
学習室(1, 2示説室等)	4.27	4.26
学生控室	4.16	3.80
学務事務室	3.78	4.22

教育事業/行事に関する事項



教育事業/行事に関する事項



第5節 今後の展望

これまで継続して来た活動を、より実質的な授業改善に繋がる様な活動に進化させ、また、現在進行中の歯学部カリキュラム再編とも併せて、シ

ラバスの充実や教育スキルの向上とともに、教員による教育改善を支援する組織的な活動を一層、進展させなければならないと考えている。

(文責 歯学部FD委員会)

工学部FD活動報告

工学部FD委員会では、学生による授業評価アンケートとその結果の分析、中間授業アンケートの実施の推進、授業計画改善書の提出とその活用方法の調査検討、4年目を向かえたGPA制度の現状分析、そして、理工学研究科のFD委員会等との共催の形でFD講演会を実施した。授業評価アンケートは平成16年度から継続して前期および後期の授業終了時期に実施しており、その後データ解析を行い、その結果を受けて、授業計画改善書を各教員が科目ごとに作成し、工学部長（FD委員会）に提出し、学科長の管理保管の基に各学科の教育プログラム点検委員会などに公開できていることになっている。授業評価アンケートは、当然のこととして定着してきている。工学部ではJABEE認証による教育を推進してきているが、教育・学習目標の社会・学生への周知、その目的を達成するための教育課程（カリキュラム）編成、成績評価規準の明確化、これらを公表するシラバスの見直しとこれらに基づく厳格な教育の実施を図ることが要求され、加えて、教育のスパイラルアップを目指したPDCAシステムの構築は認証要件の重要な一つである。

本報告では、以下に1. 授業評価アンケートの結果および授業計画改善書、2.GPA制度の現状、3.JABEE認証プログラムとFD活動、4. 活動

のまとめ、として簡単に報告し、また、授業公開・授業参観は、【工学部授業公開・授業参観報告】として総括する。

これらの詳細は、「平成19年度鹿児島大学工学部ファカルティ・ディベロップメント委員会報告」を参照願えれば幸甚である。

1. 授業評価アンケートの結果および授業計画改善書

平成16年度から自由記述を含めて16項目の設問で実施した。ほとんどの科目が学期ごとの行われているため、学期ごとの平均値を各学科および学部単位で集計し、授業改善の状況を考察する一つの指標とした。図1-1に、各15項目の学部平均値の平成16年度からの推移を示す。

アンケートは、最大評価5（大いにそう思う）、最低評価を1（全くそう思わない）として5段階で表した数値である。ただし、設問⑭の自習は、一コマの授業に対する予習・復習の時間で、3時間以上を5、2～3時間を4、1～時間を3、30分から1時間を2、30分未満を1とした数値である。各設問項目は簡略して表記しているため正確な表現は平成19年度工学部FD活動報告書を参照されたいが、全ての項目について、極めてわずかではあるが総じて年次的に右肩上がりの推移と

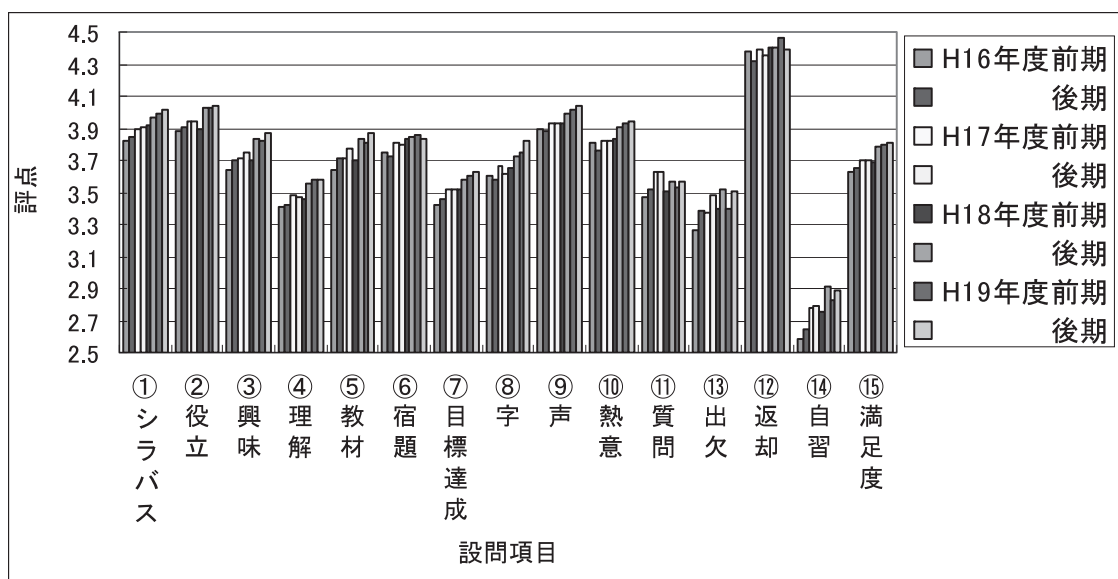


図1-1 工学部授業アンケートの年度別平均値の推移（講義・演習用）

なっている。

前期および後期の授業終了時期アンケート結果を踏まえて、教員は個々の授業に対して授業計画改善書を提出している。この授業計画改善書では、アンケート項目④（授業の理解）、⑤（教科書や教材等の適切さ）、⑥（宿題・レポート・小テストなどは授業の理解に役立ったか）、⑦（授業（学習）目標の達成度合い）、⑧（板書やプロジェクターなどの明確な文字）、⑨（教員の明瞭な声）、⑭（予習・復習の時間）、⑮（総合的な満足度）について、過去2年分の評価結果を参考に改善計画と自己評価、単位取得状況などを記載して提出する。学科長の管理保管の基に各学科の教育プログラム点検や検討委員会などで必要に応じて

公開されている。

図1-2～図1-4は、項目④（授業の理解）、⑭（予習・復習の時間）、⑮（総合的な満足度）について各学科および学部平均値を示したもので、殆どの学科で授業の理解、満足度が上昇しているのが見て取れる。この傾向は、学生の自習時間の増加が著しい学科ほど顕著といえるのではなかろうか。図は割愛したが、最も重要な⑦（授業（学習）目標の達成度合い）においても同様の結果である。また、後述するようにJABEE教育プログラム等も学生への理解と共感が浸透したした効果も間接的に大きく影響していると思われる。

なお、昨年度より、学生の率直で正確な回等が教員の資料として使用されるだけでなくより良い

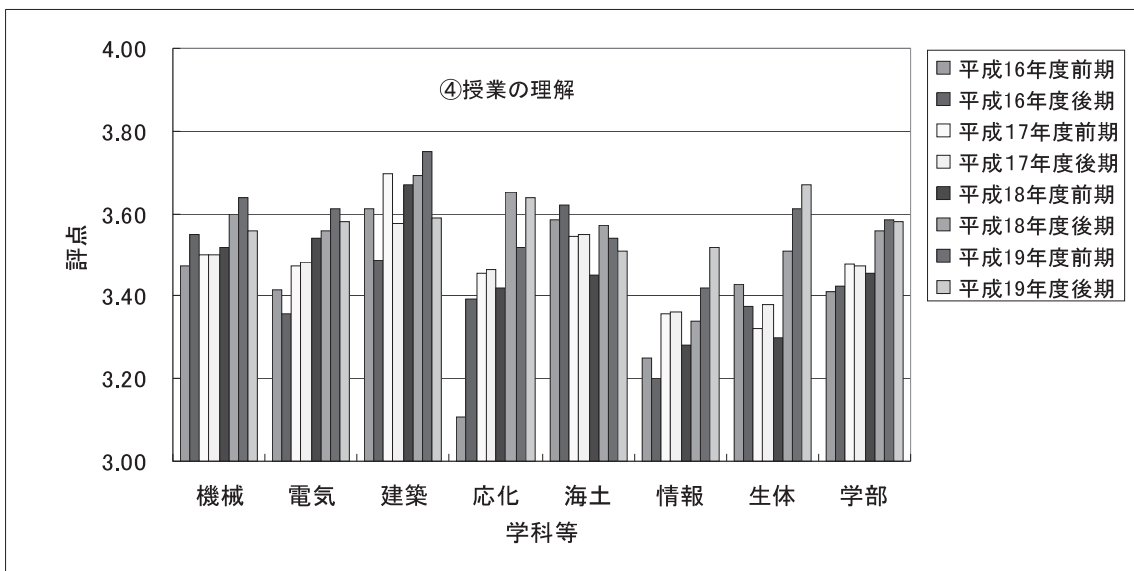


図1-2 アンケート項目④（授業の理解）の各学科および学部平均値の年度別推移

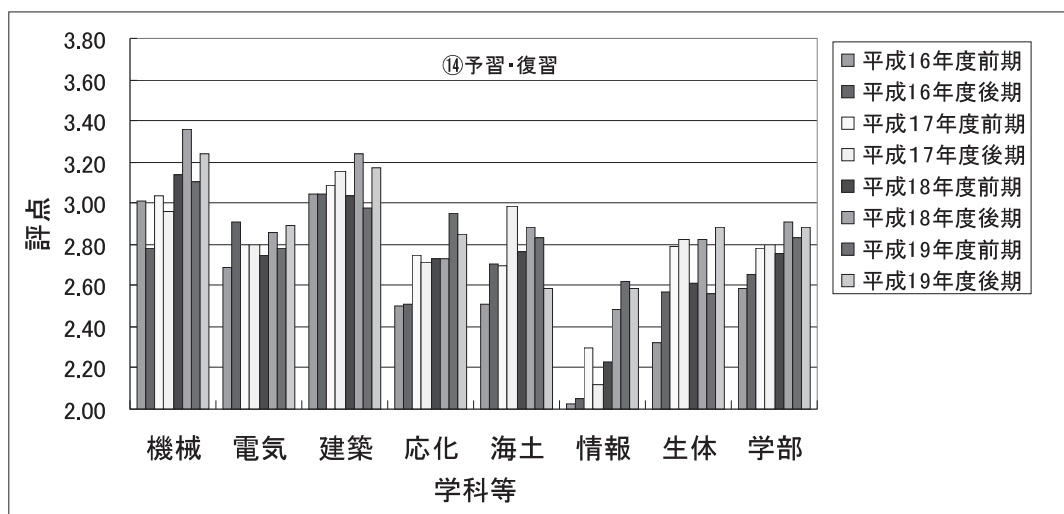


図1-3 アンケート項目⑭（予習・復習の時間）の各学科および学部平均値の年度別推移

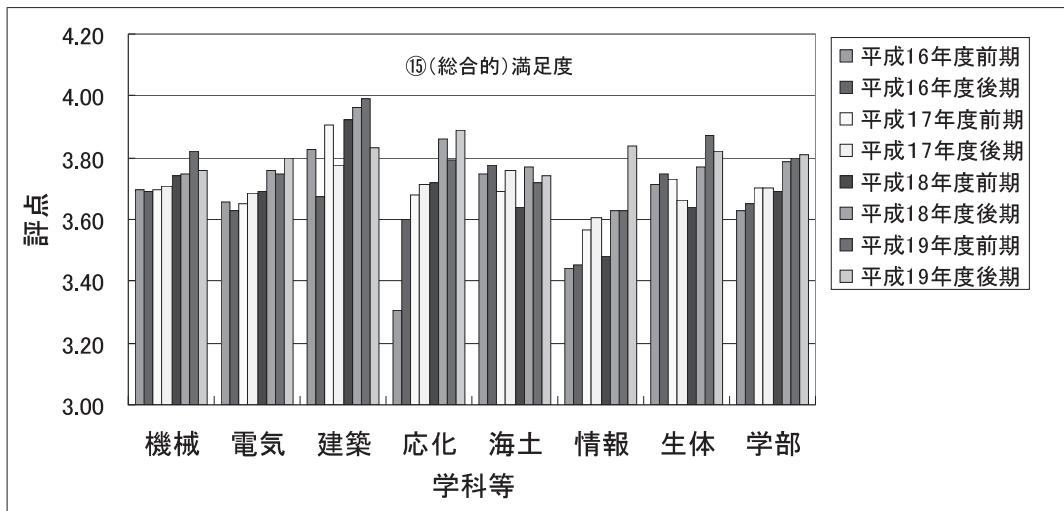


図1-4 アンケート項目⑮(総合的な満足度)の各学科および学部平均値の年度別推移

授業に繋がることを目的として、授業評価アンケートの主要な項目に対する結果を学生に周知することになっているが、本年度は年度終了後に過去4カ年の結果と併せて工学部のホームページなどで公表することになっている。このような、活動を継続することが工学部の教育の評価を高めることにもなると期待している。

2. GP制度の現状

GP制度は、各科目の成績評価レベルであるA(90~100)、B(80~89)、C(70~79)、D(60~69)、F(60点未満:不合格)を、それぞれ4、3、2、1、0の数値(GP, Grade Point)に置き換え、受講登録科目のGPの平均値(GPA, Grade point Average)によって、学生の修学レベルを評価しようとするもので、実習や卒業実験など評点化になじまない科目はP(Pass、認定)として平均値算定から除外されている。本制度の特徴は、(1)不合格科目もGPAの対象になるので、受講すると定めた科目を真剣に履修しやすくなる、(2)工学部の専門科目では、取得成績を放棄した上で再履修による成績更新が可能であり、外国留学や進学、就職などに有利な学習成績が大学に残る、(3)進級要件などの教育過程の編成において、取得単位数だけでなくGPAによる成績基準値を設定するなど、きめ細かな指導により卒業時の学力保証に役立てる、などである。工学部では、平成15年度入学生から導入された。

図3-1に、平成15年~19年度入学生の年間GPAの平均値を学年別に示す。いずれの入学年度につ

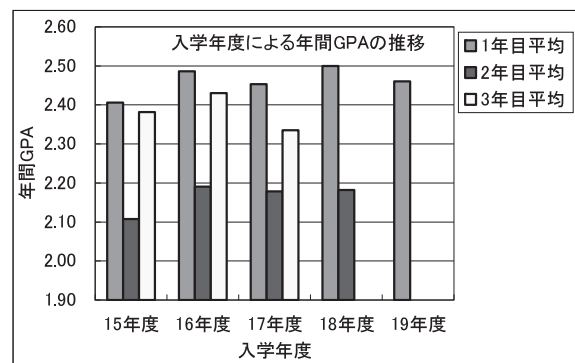


図3-1 工学部に入学した学生の年間GPAの推移

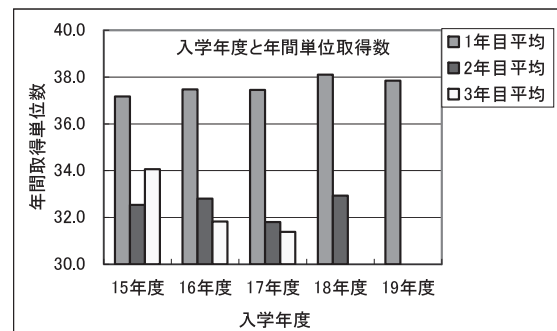


図3-2 工学部に入学した学生の年間単位数取得数

いても、在学1年目の年間GPAは2.4から2.5程度であるのに対して、在学2年目は2.1から2.2程度に一旦低下し、在学3年目に2.4前後に回復する傾向が見られる。1年目は入学直後の学生自身の緊張感や高揚感、各種オリエンテーションやフレッシュマンセミナーの影響などに加え、受講対象の多くが共通教育科目であること等のため高くなっていると考えられる。2年目は、大学生活に慣れる一方で関心が多様化し、緊張感と勉強意欲がやや希薄になること、専門科目の割合が高くな

り講義内容が高度化すること、レポート等が課される専門の学生実験等が必須であることなどのために、低い成績で合格あるいは不合格となる学生が増加し、一時的な低下を招いていると考えられる。3年目には、専門科目を学習していく自覚や将来の進路への目標等が徐々に確立していくこと、2年次に不合格となった科目の単位を再履修により取得することなどによって、年間 GPA が回復したものと考えられる。

入学年度毎の比較では、全般的に平成15年度入学生の年間 GPA が平成16年度以降の入学生の値と比べて低い傾向にある。平成15年度は工学部で GPA が導入された年であり、この年度の入学生に対しては教員側も試行錯誤的状況にあったためと考えられる。平成16年度以降の入学生では、平成17年度入学生の3年目の値が他年度の入学生のそれに比べて低めであることを除き、年間 GPA の推移には特に大きな変動が見られない。これは、平成16年度以降入学生に対しては、GPA 制度下における各教員の教育方法がある程度確立していったためと考えられる。平成17年度入学生の3年目の値が低下した原因は現時点では定かではなく、平成18年度入学生に対しても同様の傾向が生じるか注視したい。入学生の資質の変化等が GPA の推移に影響を与える可能性もあるため、今後も年間 GPA の入学年度別推移をもとにその傾向を監視し、大きな異変等が見られないか検証していく必要があると思われる。

図3-2は、1年から3年までの各学年における年間修得単位数の入学年度による相違を示す。い

ずれの入学年度においても1年目の修得単位数が最も多く、平成16年度入学以降では2年目、3年目の順になっている。平成17年度入学は、2年目と3年目が他の入学年度に較べて年間修得単位数が少なくなっているが、図3-1に見られるように年間 GPA は上昇している。平成18年度入学の1年目と2年目の年間修得単位数が上昇しているので、同入学年度の3年目の結果は注目される。

3. JABEE 認証プログラムと FD 活動

平成16年度に JABEE 認定申請した機械工学科、応用化学工学科化学工学コース、海洋土木工学科は、2年後の中間審査を経過して平成20年に5年間の認証を終え、再び継続認証を申請する予定である。平成17年度に開始した電気電子工学科は本年度中間審査を経て平成21年度までの正式認証を得ることになっている。建築工学科・応用化学工学科応用化学コースは平成18年度の認定申請を行い平成20年度に中間審査の予定である。これらの年次経緯を表6.2.1に示した。

平成19年度には、電気電子工学科が中間審査を受け、卒業要件に加えて、教育プログラム修了生には学習内容と時間の確認も教授会において行うように改善された。

これらの各学科における JABEE 教育と表裏一体となった FD 活動が、工学部全体の FD 活動の大きな原動力となっている。より詳細な FD 活動記録、現地審査における講評や PDCA に向けての対策等については、各教育プログラムの正式な審査結果を参照していただきたい。

表6.2.1 鹿児島大学工学部の JABEE への取り組み

学科	JABEE 教育プログラム名	16年	17年	18年	19年	20年	21年
機械工学	機械および機械関連分野	暫定		中間		終了	継続
応用化学工学	化学および科学関連分野 「化学工学コース」	暫定		中間		終了	継続
海洋土木工学	土木および土木関連分野	暫定		中間		終了	継続
電気電子工学	電気・電子・情報通信およびその関連分野		暫定		中間		終了
建築学科	建築学および建築学関連分野			暫定		中間	
応用化学工学	化学および科学関連分野 「応用化学コース」			暫定		中間	
情報工学	電気・電子・情報通信およびその関連分野					申請 予定	
生体工学	・生物工学および生物工学関連分野 ・電気・電子・情報通信およびその関連分野						申請 予定

4. まとめ

本年度より、理工学研究科FD委員会が組織され、活動が重複する部分があるものの一方では意見集約の範疇が広まった。そのため、工学部のFD活動としては新たな企画は実施できなかったが、JABEE基準の教育プログラムの実践を通じて、学習目標と到達度の明示やこれに沿った厳格な成績評価やプログラム内のPDCAサイクルシステムの構築と実践など、着実に一步一步教育改善を行ってきていると思われる。

一方で、大学とは何か、そして「大学教員とは何か」が自明でなくなりつつある今日、PDCAサイクルとしては、狭義のFD「教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取り組み」活動は勿論、「どのような学位を出すか」そのため「どのような教育過程を編成するのか」そのため「どのような学生を入学させるのか」を再認識した教育改善こそが必要な時期ではなからうか。

【工学部授業公開・授業参観報告】

本学部では、平成18年度工学部FD委員会において、「前期あるいは後期の授業の中から一科目

一コマを授業公開リストに公表し、6月と12月中に実施する。」こととされている。平成19年度も、平成18年度同様に、公開授業の予定表リストを全学FD委員会に報告するとともに、工学部ホームページ等に公表して実施した。

公開授業科目数および授業参観者等を昨年度の結果と併せて表4-1に示す。公開授業の科目数は昨年度並みの水準であった。しかし、授業参観者および参加報告書の提出は、残念ながら、極めて低調であった。教授会等や各学科のFD委員を通じて授業参観への参加要請は行ったが、参観者は少なく、増大に向けて次年度以降に大きな反省課題を残した。

授業参観報告書は、学科のFD委員を通じて学科のPDCAに活かされる仕組みにしているが、貴重な記載事例を、表4-2、表4-3および表4-4に集合して紹介する。このような積極的な意識の教員が多い学科においては、第1項に述べた「学生による授業評価アンケート」結果の年次推移グラフにおいて、「堅実かつ顕著な向上・改善が認められる。」とは過言であろうか。

何れにせよ、自発的に参観者が増加するようPDCAの次なるActionとPlaneが望まれる。

表4-1 平成18年度および平成19年度 工学部公開授業科目数

学科	公開授業科目数		参観報告者数（出席者数）	
	H18年度	H19年度	H18年度	H19年度
機械工学科	16	20	8 (8)	5 (8)
電気電子工学科	19	17	*	4 (4)
建築学科	15	12	1 (1)	()
応用化学工学科	16	12	0 (4)	2 (3)
海洋土木工学科	12	14	3 (5)	()
情報工学科	15	15	4 (5)	()
生体工学科	17	12	*	()

* 記録紛失 () 未報告3月31日現在

表4-2 平成19年度 工学部授業参観報告書に記載の集合事例（その1）

提出月日	平成20年1月 zz 日
授業公開・参観科目： （学科名）	CE○□工学（ACCE工学科）／○△CH（ACCE工学科）
授業公開実施日： 平成 年 月 日	平成20年1月 T 日（T 曜）T 時限／平成20年1月 E 日（F 曜）F 時限
授業参観者名： （学部学科名）	錦江湾 泳（理工学研究科 NSAM 工学専攻、工学部 ACCE 工学科） 桜島 太郎（ACCE 工学科）
本授業の改善に参考となるご意見など	・声に強弱を付けると学生さんの注意をより惹きつけられるのではないのでしょうか。 ・教室内のすべての学生を講義に集中させる雰囲気を作っていると思われた。 ・板書で重要部分を色づけするのは効果的であるが、最後部座席からは見にくく、識別しやすい色を用いるとさらによいと思われた。
本授業に対するご感想など	・講義の前半に、以前の内容と今後の予定が説明され、講義の流れを学生に理解させようとの工夫が感じられた。 ・後部座席の学生に簡単な質問をして答えさせるなど、講義に集中させる工夫がなされていた。
その他	・中間試験のため、公開予定日後に参観した。 ・参観予定日が出張であったため、了解を得て後日参観した。

表4-3 平成19年度 工学部授業参観報告書に記載の集合事例(その2)

提出月日	平成19年12月XX日/平成20年1月XX日
授業公開・参観科目: (学科名)	〇〇力学基礎及び演習A&B(ME工学科)/□□力学基礎及び演習A&B(ME工学科) 応用数学Ⅱ及び演習A&B(ME工学科)/〇△力学基礎及び演習A&B(ME工学科) △△力学基礎及び演習A&BのクラスB(ME工学科)
授業公開実施日: 平成 年 月 日	2007/12/V/平成19年12月S日/2007/12/4/平成19年12月V日(F曜)S時限 2007年12月P日(T曜)F時限
授業参観者名: (学部学科名)	鹿大 学(工学部ME工学科)/韓国 岳(工学部ME工学科) 坊津 航唐(工学部ME工学科)/霧島 登山(工学部ME工学科) 薩摩 富士(工学部ME工学科)
本授業の改善に参考と なるご意見など	<ul style="list-style-type: none"> 全体を通して適切な講義であり、改善すべき点は特に無いと思われる。 エアコンの送風音が気になった。もっと弱暖房でもいいのではないかと思った。 演習の最初に問題用紙(A4一枚で課題4問)を配付し、一番目の問題を解く際のヒントを板書していた。 担当教員2名とTAの学生1名で教室内の学生を見て回っていた。 教員は個別に学生の疑問などに対応して教室を順番に見て回っていたが、30分余り経過しても、最初の問1を解いてしまった学生は2、3名であった。 隣接の学生同士が雑談をしているものが多く、演習問題を解くことに専念しているものが少ない印象を受けた。 私も〇△力学が専門であることから、一人の学生から質問があり、聞いてみると1リットルと1m³の関係が良く分らないようであった。 演習の授業で気を配るところは、一人の学生の疑問や間違いに対して、その学生だけに対応するのではなく、問題点によってクラス全体に質問や補足説明をし、問題点を共有化させることが大切だと思います。 個別指導と共有化の作業を繰り返すことにより、クラス全体を掌握した運営が行えるようになります。 「必要なヒントを板書したので後は自分で考えるように!」という姿勢は、教員側の都合の良い思い込みであって、学生は思わぬところで行き詰まっていることが多い。 個別およびクラス全体との双方向性を高めることにより、現在の学生の状況把握を的確に行い、今後の学生指導にも活かせる情報を入手・蓄積するようしてほしい。 午後4限目の授業であるので注意は多くされていると思うが、特に学生側の問題である、講義中にも関わらず遠慮無く、寝ている学生が1、2名いた。授業を行なう側は、熱意をもって行なっているのと思う。
本授業に対するご感想 など	<ul style="list-style-type: none"> 流れの相似則についての講義であった。 講義のポイントを実機で起る現象により分かり易く、また、詳しく説明されていた。 黒板の文字が大きく、最後列からもよく見えた。 講義中に通路を歩きながら説明をするのは、居眠りしている学生を起こす上でも良いと思った。 わかり易い板書による講義がなされていた。 事前に資料が配布されており、講義の内容を深める配慮がなされていた。 演習問題の用紙しか机の上になく、問題を全く解いていない学生が2名、問1の問題はすぐに数値を計算する必要があるにも関わらず関数電卓を出していない学生が多かった。 演習の授業と言えども、必要な指示を与えるなどクラス全体を掌握して、演習問題を解くことに専念させることがまず大切だと思う。 演習の時間は、学生の落ち込んでいる学力不足の穴を見つける絶好のチャンスなので、是非とも頑張りたい。 ばね-ダッシュポット系を用いた解析式を学生に理解しやすいように指導しておられた。 地震を受ける構造物に対する免振や耐震構造を理解し解析式を誘導する演習なども併用しながら実施されているので学生のより良い理解が得られていると感じた。
その他	特になし

表4-4 平成19年度 授業参観報告書に記載の集合事例（その3）

提出月日	平成20年1月 yy 日
授業公開・参観科目： (学科名)	応用△□Ⅱ及び演習／△○□☆・□○☆△工学 (EEE 工学科) 応用○○Ⅱ及び演習 (EEE 工学科)／EEE ○△□□ (EEE 工学科)
授業公開実施日： 平成 年 月 日	2007/12/F / 2007/12/T / 2007/12/F / 平成19年12月 TS 日 (T 曜)
授業参観者名： (学部学科名)	大隈 斉彬 (工学部 EEE 工学科) / 郡元 電停 (工学部 EEE 工学科) 敬天 愛人 (工学部 EEE 工学科) / 南西 経典 (工学部 EEE 工学科)
本授業の改善に参考と なるご意見など	<ul style="list-style-type: none"> ・指名して学生に答えさせても良いかと思いました（ほとんどの学生は真剣に聞いていましたが、数名寝ている学生がいましたので）。 ・前の席が空いていたので、前の方につめさせても良いかと思いました。 ・特になし（参考）学生の授業中の出入りは3名と少なかった。これらの学生の授業中の集中力は、他の学生と比べて低かった。 ・大変見やすく整理された板書でしたが、後方からは一部の添え字等が若干小さく感じました。 ・これまで学習してきた事項を図的にわかりやすく表現し、繰り返し説明することにより、個々の内容の関連について理解が深まるような配慮がなされていたように感じます。 ・高等学校の数学や電気電子工学専門分野との関連付けへの言及、パワーポイントを用いた演習問題の詳細な解説など、自分の講義にも取り入れたいと感じました。 ・特に後ろの学生は他のことをしていたりして、講義を聴いていないようだった。 ・基礎学問なので、多少分からないところがあっても、あとでそのおもしろさや重要性が分かるのであるが、基礎的な数学の力やイメージ力・語彙力・聴いて理解する力のない学生にとっては、そのレベルに到達するには厳しく、難しいという印象だけが残るのではないかと危惧する。 ・教材や宿題などを工夫して理解を助ける工夫が見られるが、学生のモチベーションを上げる必要があるように感じた。 ・何に役立つのか、どのような技術と関連があるのか、身の回りのどのような現象と関連があるのかなど、ある程度ゴールを見せると良いのではないかと思った。
本授業に対するご感想 など	<ul style="list-style-type: none"> ・わかりやすい授業で、大変参考になりました。 ・進め方、板書、スライドいずれも、理解しやすいように、整理され、見やすく大変工夫されていると思いました。声も聞き取りやすく、速度も適度で、理解を確認しながら、進められていたと思いました。 ・前方座席の学生はもちろんのこと、後方座席の学生まで静かに集中して受講していたことが印象に残った。 ・授業の最初に設けられたパワーポイントを用いた学生による授業内容に関する発表を、他の学生が熱心に聞いていた。この形式は発表する側の学生にも聞く側の学生にも授業への関心や集中力を高めさせるのに良い方法であると改めて感じた。 ・デモ実験の実施や講義関連の資料配布の仕方など、自分の授業の改善に参考になることが多かった。 ・学生を飽きさせずに理解を助けるために、プリントの空欄を埋めながら進めていく工夫を行っている。 ・黒板の全面を使い、文字の配置も理解するようにする等、板書に工夫が見られる。 ・マイクを使用しているので、声も聴きやすい。 ・宿題やレポートの内容も、より理解させやすいように工夫されている。 ・先生は熱心にいろんな工夫をしながら理解させようとしているが、残念ながら、講義をまじめに聞いている学生は半分以下で、学生のモチベーションが低いように感じられる。
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・板書内容を受講学生は熱心に書き取っていた。集中力を高めるために、自分の授業にも板書を取り入れたい。 ・学生を飽きさせずに理解を助けるために、プリントの空欄を埋めながら進めていく工夫を行っている。 ・黒板の全面を使い、文字の配置も理解するようにする等、板書に工夫が見られる。 ・マイクを使用しているので、声も聴きやすい。 ・宿題やレポートの内容も、より理解させやすいように工夫されている。 ・先生は熱心にいろんな工夫をしながら理解させようとしているが、残念ながら、講義をまじめに聞いている学生は半分以下で、学生のモチベーションが低いように感じられる。

農学部のFD活動の概要

農学部では、平成19年度のFD活動として、以下のことを実施した。

FD週間における授業公開と授業参観

前期は平成19年7月9日から13日、後期は平成19年11月26日から30日を農学部のFD週間とし、原則として、その期間中開講されている全ての授業を農学部のみならず全学に公開した。さらに、農学部教員には平成19年度中に1つ以上の授業の参観とそれについての報告書の提出を義務づけた。報告書は授業担当者に手渡され、授業参観者のみならず授業担当者の授業改善にも利用されている。さらに、授業参観後、授業担当者と授業参観者の間で意見交換も行われた。本年度は、前期は60科目に延べ105名、後期は59科目に90名の参観があった。授業参観者は授業公開を始めた平成15年度以降増加しているが、今年度は昨年度に比べ2倍以上の参加があり、農学部での授業公開と授業参観はほぼ定着したと考えている。ただ、他学部からの参観者が今年度もなかったのは残念であった。



学生に混じって熱心に授業参観

農学部FDワークショップ

農学部では、昨年度から学生と教員の話し合いの場を設け、学生からの意見を教育に反映させる取り組みをルーチン化している。今年度は、平成19年11月28日の14時30分から、教員16名、学生50名が参加して実施された。話し合いに先立ち、鹿児島大学教育学部附属中学校の中村洋一教頭による『「教職」を志す皆さんへ』、次いで農学部で農



教育学部附属中学校 中村洋一先生による講演



グループに分かれて学生と教員との意見交換



グループでの討論で出された意見の発表

業科教育法Iを担当していただいている鹿児島大学名誉教授荒井啓先生による『教えるということ』と題する講演があった。その後、参加者が6つのグループに別れ、教育実習の体験をもとにした魅力的な授業とは？大学の授業についてどのように感じるか、改善点は何かについてディスカッションを行った。約1時間のディスカッションの後、各グループの代表がグループで出された意見

を発表し、最後に曾根晃一農学部FD委員長が全体を総括して、17時30分過ぎに終了した。各グループでのディスカッションの要旨は、FD活動報告書にとりまとめられた。

FD講演会

今年度農学部FD委員会では、学生にとって魅力ある、学生が途中で眠くならない授業を如何に提供できるかということを議論してきた。学生にとって魅力ある授業にするためには、授業内容の充実、教材の研究などとともに、話し方も重要ではないかとの結論に達した。授業内容の充実や教材の研究は、それぞれの教員や講座の教育改善検討委員会で実施できる。そこで、FD委員会としては、それぞれの教員に対し、学生との授業中のコミュニケーションの図り方、講義内容をより確実に学生に伝えることができる話し方について、専門家からアドバイスを受ける機会を設けることにし、平成20年2月2日19日（火）午後3時から5時まで第38回農学セミナーと共同でFD講演会を開催した。NHK鹿児島放送局放送部長福原健一氏を講師に迎え、「良いコミュニケーションとは－魅力ある講義の進め方－」という題で1時間半ほど講演をしていただき、その後、質疑応答を行った。事前の講師との打ち合わせで、講演内容は学生、大学院生の学会発表や就職活動（特に面接）にも大いに役に立つと考えられたので、事前に学生、大学院生にも参加を呼びかけた。

当日の参加者は、教員43名、学生・大学院生27名の70名であった。参加した教員からは、授業を進めるにあたり、話し方等に工夫が必要で参考になったという感想が出された。また、学生からは、就職活動や学会発表に大変役に立ったという感想が寄せられた。



NHK鹿児島放送局 福原健一放送部長による講演

PDCAサイクルの導入

これまで個人が管理していたシラバスを教育コース、または学科で管理し、教育目的に沿った授業の構成や授業内容の見直し、授業の指針であるシラバス、シラバスどおりに授業が行なわれてどうかをチェックする授業モニタリング、および学生による授業アンケートによる授業評価などをおして、それぞれの授業が改善、ひいては農学部の授業改善に取り組むために平成19年度からPDCAサイクルの導入に踏み切った。

平成19年度前期に、学科、講座、教育コース単位で授業科目や授業内容の見直しを行い、平成19年度後期からシラバスの電子化、チェック等を実施した。後期には、平成20年度前期の全ての授業科目（農学部・農学研究科）について、シラバスの電子入力等を行った。

外部評価の実施

学外の有識者10名からなる農学部外部評価委員による外部評価を平成20年1月31日に受けた。当日は、大学側から農学部・農学研究科の概要及び自己点検・評価の経緯の説明があった後、農学部の施設見学、各事項に関する外部評価委員からの質問と意見を中心に、自己点検・評価報告書に関する質疑応答が成された。評価委員からは、各項目に対し非常に高い評価をいただいた。

全学のFD活動への参加

鹿児島大学新任教員研修、FDワークショップ、FD講演会、クラス担任研修会など大学が主催するFD活動に積極的に参加した。

FD活動報告書

農学部・農学研究科のFD活動を報告書にまとめ、構成員に配布した。

水産学部FD活動報告

水産学部FD委員会では、昨年同様、ISO教育システム運用マニュアルで規定している「学生による授業アンケート」と水産学部独自の活動として教育訓練計画に則った「FD講習会」を実施したので、これらの取り組みについて報告する。

1. 学生による授業アンケート

平成18年度から、授業アンケートの年度結果の取りまとめを、前年度の後期と本年度の前期をあわせて行うことに変更した。これは、授業アンケートの集計結果に期末終了後に開講される集中講義を加えたことにより、アンケート処理が年度にまたがったためである。したがって、平成18年度後期と平成19年度前期のあわせた結果を報告する。

(1) 集計結果の傾向

平成18年度後期に開講された講義・演習59科目、実験・実習19科目、乗船実習7科目の全てにおいて実施された（実施率100%）。

教育システム運用マニュアル（第8版）に規定されている授業アンケートのデータ分析は、学生満足度に関すること（VI-3）であるが、平成18年度より授業アンケート項目が見直されたため、設問A-5「この授業は知識や考える力を深めるのに役立った」を昨年度と同様に満足度とみなした。

昨年度後期の度数分布においては3.0以下が9科目であったが、本年度の3.0以下は2科目へと減少し、底上げができたといえた（表1）。授業の満足度については、講義・演習科目59科目のうち57科目の96.6%で3点以上、全ての科目において中心点（2.5）以上の評価を得た。実験・実習と乗船実習科目における「満足度」では、すべての科目で3点以上であった。

また、第8版のマニュアルでは、シラバスと対応した授業モニタリングはISO-webでチェックすることになっているが、昨年度と対比するために、参考までに表1に度数分布を示した。

平成19年度前期に開講された講義・演習55科目、実験・実習20科目、乗船実習7科目の全てにおいて実施された。授業アンケート結果については、講義・演習科目、実験・実習科目、乗船実習科目別に集計し、授業アンケートの集計結果を表2に示した。

学生の満足度については、講義・演習科目55科目のうち3点以上が92.7%、3点以下が4科目で昨年度前期の11科目と比較して減少し、しかも全ての科目において中心点（2.5）以上の評価を得た（表2）。しかし、実験・実習科目においては3点以下が昨年度と同様に2科目あり、底上げはみられなかった。

表1 平成18年度後期における授業アンケートの評価点分布

設問	シラバス			満足度		
	講義・演習	実験・実習	乗船実習*1	講義・演習	実験・実習	乗船実習*1
1～2	0	0	0	0	0	0
2～3	3	0	0	2	0	0
3～4	56	19	12	57	19	12

※1：同一科目に対して複数回アンケートを実施しているため、科目数を正確に反映していない。

表2 平成19年度前期における授業アンケートの評価点分布

設問	シラバス			満足度		
	講義・演習	実験・実習	乗船実習	講義・演習	実験・実習	乗船実習
1～2	0	0	0	0	0	0
2～3	2	1	0	4	2	0
3～4	53	19	7	51	18	7

(2) 集計結果に対する改善方針

「授業アンケートの集計結果」に対して各担当教員から提出された授業改善報告書の提出数は、平成18年度後期で39科目(45.9%)、平成19年度前期で49科目(60.0%)であった。授業改善報告書については提出率の向上が課題であったため、平成19年度前期より報告書の様式の大規模な見直しを行った。さらに、提出率の向上を図るために電子媒体でも提出が出来るように改善したところ、前年度に比べて約10ポイント向上した。

授業改善報告書より、次年度に向けた改善方針を表3に取りまとめた。また、改善活動の成果については、改善を実施した事例、あるいは改善を試みて評価がよくなった事例として表4に要約した。これらの資料には、共有して改善に役立つと思われる事例を紹介しており、例えば、授業内容の細部にわたる改善方策などは省略したため、寄せられた意見をすべて記載していない。また、改善活動の成果についても、具体的な記述のあるものだけを記載した。

表3 次年度への授業改善方策(平成18年度後期、平成19年度前期)

講義・演習科目	
講義内容	考える力を育てるために授業に関連する情報を自身で検索し、まとめさせるような課題を設ける。抽象的な内容を楽しく学べるように、具体的なケーススタディーを講義内容に取り込んでいく。配付資料の枚数を精選して少なくし、重要なポイントをクリアにすることにより、考える時間をもたす。
教授の技術	ミニテストを活用した予習復習の促進とWebスタディーの導入を考えている Web教務システムを活用してテキストをダウンロードできるようにしたが十分でなかったため、再度、このシステムを使い自習を促す。 複数教員の授業なので、担当教員間で論点の整理や方向づけを促す対応が必要かもしれない。 考える力を深めるため、次年度では復習は小テストを導入し、予習は研究課題を示すことで改善する。 例年、時間外学習の項目が低く、今年は補助プリントを配布したが効果がなかったため、FD講習会で学んだMoodle(e-Learning)を導入し、改善に努める。
実験・実習科目	
授業内容	一部の学生には理解度が低い内容があったかもしれない。ここ数年、理解度の評価に改善がないので、小テストの結果に基づきシラバスやテキストを改訂する。
教授の技術	毎回、ミニレポートを課して、予習復習の機会を与える。 最終日に発表会を設けているが、グループ間でより協働体制を作れる課題を与える。 技術を取得する実習だが、既にある程度習得している学生、あるいは我流で修正が必要な学生を別メニューで指導する。

表4 授業改善への取り組みと成果(平成18年度後期、平成19年度前期)

講義・演習科目	
講義内容	今年は重要なポイントを何度も示した結果、知識や考えを深める項目で高い評価になった。双方向授業を心がけている。ディスカッションの時間を増やしたことで授業の進め方に改善がみられた。
教授の技術	授業で使う資料をCD-Rで配布し、質問はミニットペーパーで受け付けた。 教員への質問を積極的に受け付けることを最初の授業で強調し、次週に必ず解答した。 わかりやすいように説明を心がけた結果、項目C-2.3.4の評価が昨年よりアップした。 授業の進め方が速く、内容がつかみにくいと指摘があったので、OHPなど視覚的な説明資料を増やし、意識的に内容をゆっくりと説明するように心がけた。 パワーポイントでキーワードを空欄にし、書き取らせることで重要な点を印象づけるようにした。 聴覚障害学生のためにパワーポイントですべて文字化して講義した。 資料の配付で説明に集中できたことと、前回の小テストの解説や質問への回答が効果的だった。 講義の最初に前回の内容の小テストを行い、前回のノートを利用して自己採点していることが学習に効果的であるとの学生からの意見が聞かれた。
実験・実習科目	
授業内容	授業計画の十分な説明と授業ごとに今の位置づけを示すことで、高い評価が得られた。 配付資料は学生からの意見をもとに毎年改良しているためか、高い評価になっている。 技術の習得を目的とした実習である。客観的な習得状況の確認や達成基準が設定できるため、これをもとに評価したところ、ほぼ満足できる成果が得られた(学部教員に公開)。 実験の各ステップでの結果をもとに、PBL(問題解決型授業)を取り入れたことが高い評価に繋がった。
教授の技術	昨年度より配付資料の説明に時間をかけて丁寧に説明した。 毎回実験終了後に理解度を測るための小テストを行っているが、約10項目の設問のうち受講生全体の半分以上が不正解の場合はその説明が悪いと判断し、次年度への改善に役立てている。これが授業改善策として有効であるかを学生自身に尋ねたところ一定の評価を得たので、引き続き取り組む。 乗船実習において、毎朝、授業計画と内容を説明し、作業開始前に注意すべきことを説明したことが効果的だったと思われる。 約30名の学生を5班に分け手「少人数実習」を改善目標に実施したところ、授業の知識や考える力を深めた項目で0.3ポイントもの上昇がみられた。

2. FD活動

教育システム運用マニュアル（第8版）では、教員の教授法の力量向上を目的として教育訓練を実施することになっている（IV-2.2.2）。水産学部・研究科FD委員会が主催した講演会等においては、「実施報告書」と「評価報告書」を作成して取りまとめている。

(1) ノートテーカー養成講座

聴覚障害学生の修学支援のひとつとして、前期および後期のノートテーカー養成講座を平成19年4月12日（木）～16日（月）、および平成19年9月26日（水）～28日（金）に行った。前期および後期受講学生は、それぞれ11名と18名であった。受講生名や講座の内容等の詳細については、教務係に資料を保管している。

(2) FD講習会「e-Learningを活用した学生への時間外学習の促進」

平成19年9月27日、水産学部・研究科FD委員会主催のもとで、講師2名によるe-Learningの講習会を開催した。主な内容は、e-Learningのメリットとシステムの導入の仕方、Moodleによる授業への具体的活用法とシステムの構築であった。参加者は学部内の教職員18名で、事前・事後のアンケートからe-Learningの活用に対して理解が深まったことも確認できた。

(3) 教職員・学生参加によるFDパネルディスカッション

平成19年11月28日、水産学部・研究科FD委員会主催のもとで、「聴覚障害学生への修学支援から見た授業のあり方」をテーマに、2名の講師による基調講演、ノートテーカー学生の事前アンケート結果の紹介、意見交換を行った。合計1時間に及ぶ意見交換のなかで、今後の授業展開や改善、乗船実習における安全への配慮などに対して貴重な情報を得ることができた。

(4) 平成19年度鹿児島大学水産学部「授業公開・授業参観」

前期では15科目、後期では14科目の合計29科目において、授業公開・授業参観が実施された。前期については14科目で実施報告書の提出があり、

のべ参観者数は24名であった。後期については10科目で実施報告書の提出があり、のべ参観者数は12名であった。

おわりに

FD委員会では、本年度の授業アンケートの取りまとめとあわせて、過去4年間の授業アンケートの分析を行った。これらの分析結果については、FD講習会やパネルディスカッション等から得られた改善策ともあわせて、「授業アンケート分析からみたPDCA授業改善」のパンフレットで学部の構成員に周知・フィードバックした。また、過去3年間のパンフレットによる広報活動が授業の改善に反映されたかについても、学部構成員を対象にアンケートを実施し、現在、集計中である。

平成19年度水産学部FD委員会

委員長	板倉 隆夫
副委員長	上西 由翁
委員	安楽 和彦
	荒木 亨介
	大富 潤
	小田 太志
	中島 晃一

医歯学総合研究科 FD 活動報告

平成19年度の医学部FD委員会医歯学総合研究科部会の活動として、①FD講演会（医歯学総合研究科FD委員会、保健学研究科FD委員会、医学部FD委員会との共催）、②学生による授業評価、③教員による授業公開・授業参観を実施した。それぞれの活動について以下に概略を述べる。

1. FD講演会

平成20年3月7日（金）午後5時より、鶴陵会館・中会議室において、滋賀医科大学医学部家庭医療学講座・総合診療部 三ツ浪 健一（みつなみ けんいち）教授を講師として迎え、「滋賀医科大学の医学教育改革－学部教育から卒後教育へ」という講演会を開催した。

ここ数年、鹿児島大学医学部卒業者の医師国家試験の成績が思わしくなく、平成18年度の第101回医師国家試験では国立大学で最下位という結果に終わった。鹿児島大学大学院医歯学総合研究科にとって最も重要な課題の一つである「入学定員の充足」を担保する基盤となる鹿児島大学卒業者の医師国家試験の合格率向上は、医歯学総合研究科の発展に欠かせない重要な課題である。

滋賀医科大学は、大学の中期目標に「国家試験に関する具体的目標の設定」を行い、「合格率は、医師国家試験においては95%以上、看護師国家試験においては98%以上及び保健師国家試験は95%以上を目指す。」ということを明記しており、第101回医師国家試験の合格率は97.1%で第4位の成績を残している。

その滋賀医科大学において、医師国試合格率の向上策の中心的存在で、しかも卒後研修部長も兼任している三ツ浪教授に、滋賀医科大学の学部教育から大学院教育や卒後研修を含めた卒後教育への橋渡し期間に位置する医師国試対策を中心とした講演を聞くことができた。

講演会には、医学部長や病院長をはじめ29名の教員に加え、1年後に医師国家試験を控えた多くの5年生の学生が参加し、午後5時より約50分の講演の後、45分間にもわたる熱心な質疑応答があり、大変有意義なものであった。

2. 学生による授業評価

総ての授業科目を対象に、学生による授業評価を実施した。評価方法は、アンケート調査であり、“授業評価”について「シラバスに記載された学習目標が身に付いたか」「授業内容の質の高さ」「話し方の適切さ」「授業中の、教員の声の大きさ・明瞭さ」「授業の進行度合い」「教員の授業に対する熱意」「学生の質問に対する適切な対応」「テキスト・教材が授業の役に立っているか」「板書・視聴覚機器等が授業の役に立っているか」の9項目、“自己評価”について「この授業に取り組む姿勢（積極性）」「この授業の出席度合い」の2項目、そして、“総合評価”として「全体的な満足度合い」の1項目、合計12の質問項目を設定し、それぞれに対して「評価 悪」から「評価 良」の5段階で回答してもらった。回収したアンケートは、担当教員にフィードバックした。

ただし、受講者数が少なく、アンケートに回答した学生が特定できるような場合には、無理に回答をさせない方式をとり、アンケート結果を報告するか否かは、授業担当教員に一任された。その結果、前期において、実際のアンケート実施科目数及び実施率は36科目（実施率46.2%）、アンケート回収枚数及び回収率は、210枚及び回収率34.5%であった。

平成19年度の評価結果を下の表に示すが、大多数が「評価3」以上の良好な結果であった。

教員による改善報告書への具体的な記載事項は以下のごとくである。

- ①今後もより良い講義になるよう鋭意努力していきます。
- ②回収できたアンケートは3件のみで、授業を受けた学生の50%にも満たない回収率でした。これは、私の授業が評価に値しないと、学生が判断したのかもしれませんが、それならそれで、そのことをアンケートに書くべきです。学生の怠慢としか言いようがありません。また、感想・意見を記入する欄にも特に記載はありませんでした。アンケートに真剣に答えていない証拠です。われわれ

学生による授業評価

項 目	平成19年前期				
	78科目に対して、36科目で実施され計210名の回答				
	評価 良	評価 4	評価 3	評価 2	評価 悪
シラバスに記載された学習目標が身に付いたか	83	71	47	6	1
授業内容の質の高さ	110	77	21	0	0
話し方の適切さ	118	69	17	4	0
授業中の、教員の声の大きさ・明瞭さ	127	57	22	2	0
授業の進行度合い	106	74	24	4	0
教員の授業に対する熱意	133	62	12	1	0
学生の質問に対する適切な対応	122	51	33	1	0
テキスト・教材が授業の役に立っているか	103	67	38	0	0
板書・視聴覚機器等が授業の役に立っているか	117	57	30	2	1
この授業に取り組む姿勢（積極性）	79	77	48	4	0
この授業の出席度合い	113	65	23	6	1
全体的な満足の度合い	93	88	27	0	0

は、少しでも授業を改善するために、授業評価を受けて、学生の意見を聞こうとしているのに、評価を下すべき学生が、このような態度では話になりません。学生はいつでもよいと思っているでしょう。これでは、正しい評価も期待できませんし、こちらも真面目に耳を傾ける気持ちにもなりません。まさに、学生と教官の形式的はご挨拶になっています。つまり、開始した直後に既に形骸化しています。授業評価アンケートに対する学生の真摯な態度を期待します。

3. 教員による授業公開・授業参観

教員による授業公開・授業参観を平成19年12月3日から12月21日までの期間に実施した。延べ13科目が授業公開され、延べ42名が授業参観した。延べ37人が参観した平成18年度よりは僅かながら参観者が増加した。授業参観後は授業参観アンケートを実施し、授業公開した担当教員にフィードバックした。

授業参観アンケートの具体的内容は以下のごとくである。

- ①現在、準備中の講座 HP に、e-learning 同様の on-demand に講義資料のダウンロードを計画中との積極的な報告があり、それを受けて「大学院の講義の配付資料をダウンロード出来るような HP を大学院の HP に設定して

頂ければ幸いです。」の意見があり、現在行っている e-learning 同様の on-demand の方法を知らなかった教員に対し、事務側から周知出来たことが収穫であった。

- ②これからも、遠隔地（例えば、鹿屋市）や鹿児島市内の病院勤務でも時間的に講義に出席できない学生には e-learning で講義ファイルを THESIS にアップロードして課題レポートをメールで提出させ、コメントを送るというシステムを用いて、単位を取れるようにしたいと思う。
- ③今回時間がないと思ったのでネットでのアクセス画面を映写しませんでした。時間的には十分時間がとれたと思うので、次回からパワーポイントと療法で行いたいと思う。レジストレーションを必要なサイトについても継続的にできるセットアップなどの対策を考えて、最初の時間に設定するなどしてから講義をしたいと思う。また、今回は実行プログラムを用いた検索の方法も含めて行えるように準備したい。
- ④導入部分基礎的な部分の説明を行いながら、できるだけ高度な内容まで説明できるように工夫して行きたい。参考資料も少し中身が多すぎるので、ポイントが分かるように工夫したい。

（文責：医歯学総合研究科 FD 委員長 米澤 傑）

保健学研究科FD活動報告

平成19年度の保健学研究科FD委員会の活動として、①FD研修会、②学生による授業評価、③教員による修士論文発表の評価、④FD活動を契機とした授業方法・内容改善についてのアンケート調査を実施した。それぞれの活動について概略を述べる。

1. FD研修会

平成19年9月18日に「フィジカルアセスメント実践・教育技術向上のために」をテーマに医学部FD委員会、医歯学総合研究科FD委員会との共催で研修会を実施し、平成20年2月27日には「保健学の地域連携の実践と諸問題」をテーマに保健学研究科単独で研修会を開催した。共同開催分は、医学部FD委員会で詳細を報告しているのでここでは割愛し、保健学研究科が単独で開催した研修会について報告する。研修会のプログラムは、以下に示すとおりであった。

I 実践例の報告 15:30~16:30

(含：質疑応答)

司会：鹿児島大学 大学院保健学研究科
理学療法学分野 米 和徳教授

1. 膠原病の子どもとその家族に対する支援と連携

鹿児島大学 大学院保健学研究科
臨床看護学分野 武井修治教授

2. 鹿児島「高次脳機能障害者支援推進委員会」の活動報告

鹿児島大学 大学院保健学研究科
作業療法学分野 窪田正大講師

3. ピア活動と思春期健康教育

—地域のニーズとともに—
鹿児島大学 大学院保健学研究科
臨床看護学分野 下敷領須美子准教授

II 特別講演 16:30~18:30 (含：質疑応答)

1. 司会：鹿児島大学 大学院保健学研究科
研究科長 浜田博文教授

「医学部保健学科の目指すものとは何か

—金沢大学の取り組み—

天野良平教授：金沢大学 大学院医学系研究科
保健学専攻長（保健学科長）

2. 司会：鹿児島大学 大学院保健学研究科
基礎看護・地域看護学分野 小林奈美教授

「臨地相互交流型の教育研究を実践して

—金沢大学の取り組み—

稲垣美智子教授：金沢大学 大学院医学系研究科
保健学専攻（基礎看護学講座）

研修会への参加者は56名であり、その内訳は、保健学研究科教員45名、附属病院職員1名、事務職員1名、学生5名、その他（市町村職員など）4名であった。開催時にアンケート調査を行い41名から回答が得られた（回収率73.2%）。以下にアンケートの結果を示す。

1) 企画および内容について（項目を設定しての質問）

(1) プログラム全般

1. プログラムの内容は、

回答	人数	%
非常に良い	18	43.9
良い	19	46.3
普通	2	4.9
あまり良くない	1	2.4
無回答	1	2.4

2. プログラムの開催時間は、

回答	人数	%
非常に良い	13	31.7
良い	17	41.5
普通	7	17.1
あまり良くない	3	7.3
無回答	1	2.4

各学部のFD活動報告

3. プログラムの開催場所は、

回答	人数	%
非常に良い	14	34.1
良い	22	53.7
普通	4	9.8
無回答	1	2.4

(2) 実践例の報告

1. 発表時間は適切だった。

回答	人数	%
強くそう思う	10	24.4
ややそう思う	13	31.7
どちらでもない	5	12.2
あまり思わない	11	26.8
全く思わない	1	2.4
無回答	1	2.4

2. 発表内容は明快だった。

回答	人数	%
強くそう思う	20	48.8
ややそう思う	15	36.6
どちらでもない	5	12.2
無回答	1	2.4

3. 発表内容は今後の参考になった。

回答	人数	%
強くそう思う	20	48.8
ややそう思う	17	41.5
どちらでもない	3	7.3
無回答	1	2.4

4. 質疑応答の時間は適切だった。

回答	人数	%
強くそう思う	11	26.8
ややそう思う	12	29.3
どちらでもない	10	24.4
あまり思わない	5	12.2
無回答	3	7.3

(3) 特別講演

1. 発表時間は適切だった。

回答	人数	%
強くそう思う	17	41.5
ややそう思う	19	46.3
どちらでもない	3	7.3
無回答	2	4.9

2. 発表内容は明快だった。

回答	人数	%
強くそう思う	21	51.2
ややそう思う	16	39.0
どちらでもない	1	2.4
あまり思わない	1	2.4
無回答	2	4.9

3. 発表内容は今後の参考になった。

回答	人数	%
強くそう思う	21	51.2
ややそう思う	16	39.0
どちらでもない	1	2.4
あまり思わない	1	2.4
無回答	2	4.9

4. 質疑応答の時間は適切だった。

回答	人数	%
強くそう思う	15	36.6
ややそう思う	20	48.8
どちらでもない	2	4.9
あまり思わない	1	2.4
無回答	3	7.3

2) 研修会全般についての意見（自由記載・抜粋）

- ・「保健学」とは何かを考えてゆきたい。（考えている人がいるのに感激）
- ・地域との連携の実践において保健学科の教育のあり方について下敷領先生のお話は興味深かったです（時間がなくて残念でしたが…）。このような視点を今後生かしていきたいです。

- ・元気で勇気と刺激を頂きました。何をすべきか考えさせられました。
- ・自分の研究をどうやっていくか、立場としてのあり方がわかりました。
- ・保健学科全体としての取り組みの必要性を感じました。保健学科全体として生かして欲しいと思いました。
- ・もっと地元、臨地との輪を広げ、地元に貢献できるような研究をしていきたいと改めて思いました。
- ・地域連携の必要性を実感した。自分でも今後考えていきたいと思いました。
- ・学生にもっと参加してもらった方が良かった。
- ・保健学と地域連携について学び、卒業後の進路について参考にしたいと思った。
- ・これから今まで以上にしっかり勉強していこうと思いました。
- ・最新の研究内容を知る機会として自分にとって役立ったと思う。
- ・家族会などのボランティアに今後参加する機会を作っていきたい。
- ・大学院等への進学も視野に入れたい（自分の興味がある分野の発掘：保健学に関連して）。
- ・大学のホームページなどもこまめにみていきたい。

2. 学生による授業評価

平成19年度は、前期10科目、後期8科目で学生による授業評価を実施した。評価方法は、アンケート調査であり、調査票には以下に示す質問項目と授業についての意見を述べる自由記載欄を設定した。質問項目5は、「0回」「1・2回」「3・4回」「5回以上」の選択肢から回答してもらい、その他の質問項目に対しては、「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」「どちらかと言えばそう思わない」「そうは思わない」「判らない」の選択肢から選び、回答してもらった。

あなた自身について

- 1 この授業のシラバスを前もって読みましたか
- 2 この授業の予習又は復習をしましたか
- 3 この授業科目に関連する本（参考書や文献

等）を読みましたか

- 4 授業中にノートをとりましたか
- 5 この授業を何回欠席しましたか

授業に対する評価

- 6 授業はシラバスに沿った内容でしたか
- 7 配布資料は適切であり、授業に役立ちましたか
- 8 授業内容に興味を持ってましたか
- 9 授業の進め方は適切でしたか
- 10 教員は授業に対する熱意がありましたか
- 11 授業中の話し方、声の大きさ、明瞭さは良かったですか
- 12 学生の質問に対して適切な対応がなされましたか
- 13 授業を受講して、知力・学力の向上に役立ちましたか
- 14 この授業は、全体的に満足できるものでしたか

アンケート調査の結果を前期、後期ごとに次頁の表に示す。この表では回答を、1:「そう思う」、2:「どちらかと言えばそう思う」、3:「どちらかと言えばそう思わない」、4:「そうは思わない」、5:「判らない」（質問項目5のみ、1:「0回」、2:「1・2回」、3:「3・4回」、3:「5回以上」）として表している。また、オムニバス方式で開講されている科目は、担当教官ごとに評価を行ったため分析対象とした調査票の数は、前期149、後期73となっている（質問項目によっては、未記入の場合もあり、合計がこの数に満たないものもある）。

「授業に対する評価」では、「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」と回答している者が多く、概ね良好な評価が得られたが、「あなた自身について」の回答結果からは、シラバスの利用、予習・復習、さらに関連する文献等での学習の不足がうかがわれた。

この学生による授業評価の結果は、当該科目の調査票と共に担当教員にフィードバックした。

平成19年度前期 学生による授業評価の結果

回答では、1:「そう思う」、2:「どちらかと言えばそう思う」、3:「どちらかと言えばそう思わない」、4:「そうは思わない」、5:「判らない」(質問項目5のみ、1:「0回」、2:「1・2回」、3:「3・4回」、3:「5回以上」)を表している。

質問項目	1 この授業のシラバスを前もって読みました				
回答	1	2	3	4	5
人数	61	52	24	12	0
%	40.9	34.9	16.1	8.1	0
質問項目	2 この授業の予習又は復習をしましたか				
回答	1	2	3	4	5
人数	76	41	26	5	0
%	51.4	27.7	17.6	3.4	0
質問項目	3 この授業科目に関連する本(参考書や文献等)を読みましたか				
回答	1	2	3	4	5
人数	83	36	21	8	1
%	55.7	24.2	14.1	5.4	0.7
質問項目	4 授業中にノートをとりましたか				
回答	1	2	3	4	5
人数	111	29	7	1	0
%	75.0	19.6	4.7	0.7	0
質問項目	5 この授業を何回欠席しましたか				
回答	1	2	3	4	-
人数	121	16	0	2	-
%	87.1	11.5	0	1.4	-
質問項目	6 授業はシラバスに沿った内容でしたか				
回答	1	2	3	4	5
人数	93	43	1	0	12
%	62.4	28.9	0.7	0	8.1
質問項目	7 配布資料は適切であり、授業に役立ちましたか				
回答	1	2	3	4	5
人数	122	24	2	0	1
%	81.9	16.1	0.13	0	0.7
質問項目	8 授業内容に興味が持てましたか				
回答	1	2	3	4	5
人数	126	21	2	0	0
%	84.5	14.1	1.3	0	0
質問項目	9 授業の進め方は適切でしたか				
回答	1	2	3	4	5
人数	126	19	4	0	0
%	84.6	12.8	2.7	0	0
質問項目	10 教員は授業に対する熱意がありましたか				
回答	1	2	3	4	5
人数	129	19	1	0	0
%	86.6	12.8	0.7	0	0
質問項目	11 授業中の話し方、声の大きさ、明瞭さは良かったですか				
回答	1	2	3	4	5
人数	130	19	0	0	0
%	87.3	12.8	0	0	0
質問項目	12 学生の質問に対して適切な対応がなされましたか				
回答	1	2	3	4	5
人数	129	19	1	0	0
%	86.6	12.8	0.7	0	0
質問項目	13 授業を受講して、知力・学力の向上に役立ちましたか				
回答	1	2	3	4	5
人数	127	21	1	0	0
%	85.2	14.1	0.7	0	0
質問項目	14 この授業は、全体的に満足できるものでしたか				
回答	1	2	3	4	5
人数	120	26	3	0	0
%	80.5	17.5	2.0	0	0

平成19年度後期 学生による授業評価の結果

回答では、1:「そう思う」、2:「どちらかと言えばそう思う」、3:「どちらかと言えばそう思わない」、4:「そうは思わない」、5:「判らない」(質問項目5のみ、1:「0回」、2:「1・2回」、3:「3・4回」、3:「5回以上」)を表している。

質問項目	1 この授業のシラバスを前もって読みました				
回答	1	2	3	4	5
人数	37	11	6	18	1
%	50.7	15.1	8.2	24.7	1.4
質問項目	2 この授業の予習又は復習をしましたか				
回答	1	2	3	4	5
人数	20	29	16	8	0
%	27.4	39.7	21.9	11.0	0
質問項目	3 この授業科目に関連する本(参考書や文献等)を読みましたか				
回答	1	2	3	4	5
人数	27	21	17	8	0
%	37.0	28.8	23.3	11.0	0
質問項目	4 授業中にノートをとりましたか				
回答	1	2	3	4	5
人数	54	13	6	0	0
%	74.0	17.8	8.2	0	0
質問項目	5 この授業を何回欠席しましたか				
回答	1	2	3	4	-
人数	39	20	0	0	-
%	66.1	33.9	0	0	-
質問項目	6 授業はシラバスに沿った内容でしたか				
回答	1	2	3	4	5
人数	39	19	15	0	0
%	53.4	26.0	20.6	0	0
質問項目	7 配布資料は適切であり、授業に役立ちましたか				
回答	1	2	3	4	5
人数	56	16	1	0	0
%	76.7	21.9	1.4	0	0
質問項目	8 授業内容に興味が持てましたか				
回答	1	2	3	4	5
人数	58	14	1	0	0
%	79.5	19.2	1.4	0	0
質問項目	9 授業の進め方は適切でしたか				
回答	1	2	3	4	5
度数	56	17	0	0	0
%	76.7	23.3	0	0	0
質問項目	10 教員は授業に対する熱意がありましたか				
回答	1	2	3	4	5
人数	62	10	1	0	0
%	84.9	13.7	1.4	0	0
質問項目	11 授業中の話し方、声の大きさ、明瞭さは良かったですか				
回答	1	2	3	4	5
人数	62	11	0	0	0
%	84.9	15.1	0	0	0
質問項目	12 学生の質問に対して適切な対応がなされましたか				
回答	1	2	3	4	5
人数	63	9	1	0	0
%	86.3	12.3	1.4	0	0
質問項目	13 授業を受講して、知力・学力の向上に役立ちましたか				
回答	1	2	3	4	5
人数	63	10	0	0	0
%	86.3	13.7	0	0	0
質問項目	14 この授業は、全体的に満足できるものでしたか				
回答	1	2	3	4	5
人数	57	16	0	0	0
%	78.1	21.9	0	0	0

3. 教員による修士論文内容の評価

修士論文発表会において発表内容について教員による評価を行った。対象となった学生は、22名であった。評価項目は、「発表の態度・仕方はよかったか」「発表の内容は良かったか」「スライド等はよく整理され分かりやすかったか」「質問に対して的確に答えていたか」「独自の発想で研究したことが感じられたか」であり、秀（5点）・優（4点）・良（3点）・可（2点）の4段階で評価した。結果は、領域ごとの平均点等を資料として添付し、各指導教員にフィードバックする予定である。

4. FD活動を契機とした教育方法・内容改善についてのアンケート調査

研修会、学生による授業評価、教員による修士論文発表の評価などのFD活動を契機として教育方法・内容等で改善された点を明らかにするためにアンケート調査を平成20年3月に実施した。報告された改善点の例を以下に示す。なお、改善点の内容は一部簡略化されたものもある。この中で特筆すべきは、理学療法学分野および作業療法学分野において教員全員で学生の指導を行う体制が整えられたことである。以下の内容から平成19年度に実施した一連のFD活動は、保健学研究科における教育方法・内容の改善に関して重要な役割を果たしたと考えられる。

- ・今年度から理学療法学専攻では独自に修士論文予備審査会を行い、他の教員の意見を反映させた修士論文となっている。理学療法学専攻の全ての教員が関わることで、これまでよりも質が高い修士論文になったと考える。今後、理学療法学専攻では独自に博士論文予備審査会を行う予定であり、博士論文も充実すると考える。
- ・作業療法学分野では、大学院生の研究指導のため教員全員で指導・助言を行う機会（研究計画検討会）を設けた。
- ・シラバスへの記述が具体的にになり、具体的に記述することがきっかけで、授業内容を見直した。4月から他の教員と合同で週に1回勉強会を行うことになった。他の教員の視点からの意見や指摘が勉強になり、自分1人で修士論文指導を行うよりも質が高い修士論文になったと考える。
- ・担当科目において学生に課していた文献報告について、課題数を減らし内容吟味に重点をシフトさせた。
- ・学生の学問的・研究的思考を発展させるための教授方法について考えるようになった。学生が主体的に関われる講義の組み立てや教授方法について工夫するようになった。
- ・研究分野の関連する学会、研修会に参加した際にトピックとなる情報を大学院授業に必ず盛り込む工夫を行った。
- ・論文発表の評価は、意識して指導するようにしています。金沢大学の先生方のFDに関する講演は、とても参考になりました。すぐに改善に生かせる状態ではありませんが、努力はしようと思います。
- ・授業では、パワーポイントを用い授業内容の理解を深めさせることができた。特別研究では、2年間の研究成果を国際学会（21st Pacific Science Congress）でポスター発表させた。
- ・学部学生による授業評価のなかで、学生自身の評価が低い項目として、事前の予習・下調べが挙げられていた。そこで、大学院前期課程の演習や特論において、次回の講義テーマについて簡略に説明し、個々の学生にそのテーマに関する情報があれば、講義の際に提供するように提案した。その結果、講義のテーマに沿った議論が活性化したと感じられた。
- ・今後の大学院教育へ生かしたい内容は、教員の研究発表内容が大学院における教育内容に大きく影響するため、（改善にもなりますが）自分の論文内容の質を高めたいと考えます。
- ・スライドの送りが速く、ノートを取る時間がないとの指摘あり、スライドの送りを遅くしノートを取れる時間的余裕を与えるとともに、ノートを必ず取って欲しい部分に下線を引いた。
- ・講義目標をきちんと計画することにより、講義内容に充実感が増すことになった。講義概要を表記することにより、より概要に沿った講義を行うようになった。
- ・単に自分の専門分野の講義だけでなく、学生の質問や疑問点を聞く時間をもうける。学生と研究テーマについても討論する。学生が何を求めて自分の授業に望んでいるかを聞く。

（文責 保健学研究科FD委員長 築瀬 誠）

理工学研究科FD活動報告

本学大学院理工学研究科は、表1-1に示す博士前期課程工学系8専攻、理学系4専攻、および博士後期課程工学系3専攻、理学系1専攻で組織され、ナノ構造先端材料工学以外の博士前期課程の各専攻は、それぞれ工学部および理学部の同名の学科において学士課程の教育も行っている。

表1-1 理工学研究科の専攻

	博士前期課程	博士後期課程
工学系	機械工学	物質生産工学 システム情報工学
	電気電子工学	
	建築学	
	応用化学工学	
	海洋土木工学	
	情報工学	
	生体工学	
	ナノ構造先端材料工学	ナノ構造先端材料工学
理学系	数理情報科学	生命物質システム
	物理科学	
	生命化学	
	地球環境科学	

本研究科では、「理工学研究科の理念・教育目標に基づき教育の内容及び方法の改善を図る。」ことを目的として「鹿児島大学大学院理工学研究科ファカルティ・ディベロップメント委員会規則」を平成19年5月に新しく制定し、平成19年4月1日より、理工学研究科ファカルティ・ディベロップメント委員会（以下、「理工学研究科FD委員会」という。）を発足させた。

本報告書では、1. 大学院教育におけるFD活動の義務化、2. 理工学研究科の教育目標の公表など、3. 平成19年度理工学研究科FD活動、4. 今後FD活動への期待、について簡単に述べる。

詳細は「平成19年度鹿児島大学ファカルティ・ディベロップメント委員会活動報告書」を参照願えれば幸いである。

1. 大学院教育におけるFD活動の義務化

最初に大学院教育におけるFD活動が重要視されていることを再認識しておく。平成17年6月の「新時代の大学院教育」と題された中央教育審議

会の中間報告では、『第1章 国際的に魅力ある大学院教育に向けて』の『第2節第3項 課程制大学院の制度的定着の促進』の『(2) 大学院の人材養成目的に即した教育体制の整備』において、「人材養成に係わる目的の明確化」が提言された。同じく『第2章 新時代の大学院教育の展開方策』の『第1項 大学院教育の実質化（教育の課程の組織的展開の強化）のための方策』の『(1) 課程制大学院制度の趣旨に沿った教育の課程と研究指導の確立』の『①コースワークの充実・強化』において「学習課題を複数の科目等を通じて体系的に履修するコースワーク」の充実が提起され、同じく『②教員の教育・研究指導能力の向上のための方策』においては、「大学院教育の組織的展開が有効に機能するよう、各大学院の課程の目的、教育内容・方法についての組織的な研究・研修（FD）の実施」および「大学院の課程における成績評価基準の明示と厳格な成績評価の実施」並びに「大学院における教員の教育研究活動の評価の実施」についての提言がなされている。

法制度面では、文部省令第28号『大学設置基準』の一部が平成18年3月31日文科省令第11号として改正され、平成19年4月1日より施行された。前述の提言に対応して、同基準の第一条の二では「大学院は、研究科又は専攻ごとに、人材の養成に関する目的その他の教育研究上の目的を学則等に定め、公表するものとする。」、第十四条の二第2項では「大学院は、学生に対して、学修の成果及び学位論文に係わる評価並びに修了の認定に当たっては、客観性及び厳格性を確保する為、学生に対してその基準をあらかじめ明示するとともに、当該基準に従って適切に行うものとする。」、同十四条の三では「大学院は、当該大学院の授業及び研究指導の方法及び内容並び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究を実施するものとする。」、第十六条「修士課程の修了の要件は、大学院に二年（二年以外の標準修業年限を定める研究科、専攻又は学生の履修上の区分にあっては、当該標準修業年限）以上在学し、三十単位以上を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上、当該修士課程の目的に応じ、大学院の行う修士論文又

は特定の課題についての研究の成果の審査及び試験に合格することとする。ただし、在学期間に関しては、優れた業績を上げた者については、大学院に一年以上在籍すれば足りるものとする。」との規定が設けられた。

何れも実践においてやりがいのある仕事に向かって第一歩を踏み出したと再認識しよう。

2. 理工学研究科の教育目標の公表など

本理工学研究科においても、法制度化される以前から個々の専攻あるいは教員並びに学生が実質的に「世界に通用し活躍しうる人材」の「養成」と「への成長」を目指して従前より教育改善に取り組んできた。なお、研究科の組織に関わる全ての教員と学生が目的・目標を共有する証として、研究科教務委員会を中心とした検討により、平成20年度入学者用の博士前期課程並びに後期課程それぞれの履修要項には、各専攻の教育目標、あるいは前期課程（修士課程）のコースワーク、成績評価基準等について明示・公表しているの、これらを参照されたい。

3. 平成19年度理工学研究科FD活動

3.1 前期の活動：

理工学研究科の博士期前期課程各専攻のFD委員は、全員が学部の学科FD委員を兼務し一部の委員は博士後期課程の各専攻の委員をも兼務している。したがって、本研究科FD委員会が平成19年5月に発足できたときには、委員が所属する工学部および理学部においては、それぞれのFD委

員会委員として活動を開始していたため、事実上の本研究科FD委員会の開催は、表3-1に示すように9月に入ってからになった。

この間の事情は、第1には工学部FD委員会が数年来継続して行ってきた博士前期課程の授業までを含めた「学生による授業アンケート」や「FD講演会の開催企画」、あるいは、理学部FD委員会が博士前期課程の理学系専攻学生を対象として計画していた「講義に対する希望調査」などである。第2には、鹿児島大学ファカルティ・ディベロップメント委員会において、研究科FD活動の義務化に伴う活動経費支援のあり方などの議論が絡に付いたばかりであったことである。

以上の二つに加えて、従来、学部教育を前提として活動してきたFD活動、すなわち、学生により授業評価、FD講演会、ワークショップ等々、から類推して、少規模クラス、ゼミナール、演習、学位論文作成のため研究指導やコースワークなどの大学院教育におけるFD活動のありように戸惑いがあったことも遠因であろう。

このため、活動初年度の平成19年度前期の活動は、以下のようであった。

- (1) 理学系及び工学系にそれぞれ軸足を置いた活動の継続。
- (2) 第1回理工学研究科FD講演会として、カナダトロント大学工学部の川路正裕教授による講演会「欧米の大学・大学院における教育と研究の現状」を6月に開催。

なお、川路教授の講演会は、同教授が6月に鹿児島大学に来学される機会を捉えて、当初、工学

表3-1 平成19年度理工学研究科FD委員会の主な議題等

回	開催年月日	議題等
第1回	平成19年9月11日	議題1 平成19年度活動方針と活動について 議題2 その他
第2回	平成19年10月11日	議題1 アンケートについて 議題2 その他
第3回	平成19年12月13日	議題1 アンケート項目について 報告事項 平成19年度FD経費について ITPについて
第4回	平成20年1月24日	議題1 授業アンケートの集計について 議題2 活動報告書の作成について 報告事項 全学FDワークショップについて
第5回	平成20年2月29日	議題1 活動報告書の作成について 議題2 その他（平成20年度FD経費の予算請求について）
第6回	平成20年3月31日	議題1 活動報告所の作成について 議題2 その他

部FD講演会として企画されていたので、理工学研究科FD活動の一環としても共催の形で開催することが、急遽、5月の研究科運営委員会において諮られ、了承されている。

3.2 博士前期課程（工学系）専攻アンケート結果

前期開講の各授業科目に対して工学系の専攻では、平成16年度から継続して行っている学生による授業評価アンケートを学部と同一の様式で前期開講の各授業科目に対して実施した。設問項目は、下記の15項目である。

- ① 授業内容のシラバスとの一致
- ② 授業内容は役立つか
- ③ 興味深さ
- ④ 授業の理解
- ⑤ 教材や配布資料の適切さ
- ⑥ 宿題・レポート等は役立ったか
- ⑦ 授業目標の達成
- ⑧ 明快な文字
- ⑨ 明瞭な声
- ⑩ 教員の熱意
- ⑪ オフィスアワーの教員の対応
- ⑫ レポート・小テストの返却
- ⑬ 出欠状況
- ⑭ 予習・復習の時間
- ⑮ 満足度

図3-2-1に前期の授業科目について平成16年度からの推移を示す。同図上部は評点を下部には平成16年度前期の値に対する比率をプロットした。図から、以下の特徴が読み取れる。

- (1) 設問⑭一コマの授業に対する予習・復習の時間に対する評点2.5から3.0近傍に連続的に上昇しているのが目立つ。これは、図3.1.2から分かるように学生が予習・復習にかかる時間がおおよそ15時間から2時間に増加したことに相当する。また、設問⑥宿題等に臨んだ評点が、平成16年度より極めて僅かだが上昇している。
- (2) 設問①シラバス、設問③役立つ、設問④理解、設問⑦目標達成の各評点はそれぞれ平成16年度より上昇している。

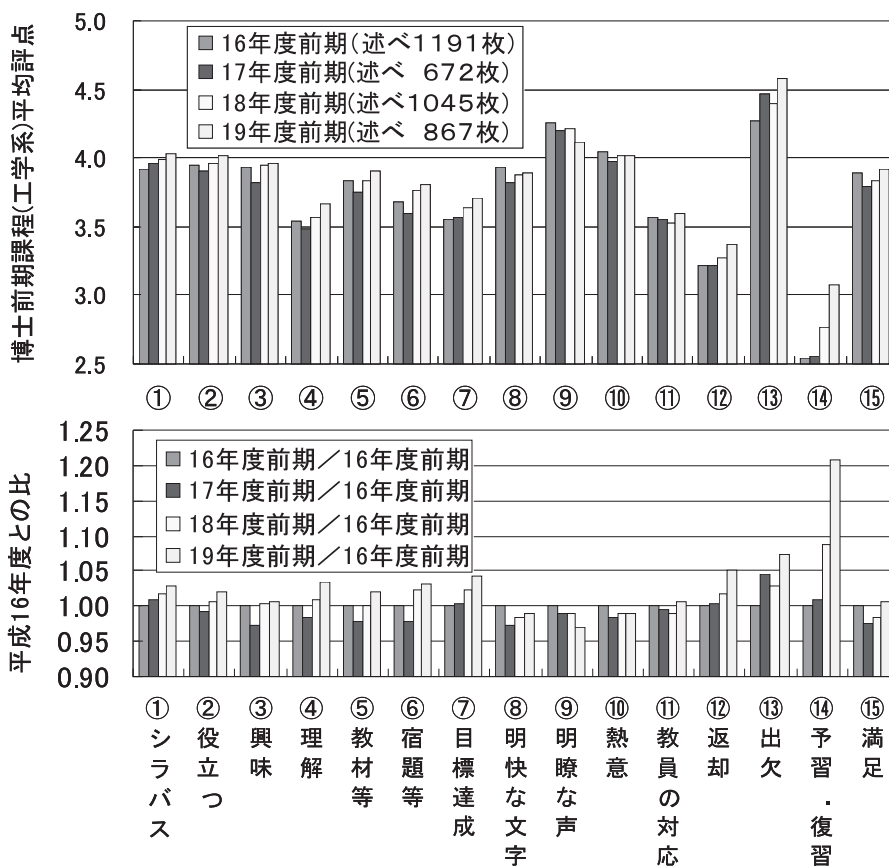


図3-2-1 博士前期課程（工学系専攻）授業評価アンケート結果（前期平均値）の推移

表3-2-1 平成19年後期工学系専攻科目の評価結果

設問項目	シラバス	理解度	研究に	仕事に	教養に	学部と	授業様式	教材や授業方法	宿題・レポート	明瞭な文字量専門性	明瞭な声適切な人数	熱意	質問	出席	予習と復習
工学系専攻平均	4.12	3.91	4.01	4.12	4.24	4.13	4.04	4.11	4.03	4.18	4.43	4.28	3.09	4.39	3.08

- (3) 上記の増加傾向に対して、設問⑧の明快な文字、設問⑨明瞭な声、および設問⑩教員の熱意の評点は、総じて4点前後で良好であるが、年度の推移としては若干下降気味である。
- (4) また、設問⑫のレポートの返却等は改善の結果が明瞭である。

これらを、総括してみると、学生の予習・復習の時間増加が理解を助け、学習目標達成に寄与しているのに対して、教員側の対応にはレポート等の返却以外に見るべき改善はなされていないようである。

学生の予習・復習時間増加の要因としては、学部でのJABEE対応型教育プログラムあるいは20単位制限を経験した学生が前期課程に進学し受講科目を絞った結果として、科目あたりの予習復習の時間が増えてきものと推測される。ただし、依然として3時間以上の予習・復習は出来ておらず、修士論文作成のための研究、研究室の後輩の研究指導、学費のためのアルバイトあるいは興味ある科目または輪講のみに時間を割いた、など調査してみることも必要であろう。

なお、学部の講義を前提としたアンケートであるため、実際はゼミ形式も多い専攻の科目にはそぐわないものも含まれている。設問9の「明瞭な声」は学部（おおよそ3.8程度）と比較して常に高い値だが、これはゼミ形式あるいは受講人数が少ないことの影響もあると思われる。

なお、平成19年後期からのアンケート項目は前期課程の多様な科目に対応するために設問を工夫し記述式の項目も増やされている。参考のため、平成19年後期の工学系専攻科目の評価結果を表3-2-1に示す。

19年度前期までと共通する部分を比較すると「理解度」の項目で評価が高いのが目立つ。その他の「シラバス」、「仕事に（役立つ）」、「熱意」、「出席」、「予習と復習」などの設問はおおむね19

年度前期までの結果と同じで、アンケートの変更による影響はあまり出ていない。

次に、新しく加えた「授業様式」の結果を見ると評点が4程度となっている。従来は全ての科目を講義形式（評点5）としてアンケートを実施していたが、実際はゼミなど他の形式の科目がかなり含まれていたことになる。授業形式と他の設問の評価の関係を調査すれば様々な知見が得られると思われる。しかし、今回は初めてのアンケートであったためか設問「授業様式」に対して同じ科目の学生でも回答が異なっていた。ここでは表3-2-1に平均値を挙げるに止める。

いまひとつの新しい項目に「質問」があるが、この評価結果は3.09と「予習と復習」の3.08に次いで低い値である。「予習と復習」と並んで改善すべき項目と思われる。

今回はアンケートの設問を見直したが、従来のアンケートと同様の設問では評価もほぼ同様であり継続性を確認できた。新しい項目については学部講義と同様なアンケートでは見えなかった、授業様式などの情報を得ることができた。理工学専攻のFDに使える有効なデータを集めるためにもアンケート設問や実施方法の更なる工夫が求められる。

3.3 博士前期課程（理学系）専攻アンケートの結果報告

理工学研究科理学系専攻のFD活動の一環として大学院学生の講義に対する希望を把握することを目的として修士課程前期1年目の学生を対象に19年7月にアンケート調査を実施した。数理情報学専攻5名（5/11）、物理学専攻5名（5/17）、生命化学専攻10名（10/12）、地球環境科学専攻10名（10/19）計30名（30/59）の回答を得た。

（結果）

それぞれの設問に対する結果は、以下のようになった。（表3-3-1～表3-3-4と●印部分の記述）

表3.3.1.a 設問1の(1)回答

科目数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	人
数理					1	1	1	1		1	
物理				1	2	2					
生化			1	5	2	1	1				
地環			2		4	3					
合計			3	6	9	7	2	1		1	

設問 1

- (1) 前期に受講した講義数を書いてください。
 (2) それはあなたにとって多いと感じましたか。
 (1: はい, 2: どちらともいえない, 3: いいえ)
 (3) そう感じた理由を簡単に書いてください。

表3.3.1.b 設問1の(2)回答

回答	1	2	3	人
数理	2	1	2	
物理	2	3	0	
生化	2	4	4	
地環	1	5	4	
合計	7	13	10	

(気になる回答のみ示す。)

- レポートや復習に追われていた。(2件)
- 自分に関係する講義を受講したいと思ったが後期に集中していたので前期には3つしか受講できなかった。後期になると就職活動が始まるので、偏りがないようにカリキュラムを組んでほしい。
- 研究時間がとられる。
- あまり魅力的な講義がなかった。

設問 2

今年度から各専攻において複数の先生で担当するコア科目が導入されましたがこの科目はあなたにとって有益でしたか。

- (1: 有益だった, 2: どちらともいえない, 3: 有益でなかった)

その理由を簡単に書いてください。

表3.3.2 設問 2の(1)回答

回答	1	2	3	人
数理	3	2	0	
物理	2	2	1	
生化	1	8	1	
地環	7	3	0	
合計	13	15	2	

- 今年度から鹿児島大学に来た私としては、ど

の先生が何を研究しているのかを、大まかに理解することが出来たから。● 鹿大に来てどの先生がどんな研究をしているのかを知ることが出来て外部の人間にはよかったと思う。ただ、専門外の話だと難しい気がする。● 学部生の時にそのような授業は受けたので必要ないと感じた。● 大学院から鹿児島に来たので、より多くの先生方と知り合いになれたし、専門の話も聞けたから。● 様々な分野の話が聞けてすごくよかったと思う。1コマずつ先生が代わっていたため、時間が少なく、もっと聞きたいと思った。● 面白い話が聞けた。● いろんな専門の先生の話聞いて面白かった。様々な研究手法があり、いろいろな角度から研究が行われているのを聞いて、研究に対する意欲が湧いた。● 自分が専門とする研究以外のことが聞けて視野が広がりよかった。● 1つの意見だけでなく複数の考え方をきくことができるため。● 幅広い分野の話が聞けて面白かった。● 演習が組み込まれていて主体的に取り組めた。● 自分の研究に関係ないこと的时间をかけることは疑問。● ひとつのテーマごとの授業時間が少なく中途半端であった。● 各先生方の研究分野を端的に学ぶことができるから。● 複数の先生から学べることで新しい興味もてるようになって良かった。しかし、この科目は4年でゼミの担当教員を決定する前にした方が良いとおもいます。● いつどのような先生がくるかわからなかったので対応(予習)にとっても困った。

設問 3

普通の大学院科目の内容に関してあなたは何を希望しますか。

- (1: より高度に専門化する, 2: より基礎を重視する, 3: より概論的にする, 4: その他)
 その他の内容も含め理由を簡単に書いてください。

表3.3.3 設問3の回答

回答	1	2	3	4
数理	0	4	0	1
物理	2	2	0	1
生化	5	2	0	3
地環	4	1	3	2
合計	11	9	3	11

人

- 出来るだけ多くのことを概論的に学び、その中で興味を持つことのできたものだけを自分で学習すればよいと思うからです。
- 学部で基礎をかため、大学院で専門化し研究に役立てたい。
- 必修科目数を減らしてほしいです。大学院で授業はあまり必要ないと思います。
- 自分の専門とは全く違った授業でとても細かくされると、ついていけないので、自分に必要な部分は自分で研究するので。
- 学部の頃と違って学習意欲もわいています。もちろん学部で学んだ基礎が大前提だと思いますが、もっと膨らませて専門的に学んで行きたいです。
- 面白そう。
- 基礎と、高度な専門的なところを同時にしたい。
- 学部の専門科目だけの授業では正直言って？（判読できず）習科目の少なさがゆえに卒論では苦勞した。よって修論に向けて、これらを補う形の内容を希望する。
- 学部時代にある程度の基礎知識を学んでいるので、基礎を復習あるいは学習しながら、専門的に勉強すればよいと思う。
- 学部の講義のレベルでは大学院までいった意味がない。
- 応用的な講義のほうが役に立つ。
- 基礎的なものが足りないと思うため。
- 自分の研究専門分野があるのに今さら概論的なものは不要。
- 学部の講義では基礎が充分身につけていないから基礎重視がよい。
- 1期は基礎重視、2期は専門性重視のように分けたらどうか。
- 学部での内容も完全に取得できていない。
- 先生の中にはこの内容は知っているだろうと決めつけて専門的に話を進めていく人もいるので、基礎を重視してもらいたい。
- It is need for all students, I think so.

設問 4

大学院の授業形態としてあなたはどれを希望しますか。

(1: 講義形式, 2: 演習形式, 3: ゼミ・輪読形式, 4: その他)

その他の内容も含め理由を簡単に書いてください。

表3.3.4 設問 4の回答

回答	1	2	3	4
数理	3	1	0	1
物理	0	1	1	3
生化	2	2	3	3
地環	1	3	5	1
合計	6	7	9	8

人

- 対話形式で行うほうが聞きたいことをしっかり聞くことが出来るからです。
- 輪読だと、自分の担当外の時に楽をしがちだから、演習のほうが身につく。
- 自分が参加できる授業がよいと思います。
- 質問が高度化するので、先生との1:1の形式がよい。
- 大学院の授業は人数が少ないのが特徴。先生も生徒も意見を交え、積極的に授業に参加できるスタイルを望みます。
- 一つには決められない。先生の話、専門的なことも聞きたいし、自分のプレゼンもしたいし。
- 実際に自分で調べてそれをみんなで議論するというのが一番実につくと思われる。
- 演習で実践能力を養わなければ、研究に役立たないと思う。
- 少人数の討論形式を通じて、その専門性から自らに何が必要かを見いだせる。
- 講義だったり演習だったり、いろいろなことをやって欲しい。
- ゼミ形式のほうがより関心をもって取り組めるが、全部ゼミ形式となると準備等で時間的に難しい。
- 輪読と講義との組み合わせがよい。
- 輪読形式は自分の担当したところ以外印象に残らない。
- 講義形式と演習形式を併せたような授業形態がよいです。講義だけでは応用できず、演習だけでは基礎が理解できないからです。

(考察)

上述の結果より以下のような傾向が推察される。

- (1) 設問1の結果より講義の量に関してはそれほど多すぎるという印象は受けない、各々が自分にあった講義の履修計画を建てているように思える。
- (2) 設問2の結果より今年度から導入されたコア科目の評判は概ね良好と考えることができる。ただし生物化学専攻においてはアンケートをおこなった時期にはまだコア科目は開講

されておらず答えようがなかったと思われる。学生のコメントの中に4年生の専門ゼミ配属になる前にあるべきという意見はこの科目の3年生解放も含めて考える必要があるかも知れない。

- (3) 設問3の結果に関しては、実験系である生化・地環と理論系である数理・物理で結果が分かれ生化・地環ではより高度化・専門化された講義、数理・物理ではより基礎的な講義が求められている傾向があるようである。
- (4) 設問4の結果より数理に関しては講義形式・演習形式を希望する傾向があり他学科では演習形式・輪読形式を希望する傾向があるようである。

これらのことを今後の理工学研究科の理系のFD活動の資料として生かしてゆきたい。

3.4 後期の活動

[1] 活動方針について

第1回理工学研究科FD委員会において、平成19年度の活動方針と活動について協議し、以下の前期活動の了承した。

- (1) 全学FD委員会の「FD経費の予算要求に係るFD活動についての基本方針」に則れば、理工学研究科を単位とした活動が必要であること。
- (2) 工学系については、委員長〔工学部選出の全学FD委員会委員、(兼)理工学研究科選出〕より、平成16年度から博士前期課程についても授業評価アンケートを実施し分析を行っていることが報告された。
- (3) 理学系については種市委員(理学部選出の全学FD委員会委員)から、どのように学生のニーズに対応していくのかについて、前期に受講した講義数に関する項目、コア科目導入についての項目、科目の内容(専門・基礎・概論)についての項目、授業形態についての項目等でアンケートを実施したとの報告があった。

これらを踏まえて、後期においては以下の活動方針と活動が概ねにおいて合意された。

- (1) 平成19年度後期から、理系、工系専攻に共通の質問項目と回答様式を用いて「学生による授業評価アンケート」を実施する。

(2) 第2回FD講演会は理系専攻を中心に企画する。(本年度の実施は取り止めとなった。)

(3) 印刷体の理工学研究科FD活動報告書の作成を目指す。

[2] 学生による授業評価アンケートの実施、及び結果の集計と分析について

大学院の授業形態は、受講人数の規模の大小、教科書や教材等の種類、輪講あるいは課題発表形式、演習あるいはゼミナール等々、非常に多様である。加えて、一般論としては学生の学修意欲は旺盛であり専門的基礎学力等も十分精査の上入学しているはずである。したがって、大学院の授業アンケートの意義・目的・方法・結果の分析、等々についての様々な議論や検討が必要とは言及するまでもないことである。

種々の議論の結果、自由記述をより多く期待して、図3-4-1に示した質問項目に図3-4-2に示す回答用紙を用いて、学生による授業評価アンケートを後期の学期末試験の時期に実施した。

3.5 博士前期課程の授業評価アンケートの分析結果(その2 平成19年後期)

平成19年度から理工学研究科FD委員会が設置された。工系の専攻では平成19年度前期まで学部のアンケート用紙を使って前期課程のFDアンケートを実施してきたが、大学院の実情に合わせたアンケート項目を検討し工系と理系を合わせた専攻全体で以下のような項目のアンケートを平成19年後期から実施した。アンケートは以下のような15項目のマークシートとABCの枠ごとの自由記述欄で構成された。

(A 授業内容等について)

- 1 シラバス
- 2 理解度
- 3 研究に(役立つ)
- 4 仕事に(役立つ)
- 5 教養に(役立つ)
- 6 学部と(連続性・関連性)

(B 授業方法等について)

- 7 授業様式
- (5). 講義形式
- (4). 書籍輪読のゼミ形式

理工学研究科博士前期課程
 学生による授業評価アンケート（平成19年度・後期）

鹿児島大学大学院理工学研究科では、授業の改善と理解度の向上を目指して、授業を受けた諸君の評価や意見を参考にしたいと思います。以下の各設問に対して、選択肢の中から一つだけ選び回答用紙の該当する番号欄に○印を記入し、また、記述欄に意見を記入下さい。なお、このアンケートは統計的に処理され、個人名が出たりすることはありませんし、成績評価にも関係ありませんので、適切な評価や率直な意見を記入してください。

A（授業内容等について）

設問1 この授業のシラバス記載内容は受講申請に役立ち、問題意識を持って授業に臨むことが出来た。

5. 大いにそう思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全くそう思わない

設問2 授業はほぼ理解でき、学習目標は達成できそう。

5. 大いにそう思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全くそう思わない

設問3 授業の内容は自身の研究を進める上で役立つと思う。

5. 大いにそう思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全くそう思わない

設問4 授業の内容は目指す(職業上の)高度専門知識として役立つと思う。

5. 大いにそう思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全くそう思わない

設問5 授業の内容は自身の教養や学力を高める上で役立つと思う。

5. 大いにそう思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全くそう思わない

設問6 学部で学習したこととの連続性・関連性が十分あった。

5. 大いにあった 4. だいたいあった 3. どちらともいえない 2. あったと思わない 1. 全く無かった

【自由記述A】授業内容全般について感想・考えた点など、改善に役立つと思われる意見を回答用紙の自由記述欄に簡潔に書いてください。特に、理解できない場合にはどこに原因があると考えますか。

B（授業方法等について）

設問7 授業はどのような様式ですか、担当教員の指示に従って回答してください。(専門書籍、原著論文には外国語によるものを含みます。))

5. 講義形式 4. 書籍輪読のゼミ形式 3. 論文輪読のゼミ形式 2. 資料調査と内容発表 1. その他

設問8 使用した教科書や教材は授業の理解に役立った。(使用しなかった場合には記入しなくて良い。)輪読形式等の場合は、授業方法と手段は適切であった。

5. 大いにそう思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全くそう思わない

設問9 宿題・レポート・小テストなどは授業の理解に役立った。(無かった場合には記入しなくて良い。)

5. 大いにそう思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全くそう思わない

設問10 板書やスクリーンなどは明瞭だった。(調査や発表形式の場合は、量・専門性に対する要求は適切だった。)

5. 大いにそう思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全くそう思わない

設問11 教員の声はよく聞こえた。(輪読やゼミ形式の授業の場合には、受講者の人数は適当であった。)

5. 大いにそう思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全くそう思わない

設問12 学生に理解させようとする教員の熱意が感じられた。

5. 大いにそう思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全くそう思わない

【自由記述B】授業方法全般について感想・考えた点など、改善に役立つと思われる意見を回答用紙の自由記述欄に簡潔に書いてください。

C（受講態度等について）

設問13 講義中やオフィスパワーで、質問しましたか。

5. 大いにした 4. 時々した 3. あまりしなかった 2. 全くしなかった 1. 質問が無かった

設問14 授業にどれだけ出席しましたか。

5. 全て出席 4. 1回欠席 3. 2回欠席 2. 3回欠席 1. 4回以上欠席

設問15 予習と復習は毎週どれくらいしましたか。

5. 3時間より多く 4. 2~3時間 3. 1~2時間 2. 30分~1時間 1. 30分未満

【自由記述C】その他、受講態度等を含めて感想や授業改善に役立つと思われる意見を回答用紙の自由記述欄に簡潔に書いてください。

図3-4-1 授業アンケート設問用A 4用紙

博士前期課程授業評価アンケート回答用紙

実施日 月 日

科目名： _____

注意事項

- ・HB, Hの鉛筆又は0.5mmのシャープペンシル(HB)で濃く記入し、それら以外のボールペンなどの筆記用具は使用しないで下さい。
- ・欄のマーク領域にかからないように記入してください。
- ・間違った場所に○印を記入した場合は、消しゴムできれいに消してください。

専攻コード

機械工学 電気電子工学 建築学 応用化学工学 海洋土工学 情報工学 生体工学 ナノ構造先端材料工学
2 1 2 2 2 3 2 4 2 5 2 6 2 7 2 8
数理情報科学 物理科学 生命化学 地球環境科学
3 1 3 2 3 3 3 4

良い記入例

しっかり枠内に記入して下さい。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	0
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

数字は、枠線にかからないように真ん中にはっきりと書いて下さい。

開講専攻名:

あなたの所属専攻名:

科目コード:

科目コードは右詰めで記入してください。

〈設問の回答〉

	5	4	3	2	1		5	4	3	2	1		5	4	3	2	1
設問1	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	設問6	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	設問11	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
設問2	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	設問7	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	設問12	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
設問3	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	設問8	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	設問13	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
設問4	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	設問9	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	設問14	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
設問5	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	設問10	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	設問15	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

自由記述(枠線にかからないように楷書で記入してください)

科目名：																			
A関連																			
B関連																			
C関連																			

図3-2-2 アンケート回答用 A4用紙

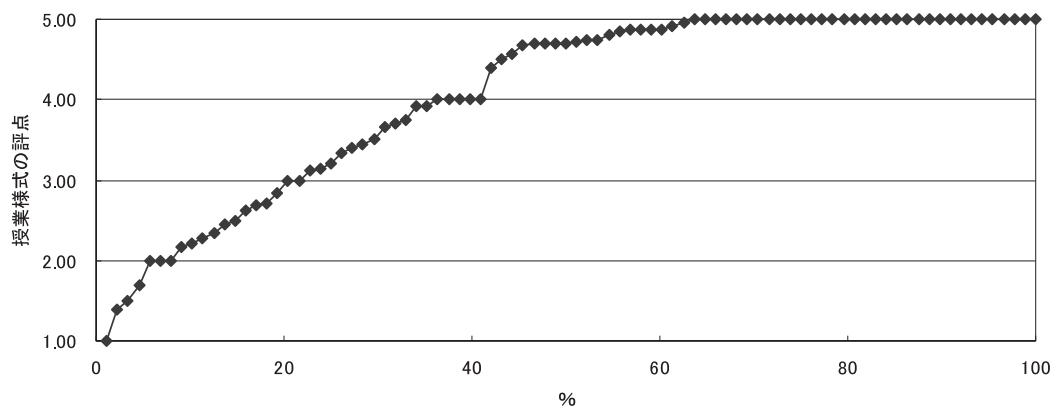


図3-5-1 平成19年度後期 授業様式の評点分布

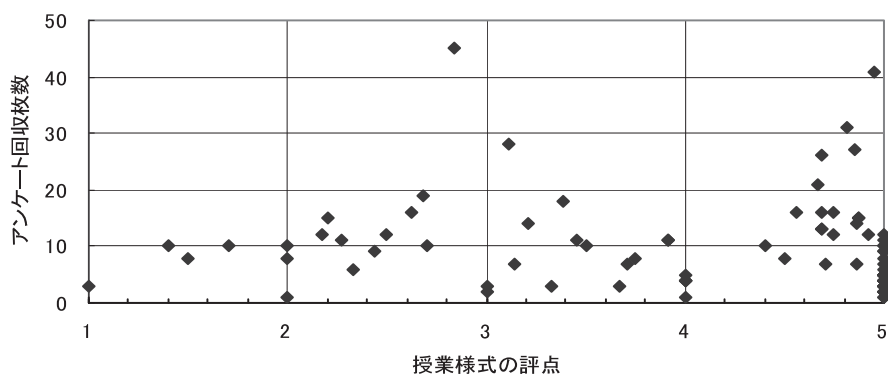


図3-5-2 平成19年度後期 授業様式の評点とアンケート回収枚数

- (3). 論文の輪読のゼミ形式
- (2). 資料調査と内容発表
- (1). その他
- 8 教材や授業方法
輪読形式等の場合、授業方法と手段は適切
- 9 宿題・レポート
- 10 文字/量・専門性
調査や発表形式の場合、量・専門性は適切
- 11 声/適切な人数
輪読やゼミ形式の場合、受講者数は適当
- 12 熱意
- (C 授業態度等について)
- 13 質問
- 14 出席
- 15 予習と復習

このアンケートは設問7で様々な授業形式に対応するための分岐を行っている点で、従来、工系で行われてきた形式と異なっている。ここでは、この設問7についての集計結果を分析する。アンケートを取るに当たっては教員がこの項目の番号

を指定することとなっていたが実際には受講者が多い場合に一つの値に定まらない結果となった。図3-5-1に設問7「授業様式」の科目平均の分布を示す。

図3-5-1は科目を設問7の評点が高い順に横に並べてグラフ化したもので科目の40%は講義形式の5となっているが20%ほどは5と4の間となっている。残り40%が1から4の間になる。次に設問7の評点とアンケート回収枚数の関係を図3-5-2に示す。

アンケートの枚数が増えると、一つの値に統一するのが困難であることが分かる。人数が多かった科目の一つでは、設問7で大半が5としている中で2名が4と回答している例がある。このように判断がばらつく傾向はゼミ形式ではさらに顕著で2から4の値が同じ科目の中でばらばらに現れて、どれが正しいか判断できない科目も在った。このことは図3-5-1の中で4から2の範囲が滑らかに変化していることから見て取れる。アンケートからはゼミ形式や発表形式の科目が40%ほ

表3-5-1 平成19年後期専攻科目の評価結果

学部	シラバス	理解度	研究に	仕事に	教養に	学部と	授業様式	教材や授業方法	宿題・レポート	明瞭な文字量／専門性	明瞭な声／適切な人数	熱意	質問	出席	予習と復習
理学系専攻平均	4.02	3.90	4.17	4.00	4.40	4.19	3.85	3.96	3.80	4.15	4.46	4.39	3.35	4.03	2.69
工学系専攻平均	4.12	3.91	4.01	4.12	4.24	4.13	4.04	4.11	4.03	4.18	4.43	4.28	3.09	4.39	3.08
理工学専攻平均	4.10	3.91	4.04	4.09	4.27	4.14	4.00	4.08	3.97	4.17	4.44	4.30	3.15	4.30	2.99

ど在ることが判ったが、設問7の評点のばらつきからも5種類に分けるのは難しいと言える。

この結果、各教員へのアンケート集計結果の報告は設問7～11については科目平均値のみとし、その他は科目平均値と当該専攻平均値とした

最後に理工学研究科の平成19年度後期アンケート結果を表3-5-1に示す。設問7～11に対応する部分の値は単なる枚数重み付平均なので参考程度に見てほしい。

3.6 博士後期課程授業アンケート

本年度は、実質的な活動は行っていない。

3.7 授業改善計画書

本年度は、博士前期課程の授業に対して、工学系専攻と理学系専攻で統一した活動ができなかったが、それぞれの系において授業計画改善書を各専攻のFD委員提出し、専攻長の管理責任において必要に応じて公表できることにしている。詳細は、平成19年度理工学研究科FD委員会報告書を参照されたい。

4. 今後の活動への期待

理工学研究科では、FD活動の第一歩を踏み出したところである。学部のように継続的な資料等によってPDCAサイクルの確立を目指しているが、専攻分野が多く、学部と異なった問題も多い。一方では、現在、新時代の大学院教育を視野に入れ、改組計画が進行中でもある。本報告書のまとめに代えて、今後の理工学研究科のFD活動への期待を以下に述べる。

4.1 博士前期課程

FDについては、十人十色の定義や説明がなされる。定義や説明でなく、日夜学生諸子と接することを生業とする多くの教員は、「元来が教えたがり屋であって、日々学生の学力の向上や幅広い視野の涵養そして学位論文等の研究指導に余念ないばかりでなく就職相談等にも熱心である。」との説もある。行政的には、大学院教育にあつては「教員が授業および研究指導等の内容・方法を改善し向上させるための組織的な取り組みの総称」とされている。制度上は、第1節で概観したように本年度4月から設置規準の中で明確に義務化され、学部教育においても次年度の平成20年度から義務化が予定されている。さらに、平成18年度に成立した教育基本法では、教員に関する条文の中で、教員は「絶えず研究と修養に励み」職務を追究しなければならないこと、そして「養成と研修の充実が図られなければならないこと」が新たに規定されている。

ところで、博士前期課程（修士課程）に共通した教育・研究指導の在り方として、例えば「新時代の大学院教育」（平成17年6月中央教育審議会、以下「中間報告」と言う。）では、以下のような指摘がなされている。

従来、多くの理工農系大学院においては、学生に対する教育と教員の研究活動が渾然一体となつて行われ、学生に対する教育が研究室の中で完結するような手法が中心となってきた。しかし、この方法は、個々の教員の指導能力に大きく依拠するため、場合によっては、専門分野のみの閉鎖的な教育にとどまり、産業界等で求められる幅広い基礎知識や社会人として必要な素養が涵養されに

くいなどの課題が指摘されている。今後は、個々の教員による指導はもとより、各研究科・専攻における組織としての計画的な教育に力点を置いていくことが、より効果的であると考えられる。

理工農系大学院における教育プログラムが、専門知識と幅広い視野を修得させるものとするためには、例えば以下のように、各研究科や専攻において組織的な教育活動を実施することが必要である。

- ・各専門分野 ←→ 専門知識 ←→ 教育プログラム
- ・幅広い視野 ←→ 関連領域 ←→ 教育プログラム
- ・自立した技術者・研究者 ←→ 必要能力や技法 ←→ 教育プログラム
- ・学術研究・産業経済活動 ←→ 国際的に活躍する人材育成 ←→ 語学教育の充実

これらに加えて、理工農系の人材には、科学技術と社会との関係や社会の安全に関しても高い素養を持つことが求められる。このため、倫理や法規制など、幅広い社会科学分野について、専門教育の内容・程度に応じて適切に教育されることが重要である。

修得単位の合計数や専門分野の研究指導のみを重視した単位制に対して、「新時代の大学院教育」では組織的な教育プログラムすなわち「コースワーク」と命名して強調している。

したがって、教育（授業）・研究指導についての議論の前に、教育組織（研究科・各専攻）が（1）「どのような学位を出すのか」そのため「どのような教育プログラム（カリキュラム）を組むのか」そのため「どのような人材を入学させるのか」の三つの要素を再確認し、（2）それを教員・学生が共有した上で、（3）例えば個々の授業評価アンケートなりによる教育プログラムの要素をチェックし、（4）次なる教育改善に向けた行動・計画・実施・チェックということになる。

学生による授業評価アンケートの実施等は、学生の生の声のほんの一端であって、授業評価そのものとしては、学習目標の設定（教育プログラムにおける・出したい学位における・入学時の学力に対する）と目標に対する到達度の客観的評価も加味して総合的に評価すべきであって、さらには修了後の追跡調査も必要と考える。

もちろん、コースワーク的あるいはコア科目的カリキュラムによる教育プログラムではカバーできないくらい広範な領域が一つの専門分野となっている専攻もある。例えば、本研究科においては理学系の専攻がそうである。逆に、工学系の専攻では、例えば建築学専攻のように将来の技術者像が比較的鮮鋭で、そのために必要な専門的知識・関連領域・自立に必要な能力や技能が比較的抽出しやすい専攻もある。前述の教育・研究指導の在り方に対する提言に異論のないところである一方で、本研究科各専攻が培ってきた独自の教育・研究指導の伝統もある。

大切なことは、前述した三つの要素のもとに研究科あるいは各専攻が組織され、教育理念や教育目標に向かって組織的なPDCAサイクルを展開し継続的な改善を行うことである。一騎当千の教員、優秀な学生、充実した設備と教育プログラムが一体となった理想的な教育の展開である。

教育論の隆盛のみで学力の衰退であってはならない。初等中等教育において40年ぶりに理数系の学習時間が増加されることになったが、この間、教育論が不在であったわけでもなく予備校の人気講師のみがそれを補ったわけでもない。中間報告でも「今後の大学院教育の組織的展開が有効に機能するためには、体系的な教育課程とそれを支える教員の教育・研究指導能力の向上が重要な課題となる。そのためには、在外研修や外国での研究に参加する機会等を活用しつつ、諸外国の大学院における実際の教育活動に関する知見を広げることが有効である。」と提言している。異論は無い。しかし、いつまでも舶来品崇拜主義でも無いだろう。一方では、「研究で一流であるばかりでなく教育においても一流を目指す」というカリフォルニア大学バークレイ校の紹介をされた九州大学深野教授の平成15年の工学部FD講演会を思い出して、本稿を閉じる。

FDに関して「言うは易く行うは難たし」ではあるが、目標を高く掲げて易しい一歩から着実に踏み出そう。それが良き伝統の年輪を重ねるだろう。それとも遺伝子組み換えを行うか。

4.2 博士後期課程

「優れた研究者を養成する観点から、前期・後期の5年間を通じて体系的な教育課程を編成し、

その上で、後期過程にあつては、教員の研究活動に参画させるなどの工夫を講じることが必要である。国際性を涵養する観点からは、サマー・インスティテュートや学会などを含め一定期間外国の大学等で教育やトレーニングを受ける機会を提供することが有効である。なお、このような取り組みは前期課程においても有効である。博士前期課程を修了し、高度専門職業人として社会に出た後に、博士課程後期へ進学した学生に対しては、研究者として必要な実験・論文作成をはじめとする研究手法などについて、適切な補完的教育を実施するなどの配慮が求められる。」との中間報告の提言にも異論はないが、FD活動にも個性と独創性が望まれている。

(文責：松本)

なお、第3項3.3節および第3.5節は、それぞれ種市委員（理学部・数理情報科学専攻FD委員）および工学部水野委員（情報工学専攻FD委員）の「平成19年度理工学研究科FD報告書」への寄稿文を全面的に引用させていただいた。



司法政策研究科FD活動報告

1. 法科大学院におけるFD活動の特色

大学院司法政策研究科は、修了者に（新）司法試験の受験資格である「法務博士（専門職）」の学位を与える“法科大学院”である。従来型の研究科とは異なり、研究者ではなく高度専門職業人を養成するための場であること、特定の国家試験の受験資格を独占していることなどから、そこで行われる教育活動は、他の研究科とは趣を異にする。そこでのFD活動のあり方においても、法科大学院に特有の性質を有している。

法科大学院における教育の質は、我が国の法曹の水準に直結することになる。そのため、そこでの授業が何を目指し、どのように目標に到達させるのかは、単に学内における議論に委ねておけばよいのではなく、①人材の輩出先である法曹界や将来における潜在的顧客である国民からの、客観的な評価を基準にしなければならない。

そして、その結果として、②各法科大学院で個別にバラバラの取り組みをするのではなく、各法科大学院の交流・連携によって、大学の枠組みを超えたスタンダードが必要とされる。

こうした観点から、平成19年度においても、司法政策研究科は、法科大学院に相応しいFD活動のあり方を模索・実践した。

2. 司法政策研究科FD活動の実施体制

平成19年度における司法政策研究科のFD活動は、法科大学院に義務づけられている第三者機関による認証評価においてFD活動の充実が重要な評価項目となることにも鑑み、①研究科長を含む4名の教員で構成するFD委員会が企画・実施した。さらに、平成19年度入学者からは、新しい教育課程が適用されるため、FD委員会とは別に、②PLAN2007ブラッシュアップ委員会（4名）を設置し、新しい教育課程における科目の運用、そこでの学生の学習状況などについて、個別具体的に問題に対応するようにした。前者による授業改善と後者のカリキュラム改善、双方向からのFD活動を行ったことで、ポイントを絞った各論的な改善提案を行うことを可能とした。

3. 授業評価アンケート

概要

司法政策研究科では、平成16年度の開設以来、授業評価を実施してきた。本学のWebStudyシステムを活用し、全科目・全教員の講義を毎回、学生が評価してきた。しかし、この方法では、①匿名性が確保できないこと、②回答項目に制限があり、個別のポイントごとに評価を数値化できないこと、③全科目について毎回評価を行うのは、学生の負担が多きすぎることなどの欠点があった。

そこで、平成19年度は、定期試験終了時に質問紙を紙媒体で配布して記入を認める形で、各科目について1回のみ実施した。質問紙の内容は以下のとおりであった。ここでは質問のみを記すが、解答用紙には、それぞれ段階的な選択肢があり、該当するグレードに○を付すようになっている。

授業評価アンケート質問項目

- 【1】 入学年度を記入して下さい。
- 【2】 前学期までに修得した単位数を記入して下さい。
- 【3】 平常の学修のうち、この科目にどれくらいの時間を割いていますか。
- 【4】 教員は講義を時間通り行いましたか。
- 【5】 教員の話し方（声の大きさや話すスピード等）は聞き取りやすかったですか。
- 【6】 教員の説明はわかりやすかったですか。
- 【7】 講義に際して、教員の準備は十分にできていましたか。
- 【8】 講義の進度は適切でしたか。
- 【9】 【8】の質問で、1や2に○を記入した方にお聞きします。なぜ、講義の進度が適切でないと思いましたか。どちらかに○を記入して下さい。
講義の進度が遅すぎる / 講義の進度が速すぎる
- 【10】 講義は、シラバスの講義計画に沿って行われましたか。
- 【11】 講義は、学生の理解度を確認しながら進められていましたか。
- 【12】 質問等について、適切な対応はありましたか。

- 【13】 双方向・多方向の講義でしたか。
- 【14】 講義内容の水準は適当でしたか。
- 【15】 【14】の質問で、1や2に○を記入した方にお聞きします。なぜ、講義内容の水準が適当でないと思いましたか。どちらかに○を記入して下さい。
講義内容が簡単すぎる / 講義内容が高度すぎる
- 【16】 シラバス等で提示された課題は適切だったとおもいますか。
- 【17】 講義の予習はどれくらいでしたか。
- 【18】 講義の復習はどれくらいでしたか。
- 【19】 この科目の成績評価方法は、シラバス等で示された、当該科目の学修目標や意義に照らして、適切なものだったと思いますか？
- 【20】 この科目の試験の問題や（それに相当するレポートの課題）は、（講義内容から直接出題されたかどうかという意味ではなく）、シラバス等で示された、当該科目の学修目標や意義に照らして適切なものだったと思いますか？
- 【21】 この講義で目指されている到達度に、自分が達したと思いますか。
- 【22】 この講義で、自分が目指していた到達度に達しましたか。

実施における問題点

このアンケートの実施における最大の問題は、回答率の極端な少なさ（全体で40%）であった。そのため、平成19年度については、アンケート結果に対する有効な分析を行うことができず、当初予定していたホームページ等での公開（学生へのフィードバック）が実現していない。

回答率が低迷した原因は、①当該科目が終了したのちでのアンケートであるため、授業改善にどのような形で役立つのか、学生の側から理解しにくかったこと、②期末試験終了直後に実施したため、翌日の他の科目の試験に備えたい学生にとっては、協力することが難しい環境にあったこと、③少人数教育を行っている本研究科では、自由記述欄の筆跡等から人物が特定される危険があることなどが考えられる。平成20年度においては、①学期の中間と最後の2回実施、②授業時間の一部を利用しての記入、③自由記述部分をPCで入力可能とするなどの対応を予定している。

なお、自由記述欄は、そのコピーをすべて担当教員に送付した。その部分の成果については数値化して公表できないものの、多くの教員が自己の授業運営を内省する契機として、学生によるアンケートに書かれていた率直な「声」が確実に利用されている。平成19年度のアンケート実施には、上述のような問題があったものの、アンケートそれ自体は、教員と学生の関係をより有意義なものとするために役に立った。

4. 授業公開・授業参観

概要

司法政策研究科では、平成18年度から、すべての科目・毎回の授業について、研究科に所属する教員が自由に参観することが認められている（担当教員には拒否権がない）。そして、各教員は、学期ごとに最低でも1回は、他人の授業を参観して、以下の諸点についての評価をまとめた報告書を提出することが義務づけられている。平成19年度についても同様であった。

報告書の項目

報告書には、以下の項目について参観した教員の所見が記入される。

- ①講義名
- ②担当教員
- ③履修者数
- ④配当学年
- ⑤講義内容の概要
- ⑥教材・授業の進め方・課題・学生の反応等、気が付いた点
- ⑦授業参観を行って参考になったこと。
- ⑧その他

成果と課題

平成19年度は、専任教員17名のうち、みなし専任教員である実務家3名を除いた14名が年間で各2回、合計28回の授業参観が実施された（報告書未提出分も含む）。見学対象は、通常の講義科目だけでなく、集中講義として学外で行われている実習科目（離島における法律相談を内容とする「リーガル・クリニックA」など）にも及んだ。作成された報告書の写しが、当該科目を担当する教員に手渡されて、当該教員は、他の教員による意見・評価を知り、授業改善に役立てることができた。

ただし、この報告書のやりとりは、参観した教

員と授業担当教員との間の、一方通行的なコミュニケーションに留まってしまう点に限界がある。そこで、平成20年度以降は、同様の形での授業参観の励行を続ける同時に、特定の科目の特定回の授業を、本研究科が所有する模擬裁判記録システムを応用する形でビデオ録音・録画し、教授会後に実施されるFD懇談会で再生して、視聴している教員どうしが議論をして検討を加えることとした。

5. 学外との連携によるFD活動 教材開発プロジェクト

冒頭で法科大学院の特色として述べたとおり、他大学との交流の中で、法科大学院教育のスタンダードを形成するのが、本研究科のFDにおける重要なミッションである。この観点からの重要な取り組みとして、平成19年度は、同年に発足した法実務技能教育教材開発コンソーシアム(PSIM)への参加を決定した。

PSIMは、名古屋大学を中心とする27校の法科大学院が参加し、模擬裁判や法律相談など法科大学院における実務教育のための教材を共同で開発し、ネットワークを通じて共有するためのコンソーシアムである。平成16年度から平成18年度まで本学も参加して継続した文部科学省・法科大学院形成支援プロジェクトのひとつである「実務技能教育教材共同開発共有プロジェクト」の後継プロジェクトとして、参加校を拡大して新たな運営体制へと移行させた。

また、同じく平成19年度からは、PSIMコンソーシアム参加大学のうち本学を含む主要16大学によって、文部科学省・専門職大学院等教育推進プログラムに選定された「実務技能教育指導要綱作成プロジェクト」を始動させている。PSIMコンソーシアムで共有している教材を使った指導方法を研究し、その要項を作成することを内容とするプロジェクトである。

平成19年度は、これらのプロジェクトのため、①平成19年6月16日、②同年9月22日、③平成20年2月9日の3回にわたって全体会合と各分野の作業部会が開催され、本研究からも常時2名の教員がこれに参加した。PSIMの成果物としての教材は、「民事裁判実習」「リーガルクリニックA」などにおいて活用されており、授業で使用した結

果、必要と思われる改善点などをコンソーシアムに報告している。教材を共同で作成するプロセスは、同時に、授業のあり方についての議論を共有するプロセスでもあり、大学の枠組みを超えたFD活動として、貴重な機会を獲得している。

他大学によるFD研究会への参加

本学は、上記のPSIMコンソーシアムのほか、九州大学・熊本大学・琉球大学と共同で法科大学院に関する包括的な教育連携を行っており、特に実務科目の高度化については、「九州沖縄連携実習教育高度化プロジェクト」として、文部科学省・専門職大学院等教育推進プログラムに選定されている。大学の枠を超えた教育の高度化の試みについては、全法科大学院の中でも先端的な地位にあると言ってよい。もっとも、自校が参加するプロジェクトの成果物の中に学ぶのでは、法科大学院教員のスタンダードを知るうえで十分とはいえない。そこで、平成19年度は、FD関連の予算配分を受けて、関西学院大学法科大学院が行う教育推進プログラムが主催するシンポジウムに教員を派遣し、その成果報告を大学に持ち帰って、教授会メンバーで共有した。法科大学院におけるITの活用を内容とするものであり、同じくITを幅広く導入した実務スタイルの教育に力を入れている本学にとって、参考とすべき点が多い。もっとも、この成果を本学の教育にどのように活かすのかについては、平成19年度においては関連科目の担当教員レベルでの検討にとどまっており、今後の課題である。

以下、参加した森永真綱准教授が教授会に提出した報告書より転載する。

報告書

関西学院大学法科大学院 教育推進プログラム 公開研究会

ロースクール教育の最先端

1) グラスゴー大学大学院のバーチャル教育システムの概要

プログラム上のスコットランドの架空都市を舞台にシミュレーションを行う。学生は、70以上の4人制の「法律事務所」に所属するソリシターとなり、仮想上オフィスを使って、他の弁護士や組織、国家機関、依頼者などとコンタクトをとる。

2セットの2つの課題を行う（課題は、傷害事件の交渉による解決、遺言を残さず死亡した人物の遺産・税金の法的処理など）。最初と最後の講義以外は、教師は交渉に関して全く手を差し伸べず、学生はいかに対処すべきかを自身で考えなければならない。

ただし、オンラインのチャットルームで教授に質問したり、ネット上のアーカイブされたQ&A集を調べたりすることは出来る。作業はすべてウェブサイトを通して行われ、各学生の経過記録もウェブサイト上でとられる。

重要なポイントは、学生が自らでどう進めるべきか、プロとしてどう振る舞うべきかを見つけないといけないという点。そして、比較的安全な状況で、様々な形式の実務を試すことができるという点である。事例には、依頼者が嘘をついたり、対立する法律事務所がそれぞれ異なる傷害の現場の写真を入手したりするなど、難問が設定されたり、罾が仕掛けられていることもある。優秀な学生ほど、このシミュレーションでも良い結果を出し、他の学生もほとんどシミュレーションを有益で面白いと感じているようだが、他方で学生たちは、「本で得た知識」を実際の事例に応用することに四苦八苦している。これにより法的手続きに関する知識と技能が向上するだけでなく、スコットランドの法体制の価値体系を吸収することができる。実務研修は、このような学習を足場とし、それをさらに強化するためのものであると位置づけられる。

2) 関西学院大学ロースクールにおける模擬依頼者を使ったシミュレーション授業の概要

学生は模擬法律事務所に所属し、事務所メンバーは協働して様々な架空の事件の処理（例えば賃料の回収、不動産仲介、企業における内部告発、熟年離婚）に当たる。もっともいわゆるリーガルクリニックであれば現実の依頼者と向き合うことになるが、本シミュレーション授業では模擬依頼者（SC）を採用し、事件の当事者を演じてもらう点が異なる。この模擬依頼者は、一般公募した上で（関西学院大学の学生や職員ではなく、一般の方である）、一定の時間をかけて当該事件の依頼者を演じることができるよう訓練を重ねた上で、協力してもらうことになる。シミュレーション

終了後、弁護士と共にフィードバックを行う。

以上のような授業を通じて、実体法及び手続法の双方の理解を深めることに資し、一定の効果を上げている。しかしロースクールの授業はややもすれば知識偏重、消化不良に陥っていることは否めず、今後架空の事件をどのように作成すべきかという課題も残る。

3) バーチャル教育の意義と問題点

シミュレーション教育の利点は、通常の演習に比し、既存の判例分析や学説整理にとどまらず、紛争解決能力を養うという大きな意義がある。またリーガルクリニックと比べれば、現実の事件を処理するわけではないから、対外的責任を懸念しなくてよいので、安全かつ平穏な形で事案処理能力を高めることができるというメリットがある。さらにいえば架空のものである以上、より教育効果が高まるよう、事例設定することも可能になる。

とりわけグラスゴー大学のようにパソコンのプログラム上の架空の都市で架空の事件・依頼者と対峙するという形態は、大学内部で全てをまかなうことができ、またいわばゲーム感覚で取り組むことができるので、特に最近の若者にとり学習意欲・効果を高めることができる教育素材としてその意義は小さくないという点は否定できないだろう。

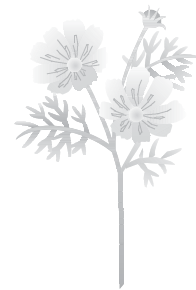
しかしながら、現実の世界をゲーム感覚で捉えるという最近の悪しき風潮を助長することにもなりかねないという問題点を指摘することができる。プロセス重視の法科大学院においては、実際に生起する「生の事件」に真剣に向き合うことができる法律家の育成が最大の課題なのであり、バーチャル教育の過度の強調はこのことを蔑ろにすることに通じかねないことから、同教育システムを採り入れるとしても、この点に留意する必要がある。これは模擬依頼者を用いる関西学院大学の場合にも当てはまることである。やはり演じている依頼者と現実の事件に直面している依頼者は違うのである。

本学では、積極的にリーガルクリニックを実施しており、その教育的意義は非常に大きいものと思われる。もっとも従来の講義・演習形式の授業がカリキュラムの大半を占めているため、より

実務的・実践的な教育システムを開発する必要はあろうかと思われる。このような観点からは、あくまでも補助的なツールであるということを前提に、バーチャル教育システムを導入することも選択肢の一つではないかと思われる。

6. 今後の課題

以上で述べたとおり、平成19年度FD活動は、①授業評価、②授業参観、③大学の枠を超えたFDプロジェクトへの参加の3点を軸として、一定の成果を上げることができた。しかしながら、その成果のとりまとめ、とりわけ外部に向けた発信体制については、不十分であったことも否めない。平成20年度においては、①授業評価アンケートの回収率向上、②授業評価アンケートに基づく授業改善実績の報告、③単なる参観にとどまらない「授業研究」の実施、④学外におけるプロジェクトへのさらなる貢献が課題となる。



臨床心理学研究科 FD 活動報告

1. 臨床心理学研究科の Faculty Development について

平成19年度の大学設置基準の改定により、大学院においても FD 活動が義務化され、文部科学省からは、学部だけにとどまらず、大学院においても教員の資質維持向上に向けての努力を求められるようになってきています。

平成19年度より設置認可された臨床心理学研究科は、臨床心理学分野では日本初の独立研究科としての専門職大学院です。

設置認可計画書においては、『XII 教員の資質の維持向上の方策』の中で、1. FD 委員会の立ち上げ、2. 客観的で厳格な成績評価制度の導入、3. 学生による授業評価の導入、4. 授業研究・実務研修等を実施し、本研究科専任教員の教授技術の向上や学生の履修意欲の向上に努めることを明記しています。設置初年度である平成19年度では、本研究科全体が設置認可計画書遵守のための教育体制の整備を最優先としてきました。

2. FD 委員会、FD 研修会

平成19年度4月より FD 委員会は、委員長；服巻豊、委員；平川忠敏の2人体制で発足しました。FD 委員会として FD 活動にかかわる重要事項は、拡大 FD 委員会ならびに FD 研修会のなかで取り扱うこととしました。この体制により、専任教員全員が FD 活動が決定するまでの経緯を知り、活動内容の具体的な運用の決定に関与することができ、FD 活動の必要性、周知の徹底が可能となりました。また、FD 活動の重要事項については、原案作りを FD 委員会メンバーで行い、原案からの具体案、詳細案を検討する際に、FD 研

修会、拡大 FD 委員会の場で議論される体制が整えられたことは、小人数である FD 委員メンバーの負担軽減にもつながったと考えております。

以下に平成19年度の2回の拡大 FD 委員会、3回の FD 研修会を開催し、教育の質の維持向上に努めました。

3. 厳格な成績評価制度について (表1、2)

(1) 後期の取り組み

前期の検討結果を受け、前期からの改善点を以下に示します。

1) 成績評価方法についての開示について

- ・講義・演習科目については、100点満点による採点で、評価は A+、A、B、C、F の5段階評価とする。
- ・実習科目についての評価は A、B、C、D の4段階評価とする。
- ・厳格な成績評価を実施するため、成績枠を設けていることを学生に開示する。

2) 実際の成績評価について

- ・100点満点による採点で5段階評価とする。
- ・受講生10名以上の科目においては、5段階評価に以下の成績枠を設け、専任教員だけでなく、兼任・兼任教員へも協力依頼を行うこととする。

4. 学生による授業評価の実施 (表3～5)

(1) WebStudy を活用した学生による授業評価の結果

講義科目は1科目、演習科目は6科目、実習科目は学内実習、学外実習とに分けて2科目として学生による授業評価を実施しました (表5～7)。

表1. 講義、演習科目の評価基準

	評価	評価得点	
合格	A+	90点以上	特に優れた成績を示した者
	A	80～89点	優れた成績を示した者
	B	70～79点	合格と十分認められる者
	C	60～69点	合格と認められる最低限度の成績を示した者
不合格	F	60点未満	

表2. 2008年度後期の成績評価枠の割合

素点	評語	A		B		C		D		E		F		合計	
		人数	割合 (%)	人数	割合 (%)	人数	割合 (%)	人数	割合 (%)	人数	割合 (%)	人数	割合 (%)	延べ数	割合 (%)
90-	A+	3	20.0	3	20.0	3	20.0	3	20.0	2	13.3	2	13.3	16	17.8
80-89	A	4	26.7	3	20.0	3	20.0	3	20.0	2	13.3	4	26.7	19	21.1
70-79	B	6	40.0	7	46.7	8	53.3	9	60.0	11	73.3	7	46.7	48	53.3
60-69	C	2	13.3	2	13.3	1	6.7	0	0.0	0	0.0	2	13.3	7	7.8
-59	F	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
合計		15		15		15		15		15		15		90	

※後期は、受講生10名以上の科目について授業担当教員へ成績枠を求めた。はじめての成績評価の取り組みであった。結果、1科目以外は、A +、A の評価を40% 以内、B 以下の評価を60% 以上とし、成績枠に基づいた厳格な成績評価が行われた。

評価項目は、共通として総合評価、理解度、満足度を尋ね、講義、演習、実習それぞれの特徴を尋ねる項目を加え、自由記述ができるように工夫を行いました。

- ・実施期間について：授業評価対象科目は9科目であった。学生は、1月17日から24日までの7日間で、あわたたしくもなく順調に受講科目の授業評価を行うことができたようであった。実施期間は7日ほどで適当であると思われた。
- ・WebStudy の活用について：学生たちは、全員ではないが前期のうちに WebStudy を活用した授業感想や課題提出の経験があり、戸惑いはなかったようである。また、事前に2名の学生に対してデモンストレーションを行ったことにより、WebStudy 活用の経験のない学生でも周りのサポートを受けて実施が可能であったようである。活用に対するとまどいもみられず、今後、1セメスターに3回の実施であっても混乱はないものと思われる。
- ・学生の匿名について：評価の平均点は全般的に高いが、最低点では学生の自由な表現が反映されていることがうかがえた。また、自由記述では学生も忌憚ない意見を述べ、授業改善への貢献がみられた。よって匿名性は担保されるシステムとすることが重要である。
- ・授業評価と授業改善へのつながり：学生によ

る授業評価と報告書を授業改善につなげるものと位置付け実施した。教員が作成した報告書には、各授業担当教員（共同科目については筆頭担当者）が学生の各項目における評価点ならびに自由記述内容を鑑み、次年度の授業改善案の記載がみられた。学生による授業評価と報告書が一体化することにより、授業評価と授業改善のつながりが見られるシステムとして構築された。今後は、シラバスとの関連についても検討していく必要がある。

以下に、WebStudy を活用した学生による授業評価の結果を示します。

2008年度からは、1セメスター毎に3回実施するため、教員へのフィードバック方法、学生へのフィードバックなどを考慮しながら運用につとめていきたいと考えております。

各学部の FD 活動報告

表3. 講義科目における授業評価（1科目）

	最高値	最低値	平均値
1. 授業を総合的に5段階で評価してください	5	4	4.6
2. 授業のテキスト・資料等は適切でしたか (テキスト・資料等を使用した場合のみ回答してください)	5	4	4.9
3. 授業の内容は理解できましたか	5	3	4.2
4. 授業の内容に満足していますか	5	4	4.5
5. 授業を通して臨床心理学の理論に興味が増しましたか	5	4	4.9
6. あなたは授業を熱心に受講しましたか	5	4	4.7

表4. 演習科目における授業評価（6科目平均）

	最高値	最低値	平均値
1. 授業を総合的に5段階で評価してください	5	2	4.4
2. 授業の内容は理解できましたか	5	2	4.0
3. 授業の内容に満足していますか	5	3	4.5
4. 授業を通して臨床心理学に興味が増しましたか	5	2	4.6
5. 授業を通して講義（理論）の理解や実習体験の理解につながりましたか	5	1	4.5
6. あなたは授業を熱心に受講しましたか	5	2	4.7

表5. 実習科目における授業評価（2科目平均）

	最高値	最低値	平均値
1. 実習を総合的に5段階で評価してください	5	4	4.7
2. 学内（学外）実習での体験に満足していますか	5	3	4.6
3. 実習体験を通して臨床心理学や臨床業務にイメージが増しましたか	5	3	4.9
4. 実習体験の中で講義や実習で学んだことが役に立ちましたか	5	3	4.8
5. あなたは実習を熱心に取り組みましたか	5	4	4.8

大学院連合農学研究科FD活動報告

【平成19年度FD活動内容】

大学院連合農学研究科では、平成19年2月16日にFD委員会規則を制定、それに基づき第37回代議委員会（H19.4.12）でFD委員を選出、平成19年度は計4回の会議を開催した。

取り組んだ活動は、次のとおりである。

1. 共通セミナーの改善
2. 共通セミナー（特別）授業評価調査票の一部改正
3. TA活動実施報告書によるTA活動実態把握

◆共通セミナーの改善及び共通セミナー（特別）授業評価調査票の一部改正

本研究科では、単位制を採用しておらず、3年以上在籍に必要な研究指導を受けること、共通セミナー（一般、特別）をそれぞれ30時間受講すること、学位論文の主論文として査読付き学術雑誌に2報投稿することを、学位論文の提出要件としている。

研究指導については、博士後期課程であり極めて専門性が高く共通的なFDに該当しにくいことから、学部・研究科の授業に相当する共通セミナーの改善が、FD活動の第一の取り組みとなると考える。

このうち共通セミナー（一般）は、全学生を対象として、個人の専門に偏らない幅広い農水産学分野の知識の習得を目的としており、当初よりアンケートを実施、例年、改善に取り組んできている。

平成19年度については、

- ・講義資料及びスライドの日英併記
- ・英語による講義の増加
- ・外部講師の増加
- ・交流時間の延長
- ・1年生のプレゼンテーションの実施
- ・ポスターセッションの修士課程・学部学生への開放

を行った。

共通セミナー（一般）においては、例年、在学生の4割強を占める外国人学生より使用言語について強い要望があり、今年度は6セミナー中5セミナーまでが英語で行われ、好評であった。日本人学生にとっては、専門性の異なるセミナーの理解に苦勞した反面、新鮮な刺激となり、今後、研究者として活動していくにあたり、語学力の重要性を改めて認識する良い機会となった。

平成18年度共通セミナー（一般）アンケート調査結果

	セミナーについて						企画・運営について				ポスターセッションについて	
	セミナー-A	セミナー-B	セミナー-C	セミナー-D	セミナー-E	セミナー-F		時期	日数	会場		
ほぼ理解できた	45名 52.3%	40名 46.5%	46名 53.5%	45名 52.3%	43名 50.0%	51名 59.3%	良い	69名 80.3%	72名 83.7%	71名 82.6%	意義がある	64名 74.4%
半分程度	40名 46.5%	33名 38.4%	36名 41.9%	34名 39.5%	38名 44.2%	34名 39.5%	悪い	5名 5.8%	9名 10.5%	5名 5.8%	少しは意義がある	16名 18.6%
理解できなかった	1名 1.2%	13名 15.1%	4名 4.6%	7名 8.2%	5名 5.8%		その他	10名 11.6%	3名 3.5%	7名 8.1%	その他	2名 2.3%
無回答						1名 1.2%	無回答	2名 2.3%	2名 2.3%	3名 3.5%	無回答	4名 4.7%
計	86名	86名	86名	86名	86名	86名		86名	86名	86名		

平成19年度共通セミナー（一般）アンケート調査結果

セミナーについて						
	セミナー A	セミナー B	セミナー C	セミナー D	セミナー E	セミナー F
ほぼ理解できた	21名 (27%)	36名 (46%)	28名 (36%)	22名 (28%)	51名 (65%)	65名 (83%)
半分程度	44名 (56%)	35名 (45%)	43名 (55%)	48名 (62%)	26名 (33%)	4名 (5%)
理解できなかった	13名 (17%)	7名 (9%)	7名 (9%)	8名 (10%)	1名 (1%)	9名 (12%)
企画・運営について						
	時期	日数	会場	グループの分け方		
良い	65名 (83%)	68名 (87%)	68名 (87%)	良い	56名 (72%)	
悪い	4名 (5%)	3名 (4%)	3名 (4%)	改善すべき	19名 (24%)	
その他	9名 (12%)	7名 (9%)	7名 (9%)	無回答	3名 (4%)	
	プレゼンテーション		ポスターセッション		交流会について	
意義がある	30名 38%		56名 72%		57名 73%	
少しは意義がある	34名 44%		16名 21%		14名 18%	
その他	12名 15%		5名 6%		6名 8%	
無回答	2名 3%		1名 1%		1名 1%	

また、共通セミナー（特別）は、当該年度に主指導教員として学生を担当している教員がそれぞれ6時間の集中講義として開講するもので、これまで授業評価調査等のアンケートは実施していなかったが、平成18年度セミナーより実施、その結果について分析し、分析結果に対する対応等について教員からの回答を集め、平成19年度セミナー担当教員に周知・フィードバックした。

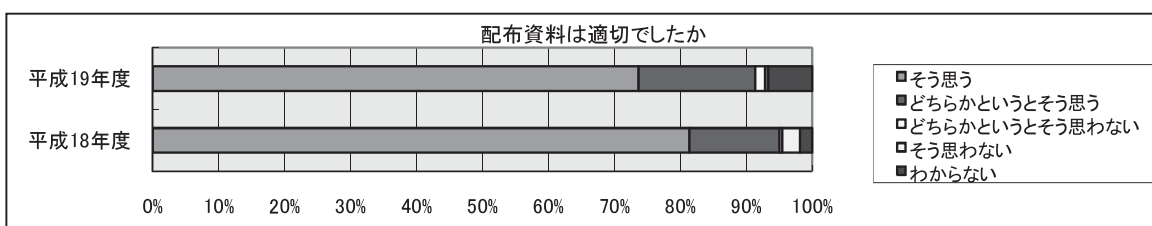
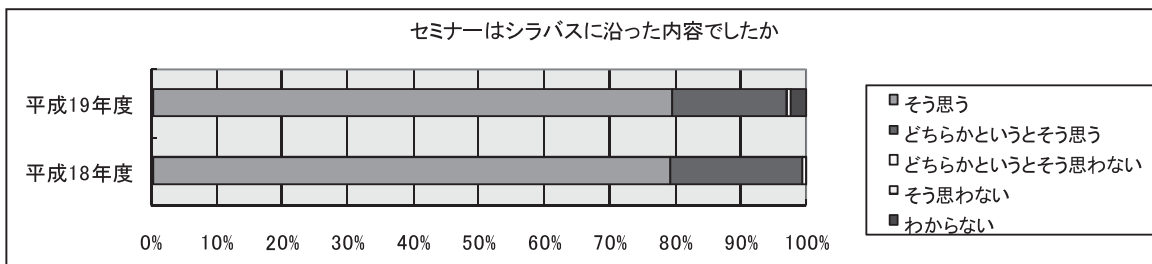
共通セミナー（特別）授業評価調査結果は、学生が主体的に研究に取り組む意識をもって入学してきている後期博士課程であることからか、どの項目をとってもかなり高い評価となっている。

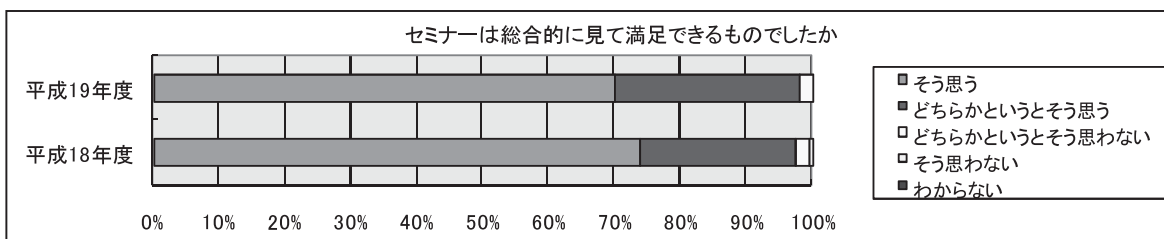
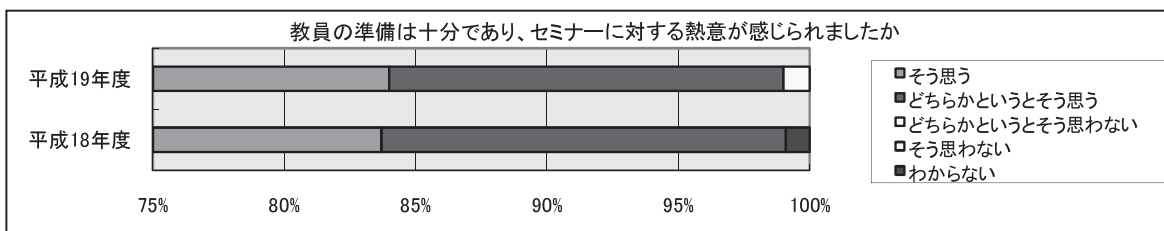
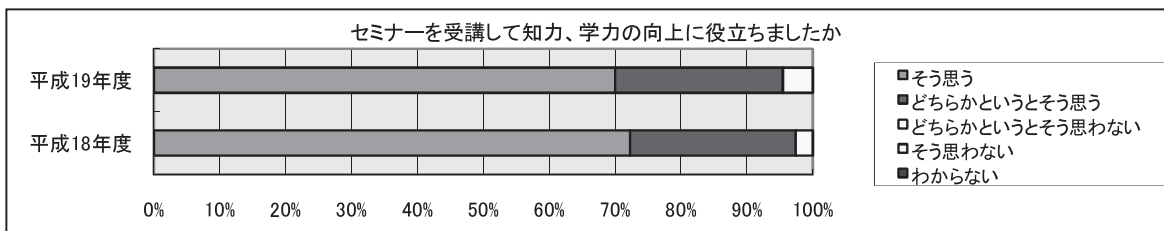
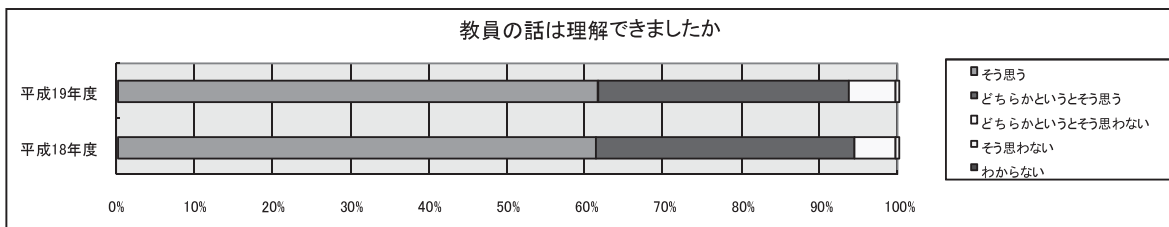
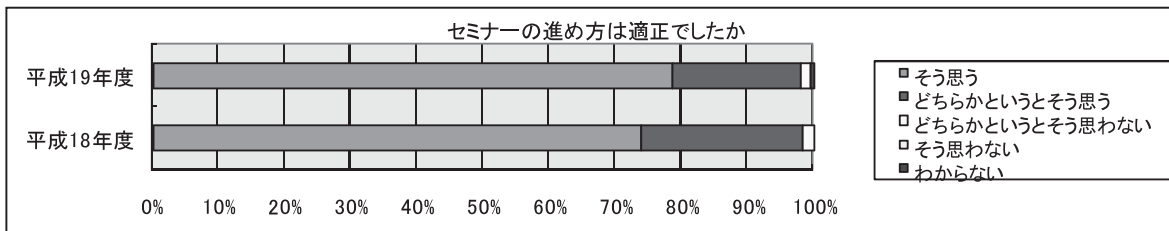
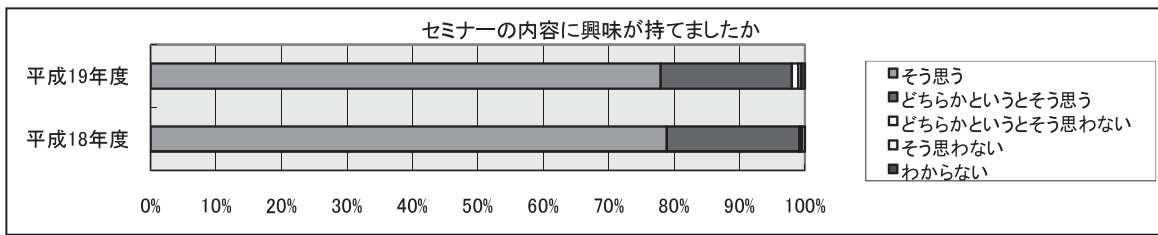
このほか、平成19年度の共通セミナー（特別）授業評価調査から、学生にとってセミナーを受講した目的の達成度評価の項目を新たに追加した。

共通セミナー（特別）授業評価調査結果

平成19年度 受講者数：253名 アンケート回答数：211名 回収率：83.4%

平成18年度 受講者数：320名 アンケート回答数：227名 回収率：70.9%





◆ TA 活動実施報告書による TA 活動実態把握

TA 活動実施報告書については平成18年度より実施している。TA は、大学院学生の処遇の改善とともに指導者としてのトレーニングの機会提供を目的としているが、これまで TA に採用された学生の意見を聞く機会は設けていなかった。今回、活動実施報告を提出し、9 割以上の学生から指導者としてのトレーニングとして有益であったとの回答を得るとともに、具体的に 1) 学生個々の個性及び理解度に応じた指導、2) コミュニケーション能力、3) 授業・実験の事前準備や安全管理指導、4) 時間・スケジュール管理、等の重要性を学んだとの回答があり、TA 活動の実態が把握できた。平成19年度は、TA 活動を学生にとってより実りのあるものとするため、TA に指導された学生からの TA 活動評価調査を実施することとした。この結果をとりまとめ、平成19年度に TA に採用された学生及び平成20年度に TA に採用される学生に配布する予定である。

【まとめ】

本研究科の FD 活動については、平成18年度まで規則及び委員会は整備されていなかったが、自己点検・評価委員会、共通セミナー（一般）において、或いは各構成研究科独自で実施されてきた。今回、規則・委員会の整備に伴い、PDCA サイクルを効果的に機能させ、教育研究のより一層の充実に向けた体制が整ったといえる。本研究科では、平成17年度より学生を対象とした講演会を各構成大学で実施しているが、平成20年度は本講演会の充実も検討していく。

本研究科は外国人留学生が在学生の 4 割以上という構成となっている。例年行っている共通セミナー（一般）のアンケートのほか、どのようなアンケートを実施しても、外国人留学生の要望は何にも優先してまず英語の使用である。個々の研究指導においては指導教員が直接対応するため問題は生じていないが、全学生を対象とする共通セミナー・講演会等においては、英語のみであれば半数以上を占める日本人学生の理解の障害となるし、両言語の併用となれば、資料は支障なく準備できても、同じ時間内であれば講義・講演に盛り込む内容に限界が生じる。

また、本研究科は博士後期課程であることか

ら、個々の学生の研究内容の専門性が極めて高い。共通セミナー（一般）は、将来研究者として活動するにあたり、広い視野・幅広い農水産学の知識を養うため全ての学生に必修で課しているものであるが、全ての学生に対して理解しやすいようにすれば物足りなく、かといって博士後期課程にふさわしい専門性の高い内容にすれば、言語の問題もあいまって理解できる学生の割合が下がることとなる。

この、言語と専門性については、全学生を対象としたセミナー・講演会等において必然的に内在する問題である。留学生からは同時通訳の設置などの要望もあるが、経済的問題を別にして専門性の高さから利用は極めて難しく、解決困難となっている。

鹿児島大学教育センター年報 第5号

2008年9月 発行

編集・発行 鹿児島大学教育センター
鹿児島市郡元1丁目21番30号
TEL/FAX:099-285-8826
<https://www.kic.kagoshima-u.ac.jp>
